
GATE 1:CONTACT
1.接触編
ゲート
自衛隊
彼の地にて、
斯く戦えり
柳内たくみ
Yanai Takumi
アルファポリス


GATE 1:CONTA
1 接触編
ゲート
自衛隊
彼の地にて
斯く戦え
柳内たくみ
Yanai Takumi
アルファポリス

ゲート ― 1. 接触編 ―

自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり

柳内たくみ

日本

伊丹耀司（いたみようじ）

33歳。陸上自衛隊二等陸尉、第三偵察隊隊長。いわゆるおたく趣味の持ち主。同人誌やネット上の小説や漫画を愛読する。仕事は生活と趣味のための収入源と割り切っている。

倉田三曹（くらたさんそう）

21歳。第三偵察隊に所属。伊丹の乗る高機動車のドライバー。猫耳萌（ケモノ系萌）の趣味を持ち、先輩の伊丹ともおたく話で盛り上がる間柄。

黒川二曹（くろかわにそう）

23歳。第三偵察隊の女性自衛官。看護師でもあり、身長190㎝の美女。ゆったりとしたお淑やか口調だが、なにげに毒舌を放つ。

栗林志乃（くりばやしし の）

24歳。第三偵察隊の女性自衛官。陸上自衛隊二等陸曹。小柄ながら豊かなバストを装備するが、格闘徽章を有する猛者でもある。

富田章（とみたあきら）

27歳。第三偵察隊に所属。陸上自衛隊二等陸曹。レンジャー、空挺徽章の二つを併せ持つ。通信制の大学で天文学を学んでいる。

本位総理大臣（もとい）

日本国の総理大臣。『特地』の利権を狙う内外の干渉を、どうはねのけるかに苦慮して精神を磨り減らしている。

嘉納太郎（かのうたろう）

日本国の防衛大臣兼務特地問題対策担当大臣。おたく趣味の持ち主として国民に知られ、かつては伊丹ともおたく仲間だった。

梨紗（りさ）

伊丹と離婚した元妻。女性向け同人誌作家。

アメリカ

ディレル

アメリカ合衆国大統領。『特地』から得られる利権拡大を狙って、様々な陰謀を巡らせている。

中国

薹徳愁（とう とくしゅう）

中華人民共和国国家主席。『特地』に移民を送り出すことによって、利権独占を狙っている。

ロシア

ジェガノフ

ロシア連邦大統領。『特地』からの資源流入によるロシアの影響力低下を懸念して、様々な策謀を巡らせている。

異世界（特地）

テュカ・ルナ・マルソー

165歳（外見は16～17歳）。金毛碧眼のエルフ上位種族の娘。父ホドリュー・レイ・マルソーとともに、コワンのエルフ村で生活していたが、古代龍の襲撃によりコワンの村は全滅し、一人生き残る。

レレイ・ラ・レレーナ

15歳。ヒト種の賢者、魔導師。老賢者カトーの二番弟子。理知的で優れた才能を持つが、それだけに情緒に欠ける。細い体つきのため、年齢より幼く見られることがある。

ロゥリィ・マーキュリー

961歳（外見は13歳）。亜神、神エムロイの使徒。死神ロゥリィとあだ名され、華奢ながら巨大なハルバートを操り容赦なく敵を切り裂く。異世界の神官服であるフリフリの黒ゴスを纏っている。

モルト・ソル・アウグスタス

異世界の帝国皇帝。帝国の覇権拡大を図るために、ゲートを越えて日本にまで出兵を試みる。

ピニャ・コ・ラーダ

19歳。モルト皇帝の美人娘。帝国と日本との間にある国力の差にいち早く気づき帝国を守るために奔走する。伊丹と関わったため、おたく文化に接触して強い影響を受ける。

序

二〇××年　夏

その日は、蒸し暑い日であったと記録されている。

気温は摂氏三十度を超え湿度も高く、ヒートアイランドの影響もあって街は灼熱の地獄と化していた。にもかかわらず土曜日であったために、多くの人々が都心へと押し寄せ、買い物やウィンドウショッピングを楽しんでいる。

午前十一時五十分。

陽光は中天にさしかかり、気温もいよいよ最高点に達しようとした頃、東京都中央区銀座に突如『異世界への門（ゲート）』が現れた。

中から溢（あふ）れだしたのは、中世ヨーロッパの鎧に似た武装の騎士と歩兵。そして……ファンタジーの物語や映画に登場するようなオークやゴブリン、トロルと呼ばれる異形の怪異達だった。

彼らは、たまたまその場に居合わせただけの人々へと襲いかかった。

老いも若きも男も女も、人種国籍すら問われなかった。それは、あたかも殺戮そのものが目的で

あるかのようだった。平和な国の平和な時代であることを慣れ親しんだ人々に抵抗の術はなく阿鼻叫喚の惨劇の中で次々と倒れていった。

買い物客が、親子連れが、そして海外からの観光客達が次々と馬蹄に踏みにじられ、槍を突き刺され、そして剣によってその命を絶たれた。累々たる屍（しかばね）が街を覆い尽くし、銀座のアスファルトは血の色で赤黒く舗装された。その光景にあえて題字をつけるならば『地獄』。異界の軍勢は、積み上げた屍の上にさらなる屍を積み、そうして出来た肉の小山に漆黒の軍旗を掲げたのである。そして彼らの言葉で、声高らかにこの地の征服と領有を宣言した。それは聞く者の居ない一方的な宣戦布告だった。

『銀座事件』

歴史に記録される異世界と我らの世界との接触は、後にこのように呼ばれることとなった。

＊　＊

時の首相、北条重則（ほうじょうしげのり）は国会で次のような答弁を行っている。

「当然のことであるが、その土地は地図に載ってはいない。

どんな自然があり、どんな動物が生息するのか。そして、どのような人々が暮らしているのか。

その文化レベルは？　科学技術のレベルは？　宗教は？　統治機構の政体すらも不明である。

今回の事件では、多くの犯人を逮捕した。

逮捕などという言葉を用いるのも、もどかしく感じる。これと言うのも、憲法や各種の法令がかかる事態を想定していないからである。そして我が国が、有事における捕虜の取り扱いについての法令を定めていないからでもある。現在の我が国の法令に従えば、彼らは刑法を犯した犯罪者でしかないのだ。

ならば、強弁と呼ばれるのも覚悟で特別地域を日本国内と考えることにする。

『門（ゲート）』の向こう側には、我が国のこれまで未確認であった土地があり、住民が住んでいると考えるのである。向こう側に統治機構が存在するとしても、これと交渉し国境を確定して、国交を結ばなければ独立した国家としては認められない。現段階では、彼らは無辜（むこ）の市民と外国人観光客の命を奪った武装勢力でありテロリストなのだ。

彼らと平和的な交渉をという意見があることも承知している。だが、それをするには相手を交渉の席に座らせなければならない。だが、どうやって？　現実的に我々は『門』の向こう側と交渉を持っていないのに。

我々は『門』の向こう側に存在する勢力を、我々との交渉のテーブルに着かせなければならないのだ。力ずくで、頭を押さえつけてでもだ。

交渉を優位に進めるには、相手を知る必要もある。

逮捕した犯人達……言葉が通じない彼らからも、少しずつ情報を得ることが出来るようになった。だが、それだけを頼りにするわけにもいかない。誰かがその眼と耳で確かめるために赴かなければならないだろう。

従って、我々は『門（ゲート）』の向こう側へと踏み入る必要があるのだ。

だが、無抵抗の民間人を虐殺するような、野蛮かつ非文明的な土地へと赴くのである。相応の危険を覚悟しなければならないだろう。

まずは、非武装と言うわけにもいかない。さらに特別地域内の情勢によっては、交戦することも考えられる。未開の地で誰を味方とし、誰を敵とするか、その判断も現場にある程度委ねなければならない。

何も、危ないところへわざわざ行く必要はない。いっそのこと、『門』が二度と開かれることのないように破壊してしまえばよいという意見が、野党の一部から出ていることも承知しているが、ただ扉を閉ざしてこれで安全だと言い切れるのだろうか？

これから日本国民は、同じような『門』が今度はどこに現れるかという不安を抱えて生活しなくてはならなくなる。今度、あの『門』が開かれるのはあなた方の家の前、家族の前かもしれない。さらには、被害者やご遺族への補償をどうするかという問題もある。

もし、特別地域に統治機構があってそこに責任者がいると言うのであらば、我が国の政府としては、今回の事件について誠意のある謝罪と補償、そして責任者の引き渡しを断固として求めなけれ

ばならない。

もし相手方がこれに応じないならば、首謀者を我らの手で捕らえ裁きにかける。資産等があればこれを力ずくにでも差し押さえて、遺族への補償金に充てる。これは、被害者やご遺族の感情からみても当然のことである。従って、我が日本国政府は、『門』の向こうに必要な規模の自衛隊を派遣することと決定した。その目的は調査であり、かつ銀座事件の首謀者逮捕のための捜査であり、補償獲得のための強制執行である」

特別地域自衛隊派遣特別法案は、野党の一部が反対するなか、衆参両議院で可決された。

なお、アメリカ合衆国政府は、「『門（ゲート）』の内部の調査には、協力を惜しまない」との声明を発表している。北条総理は「現在の所は必要ではないが、情勢によってはお願いすることもありえる。その際はこちらからお願いする」と返答している。

また、中国政府は、『門』という超自然的な存在は、国際的な立場からの管理がなされることが相応しい。日本国内に現れたからと言って、一国で管理すべきではない。ましてや、そこから得られる利益を独占するようなことがあってはならないとのコメントを発表した。

＊　＊

「あえて言上いたしますが大失態でありましたな。この未曾有の大損害に際して、いかなる対策を講じられるおつもりか、陛下のお考えを承りとう存じます」

元老院議員であり、貴族の一人でもあるカーゼル侯爵は、議事堂中央に立って玉座の皇帝モルト・ソル・アウグスタスに向けて歯に衣着せぬ言葉を突きつけた。

元老院議員は議場内であれば、至尊の座を占める者に対してもそれをすることが許されていたし、またそれをすることが求められていると確信していたからでもある。

薄闇の広間。

そこは厳粛であることを旨に、華美な飾り付けを廃し静謐と重厚を感じさせる石造りの議事堂だった。円形の壁面にそって並べられたひな壇に、いかめしい顔つきの男達が座って、中央をぐるりと囲んでいる。

数にしておよそ三百人。帝国の支配者階級の代表たる、元老院議員達であった。

この国において元老院議員となるには、いくつかのルートが存在する。その一つが権門の家に生まれること。何処の国であっても、貴族とは稀少な存在であるが、この巨大な帝国の首都では石を投げれば貴族に当たると言われているほどに数が多いのだ。従って、ただ貴族の一人として生まれ

ただけでは、名誉ある元老院議員の席を得ることはかなわない。貴族の中の貴族と言われるほどの名門、権門の一員でなければ、元老院議員とはなれないのである。

では、権門でもなく名門でもない家に生まれた貴族は、永遠に名誉ある地位を占めることは出来ないかというと、そうでもないのである。その方法として開かれている道が、大臣職あるいは軍において将軍職以上の位階を経験することであった。

国家の煩雑且つ膨大な行政を司るには官僚の存在が不可欠である。権門ではないが貴族の一族として生まれ、才能に恵まれた者が立身を志したなら、軍人か官僚の道を選ぶという方法が存在した。軍や官僚において問われるのは実務能力である。名ばかり貴族の三男坊であっても、才能と勤労意欲、そして幸運さえあればこの道を進むことも可能なのである。

大臣職は宰相、内務、財務、農務、外務、宮内の六職ある。軍人となるか官僚となる道を選び、大臣か将軍の職を経験した者は、その職を退いた後に自動的に元老院議員たる地位が与えられる。ちなみに将軍職については、出身階級が平民であっても就くことが出来る。と言うのも士官になると騎士階級に叙せられ、位階を進めるにつれ貴族に名を連ねることも可能だからである。

カーゼル侯爵は、男爵という貴族としてはあまり高いとは言えない位階の家に生まれた。そこからキャリアを積み、大臣職を経て元老院議員たる席を得たのである。そうした努力型の元老院議員は、自らの地位と責任を重く受け止める傾向がある。要するに張り切りすぎてしまうのである。得てしてそういう種類の人間は周囲からは煙たがられるもので、そして煙たがられれば煙たがられる

ほど、より鋭く攻撃的な舌鋒になってしまうのだ。

「異境の住民を数人ばかり攫ってきて、軟弱で戦う気概もない怯懦な民族が住んでいると判断したのは、あきらかに間違いでした」

もっと長い時間をかけて偵察し、可能ならばまずは外交交渉をもって臨み、与し易い相手かどうかを調べ上げるべきだった、と畳みかけた。

確かに、現在の情勢は最悪である。

帝国の保有していた総戦力のおよそ六割を、今回の遠征で失ってしまったのだ。この回復は不可能でないにしても容易ではなく、莫大な経費と時間を必要とするだろう。

当面は、残りの四割で帝国の覇権を維持していかなくてはならない。だが、どうやって？

モルト皇帝は即位以来の三十年、武断主義の政治を行ってきた。周辺を取り囲む諸外国や、国内の諸侯・諸部族との軋轢、諍いを武力による威嚇とその行使によって解決して、帝国による平和と安寧を押しつけてきた。その圧倒的な軍事力を前にしてはいかなる国も恭順の意を示すより他はなく、あえて刃向かった者は全て滅んでいった。

諸侯の帝国に対する反感がどれほど強かろうと、圧倒的な武威を前にしてはそれを隠すしかない。帝国は、この武威によって傲慢かつ傍若無人に振る舞うことが許されてきたのである。

だが、覇権の支柱たる圧倒的な軍事力の過半を失った今、これまで隠忍自重をつづけてきた外国や諸侯・諸部族がどう動くか？

帝国におけるリベラルの代表格となったカーゼル侯爵は、法服たるトューガ（トーガに似た正装）の裾をはためかせるように手を振り、声を張りあげて問いかけた。

「陛下！　皇帝陛下は、この国を、どのように導かれるおつもりか⁉」

カーゼル侯爵が、そのように演説を結んで席に着くと、皇帝は重厚さを感じさせるゆっくりとした所作で、玉座の身体をわずかに傾けた。その視線はゆらぐことなく、自らを指弾した論客へと真っ直ぐに向いていた。

「侯爵……卿の心中は察するものである。此度の損害によって帝国が有していた軍事的な優位が一時的にせよ失せていることも確かなのだから。外国や諸侯達が隠していた反感を顕わにし、一斉に反旗を翻し鋭い槍先をそろえて帝都まで進軍して来るのではないかと、恐怖に駆られて夜も眠れないのであろう？　痛ましいことである」

皇帝のからかうような物言いに、厳粛な議場の空気がくぐもった嘲笑で揺れた。

「元老院議員達よ、二百五十年前のアクテクの戦いを思い出してもらいたい。全軍崩壊の報を受けた我らの偉大なる祖先達が、どのように振る舞ったか？　勇気と誇りを失い、敗北と同義の講和へと傾く元老院達を叱咤する、女達の言葉がどのようなものであったか？

『失った五万六万がどうしたというのか？　その程度の数、これで幾らでも産んでみせる』と言ってスカートをまくって見せた女傑達の逸話は、あえて言うまでもないだろう？

この程度の危機は、帝国開闢以来の歴史を紐解けば度々あったことである。わが帝国は、歴代

の皇帝、元老院、そして国民がその都度、心を一つにして難事に立ち向かい、さらなる発展を成し遂げてきたのである」

皇帝の言葉は、この国の歴史であった。

元老院に集う者にとっては、改めて聞かされるまでもなく誰もがわきまえていることであった。

「戦争に百戦百勝はない。だから此度の戦いの責任の追及はせぬ。敗北の度に将帥に責任を負わせていては、指揮を執る者がいなくなってしまう。まさかと思うが、他国の軍勢が帝都を包囲するまで、裁判ごっこに明け暮れようとする者はおらぬな？」

議員達は、皇帝の問いかけに対して首を横に振って見せた。

誰の責任も問われないとなれば、皇帝の責任を問うことも出来ない。カーゼルは、皇帝が巧みに責任を回避したことに気付いて舌打ちをした。ここであえて追及を重ねれば、小心者と罵倒された上に、裁判ごっこをしようとしていると言われかねない雰囲気になっていたのだ。

さらに皇帝は続けた。

此度の遠征では熟練の兵士を集め、歴戦の魔導師をそろえ、オークもゴブリンも特に凶暴な個体を選抜した。

十分な補給を整え、訓練を施し、それを優秀な将帥に指揮させた。これ以上はないという陣容と言えよう。

将帥が将帥たる責務、百人隊長が百人隊長たる責務、そして兵が兵たる責務を果たすよう努力し

たはずだ。
　にもかかわらず、七日である。
『門』を開いてわずか七日ばかり。敵の本格的な反撃が始まってからを数えるならば、二日で我が軍は壊滅してしまったのだ。
　将兵の殆どが死亡するか捕虜となったようだ。ようだ、と推測することしか出来ないのも生きて戻れた者が極めて少ないからである。
　今や『門』は敵に奪われてしまった。『門』を閉じようにも、『門』のあるアルヌスの丘は敵によって完全に制圧されて、今では近付くことも出来ないでいる。
　これを取り戻そうと、数千の騎兵を突撃させた。だがアルヌスの丘は、人馬の死体が覆い尽くし、その麓には比喩でなく血の海が出来てしまった。
「敵の武器のすごさがわかるか？　パパパ！だぞ。遠くにいる敵の歩兵がこんな音をさせたと思ったら、味方が血を流して倒れているんだ。あんな凄い魔術、儂は見たこともないわ」
　魔導師でもあるゴダセン議員が、敵と接触した時の様子を興奮気味に語った。
　彼と彼の率いた部隊は、枯れ葉を掃くようになぎ倒され、丘の中腹までも登ることが出来なかった。ふと気づいた時には静寂があたりを押し包み、動く者は己を除いてどこにもいない。見渡す限りの大地を人馬の躯が覆っていたと述懐した。
　皇帝は瞑目して語る。

「既に敵はこちら側に侵入してきている。今は門の周りに屯して城塞を築いているようだが、いずれは本格的な侵攻が始まるだろう。我らは、アルヌス丘の異界の敵と、周辺諸国の双方に対峙していかなければならない」

「戦えばよいのだっ！」

禿頭の老騎士ポダワン伯爵は、立ち上がると皇帝に一礼して、主戦論をもって応じた。

「窮している時こそ、積極果敢な攻勢が唯一の打開策じゃ。帝国全土に散らばる全軍をかき集めて、逆らう逆賊や属国どもを攻め滅ぼしてしまえ！　そして、その勢いを持ってアルヌスにいる異界の敵をうち破る！　その上で、また門の向こう側に攻め込むのじゃ！」

議員達は、あまりに乱暴な意見に「それが出来れば苦労はない」と、首を振り肩をすくめつつヤジの声を投げた。全戦力をかきあつめれば、各方面の治安や防衛がおろそかになってしまう。皆が口々に罵声を放ちあって、議場は騒然となった。

ポダワンは、逆賊共は皆殺しにすればよい。皆殺しにして、女子どもは奴隷にしてしまえばよい。街を廃墟にし、人っ子一人としていない荒野に変えてしまえば、もうそこから敵対する者が現れる心配などする必要もなくなる……などと、過激すぎる意見で返していた。非現実的なことのようだが、歴史的に見れば帝国にはその前科がある。

帝国がまだ現在よりも小さく、四方の全てが敵であった頃、敵国をひとつずつ攻略しては住民全てを奴隷とし、街を破壊し、森は焼き払い農地には塩をまいて不毛の荒野とし、周囲を完全な空白

地帯とすることで安全を確保したのである。
「それが出来たとしても一体全体どうやってアルヌスの敵を倒す？　力ずくでは、ゴダセンの二の舞を演じることになろうな？」
　議場の片隅から飛んできた声に対して、ポダワン伯は苦虫を噛みつぶしたような表情をしながらも、苦しげに応じる。
「う～そうじゃな……属国の兵を根こそぎかき集めればよい。四の五の言わせず全部かき集めるのじゃ。さすれば数だけなら十万にはなるじゃろて。弱兵とは言え矢玉除けにはなる。その連中を盾にして、遮二無二、丘に向かって攻め上ればよいのじゃよ！」
「連中が素直に従うものか！」
「そもそもどんな名目で兵を供出させる？　素直に軍の過半を失いましたから、兵を出して下さいとでも頼むのか？　そんなことをしたら、逆に侮られるぞ」
　カーゼル侯は、空論を振りかざして話をまとまりのつかない方向へとひっぱっていこうとするポダワン伯という存在を苦々しく思った。
　タカ派と鳩派双方からの聞くに耐えない言葉の応酬が始まり、議場は掴み合いに陥りかねない雰囲気が漂いだした。
「ではどうしろと言うのか!?」
「ひっこめ戦馬鹿！」

議員達は冷静さを失って乱闘寸前にまでヒートアップする。
時間だけが虚しく過ぎ去って行く。わずかに理性を残す者もこのままではいけないと思うものの、紛糾する会議をまとめることが出来ないでいた。
そんな中で、皇帝モルトが立ち上がる。
発言しようとする皇帝を見て、罵り合う議員達も口を噤んで静かになっていった。
「いささか乱暴であったが、ポダワン伯の言葉は示唆に富んでおった」
それを受けてポダワンは、皇帝に恭しく一礼した。
皇帝の威厳を前にして議員達は冷静さを取り戻していく。皇帝が次に何を言うのか聞こうとし始めているのだ。
「さて、どのようにするべきかだ。このまま事態が悪化するのを黙って見ているのか？　それも一つの方法ではある。だが、余はそれは望まない。となれば、戦うしかあるまい。ポダワン伯の進言を採用し、属国や周辺諸国の兵を集めるが良いであろう。各国に使節を派遣せよ。ファルマート大陸侵略を窺う異世界の賊徒を撃退するために、援軍派遣を求めるとな。我らは連合諸王国軍を糾合し、アルヌスの丘へと攻め入る」
「連合諸王国軍？」
皇帝の言に元老院議員達は、ざわめいた。
今から二百年ほど前に東方の騎馬民族からなる大帝国の侵略に対抗するため、大陸諸王国が連合

してこれと戦ったことがあった。それまで相争っていた国々が集うのに、「異民族の侵攻に対して仲間内で争っている場合じゃない」という心理が働いたのである。不倶戴天の敵として争っていたはずの列国の王達が、騎士達が、馬を並べて互いに助け合い異民族へと向かっていく姿は、今では英雄物語の一節として語られている。

「それならば、確かに名分にはなるぞ」

「いやしかし、それはあまりにも……」

そう。そもそも『門』を開いて攻め込んだのはこちらではなかったか？　皇帝の言葉はその主客を転倒させていた。こちらから攻め込んでおいて、「異世界からの侵略から大陸を守るため」と称して各国に援軍を要請するとは、厚顔無恥にもほどがあるのではないか。……それをあえて口にする者はいなかったが。

とはいえ「帝国だけでなくファルマート大陸全土が狙われている」と檄を飛ばせば、各国は援軍を送ってよこすだろう。要するに、事実がどうであるかではなく、どう伝えるかと言うことだ。

「へ、陛下。アルヌスの麓は、人馬の躯で埋まりましょうぞ？」

カーゼル侯の問いに、皇帝モルト嘯くように告げる。

「余は必勝を祈願しておる。だが戦に絶対はない。故に、連合諸王国軍が壊滅するようなこともありうるやも知れぬ。そうなったら、悲しいことだな。そうなれば帝国は旧来通りに諸国を指導し、これを束ねて、侵略者に立ち向かうことになろう」

周辺各国が等しく戦力を失えば、相対的に帝国の優位は変わらないということである。
「これが今回の事態における余の対応策である。これでよいかなカーゼル侯？」
皇帝の決断が下った。
カーゼルは連合諸王国軍の将兵の運命を思って、呆然とした面持ちとなった。
周囲は、そんなカーゼルら鳩派を残し、皇帝に向かい深々と頭を下げると、粛々と各国への使節を選ぶ作業へと移ったのである。

＊　＊

打ち上げられた照明弾が、漆黒の闇を切り裂き大地を煌々と照らす。
彼らがみずからをして『コドウ・リノ・グワバン』と呼ぶ、敵の突撃が始まった。
人工の灯りと、中空に打ち上げられた照明弾によって、麓から押し寄せる人馬の群れが浮かび上がる。
重装騎兵を前面に押し立て、オークやトロル、ゴブリンといった異形の化け物が大地を埋め尽くして突き進んで来る。その後ろには、方形の楯を並べた人間の兵士が続いていた。
上空には、人を乗せた怪鳥の群れが見える。
数にして、数千から万。はっきり言って数えようがない。

監視員が無線に怒鳴りつけていた。
「地面三分に、敵が七分。地面が三分に敵が七分だ!!」
敵意が、静かに、ひたひたと押し寄せて来る。
哨所からの知らせを受けた、陸上自衛隊特地方面派遣部隊・第五戦闘団第５０２中隊の隊員達は交通壕を走ると、第二区画の各々に指定された小銃掩体（えんたい）へと飛び込んで、担当範囲へ向けて銃を構えた。
陸自の幕僚達は、今回の特地方面派遣部隊を編成するに当たっては、かなり苦心惨憺していた。なにしろ、文明格差のある敵である。槍や甲冑で身を固めた敵と対峙した経験を持つ者などどこにもいないし、魔法やら、ファンタジーな怪異、幻想種への対処法に至っては、知るよしもない。
そこで彼らは、小説や映画にアイデアを求めることとした。
自衛隊のＰＸ（売店）では自衛隊が戦国時代にタイムスリップする小説はもとより、漫画、挙げ句の果てに新旧の映画版やテレビ版のＤＶＤが飛ぶように売れたという。さらにはファンタジーの映画やアニメを求めて幹部自衛官が秋葉原の書店に列を作るという、笑っていいのかいけないのか判らない事態すらおこっている。
Ｍ氏やＴ氏といった高名なアニメ監督や小説家などが、市ヶ谷に集められて参考意見を求められたという話までもがまことしやかに語られているほどなのだ。
そして彼らは某（なにがし）かの結論を下すと、全国の各部隊から併せて三個師団相当の戦力を抽出したので

ある。

それは一尉～三尉の幹部と三等陸曹以上の陸曹を集中するという特異な編成であった。

その理由としては、首相の答弁にある『未開の地で誰を味方として、誰を敵とするか』という高度な判断力を現場の指揮官に求める必要があるからと説明しているが、それだけではないことは、誰の目にも明らかだった。

特地方面派遣部隊は、かき集められた装備にも特徴があった。比較的古い物が多く見られるということである。まず隊員達の携行する小銃は六四式小銃。集結した戦車は七四式だった。全て新装備が導入されたことで、第一線からは姿を消しつつあるものだ。

「在庫一斉処分」などと口の悪い最先任上級曹長は語っている。そういう側面がないとも言えないが、そればかりが理由ではないのだ。

六四式小銃が選択されたのは八九式の5・56㎜弾では、槍を構えて突っ込んで来る重量級のオークを止めることが出来なかったからだ。さらに同銃の銃剣で敵を刺突すると、鋸状になっている鎬が鎧やチェーンメイル等の防具にひっかかって、そのまま抜けなくなってしまった事例が多く報告されたのだ。

その上、情勢によっては装備を放棄して撤退しなければならない事態も想定されている。一両数億円もする高価な兵器を、簡単にうち捨ててくるわけにはいかないので、廃棄しても惜しくない、廃棄予定あるいは既に廃棄済みであるが、手続きの遅れによって倉庫等に眠っていた装備をかき集

めたのである。
六四式小銃を持つ者は二脚を立てて、照星と照門を引き起こす。配られた弾が常装薬なので、規整子は『小』にあわせた。
ある者は5・56㎜機関銃のミニミを構え、カチカチと金属製ベルトリンクで繋がれた弾帯を押し込んでいる。（六二式機関銃は、陸曹や幹部が血相を変えて「俺たちを殺すつもりかぁ」と反対したので、特地には持ち込まれていない。それほど故障が多く、言うことキカン銃と揶揄されていた銃なのだ）
高射特科のスカイシューターをはじめとする、35㎜二連装高射機関砲Ｌ90や、40㎜自走高射機関砲Ｍ42と言った新旧そして骨董品の対空火器が、上空から近付く怪鳥へと砲口を向けた。
次の照明弾が上げられ、闇夜が再び明るくなった。上空から降り注ぐ光が、夜空を背景にしていた敵を浮かび上がらせる。敵も、その足を速め、足音と言うよりは轟きに近くなっている。
小銃の切り替え軸（安全装置）を「ア」から「レ」へとまわす。
耳に付けたイヤホンから、指揮官の声が聞こえた。
「慌てるなよ、まだ撃つなぁ……」
慣れたわけではないが、これが初めてという訳でもない。自衛官達は近づいて来る敵を前にして息を呑みつつも、号令を待つことが出来た。
敵が、彼らの言葉で『アルヌス・ウルゥ』と呼んでいるこの丘に押し寄せて来るのは、これで三

回目。そのうち二回は彼らの失敗だった。大敗北と言って良いはずだ。

この世界の標準的な武器である槍や弓そして剣、防具としての甲冑では、その戦術はどうしても隊伍を整えて全員で押し寄せるという方法となる。時折、火炎や爆発物を用いた攻撃（魔法かそれに類するものではないかと言われている）も行われているが、射程が短い上に数も圧倒的に少ないため、それほどの脅威にならない。そのために、どれほどの数を揃えようとも、現代の銃砲火器を装備した自衛隊の前では敵ではなかったのだ。

黒澤明監督の映画『影武者』で、武田騎馬隊が織田・徳川の鉄砲隊を前にたちまち壊滅するという場面が描かれていたが、それよりもさらに映画的に、人馬の屍が丘の麓を埋め尽くす結果となったのである。

だが、それでもなお彼らはこの丘を取り戻そうと攻撃を始める。

自衛隊もこの地に居座って、アルヌスの丘を守ろうとする。

全てはここに『門』があるからだ。『門』こそが、異世界を繋ぐ出入り口であった。敵はこのアルヌスから銀座へとなだれ込んだのである。東京、そして銀座で起きたあの忌まわしい惨劇を防ぐためには、この『門』を確保し絶対に渡すことは許されない。

奪おうとする。そして守ろうとする。この二つの意志が衝突してついに三度目の攻防戦へと行き着いた。過去の二回の経験を学んだのか、今回は夜襲だった。月の出ていない夜間なら見通しも利かない。夜ならば油断も隙もあり得る……というのが、この世界の感覚だったのだろう。悪い考え

とは言えない。が、しかし……次の照明弾があがると、コドウ（連合諸王国軍）・リノ・グワバン将兵の姿が、はっきりと浮かび上がった。

「撃てぇ！」

東京そして日本は、二十四時間営業は当たり前の世界だ。昼だろうと夜だろうと区別無く、列べられた銃口は挨拶代わりとして砲火を持って彼らを出迎えたのである。

01

伊丹耀司（いたみようじ）二等陸尉（三十三歳）はオタクであった。現在もオタクであり、将来もきっとオタクであり続けるだろうと自認している。

『オタク』と言っても、自分でファンフィクション（二次創作）小説や漫画を描いたり、あるいはフィギュアや球体関節人形を作って愛でたりするという、クリエイティブなオタクではない。もちろんボーカロイドを歌わせたりもしない。他人が「創った」り「描いた」ものへの批評や評価を掲示板に投稿するという、アクティブなオタクでもない。誰かの書いた漫画や小説をただひたすらに読みあさるという、パッシブな消費者としてのオタクであった。

夏季と冬季の同人誌即売会には欠かさず参加し、靖国神社なんかには一度も行ったことがないく

せに中野、秋葉原へは休日の度に詣でている。官舎の壁には中学時代に入手した高橋留美子のサイン色紙が飾られていて、本棚には同人誌がずらっと並んでいるありさまだ。法令集や教範、軍事関係の書籍は開くこともないからと本棚でなく、新品状態のままにビニール紐で縛り上げて押入の中に放り込んである。

そんな性向の彼であるから、仕事に対する態度は熱意というものにいささか欠けていた。例えば、演習の予定が入っていても「その日は、イベントがありまして……」と臆面もなく休暇を申請してしまうというように。

彼は嘯く。

「俺はね、趣味に生きるために仕事してるんですよ。だから仕事と趣味とどっちを選ぶ？　と尋ねられたら、趣味を優先しますよ」

そんな彼が、よーも自衛官などになったものだと思うのだが、なっちゃったのだから仕方ないのである。

そもそも彼のこれまでは、「喰う寝る遊ぶ、その合間にほんのちょっと人生」と言うに相応しい物であった。彼が昔愛読したマンガにあった「息抜きの合間に、人生やってるんだろ」というセリフが最も合っているように思われる。だからでもないだろうが、競争率の低い公立高校を選んで、あんまり勉強することなく入試に合格。成績は中の下。アニメ・漫画研究会で漫画や小説を読みふける毎日。たまに映画の封切り日には朝早く映画館に列ぶという三年間を過ごしたのだった。

大学は、新設されたばかりで競争率の低そうな学科を選び、これもまたあんまり勉強することなく合格。やはりアニメを観賞し、漫画やライトノベルを読みつづける毎日を過ごすが、在学中無遅刻・無欠席で全ての講義に出席していたこともあって、講師陣の受けはそれなりに良く、「伊丹だから、ま、いいか」と『良』と『可』の成績をもらい四年で卒業。

「就活どうする？」という話題が、学生の間でそろそろ出始めた頃に、彼はしゃかりきになって会社訪問するのは好きじゃないなぁ……などと呟きながら都内某所にある自衛隊地方連絡部（現在は地方協力本部）の事務所の戸を叩いたのである。

「こんな奴、よくも幹部にしたものだ」とは、誰のセリフだっただろうか。

彼の国防意欲というか、熱意に欠ける職務態度に業を煮やした上司が、「お前ちょっと鍛え直して貰ってこい」と有無を言わせず過酷な訓練で定評のある幹部レンジャー訓練に放り込んだ。

案の定、すぐに音を上げて「やめたいんですけど」と電話をかけて来た。

これには彼の上司も困ってしまった。あの手この手で励まし、頑張らせようとしたのだがどうにもならない。そもそも言ってどうにかなるなら最初から苦労しない。疲れ果て、どうしようもなくなって、最後にポツリと呟いた。

「ここで止めたら、年末（二十九、三十、三十一日）の休暇はやらん」

「じゃぁ、頑張ってみます」

伊丹の上司は、自分が口にした何に効果があったのかと、今でも悩んでいると言う。

さて、こんな伊丹が夏のある日、都内某所でおこなわれているイベントに行くために新橋駅で『ゆりかもめ』を待っていたところ、とんでもない事件に出くわした。

後に『銀座事件』と呼ばれるアレである。

突然あらわれた巨大な『門』。

そこからあふれ出た、異形の怪異をふくむ軍勢。

今でこそ『門』の向こう側を、政府は特別地域などと呼んでいるが、伊丹には瞬間的に『異世界』だと理解できた。理解できてしまった。

そしてこう思った。

「くそっ！　このままでは、夏の同人誌即売会が中止になってしまう」

その後の彼の活躍は、革新系の大手新聞ですら一面で取り上げざるを得なかったほどである。

霞ヶ関や永田町も襲われ、何が起きているのかわからずただ逃げ回るばかりの政府の役人と政治家たち。命令が来ないために、出動したくても出来ない自衛隊。桜田門以南の官庁街がほぼ壊滅したために指揮系統がズタズタになり、効果的な対応が出来ない警察。

そんな中で伊丹は、付近の警察官を捕まえて西へ指さした。

「皇居へ避難誘導してくれ！」

だが、「そんなことできるわけない」という言葉が返ってくる。一般の警察官にとって、皇居内

に立て籠もるなどというアイデアは思案の外にあったからだ。

とはいえ、皇居は元より江戸城と呼ばれた軍事施設である。従って数万の人々を収容し、かつ中世レベルの軍勢から守るのにこれほど相応しい施設はない。いや、包囲されているわけでも無いから籠城の必要はない。避難した人々は、半蔵門から西へと脱出すればよいのだ。

伊丹は、指揮系統からはずれつつも懸命に民間人を守ろうとしていた警察官や、避難した民間人の協力を仰いで、皇居へと立て籠もった。皇宮警察がやかましかったが、これも皇居にお住まいの『偉い方』のお言葉一つで鎮まる。

徳川の手によって造られた江戸城は実戦経験のない城塞である。だが、数百年の時を経て平成の世にて初めて城塞としての真価を発揮したのである。

この後、皇居にある近衛と称される第一機動隊、そして市ヶ谷から自主的に出動してきた第四機動隊によって、『二重橋濠の防衛戦』は引き継がれたのであるが、それまでの数時間が、数千からの人を救ったという功績は誰もが認めることである。こうして伊丹は防衛大臣から賞詞を賜った上で二等陸尉へと昇進することとなった。

なっちゃったのである。

で、時が少しばかりたって、特別地域派遣部隊である。

三度目の攻撃を受けた翌朝。

明るくなって見えた光景は、夥しい人馬と怪異の死骸によって大地が埋め尽くされているというものだった。

さらには高射機関砲の40㎜徹甲弾を受けて墜ちた飛竜も横たわっていた。

伝説ではドラゴンの鱗は鉄よりも硬いと語られているが、確かにそのようである。ただ40㎜弾を受けては耐えることは出来なかったようだ。

「ちょっとした地方都市一個分の人口が、まるまる失われたってことか」

伊丹は、これを見て思った。

銀座事件で攻め込んできた敵は、約六万。

第一次から始まって昨晩の第三次攻撃で、およそ六万が死傷（オークやゴブリン等の怪異はこれに含まず）。併せて十二万もの兵を失っちゃって、敵はどうするつもりなんだろか、と。

この世界の人口がどの程度か知る由もない。何しろ、『門』とその周辺を確保しただけで、まだなんの調査も出来ていないのだから。

だが一般的な常識から考えても、数万の戦力を丸ごと失って、その部族だか国家だかが無事でいられるはずがないのだ。見たところ倒れている兵士の中に、子どもにしか見えない者もいる。実際に子どもなのか、そのような容姿をもった種族なのかは判らないが……。もし、子どもを戦場に送るようならその国の有り様は、最早末期的と言えるだろう。

伊丹ですらこのように感じるのだから、他の幹部達も当然考えていた。

この世界の調査をしなければ、と。

前進して一定の地域を確保するにしても、『門』周辺だけを確保し続けるにしても、さらに進んで敵と交渉するにしても、今後の方針を定めるには情報が不足しているのである。幸いにしてOH-1型ヘリが撮ってきた航空写真から周辺の地図は起こすことができた。滑走路が開けば、無人偵察機を飛ばすこともできるだろう。従って、次はどんな人間が住んでいるか、人口や人種、産業、宗教そして政治形態がどのようになっているか、そして住民の性格はどういうものかの調査をしたいところだ。

どうやって、調査するのか。

もちろん、直接行って見るのである。

「それがいいかも知れませんねえ」

「それがいいかもじゃない！　君が行くんだ」

檜垣（ひがき）三等陸佐は、物わかりの悪い部下に疲れたように言った。

伊丹は、新しく上司となった男の言葉に首を傾げた。

自分は員数外の幹部として第五戦闘団に所属しているおまけみたいな二尉だ。調査という任務はわからなくもないが、その為の部下を持っていなかったのである。

「まさか、一人で行けと？」

それも、気楽でいいかなと思わなくもない。

「そんなことは言うわけないだろう。とりあえず六個の深部情報偵察隊を編成する。君の任務はその内の第三の指揮だ。担当地域の住民と接触し民情を把握せよ。可能ならば、事後の今後の活動に協力が得られるよう、友好的な関係を結んできたまえ」
「はぁ……ま、そう言うことなら」
こうして伊丹は後頭部をポリポリと掻きながら、第三偵察隊の隊長となったのである。

＊　＊

アメリカ合衆国
ホワイトハウス

「大統領閣下。東京に現れた『門（ゲート）』に関する、第六次報告です」
大統領のディレルは、カリカリに焼き上げた薄切りのトーストにバターとジャムを重ねて塗ったものをサクッと噛ると、彼の優秀なスタッフが差し出した報告書を受け取った。
大統領は表紙を含めて数枚ばかりめくる。さっと目を通した程度で、テーブルの上にポンと放り出した。
「クリアロン補佐官。この報告によると、日本軍は折角『門』の向こう側へ立ち入ったのに『門』

の周囲を壁で囲んで、亀の子みたいに首を引っ込めて立て籠もっている。そういうことなのだね？」

「その通りです、閣下。自衛隊は守備を固めて動いていません」

Army（軍）ではなくSelf Defense Force（自衛隊）だと、さりげなく訂正する補佐官。だが大統領はそれに気づかないのかそのまま話を続けた。

「ふむ……圧倒的な技術格差。高度な訓練を受けた優秀な兵士。いったい何を躊躇（ためら）う必要がある？　君の考えを述べたまえ」

「大統領閣下、ご説明いたします。日本は、かつての大戦の教訓から学んだのです。いかに強力な戦力を有しているとは言え、広大な地域を制圧支配しようとするには、その戦力は不足します。選択しうるオプションとしては、特別地域の政治状況を明確に見極め、要点を抑えるという戦略しかありません」

そのことは中級指揮官の層を異常なまでに厚くした特地派遣部隊の編成からも窺い知ることが出来る。『門』を確保する段階を終えて、現在は特別地域の各地に小部隊を派遣し、情報収集や宣撫工作にあたらせる、といったところだろう。

大統領はナプキンで口元についたバターをぬぐうと、目の前の部下を一瞥した。

「つまり、日本軍の現状は特別地域の情勢を窺っているからだと言うのだね？」

「そのとおりです大統領閣下。北条（ほうじょう）首相は石橋を叩く男のようです。成果を急いでいません」

大統領は、ススッとコーヒーを口に含んだ。
銀座事件を受けた後の強腰の態度をとった北条は、空前の支持率を受けて政権が安定している。だから成果を急ぐ必要がないと言うのである。
我が身を振り返ればディレルは支持率が急落している。早急に具体的な成果をあげて国民に示さなければならない。それが彼の立場だった。
「補佐官、『門』はフロンティアだ」
「その通りです、大統領閣下」
「『門』の向こう側に、どれほどの可能性が詰まっているか、想像したまえ」
手つかずの資源。圧倒的な技術格差から生ずる経済的な優位。汚染されていない自然。これら全てに資本主義経済は価値を見いだすのである。
資源は存在する。これは間違いがない。
東京に攻め込んできた兵士の武装を解析したところ、ほぼ地球と同じ鉱物資源があることが判明している。それどころか、こちら側ではレアメタル、レアアースとされる稀少資源が、特地では豊富に存在する可能性も指摘されていた。
そして技術格差は、武器の種類や構造から類推することが出来る。
見事な、工芸品と見まがうばかりの細工が施されていたが、所詮は手工業の域を出ないものばかりだ。材質、構造共に不均質で規格といったものは存在してなかった。

これらの武装で身を固めた騎士達が攻め込んで来るという戦術を見れば、その社会構造と生産力までも予想が可能だ。

さらに、こちら側には存在しないファンタジーな怪異、動物、亜人達。これらの生き物が持つ遺伝子情報は、生命科学産業の研究者達にとって宝の山と言えるだろう。

極めつけは『門』である。

この超自然現象を含めた全てに、全世界の科学者達が注目しているのだ。

「ご安心下さい大統領閣下。わが国と日本とは友邦です。価値観を同じくする国であり、経済的な結びつきも強固です。『門』から得る利益は、わが国の企業にも開放されるでしょう。また、そのように働きかけるべきです」

「それでは不足なのだよ」

同様の働きかけならば、既にＥＵ各国が始めている。

中国やロシア、新興諸国も『門』がもたらすであろう利益、資源を狙って水面下の活動を始めていた。

「問題は、どれほどの権益を確保できるかなのだ」

これこそがディレル大統領が国民に示すことの出来る成果となるだろう。

「その為には、わが国はもっと積極的に関与するべきではないかね？　米日同盟の見地から陸軍の派兵を検討しても良いと思うが」

だが、補佐官は残念そうに首を振った。
「我が国は、中近東だけでも手を焼いております。余所様の喧嘩に手を出す余裕はありません」
それに『門』の持つ可能性は、必ずしもよい面ばかりとは限らないのだ。未開の野蛮人を手なずけ教化しようとするなら、多額の予算と人材を長期間にわたって投入しなければならなくなる。かつての植民地時代のように、ただ収奪すればよいという時代ではないのだ。
大統領は、思ったようにならない現実の忌々しさに、深いため息をついた。
「報告書から見ると、『門』の向こう側での戦闘は苛烈極まりなかったようだね？」
「弾薬の使用量が尋常ではなかったようです。ですが、ここ最近は落ち着いています。自衛隊は守り通すでしょう。自衛隊は装備、訓練共に守勢に秀でています」
「ふむ。では、わが国の対応はどうするべきかな？」
「現段階としては日本国政府の武器弾薬類調達を支援する程度でよいでしょう。これは兵器産業界に声をかけるだけで済みます。あとは、特別地域の学術的な合同調査を持ちかけ『門』の向こう側に人を送り込みたいところです。これ以外については、状況次第かと存じます」
あまり、日本に肩入れしすぎると万が一の時に巻き込まれるおそれがある。
物事は、どう転ぶかわからないものなのだ。日本が特別地域に自衛隊を進めることについては、多くの国が大義名分があると認めている。だが一部……中国や韓国などは、かつての軍国主義の再来であり、侵略であると非難していた。こうした国は日本が何をやっても非難する傾向があるが、

耳に入る以上は気にはなるのだ。日本が『門』から得られる利益を独占するような素振りを見せれば、この主張に同調する国も出て来るだろう。そうなった時に、合衆国が共犯呼ばわりされる事態だけは避けたい。

「火中の栗は、日本に拾わせるべきです」

そして、状況がこじれたらしゃしゃり出て抑えてしまえばよい。そのために国連を利用する手配もしてある。補佐官はそう言っていた。

だが、ディレルとしてはやはり不満だった。

今のところ日本はうまくやっており、口や手を出す機会が見いだせそうもない。

ディレルは国内に向けて具体的な成果を示す必要に迫られているのだ。かと言って、補佐官の危惧を無視するわけにもいかないのもまた確か。大統領は舌打ちしつつも「そうだな」と頷き、次の懸案事項に話題を移した。

『門』の出現。それは、新大陸発見に続く歴史的な出来事である。

アメリカ大陸の発見によってスペインが世界帝国へと飛躍したように、『門』の存在は世界の枠組みを大きく変えることが予想された。あらゆる国の政府が、その事を理解しているゆえに、『門』内部での日本の動向が注視されているのである。

＊　＊

ウラ・ビアンカ（帝国皇城）

皇帝モルトの皇城には、毎日数百人の諸侯・貴族が参勤する。

元老院議員、貴族や廷臣が集い、諸行事に参加するとともに、政治を雑事でもあるかのように行っていた。

会議では優雅に踊り、美食に耽り、賭け事や恋愛遊戯といった遊興を楽しみつつ、議場で少しばかり話し合う……という感じである。軍を派遣するかどうかを、貴族達が狐狩りの獲物の数で決めるということもあった。

だが、ここ暫く続いた敗戦は宮廷の諸侯、貴族達を消沈させるに充分な出来事であった。煌びやかな芸術品は色あせて見え、華やかな音楽も空虚に聞こえる。

栄耀栄華を誇るモルト皇帝の御代を支えるものは、強大な軍事力と莫大な財力。この両輪こそが、帝国を大陸の覇権国家たらしめていることは小児であっても理解している。

それが、今ではその片輪が失われてしまった。

宮廷を彩った武官や貴族達も出征していただけに、仲間うちの犠牲者も少なくない。未亡人が量

産されて、貴族達は文字通り連日おこなわれる葬儀に出席しなくてはならなかった。
皇帝は喪に服して行事を控え、宮廷も閑散とした日が続いていた。
「皇帝陛下、連合諸王国軍の被害は甚大なものとなりました。死者・行方不明者はおよそ六万人。負傷し軍役に再び就くことのできぬ者とを併せますと、損害は十万にも達する見込みです。敗残の連合諸王国軍は統率を失い、それぞれちりぢりとなって故郷への帰路に就いたようです」
この数には、オークやゴブリン、トロルといった怪異達は含まれていない。亜人のなかでも知能に劣る怪異達は軍馬と同じ扱いをされているのだ。
内務相のマルクス伯爵の報告に、皇帝は気怠そうに身を揺すった。
「ふむ、予定通りと言えよう。わずかばかりの損害に怯えておった元老院議員達も、これで安堵することじゃろう」
「しかし、『門』より現れ出(い)でました敵の動向が気になりますが」
「そなたも、いささか神経質になっているようだな」
「この小心は生来のもののようでして、陛下のような度量は持つに至ることはできませんでした」
「よかろう。ならば、股肱の臣を安堵させてやることにしよう。なに、そう難しいことではない。アルヌス丘からここまでの距離は長い。すなわち帝国の広大な国土を、防塁としてこれにあたればよいのだ」
皇帝は続けた。

敵が動き出したなら、アルヌスより帝都に至る全ての街と村落を焼き払い、井戸や水源には毒を投げ入れ、食糧は麦の一粒に至るまで全てを運び出すよう命ぜよ。さすればいかなる軍と言えども補給が続かず焦土の中で立ち往生する。そうなれば、どれほど強大な兵力を有していようと、優れた魔導を有していようと、付け入る隙は現れるであろう、と。

現地調達できなくなれば食糧は本国から運ぶしかなく、長距離の食糧輸送は馬匹(ばひつ)を用いたとしても重い負担だ。これによって敵の作戦能力は、帝都に近付けば近付くほど低下することとなる。それに対して帝国軍は、帝都に近付けば近付くほど有利になる。各地に拠点を構築し、敵に出血を強いていけば、敵は勢いを失い自然に立ち枯れる。それがこの世界における軍学上の常識であった。

敵を長駆させ、疲れたところを撃つという、どこの世界においてもみられる至極(しごく)一般的で判りやすい戦略であるが故に、効果的でもある。しかし自国を焦土とすることの影響は深刻かつ甚大であり回復は容易でない。人民の生活を全く考慮しない非情さ故に、確実に民心を離反させる。守ってもらえなかった。それどころか食べ物も、飲み水も奪われたという恨みは、永久に受け継がれていくことになるだろう。そうした影響を考えれば、容易にそれをするわけにはいかないのが政治であるはずだった。しかし……。

「しばし税収が低下しそうですな」

マルクス伯は、ちょっと差し障りがある程度の言い方で、民衆の被害を囁くだけだった。

皇帝も「致し方あるまい。園遊会をいくつか取りやめるか。それと、離宮の建造を延期すれば良

かろう」と応じるのみ。強大な帝国においては、民衆の被害や民心などその程度のものなのである。

「カーゼル侯あたりが、うるさいかと存じますが」

「何故、余がカーゼル侯の精神衛生にまで気を配らねばならぬのか？」

「恐れ多きことながら、一部の議員らと語らって、非常事態勧告を発動させようとする動きが見られます」

元老院最終勧告は帝国の最高意志決定とされている。これが元老院によって宣言されれば、いかに皇帝であろうと罷免される。歴史的にも元老院最終勧告によって地位を追われた皇帝は少なくないのだ。

「ふむ面白い。ならばしばらくは好きにやらせてみるが良かろう。そのような企てに同調しそうな者共を一網打尽にする良い機会やも知れぬ。枢密院に命じて調べさせておくがよかろう」

マルクス伯は一瞬驚いたが、ただちに恭しく一礼した。

元老院の最終勧告に対抗する皇帝側の武器が国家反逆罪である。こうして枢密院に証拠固めという名の証拠ねつ造が命じられた。

「元老院議員として与えられた恩恵を、権利と勘違いしている者が多い。いささか鬱陶しいのでこのあたりで整理をせねばな」

皇帝はそう呟くとマルクス伯の退出を命じようとした。

恭しく頭を下げるマルクス伯。だが、静謐な空気を破って凛と響き渡る鈴を鳴らしたような声が、宮廷の広間に鳴り響いた。

「陛下！」

つかつかと皇帝の前に進み出たのは、皇女すなわち皇帝の娘の一人であった。

片膝を付いてこれ以上はないというほど見事な儀礼を示した娘は、炎のような朱色の髪と白磁の肌を、白絹の衣装で包んでいる。

「どうしたのか？」

「陛下は我が国が危機的状況にあるというのに、何を為されているのですか？　耄碌されたのですか？」

優美な顔から、棘のある辛辣なセリフが出てくる。

モルト皇帝はここにも恩恵と権利を勘違いしている者がいることに気付いて微苦笑した。皇女の舌鋒が鋭いのはいつものことである。

「殿下、いったいどのようなご用件で、陛下の宸襟を騒がされるのでしょうか？」

皇帝の三女、ピニャ・コ・ラーダは、腰掛けて微笑んでさえいれば、比類のない芸術品とも言われるほどの容姿を持っている。だが、好きに喋らせると気の弱い男ならその場で卒倒しかねないほど辛辣なセリフを吐くので国中にその名を知られていた。

「無論、アルヌスの丘を占拠する賊徒どものことです。アルヌスの丘は、まだ敵の手中にあると聞

きました。陛下のような安穏な様子を拝見するに、連合諸王国軍がどうなったのか未だご存じないと思わざるを得ない。マルクス、そなた陛下に事実をご報告申し上げたのだろうな？」

「皇女殿下、ご報告申し上げましたとも。連合諸王国軍は多大な犠牲こそ払いましたが、敵のファルマート大陸侵攻を見事に防ぎきったのです。身命を省みない勇猛果敢なる諸王国軍の猛攻によって、物心共に損害を受けた敵は恐れおののき強固な要害を築いて、冬眠した地熊のごとく籠もろうとしております。そのような敵など、我らにとってなんら脅威ともなりません」

マルクス伯の説明に、ピニャは「フン」とそっぽを向き言い放った。

「妾も子どもではない故、物は言いようという言葉を知っておる。知っておるが、言うに事欠いて、全滅で大敗北の大失敗を、成功だの勝利だのと言い換える術までは知らなんだぞ」

「これは、事実でございます」

「こうして真実は犠牲になり、歴史書は嘘で塗り固められていくという訳か？」

「そのようにおっしゃられても、私にはお答えのしようもなく」

「この佞臣め！　聖地たるわれらがアルヌスの丘は連中に抑えられたままではないか？　何が防衛に成功したか？　真実は、累々たる屍で丘を埋め尽くしただけであろう」

「確かに、損害は出ましたな……」

「ならば、この後はどうする？」

マルクス伯爵は、とぼけたように兵の徴募から始まって、訓練と編成に至るまでの一連の作業を

説明した。軍に関わる者なら誰でも知る、新兵の徴募と訓練、編成の過程を告げられてピニャは舌打ちした。

「今から始めて何年かかると思っているのか？　その間にアルヌスの敵が、なにもせずじっとしていてくれると？」

「皇女殿下。そのようなことは私めも存じております。しかし、現に兵を失った上には、地道にでも徴兵を進め、訓練を施し、軍を再建するしか手はありません。兵を失ったことでは諸国も同じ。もう一度、連合諸王国軍を集めるにしても、軍の再建にかかる時間は国力に比例いたします。諸国の軍再建は我が国より遅くなっても、早くなることはありますまい」

この言いようには、ピニャも鼻白む。

「そのような悠長なことでは、敵の侵攻を防ぐことは出来ぬっ！」

皇帝はため息と共に、手をわずかに挙げて二人の舌戦を止めた。

彼の察するところピニャには騒動屋の傾向がある。責任を負うことのない者がよくする物言いで、批判ばかりで建設的な意見は何もないのだ。例え言ったとしても、夢物語みたいで伝統と格式を重んじる者なら到底首を縦に振れないことばかり。それでいて何かあれば、さあ困ったどうするどうすると責め立て実務者を「じゃあ、どうすればいいんだ！」と叫くまでに追い込んでしまうのである。

今回の事態からすれば、マルクス伯が言うように地道に軍を再建するしかないのである。そのた

めに時間を稼ぐことが、政治であり外交と言える。皇帝としてはそのための連合諸王国軍の招集であり、その壊滅をもって目論見は成功したのだ。

いささか辟易としてきた皇帝は、娘に向かって話しかけた。

「ピニャよ。そなたがそのように言うのであれば、余としても心を配らねばならぬ」

「はい、皇帝陛下」

「しかし、アルヌスの丘に屯(たむろ)する敵共について、我らはあまりにもよく知らぬ。丁度良いから、そなた行って見て来てくれぬか？」

「妾(わらわ)がですか？」

「そうだ。帝国軍は再建中でな、今は偵察兵にも事欠く有様じゃ。国内各所に配した兵を引き抜くわけにもいかぬ。新規に徴募してもマルクス伯の申した通り、実際に使えるようになるまで時間がかかる。今、一定以上の練度を有し、それでいて手が空いているのは思いを巡らしてみればそなたの『騎士団』くらいであった。そなたのしていることが兵隊ごっこでなければ……の話だがな」

皇帝の試すような視線に正対して、ピニャは唇をぎゅと閉じた。

アルヌスの丘への旅程は、騎馬で片道十日だ。

そこは危険な最前線、万を超える軍が全滅してしまった地。そんなところへ自分と自分の騎士団だけで赴けと言うのだ。

しかも、華々しい会戦と違って、地道な偵察行。

日頃から兵隊ごっこと揶揄されてきた騎士団にとって、任務が与えられたことは光栄と思わなければならないのだろうが、内容が不満である。

さらに言うならば、彼女の騎士達は実戦経験が皆無であった。自分や、自分の部下達は危険な任務をやり遂げることが出来るだろうか？

皇帝の視線は、「嫌なら口を挟むな」と告げていた。

「どうだ。この命を受けるか？」

ピニャは、ギリッと歯噛みしていたが、思い立ったように顔を上げた。そして……、

「確かに承りました」

と、ピシャリと言い放つと、皇帝に対して儀礼にのっとって礼をとった。

「うむ、成果を期待しておるぞ」

「では、父上。行って参ります」

そしてピニャは、玉座に背を向けた。

02

「空が蒼いねぇ。さすが異世界」

伊丹が呟いた。青空に、大きな雲がぽっかりと浮かんでいる。電柱とか電線などもない。前から後ろまで、上半分は完全に空だった。

「こんな風景なら、北海道にだってありますよ」

運転席の、倉田三等陸曹が応じた。倉田三曹は、北海道は名寄（なよろ）駐屯地から来ている。

「俺は、巨木が歩いていたり、ドラゴンがいたり、妖精とか飛びかっているトコを想像してたんですけどねぇ。これまで通ってきた集落で生活していたのは人間ばっかしだし、家畜も牛とか羊にそっくりでガックリっす」

倉田は一般陸曹候補学生課程を修了したばかりの二十一歳だ。伊丹が上下関係に鷹揚ということを知ると、気軽に話しかけてくるようになった。

青空を背景に、緑の草原をオリーブドラブに塗装された軍用車両が列を組んで走り抜けていく。先頭を七三式小型トラック、その後ろに高機動車（ＨＭＶ）、さらには軽装甲機動車（ＬＡＶ）が続く。

要するに、前二台はジープみたいな乗り物、後ろの一台は装甲車みたいな乗り物が走っているのである。

伊丹はその二両目の高機動車に乗っていた。

後席には彼の率いる第三偵察隊の隊員達が乗り込んでいる。車両三台、総勢十二名が偵察隊の総戦力であった。

後席でガサガサと地図を広げていた桑原陸曹長が、運転席に顔を突きだした。
「おい倉田、この先しばらく行くと小さな川が見えて来るはずだ。そしたら、右折して川沿いに進め。しばらくすると森が見えてくる。それがコダ村の村長が言っていた森だ」
航空写真から作られた地図と、方位磁石とを照らし合わせながら説明する桑原曹長は、二等陸士からの叩き上げで今年で五十才。教育隊での助教経験も長いベテランだ。新隊員達からは『おやっさん』と呼ばれて恐れられていた。倉田も新隊員時代、武山駐屯地で桑原曹長の指導を受けて前期教育を終えたそうだ。
この世界ではまだ衛星を打ち上げてないのでGPSが使えない。その為に、地図とコンパスによるナビゲーションだけが頼りとなる。そして、こういうことは経験の長いベテランのほうが上手いと、伊丹は隊の運営を全面的に桑原に押しつけていた。
「伊丹二尉、意見具申します。森の手前で停止しましょう。そこで野営です」
桑原の言葉に伊丹は振り返って「賛成」と応じた。桑原は、軽く頷いて通信機のマイクをとった。
倉田は、バックミラーで後ろに続く軽装甲機動車との車間距離を確認した。
「あれー、伊丹二尉。一気に乗り込まないんすか?」
「今、森に入ったら夜になっちゃうでしょ? どんな動物がいるかもわからない森の中で、一夜を明かすなんてご免こうむります。それに、情報通りに村があるとしたら、そこで住んでいる人を脅

かすことになるでしょ？　俺たち国民に愛される自衛隊だよ。そんな威圧するようなこと出来ますかってーの」

だから森には少人数で入ると伊丹は告げた。

この偵察行の目的は現地住民と交流し、民情を調査することにある。ヘリコプターを使えば速いのに、わざわざ地面を行くのだって通りすがる住民と交流するためだ。

暴力で制圧することが目的ではない。悪感情を持たれるような事は極力避ける。それが方針だった。

これまで三カ所の集落を通り、この土地の住民と交流をとってみた。住民達は戦争なんて領主様のすることで、俺らには関係ねぇやという態度であり、伊丹達に特別悪感情を示すということもなかった。ならば余計なことをして仕事を難しくする必要はない。

「えーと」

伊丹は胸ポケットから黒革の手帳を取り出すと、この土地の挨拶を綴ったページを開いて予習する。銀座事件の捕虜を調査した言語学者達の成果である。

「サヴァール、ハル、ウグルゥー？（こんにちは、ごきげんいかが？）」

「棒読みっすねぇ。駅前留学とかに通ったほうがよかぁありません？」

「五月蠅せえ！」

パコッと倉田の頭をヘルメット越しに叩く伊丹であった。

こうして森の手前にやって来た第三偵察隊であったが、最初に彼らの目に入ったのは天を焦がす黒煙だった。

「燃えてますねぇ」

倉田の言葉に、「はい、盛大に燃えてます」と伊丹は黒煙を見上げた。森から炎が立ち上っていた。

「大自然の脅威っすね」

「というより怪獣映画だろ」

桑原はそう言うと、双眼鏡を伊丹に渡した。そして正面からやや右にむかったところを指さす。伊丹は桑原の指さした辺りに双眼鏡を向けた。

「あれま！」

ティラノサウルスにコウモリのような羽根をつけた感じの巨大な生き物が、地面に向かって火炎放射していた。

「首一本のキングギドラか？」

桑原のセリフに倉田が「おやっさん、古いなぁ。ありゃ、エンシェントドラゴンっすよ」と突っ込む。だが、桑原はドラゴンと言われるとブルース・リーを連想してしまう年代なので妙に話が合わなかった。

前方で停止した七三式トラックから、小柄なWAC（女性自衛官）が走り寄ってきた。
この偵察小隊には二人のWACが配属されている。住民と交流する時、女性がいたほうが良い場面があるかも知れないという配慮から配属されていた。例えばイスラムのような戒律のある土地だった場合、女性と交渉するのは女性であったほうが良いのである。
「伊丹二尉、どうしますか？　ここでこのままじっとしてるわけにはいきませんが」
栗林二等陸曹だった。
彼女を見ると多くの男性自衛官は、装備が重くないかと質問する。体が小さすぎて装備を身につけると言うより、装備が彼女を入れて歩いているという印象になってしまうのだ。だが、小柄というだけで侮ると酷い目に会う。これでも格闘記章を有する猛者なのだ。
「あのドラゴンさぁ、何もないただの森を焼き討ちする習性があると思う？」
意見を求められても栗林にわかるはずがない。だが「わかりません」と素直に答えるようなタマでもない。少しばかり辛辣な態度で、
「ドラゴンの習性にご関心がおありでしたら、何に攻撃をしかけているのか、二尉ご自身が見に行かれてはいかがですか？」
と言ってのけた。
「栗林ちゃん。おいら一人じゃ怖いからさぁ、ついてきてくれる？」
「わたくしは嫌です」

「あっ、そう」
伊丹はバリバリと頭を掻くと告げた。
「適当なところに隠れてさ、様子を見よか。んで、ドラゴンがいなくなったら森の中に入ってみよう。生き残っている人がいたらさ、救助とかしたいし」
森の中に集落があるという情報があった。多分、その集落がドラゴンに襲われているんじゃないかというのが伊丹の考えであった。

結局、伊丹達が森に入ることが出来たのは、翌朝だった。
夜になっても火がなかなか消えず、また黒煙が立ちこめていて見通しが利かなかったからだ。夜半からは雨が降り始めたおかげで森林火災が下火となり、これによって、ようやく森に入ることが出来るようになったのである。
森は、すっかり見通しが良くなっていた。
木の葉は全て焼けおち、立木は炭となり果てていた。
黒い地面からは、ブスブスと煙が上がっている。
地面にはまだ熱が残っていて、半長靴（はんちょうか）の中がじんわりとあったかい。
「これで生存者がいたら奇跡っすよ」
倉田の言葉に、伊丹もそうかもなと思いつつ、とにかく集落があったと思われるところまでは行

ってみようと考えていた。
二時間ほど進む。すると立木のない開豁地（かいかつち）へと出た。
この森が焼かれていなければ、ここまで入るのに最低でも半日を要したであろう距離である。
見渡すと、明らかに建物の焼け跡とおぼしきものが何軒分かある。よく見れば……いや、よく見なくても、仏像の炭化したようなものが数体横たわっていた。仏像というよりは、焦げたミイラとでも言うべきか。
「二尉、これって」
「倉田、言うなよ……」
「うへっ、吐きそうっすよ」
倉田は、胃のあたりをおさえると周辺を見渡した。
襲撃を警戒するかのように、集落跡をゆっくりと歩く。
無事な建物は一軒たりともない。石造りの土台の上につくられていた建物は焼け、瓦礫の山と化している。そんな建物の間に、黒こげの死体が転がっているという状態なのだ。
「仁科（にしな）一曹、勝本（かつもと）、戸津（とづ）をつれて東側をまわってくれ。倉田、栗林、俺たちは西側を探すぞ」
「探すって、何を？」
栗林の言葉に伊丹は「う〜ん、生存者かな？」と肩をすくめた。

小一時間かけて捜索して、どうやらこの集落には生存者がいないようだと判った。
伊丹は、井戸の脇にどっかりと腰を下ろすと、タオルで汗をぬぐう。他の隊員達は、ここに住んでいた者が生活していた時の様子が判るものを探して、集落のあちこちを歩き回っている。
すると、栗林がクリップボードを小脇に抱えてやってきた。
「二尉。この集落には大きな建物が三軒と、中小の建物が二十九軒ほどありました。確認できただけで遺骸は二十七体で、少なすぎます。ほとんどは建物が焼け落ちた時に瓦礫の下敷きになったのではないかとも考えられます」
「一軒に三人世帯と考えても、三十軒なら九十人だもんなぁ。大きな家を併せたら最低でも百人くらいの人が生活してたんじゃないかなぁ。それが全滅したのか、それともどこかに隠れているのか……」
「酷いものです」
「ふむ。この世界のドラゴンは集落を襲うこともあるって報告しておかないとな」
「門の防衛戦では、敵の中にドラゴンに乗っていた者もあったそうです。そのドラゴンは昨日確認したものよりはかなり小さかったんですが、そいつの鱗でも7・62㎜弾は貫通できなかったそうですよ。腹部の柔らかい部分でも12・7㎜の徹甲弾でどうにかということでした」
伊丹は、栗林の蘊蓄を聞くと「へぇ」と目を丸くした。
ドラゴンの遺骸を回収して、その鱗の強度試験をやったという噂は聞いていたが、結果がどうだ

ったかまでは伝わって来てなかったからだ。条件にもよるが、7・62㎜弾は厚さ10㎜の鋼板を貫通する。ドラゴンの鱗はそれ以上の硬さを持つということになる。

「ちょっとした、装甲車だね」

「はい」

伊丹は水筒に口をつけると残りが少ないのを気にして、チャプチャプと振った。周囲を見渡して、自分の後ろにあるのが井戸だと気づくと、その上にある木桶を手にとる。水を汲むのに木桶を放り込んで、縄で吊り上げる形式のようだ。

「ドラゴンがどのあたりに巣を作っていて、どのあたりに出没するかも調べておかないといけないね」

などと言いながら、井戸に木桶を放り込んだ。

すると、コーーーンと甲高い音が井戸から聞こえた。

「ん？」

普通、水に物が落ちたら水の跳ねる音がするものだ。

「ドボン」という音が聞こえると思っていたから、妙に思った伊丹は井戸をのぞき込んだ。栗林も「なんでしょうね」と、一緒にのぞき込む。

すると……、

井戸の底で、長い金髪の少女が、おでこに大きなコブをつくってプカプカと水に浮かんでいるの

が見えたのであった。

＊　＊

「テュカ、起きなさい」

少女の優しい夢は、父親の声に破られた。

「お父さん、どうしたの？　折角いい気持ちで寝てたのに」

目を擦り擦り、身を起こす。

見渡して見ると居間にはうららかな日射しが差し込んでいる。

午睡から無理矢理目覚めさせられたためか、頭がまだはっきりとしない。ただ、自分を起こした父の表情が異様なまでに険しくなっていることは気づいた。

窓の外からも、雑多な足音や喧噪が聞こえて来る。集落中が騒ぎに包まれていた。そのただならぬ気配に何か重大なことが起こったのだと感じた。

「どうしたの？」

その答えは、テュカ自ら悟った。窓の外、その空に巨大な古代龍の姿が見えたからだ。このあたりには龍は棲まない。だから実際に見るのはこれが初めてである。しかし幼い日々、父親から受けた博物学の講義で知識として知っていた。

「あれは、もしかして炎龍っ!?」
「そうだ」
父が手にしているのは弓だった。これはエルフ一族では一般的な武器だ。さらには、貴重品をしまい込むのに使っているタンスに手をのばし、中からミスリル銀の鏃（やじり）と鳳（おおとり）の羽根でつくられた矢を取り出そうとしている。
父が、戦おうとしている!?
テュカも反射的に、愛用の弓矢に手をのばした。だが、父親の「やめなさいっ」と言う声に止められてしまう。
「どうして？」
「君は、逃げるんだ」
「あたしも戦うわ」
「ダメだ。君に万が一のことがあったら、私はお母さんに叱られてしまうよ」
父が亡くなった母のことを持ち出すのは、娘に是が非でも言うことを聞かせたい時だ。だが、精神的に自立する年齢を迎えていた娘は父に笑顔で逆らった。
「炎龍が相手じゃどこに逃げても一緒よ。それに、手勢は一人でも多い方が良いでしょ」
肉食の炎龍が好物とするのはエルフや人間の肉だと言う。ここで炎龍を倒さない限り、どこへ逃げようとも匂いを嗅ぎつけてやって来るに違いない。大地をはいずり回るエルフや人がどれだけ逃

げようとも、古代龍にとってはひとっ飛びの距離でしかないのだから。
窓の外では、戦士達の矢が空に向けて放たれた。風や水の精霊が招喚され、炎龍への攻撃が始まっている。だが、その効果は薄い。
逆に炎龍から放たれた炎が、誰かの悲鳴と共に家を焼く。避難しようとしていた女子どもがこれに巻き込まれて火だるまになった。
絶命の金切り声が耳の奥まで響いて、テュカは眉根を寄せる。
「とにかく、ここにいては危ない。外へ出よう」
父は、娘の手を引いた。娘はしっかりと弓矢を握っていた。
絹裂く悲鳴がそこかしこから響く。
戸口から出たテュカが眼にしたのは、幼なじみの少女が炎龍の牙にかけられる瞬間だった。
「ユノっ！」
愛する親友が食べられてしまう。とっさの判断でテュカは素早く弓矢を番えた。若いとはいえ、弓を手に産まれてくると言われるエルフである。腕前は確かだった。
渾身の力で引き絞り狙い定めて矢を放つ。だがテュカの矢は、はじかれてしまう。
テュカの矢ばかりではない。エルフの戦士達が無数の矢を龍に浴びせかけていた。だが、そのどれもが分厚い鱗に阻まれて傷一つ負わすことが出来ないでいた。
バリバリとエルフの少女をかみ砕き飲み込んだ炎龍は、縦長の瞳を巡らせると次なる獲物として

テュカを選んだ。
「ユ、ユノが。ユノが……」
炎龍に見据えられた瞬間、テュカの全身は恐怖にすくむ。
逃げようにも足は動かず、叫ぼうにも声すら出ない。龍と視線をあわせてしまうと魂が砕かれるという。この時のテュカは、まさに魂を奪われたかのように動けなく、いや逃げようとすることすら意識にのぼらなくなっていた。
「ダメだ、テュカ！」
父が矢を番えつつ、精霊に呼びかける。
「Acute-hno unjhy Oslash-dfi jopo-auml　yuml-uya whqolgn！」
風の精霊の助力を得て、閃光のような矢が炎龍の眼に突き刺さった。
その瞬間、炎龍の叫びが大気を振るわせた。その振動は周囲に居合わせた生きる物全てを引き裂いてしまうのではないかと思わせるほど。
炎龍はのたうち回るようにして、空へと浮かぶ。
「眼だ、眼を狙え!!」
戦士達の矢が炎龍の頭部に狙いを集めた。だが大地に降りているならともかく上空に舞い上がった龍の眼を狙うのは、いかに弓兵のエルフといえども難しい。
炎龍は、自らを傷つけたエルフを選び出し狙いを定めた。

集落を巨大な炎の柱で焼き払うと、炎龍はその鋭い爪と牙とでエルフの戦士達を蹴散らす。払いのける。踏みつぶす。その牙で食いちぎる。

「テュカ、逃げなさい!!」

父親は娘を叱咤した。しかし、娘は呆然と立ちすくんだまま。

ホドリューは娘に手をあげるどころか、声を荒げたことすらない優しい父親である。それは日々の暮らしの中では柔和なだけの甘い父親として見える。しかし、このような危急の時……則ち勇猛さと暴力的な荒々しさをむき出しにしなければならない時、これを発露できる厳しさも兼ね備えていた。

娘が龍の上顎と下顎の隙間に捕らえられる寸前、父は自らの身体をもって娘をはじき飛ばした。

そして、炎龍の顎にレイピアのひと突きを喰らわせる。

そのまま娘の身体を抱え上げて走りだす。

「来たぞっ!」

戦士達の精霊への呼びかけは、あたかも合唱のように響く。

矢が斉射され、その内の数本が炎龍の鱗の隙間へと突き刺さる。口腔に突き刺さる。爪の付け根へと突き刺さる。

だが、龍はひるむことなく巨体をもって迫ってきた。

父は、娘に語り聞かせた。

「君はここに隠れているんだ。いいねっ！」
そして、娘は井戸の中へと投げ込まれる。
投げ込まれる最後の一瞬、彼女が見たものは父の背後に広げられた炎龍の巨大な顎。そして鋭い牙だった。

どれほどの時間を井戸の底で過ごしただろうか。
集落や森が焼き尽くされていく炎の音。
井戸の中にまで降り注ぐ火の粉。
戦士達の怒号。そして悲鳴。
腰までつかる水の冷たさに震える。ただただ怖くて、恐ろしくて、そして不安で、涙を止めることも出来ない。
ふと、気がつくと耳に入る音がなくなっていた。
聞こえるのは自分の呼吸音。心拍の音。あるいは、ささやかに聞こえる水の音だけ。蒼かった空が、いつの間にか黒く暗くなっていた。だが、不思議と井戸の周りは明るかった。集落を焼く炎の光が、井戸の底まで届いているのだ。
気がつくと、雨が降り始めていた。
全身が雨に濡れる。顔が濡れる。眼に水が入る。だが、どうしても空から目を離すことが出来な

かった。
「やぁ、テュカ。無事だったかい？」
そう言って父が、ひょっこりと顔を出す。そんな光景を何度思い浮かべたことか。
でも、いくら待ち続けても誰の声もしなかった。
みんな死んでしまったのではないかという嫌な思いが浮かび上がって、胸が千々に引き裂かれそうになった。
「お父さん……助けて」
やがて、空が明るくなった。夜の黒い空から、昼間の青い空へと移り変わった。
井戸水は冷たい。寒さと疲れ、そして空腹とでテュカは立っていることも出来なくなっていた。絶望と悲しみとで、あらゆる種類の気力が失われていった。
「このまま、死んじゃうのかな」
そんな風に思う。だが不思議と怖くなかった。と言うより、このまま死んでしまうことは、何か良いアイデアにも思えるのだ。死んでしまえば、怖れや不安から解き放たれる。孤独の悲しみも、切なさからも逃れられる。あらゆる苦しみからの唯一の救いが死、そんな風に感じられたのだ。
ふと、井戸の上から何か人の声が聞こえたような気がした。
朦朧とした意識で、天を見上げてみる。すると、視界全体に水汲み用の桶のような物が広がっていた。

こ〜んという甲高い音。
鼻の奥に香辛料を吸い込んだようなツーンとした激痛。視界一杯に広がる火花。
「はへぇ……」
スウと、彼女の意識が遠のいていった。
「Daijyoubuka! Okiro! Meoakero!」
ぺちぺちと頬を叩かれる感触、そしてかけられる声。
霞のかかる視界の向こうで自分をのぞき込む誰かの顔は、どこか彼女の父に似ていた。
「お父……さ……ん」

＊　＊

「エルフっすよ、二尉」
倉田三曹の言葉に、伊丹は「エルフですねぇ」と応じた。
「しかも、金髪のエルフっすよ。くぅ〜〜希望が出てきたなぁ！」
「お前、エルフ萌えか？」
「違いやす。俺はどっちかっていうと、艶気たっぷりのほうが好みでして。でも、エルフがいたんですから、妖艶な魔女とか、貞淑な淫魔（女）とか、熱いハートのドラキュリーナとか、清楚な獣

娘と出会う可能性アリでしょ？　洒脱な会話の楽しい狼娘も可です」

伊丹は、十八禁同人誌などに描かれる彼女たちの姿を思い浮かべつつも……こんなのが現実にいたらどうなるんだろうというある種の恐怖感に苛まれた。

獣娘については、手塚漫画の大作によく似たミュージカルに出演メークを施した女優さんがよい例になるかもしれないと思ったりする。倉田の言うように、妖艶な魔女とかドラキュリーナとかが本当にいたら、きっと萌えるだろう。

「そりぁ、まぁ、あり得る可能性は高くなっているよな」

「いや、絶対にいます！」

握り拳で何やら力説し、萌え……この場合は燃えている倉田の姿に退きながら、伊丹は「まぁ、がんばれよぉ」と遠くで応援することにした。

栗林ともう一人のWAC（女性自衛官）黒川二曹が、井戸から引き上げた見た目で十六歳前後の少女の濡れた衣服を脱がせたり、ブランケットシートでくるんだりと手当している。

その光景を見物しようとすると、栗林二曹の鉄拳制裁で確実に排除されるために男連中は近付くことも出来ないでいた。

伊丹も、遠巻きに見ているしかない。仕方なく井戸に降りるのに使ったロープとかを片づける。井戸の底に降りた時、水に濡れた服が冷たい。さらには半長靴の中には水が少しばかり入り込んで歩くたびにギュボ、ギュボと言った。

他の隊員達は携帯円匙（えんぴ）で簡単な埋葬用の穴を掘ったり、集落の状況を記録におさめるために瓦礫の山を掘り返していたりする。人々の生活に使われていた家具什器、あるいは弓矢などの焼け残った品物を集めて、ビデオや写真を撮るのも大切な仕事だ。資料として持ち帰るためである。

伊丹は、腰を下ろすと半長靴を脱いで逆さにした。するとドドっと水がこぼれ落ちた。このまま履くのは抵抗があるが、裸足で居るわけにもいかないので、背嚢（はいのう）から取り出した新聞紙を靴の中につっこんで水を吸えるだけ吸わせる。靴下はよく絞ってから履き直す。

すると黒川二等陸曹（看護師資格有り）がやってきた。

一応、敬礼してくれるので伊丹も答礼するのだが、身長が１７０㎝になるかならないかの伊丹は黒川二曹を見上げる姿勢になる。黒川は、身長が１９０㎝もあるのだ。

身長をいろいろと誤魔化してどうにか採用基準ギリギリの栗林と二人ならべて第三偵察隊の凸凹ＷＡＣと呼ばれていたりする。

「とりあえず体温が回復して参りましたわ。漫画的にできた、おでこのコブもお約束に従ってほどなく消えるでしょう。もう大丈夫だとは思いますが……これから、どういたしましょう？　私たちは、いつまでもここに居るわけにも参りませんし、でも女の子をここに一人だけ残していくのも何やら不人情な気もいたします」

と、ゆったりとしたお淑やか口調で黒川は語った。

小柄な栗林が気が短くて勇猛果敢なのに対して、大柄な黒川がのんびり屋でお淑やかという性格

の対比が妙である。

「見たところココの集落は全滅してるし、助け出したものを放り出していくわけにもいかないでしょ。わかりました、保護ということにして彼女をお持ち帰りしましょ」

黒川はニッコリと笑った。この女の側にいると時間がゆっくりと流れているような気がして来るから不思議だ。

「二尉ならばそうおっしゃって下さると思っていましたわ」

「それって、僕が人道的だからでしょ？」

「さぁ？　どうでしょうか。二尉が、特殊な趣味をお持ちだからとか、あの娘がエルフだからとか、色々と理由を申し上げては失礼になるかと存じます」

伊丹は、大きな汗の粒が額から頬をつたって喉を経て襟に潜り込み、服の下へと落ちていくのを感じた。

本来の予定であれば、あと二～三カ所の集落巡りをすることになっている。だが、保護したエルフの娘を連れ回すわけにも行かない。そのために伊丹は、来た道をたどってアルヌス駐屯地へと帰還することにした。アンテナ立てて本部にお伺いを立てたところ、「ま、いいでしょ。いいよ、早く帰ってこいや」という感じの返事が来た。

「桑原曹長……そんなことで宜しくお願いします。まずはコダ村に戻りましょう」

伊丹はそう言うと、さっさと高機動車の助手席に乗り込んでしまう。運転は倉田、後部席で桑原が全体の指揮をする。また保護したエルフの看護のために、黒川が乗り込んでいた。

第三偵察隊は、再び走り出した。

復路も、往路と同じような平和な光景が広がっていた。つい今朝方まで、ドラゴンが空を覆い、集落の一つを全滅させたなど思えないほどののどかさだ。

空は晴れてどこまでも青く、大地は広がっている。

半日近い行程を、砂煙を巻き上げながらただひたすら走り抜ける。来る時と違ってスピードが出ているせいか、偵察隊にはなんとなく逃げるような気分が満ちていた。

「ドラゴンが来たら嫌だなぁ」

「言うなって。ホントになったらどうするんよ」

運転席から聞こえた言葉に思わずつっこむ伊丹。

舗装などされていない道だ。サスペンションも路面の振動を吸収しきれず、車は上下に激しく揺れた。

黒川がエルフの少女の血圧や脈を測って、首を傾げながら呟いた。

「エルフの標準血圧ってどのくらいでしょう？　脈拍は？」などと尋ねてきて伊丹を閉口させながらも、バイタルの数値は安定している。人間を基準とするならば低いけれど、と報告してきた。

「大丈夫かな？」

「呼吸は落ち着いてますし、血圧も脈拍、体温とも安定。不自然に汗をかくということもないですし……人間ならば、大丈夫と申し上げたいところなのですが」

エルフの生理学など知らない黒川としてはそう答えるしかない。伊丹は、はやいところ現地人に接触して、エルフ娘の扱いについて相談するのが一番かと考えていた。

コダ村の人々は、「何だお前ら、また来たのか」という感じで伊丹達を歓迎するでなく、といって嫌悪するわけでもなく、なんとなく迎え入れた。

伊丹は、村長に話しかけ、教えて貰ったとおり森の中に集落があったが、そこは既にドラゴンに襲われて焼き払われていた、というようなことを辞書を見ながらたどたどしく説明した。

「なんとっ！　全滅してしまったのか？　痛ましいことじゃ」

伊丹は、小さな辞書をめくりながら単語を選び出す。

「あ～～と。私たち、森に行く。大きな鳥、いた。森焼けた。村焼けた」

適切な単語がないので『鳥』と言いながらもメモ帳にドラゴンの絵を描いてみせる。こういうイラストは伊丹は得意だったりするのだ。

長老は、そのイラストを見て血相を変えた。

「こ、これは古代龍じゃ。しかも炎龍じゃよ」

伊丹の辞書に単語が増える。古代龍を意味する単語が付け加えられ、現地でなんと発音するのか

が、ローマ字で表記された。
「ドラゴン、火、だす。人、たくさん、焼けた」
「人ではなく、エルフであろう。あそこに住んでいたのはエルフじゃよ」
村長はこの世界の言葉で『re-namu』と何度か繰り返した。伊丹は、辞書の『え』の覧に『エルフ／re-namu』と書き込む。
「そうです。そのエルフ、たくさん死んでいた」
「わかった、よく教えてくれた。すぐに近隣の村にも知らせねばならぬ。エルフや人の味を覚えたドラゴンは、腹を空かしたらまた村や町を襲って来るのじゃよ」
村長はお礼かたがた伊丹の手を握る。そして人を呼ぶよう家族や周囲に声をかけてまわった。
ドラゴンがエルフの集落を襲ったという知らせに、村人達は血相を変えて走り出した。
「一人、女の子を助けた」
伊丹の言葉に、村長は「ほう」と顔を上げた。村長を高機動車の荷台へつれて行き意識無く横たわる金髪の少女を見せた。
「痛ましい事じゃ。この娘一人を残して全滅してしまったのじゃな」
村長は、エルフ娘の金髪頭をひと撫でした。種族こそ違え、このコダ村とエルフの集落とはそれなりの交流があったのだ。
エルフは森を守り、狩猟で入り込む猟師が森の深部に入りこまないようにと牽制しながらも、負

傷したり迷ったりと困窮していれば助け、時には保護して送り返してくれる。
互いに干渉しない、距離を置いた、しかし敬意を払い合う関係とでも言うべきか。そんな関係が両者の間にはあったのだ。
「あ～と……この子、村で保護……」
伊丹の言うことは理解できる。だが、村長は首を振った。
「種族が違うので習慣が異なる。エルフはエルフの集落で保護を求めるのが良い。それに、我らはこの村から逃げ出さねばならぬ」
「村、捨てる？」
「逃げるのじゃよ。知らせて貰えねば、そんな暇もなく我らは全滅してしまったろうに。ホントに感謝するぞ」

03

コダ村の中心から少しばかり離れた森の中に小さな小さな家が、一軒建っている。
サイズとしては、六畳間ふたつの２ＤＫ程度。平屋で、小さな窓がふたつ。窓ガラスというものが存在しないこの地では、採光と通風が目的の窓も、構造的な理由から総じて小さめにつくられ

る。

日干し煉瓦を積み上げた壁には蔦が這っている。

天を覆う樹冠からの木漏れ日で、周囲は柔らかめに明るいため、建物からは瀟洒な感じがして、なかなかに素敵な雰囲気だった。

その家の前には馬車が停められている。荷台には木箱やら、袋やら、紐で結わえられた本やらが山のごとく積み上げられていた。

傍らで草を喰んでいる驢馬がその荷馬車を引くとするなら、ちょっと多すぎるんじゃないか？と尋ねたくなる。それほどまでの荷物量だった。

その山のような荷物を前にして、さらに一抱えもあるような本の束をどうやって載せようかと苦心惨憺している者がいる。

年の頃十四～五といった感じで貫頭衣をまとったプラチナブロンドの少女だった。

「お師匠。これ以上積み込むのは無理がある」

最早どこをどう工夫しようと、手にした荷物は載りそうもない。少女は、その事実を屋内へと冷静な口調で伝えた。

「レレイ！　どうにもならんか？」

窓から顔を出した白いひげに白い髪の老人は、「まいったのう」と眉を寄せた。

「コアムの実と、ロクデ梨の種は置いていくのが合理的」

レレイと呼ばれた少女は、腐る物ではないのだから……と、荷馬車から袋を一つ二つ降ろす。そして、空いたスペースに本の束を載せた。

コアムの実もロクデ梨の種も、ある種の高熱疾患に効能のある貴重な薬だ。だが、その高熱疾患自体、あまり見られるものではないので、今日明日必要になるということもない。また稀少とは言っても、手に入らないものでもないから、失ったら取り返しのつかなくなる貴重な書物を優先するべきなのだ。

白髪の老人は袋を受け取ると、肩を落とした。

「だいたい炎龍の活動期は五十年は先だったはずじゃ。それがなんで今更……」

エルフの村が炎龍に襲われて壊滅したという知らせは、瞬く間に村中に走った。

これが普通ならば着の身着のまま逃げ出さなければならないところであった。だが、今回に関しては通報が早かったため、荷物をまとめるだけの時間があった。その為に村全体が、逃げ出す支度で大騒ぎしているのである。

老人はぶつくさ言いながらも、レレイの降ろした袋を小屋へと戻した。寝台の下に隠し扉があり、そこに仕舞い込もうという心づもりなのである。

その間にレレイは驢馬を引いてきて荷馬車とつないだ。

「師匠も早く乗って欲しい」

「あ？　儂はおまえなんぞに乗っかるような少女趣味でないわいっ！　どうせ乗るならおまえの姉

のようなボン、キュ、ボーンの……」

「……」

レレイは冷たい視線を老人にむけたまま、おもむろに空気を固めると投げつけた。空気の固まりとは言っても、ゴムまりみたいなものだが、次々とぶつけられるとそれなりに痛い。

「これっ！　止めんかっ！　魔法とは神聖なものじゃ。乱用する物ではないのじゃぞ！　私利私欲や、己が楽をするために使って良いものではないのじゃって……やめんか！」

……おほん。

「余裕があると言っても、いつまでもゆっくりしていられるわけではない。早く出発した方が良い」

「わかった、わかった。そう急かすな……ホントに冗談の通じない娘じゃのう」

老人は杖を片手に、レレイの隣によっこらせと乗り込む。レレイは冷たい視線を老人に向けたまま語った。

「冗談は、友人、親子、恋人などの親密な関係においてレクレーションとして役に立つ。だけど、内容が性的なものの場合、受け容れる側に余裕が必要。一般的に、十代前半思春期の女性は性的な冗談を笑ってかわせるほどの余裕はない場合が多い。この場合、互いの人間関係を致命的なまでに破壊するおそれもある。これは大人であれば当然わきまえているべきこととされている」

老人は弟子の言葉に、大きなため息をひとつついた。

「ふぅ～疲れた。年はとりたくないのぅ」
「客観的事実に反している。師匠はゴキブリよりしぶとい」
「無礼なことを言う弟子じゃのう」
「これは、幼年期から受けた教育の成果。教育したのは主にお師匠」
身も蓋もないことをレレイは告げる。そして驢馬に鞭をひと当てした。
驢馬はそれに従って前に進もうとする。ところが荷台のあまりの重さからか馬車はピクリとも動かなかった。
「……」
「……オホン。どうやら荷物が多すぎたようじゃのう」
「この事態は予想されていた。かまわないから荷物を積めと言ったのはお師匠」
「……」
レレイは黙ったまま、馬車からピョンと飛び降りた。
動かない馬車にいつまでも乗っているくらいなら歩いた方がマシだと判断したのだろう。
「おお！　レレイは、気の利くよい娘じゃのう。いつもこんな調子ならば、嫁のもらい手は引く手数多(あまた)じゃろうにのぅ、惜しい事じゃ。ホントに惜しい事じゃ」
老人はそう言うと、レレイから手綱を受け取った。そして、驢馬に鞭をひと当て。驢馬も頑張っているが、やはり動かなかった。

レレイはちらりと車輪に目をやった。車輪は地面に三分の一程めり込んでいる。このままでは決して動くことはないだろう。
「お師匠。馬車から降りるのに手が必要なら言って欲しい」
「し、心配するでない。儂らにはこれがあるではないか？」
老人が杖を掲げると、レレイは日頃から口うるさい師匠の口調を真似て見せた。
「魔法とは神聖なものじや。乱用する物ではないのじやぞ。私利私欲や、己が楽をするために使って良いものではないのじや……」
老人は、額に漫画的な汗を垂らすと言い訳を試みる。
「儂らは魔導師じゃ。ただ人のごとく歩く必要はないのじゃよ」
しかし、レレイの温度を全く感じさせない視線は決して和らぐことはなかった。
老人の口は「あー」の形状で固まったまま呪文がなかなか出てこない。
「……」
教育者としての矜持とか、いろいろなものがその胸中で葛藤しているのだろう。老人が次の動きを見せるまでしばしの時間が必要だった。やがて情けなさそうな表情をはりつけた顔をレレイへと向ける。
「す、すまんかった」
「いい。師匠がそう言う人だと知っている」

レレイとは、そういうことを口にする身も蓋もない娘であった。

魔法を使うことで重量が軽くなれば、荷物山盛りであっても驢馬の力で容易に引くことが出来る。こうしてレレイと師匠の乗った馬車は、長年住み慣れた家を後にしたのである。

村の中心部に向かう中、あちこちの家でレレイ達同様、馬車に荷物を積み込む者の姿が見られた。農作業用の馬車や荷車、あるいは馬の背中に直接荷物をくくりつけている者までいる。

レレイは、そんな村人達の姿を、観察するかのようにじっと見つめていた。

師匠は語りかける。

「賢い娘よ。誰も彼もが、お前の目には愚かに見えることじゃろうなぁ」

「炎龍出現の急報に、これまでの生活を捨てて逃げ出さなくてはならなくなった。だけど、避難先での生活を考えれば、持てる限りの物を持って行きたいと考えるのは、人として当然のことと言える」

「人として当然とは、結局の所、愚しいと言うことであろう？」

「……」

レレイは、師匠の言葉を否定できなかった。

本当に命を大切に思うのであれば、与えられた時間を使って、より遠くへ逃げるべきではないだろうかと考えるからだ。なまじ余裕があるばっかりに、荷物をまとめるのに時間を費やしてしまっ

ている。これによって結局は出発時間が遅れる。さらに重い荷物は移動速度を低下させる。炎龍に追いつかれてから荷物を捨てても、もう遅いのだ。

そもそも、人は何故生き続けたいなどと考えるのか。人はいずれ死ぬ。結局は遅いか早いかでしかない。ならば、わずかばかりの生を引き延ばす行為にどんな意味があると言うのだろう。

レレイはそんな風に、物事を理屈で割り切った考え方をしてしまう。そしてそんなレレイを老人はどのような言葉を持って諭せばよいのかと悩むのである。

村の中心部にさしかかると、道は馬車の列で渋滞が出来ていた。

「この先は、いったいどうなっているのかね？」

いつまでも動かない馬車の列に苛立ってか、師匠は進行方向から来た村人に声をかけた。

「これはカトー先生。レレイも、今回は大変なことになったね。実は、荷物の積み過ぎで、車軸がへし折れた馬車が道を塞いでいるんです。みんなで片づけてますが、しばらく時間がかかりますよ」

引き返して別の道を選ぼうにも、既に後続の馬車が塞いでいて、行くも戻るも出来なくなっていた。

師匠と村人が話している中、レレイは後方から見慣れない姿の男達が、これまで聞いたこともない言葉で騒ぎながらやって来ることに興味を引かれていた。

「避難の支援も仕事の内だろ。とにかく事故を起こした荷車をどけよう！　伊丹隊長は村長から出

動の要請を引き出してください。戸津は、後続にこの先の渋滞を知らせて、他の道を行くように説明しろ！　言葉？　身振り手振りでなんとかしろ！　黒川は事故現場で怪我人がいないかを確認してくれ」

見ると、緑色……緑や濃い緑、そして茶色のまざった斑模様の服装をした男達だった。

いや、女性らしき姿もある。兜らしいものを被っているところをみると、どこかの兵士だろうか？　だが、それにしては鎧をまとっていない。レレイの知識にない集団のようだ。

何を言っているのかよくわからないが、初老の男に指示された男女が凄い速度で走っていく。

その様子を見ると、はっきりとした指揮系統らしきものがあるようだった。禍々しい暴力を、規律という名の鞘に仕舞い込んだ軍事組織の気配がある。

レレイは師匠に「様子を見てくる」と告げると、馬車を降りた。

馬車十五台程先に、事故を起こした馬車があった。

車軸が折れて馬車が横転している。驚いた馬が走り回って暴れたらしい、撒き散らされた荷物と、倒れている男性、そして母子の姿があった。馬も倒れて泡を吹いているが、まだ起きあがろうとして無闇に四肢を振り身を捩っている。そのために、村人達が助けに近づこうにも近づけないのだ。

「君。危ないから下がっていて」

緑色の服の人達。

何を言われているのかよく判らないが、手振りからしてレレイに下がっているように言っていることは理解できた。

だがレレイは倒れている母子も怪我をしていることに気付くと、制止を振り切って、駆け寄った。傍らで馬が暴れているが気にしない。

「まだ生きている」

レレイよりちょっと下。十歳ぐらいの子どもを診ると、頭を打ったようで顔や手足から血の気が失せてぐったりとしている。その上まるで栓を開けたみたいに汗を掻いて身体が冷えていこうとしている。

母親は、気を失っているようだが大したことはない。子どもが一番危険な状態だった。

「レレイ!!　何をしている!?　何があった？」

呼ぶ声に振り返ると村長だった。やはり緑の服の人と一緒だ。事故の知らせを受けて駆けつけてきたのだろう。

「村長。事故。多分荷物の積み過ぎと荷馬車の老朽化。子どもが危険、母親と父親は大丈夫と思われる。馬はもう助からない」

「カトー先生は、近くにいるのかね？」

「後ろの馬車で焦れてる。わたしは様子を見に来た」

ふと見ると、緑の服をまとった長身の女性がレレイと同じように子どもの様子を診て、誰かに伝

えていた。その手際の確かさは体系的に医学を学んだ者の気配があった。そして村長の隣にいる三十代くらいの男が全体への指示を出している。

突然、悲鳴が上がる。

「危ない!!」

バンバンバン!!

突然の炸裂音にびっくりして振り返ると目に入ったのは、暴れていた馬が、レレイに覆い被さるようにドウッと倒れるところだった。紙一重のところで巻き込まれずに済んだが、あとほんの少しずれていたらレレイの十人分はある馬体に、彼女は押しつぶされていただろう。

レレイに判ったのは、どうやら緑の服の人たちが、暴れる馬から自分を守るために何かしたということだけだった。

＊　＊

大陸諸国から帝国に集まった軍勢が、一夜にして姿を消した。

それは日本ならば新聞の一面トップ、あるいはバナー広告一行目にとりあげられるような出来事であろう。だがこの世界、この特地の民にとって、軍がどこに行こうとどうなっていようと関係のない話だった。戦争に負けたとしても、支配者が変わるだけ。人々の生活になんら変化を起こすも

のではないのだ。

これと言うのも常にどこかの国と戦争をしているという状態が続いて来たせいである。戦争に勝ったり負けたり、領地を奪ったり奪われたり。領主がコロコロとかわり、仰ぐ旗がコロコロかわる。そんなことが続けば、我々の言うところの愛国心など育まれるはずがないのだ。

そんな世界では、自分の住んでいる土地とその周辺が戦場になるのでない限り、あるいは自分の家族が兵士として戦場に赴いているのでない限り、市井の民が国の動静に関心をはらうことはほとんど無いのである。

それでも、ここ最近は人々の生活に影響が表れ始めていた。

それは、盗賊の跳梁である。

この世界の支配体制では、兵士や騎士の存在があったとしても、盗賊を抑える効果はそれほどない。なぜなら、貴族や騎士の主たる任務に治安の維持は含まれていないからである。

彼らの役割と関心は「支配する」ことにある。騎士や貴族は税金と称して民から奪う。盗賊らは名目がないけど奪う。どちらも無理矢理で、拒否したら暴力を振るう。本質は同じで、大した違いはないのだ。

もし、貴族や騎士が盗賊を退治したとしても、それは牧童が自分の羊を守るために、たまたま自分の視界に入った狼を追い払う程度のことでしかない。身も蓋もない言い方だが、民衆の安全に気を配ることは義務ではなく、奨励される善行のひとつに過ぎないのだ。

死にもの狂いになって刃向かってくる盗賊を追って命を落とすかもしれないとなれば、貴族や騎士達が熱心に戦うなどまずあり得ない。これは、とりわけ珍しいことではない。かつての日本でもそれは同じことで、野盗に狙われた農村が七人の用心棒を雇う映画の状況設定が成立するのも領主があてにならないからだ。

とはいえ、在郷の騎士や兵士が激減したという事実は、盗賊の喜ぶ状況だった。

これまでは、こそこそと行っていた野盗行為を堂々と行えるようになったのだから。

そして、獲物がいなくなったら困るので、根こそぎ狩ったり奪ったりしない……というのは智恵のある狩人の仕事である。それと類似するのが盗賊行為であるが、そもそも智恵のある人間が盗賊に身を落とす例は少ないので、盗賊の大部分は陰惨を極める仕事の仕方をする。

例えば近くにドラゴンが出たために、とある村から逃げ出すことになった一家だ。

男は、農耕馬に馬車を引かせると、家財一切合切と妻三十二歳と娘十五歳を乗せて村を出た。

こうした逃避行では、野生の草食動物がするように……例えば野牛やシマウマのように、キャラバンを組んで移動するのが常である。だが、そんな悠長なことをしているとドラゴンに襲われるかも知れないという恐怖が先にたった。

だから村人達が止めるのも聞かず、一家だけで村を出たのである。

運悪く盗賊が現れたのは、村を出て二日目の夕刻だった。

男は、農耕馬をひたすら鞭打ったが、荷物満載の馬車がそんなに速く走れるはずもない。抵抗ら

しい抵抗をすることも出来ず、一家は騎乗の盗賊達に取り囲まれてしまった。
男はあっさりと殺され。家財と、妻と娘を奪われたのだった。

夕闇の中。十数名の盗賊達は火を囲んで、獲物を得た喜びに一時の享楽を味わっていた。
獲物の中には金品ばかりでなく一家が当面の暮らしを保つための食料もあった。これで腹を満たす。母娘を犯すのは順番待ちだが、盗賊でも主立った立場にいる者は早々に獣欲を満たして、いい気分で酒を味わっていた。
「お頭、コダ村だそうですぜ」
炎龍の出現によって村中が逃げ出している。荷物を抱えていて足が遅い。たいした脅威もない。これを襲ってはどうか？　襲わない手はない。襲いましょう。奪いましょう。
配下の言葉に、頭目はニンマリとほくそ笑んだ。実に良いアイデアだ。そうしよう。彼はそう考えた。だが……。
「手が足りねぇぞ」
二十人に満たない自分の配下では、村丸ごとのキャラバンは獲物が大きすぎる。
「それですよ。あちこちに、声をかけて人を集めるんでさぁ。そうすれば今まで出来なかったような大仕事が出来ますぜ」
これは手下を集める良いきっかけとも言えた。

頭数が揃えば、村や町を襲うことも出来る。うまくやれば、領主を追い出して自分が領主に成り上がることだって出来るかも知れない。

野盗から領主へ。その日暮らしの盗賊家業から、支配者へというしばしの夢、刹那の夢に浸る。

名もない盗賊の頭目。彼にとって幸福を夢見た瞬間が、人生の終わりだったのは幸せだろうか。それとも不幸だろうか。

ゴロッと首の上から、頭が地に落ちる。

ゴロゴロと大地を転がり、たき火の側で止まった。

ジュと髪が焦げて独特の臭いが立ち上がった。

生理学的には、人は首を切られても数秒は意識があると考えられている。とすれば、彼は自分の頭が大地を転がる瞬間を体験しただろう。視野が回転し、何が起こったのか理解する前に、自分の身体であった物体が首から血液を噴出させながらグラッと倒れる瞬間を眺めるのである。

そして、急激に暗くなっていく視野の向こうに、自分の赤い血を浴びる長い黒髪の死神を見たのである。

その少女を見た者は誰もが最初に「黒い」と思う。

抜けるような白い肌に漆黒の髪、黒い衣装。そして、その瞳は底のない闇のごとく黒かった。

ビュンという風切り音とともに、盗賊の首が飛ぶ。

手にした武器は、重厚なハルバート。
重い鉄塊のごとき斧に長柄をつけた武器だ。断じて小柄な少女が振り回してよいものではない。フリルで飾った服をまとった少女が手にしてよいものでもない。それを柳のような細い腕と、白魚のような細い指で振り回すのだから非常識にもほどがある。
どすっと重い鉄斧を肩に載せて、丸い息を「ほっ」と吐いた。
少女の周囲には野盗であった死体が累々と横たわっていた。
「クスクスクス……。おじさま方ぁ、今宵はどうもありがとう」
スカートをつまみ上げて、ちょこんと一礼。
年の頃は見た目では十三歳前後。優美さと、気品のある所作からは育ちの良さが感じられた。その顔(かんばせ)は笑顔をたたえている。だが、目だけが笑っていない。黒い瞳の中に浮かぶ闇はどこまでも深い虚無だった。
「生命をもってのご喜捨を賜りホントにありがとう。主神にかわってお礼を申し上げますわねぇ。神はあなた達の振るまいがたいそう気に入られてぇ、おじさま方をお召しになるっておっしゃられてるのぅ」
「……な、なんでぇ！　てめえはっ！」
まだ生きている野盗達の中には、腸(はらわた)に氷を詰められたようなぞっとする重さの中でも、なんとか虚勢を張ることができた者もいた。この際、声を出すことが出来ただけでも褒めてやるべきだろう。

「わたしぃ？」
くすりと愛らしくほほえむ。
「わたしはロウリィ・マーキュリー。暗黒の神エムロイの使徒」
「エムロイ神殿の神官服？　……じ、十二使徒の一人。死神ロウリィ？」
「あらぁ、ご存じなのぉ？　クスクスクスクス……それで正解よぉ」
コロコロと嗤う少女を前にして、野盗達は一斉に逃げだした。
荷物もなにもかもうち捨てて死にもの狂いになって走り出す。
じょ、冗談じゃねぇ。使徒なんかとまともにやり合えるかっ！
魂の叫び、命の叫びをそれぞれにあげながら、懸命に死の淵から逃れようとする。
「だめよぉ。逃げてはいけないのよぉ」
ロウリィが跳んだ。自分の体重の何倍もあるような巨大な鉄塊を抱え、どう猛な肉食獣の身のこなしで、盗賊達に襲いかかる。
ハルバートが盗賊の頭をスイカのようにかち割ると、周囲にミンチ状の肉片がまき散らされた。
「ひぇ、あわっ……ひっ」
腰が抜けた男の前に、ゆらぁりと立つロウリィ。重たいハルバートをよいしょと担ぐと、足下をちょっとふらつかせながらも、高々と掲げあげる。
彼女の白い肌は、返り血で真っ赤に染まっていた。

「うふふ……神様はおっしゃられたのよぉ。人は必ず死ぬのぉ。決して死から逃れることは出来ないのぉ」

振り下ろされる斧に続いて、断末魔の悲鳴が響くのだった。

「はぁ、はぁ、はぁ……なんだって、エムロイ神殿の神官がこんなところに」

男は我が身に訪れた不幸を恨みながら、走っていた。

遠くから仲間の絶叫が聞こえる。また一人、死神に命を刈り取られたようだ。

「くっ、くそっ」

夜の荒野だ。道などない。窪みがあり、岩が転がって、荊(いばら)が群生し、灌木が立ちふさがっている。男は、転び、のたうち回りながら、泥と汗とにまみれ、あちこちをすりむき、服を破きながら、這うように、あえぐように走った。

またしても、絶命の悲鳴がこだました。

ぬかるみにはまり込み、滑って転ぶ。

身体を地面にうちつけて、男は拳で大地を打った。

「くそっ、くそっ、くそぉおおおっ、なんで俺がこんな目にっ！」

「あらぁ。十分楽しんだのではなくてぇ？」

トンという足音。

それに続く鈴を鳴らしたような声に、はっと見上げる。すると銀色の月を背景に、黒い少女が立っていた。

「あなた、イイ思いをしたのではなくてぇ？　人を殺したのではないのぉ？」

男の開いた脚の間……股間すれすれにズトンと、大地を割らんばかりにハルバートが突き刺さった。

「ひ、ひっひ、ひ、お、俺はまだやってねぇ!!」

「あらぁ、ホントぉ？」

「ホントだよ！　仲間にしてもらって、これが初めての仕事だったんだよぉ！　女だって、俺は新米だから最後だって言われて、まだ指一本触れさせて貰ってねぇんだ！」

「ふ～～ん？」

ロウリィはのぞき込むようにして、男を値踏みした。

「他のおじさま達は、み～んな、エムロイの神に召されたわよぉ。あなた独りじゃ寂しいんじゃなくてぇ？」

男はぶるぶると首を振った。寂しくない、寂しくない。

「でもぉ、独りだけ仲間はずれなんて、いい気分じゃないわぁ」

「いや、是非仲間はずれにしてくださいっ！」

男は祈るように願った。

ロゥリィは、ゾロリとした刃物のような冷たい目で男を見下ろす。
「どうしよぅかなぁ～」
言いながら、ロゥリィはポンと掌を拳で打つ。
「そうだわあ。良いこと考えたのぅ。まだ、何もしてないなら。今からでもすればいいのよぉ」
そう言って黒い少女が男の片足をむんずと掴みあげた。
それは華奢な見た目からは信じられないほどの怪力だった。
「るるんらっ」と鼻歌を歌いながら、雑巾かモップでも引きずるような感じで男を引きずる。
「いでで、やめっ！　ごふっ!!　あつっ」
石や砂利の転がる荒れ地だ。汗まみれの男の身体は、皮膚が破れ、溢れ出る自らの血でさらにまみれた。
「あなた、お母さんと、娘さんとどっちが好み？」
「いやだぁ！　止めてっ!!　ぐへっ、ごっぽっ……」
「遠慮なんかしてはいけないのぉ。これが最期なんだしぃ、お相手していただけるように頼んであげるわよぉ」
ロゥリィは男の足をつかんだままぶんっと腕を振った。
男は、うち捨てられた人形のように不格好に横たわる母娘のところでドサッと転がる。
「さぁ、はじめるとよいのよぉ。あなたの順番よぉ」

男は、首をブルブルと小刻みに振る。
一糸も纏わない姿の母娘二人は、暴行を受けていた姿勢そのままに両足を広げ、両腕は万歳するかのように挙げていた。身動き一つせず横たわっていて、見ると呼吸も止めていた。
「あら困ったわね。こちらの二人も、もう召されてしまったようだわ」
暴行をうけている間に、命に関わるような傷を負わされたのかも知れない。
「間に合わずにごめんなさいね」
ロゥリィは母娘に瞑目して頭を少し下げた。その上で男に微笑む。
「でも、折角だからぁ。やったらぁ？」
男の股間が濡れて、周囲に水たまりが広がっていった。

04

盗賊の青年は、涙を流しながら許しを請い続けた。
地に這いずり、手を組んで祈るように。涙と鼻水を流しながら慈悲を請う。自分はまだ直接には罪を犯していない。まだ手を汚していない。生活苦のために、盗賊に身を落とすしかなかった。反省して、心を入れ替えて、これからは真面目に働く等々。

ロゥリィはその醜態に嘆息した。
汚物を見ることを厭うかのように顔を背ける。その見苦しさに、視線を向けたが最後、自らが汚されてしまうかのような気分になったのだ。
まず大前提がある。それは、ロゥリィの考えでは、人を殺すことは罪ではないということなのだ。大切なことは、何故、どのような目的で、そしてどのような態度でそれを為したかなのだ。
これこそロゥリィの仕える神の教えでもあった。
盗賊や野盗が、人のものを盗むことの何が悪いのだろう。
兵士や死刑執行人が、敵や死刑囚を殺すことの何が悪いのだろう。
そういうことなのだ。
ロゥリィの仕える神は善悪を語らない。
あらゆる人の性を容認する。人が生きるために選んだ職業を尊ぶ。そして、その職業なりの道を尊ぶ。だから、盗賊ならば盗賊として堂々としていればよい。そのかわり盗賊であるが故に、兵士であるが故に、戦場でそして法によって裁かれること等で、自らの命もまた奪われることを覚悟すべしと教えるのだ。
もし、この男が盗賊として胸を張ってロゥリィに相対したのであれば彼女はそれなりの尊敬を示したろう。神の使いの立場として、青年を愛したかも知れない。
だが、この男の態度たるやどうだろう。

まず、自ら手を汚していないという言い訳が許せない。実際に盗賊に参加し、数を頼む暴力集団の構成員となった以上、直接手を下したかどうかは全く関係がないのだ。

そして、生活苦のために盗賊に身を落とすしかなかったという言い訳がまた許せない。食べていけないのなら、飢えて死ねば良い。

才覚に乏しく運に見放され食べていくことが出来ないが、誰も傷つけたくない。故に、物乞いや路上生活者として生きるということを選択する者も居るのだ。その矜持をロゥリィは見事な覚悟と認めて愛する。

人として愚劣。男として低劣。まさに存在の価値なし。その見苦しさに、漆黒の使徒はその美貌をゆがめた。

ロゥリィは、冷厳に命じる。墓穴を掘るようにと。その数は三つ。

青年は、道具がないと応じたが、母親から頂いた両手があるでしょう？　とロゥリィに論駁(ろんばく)されてしまう。だから青年は荒野を引っ掻くようにして、穴を掘った。

ここは荒野だ。砂場や耕された畑に穴を掘るようには行かない。たちまち爪は剥がれた。皮膚はぼろぼろとなった。しかし、青年がその痛みに手を休めようとすると巨大なハルバートがつま先を削るようにして叩きつけられて、大地を抉った。

恐怖に駆られた青年は、一時の狂躁に苦痛を忘れ、砂礫と雑草の大地を削るようにして、必死で穴を穿(うが)つのだった。

やがて、一家の父親を埋葬した。
一家の母親を埋葬した。
そして一家の娘を埋葬する。
最早、感覚を失った掌で土を掬いあげて少女の墓に盛り終えた時、既に太陽は昇り、あたりは明るくなっていた。
男が仕事を続けたのは、これが、自らを見逃す条件であると思ったからだ。いや、そう思いたかった。思い込もうとした。そして男はお伺いをたてるかのように振り返ったのである。
「こ、これでいいか？」
渇きと飢え、そして疲労と両手の激痛とで息も絶え絶えとなっていた男は、見た。
神に祈りを捧げる少女、ロゥリィの姿を。
片膝をついて、両手を組み一心に祈る。彼女は神秘的な陽光に包まれ気高く美しく、見る者の呼吸すら押し止める。
喪服にも似た漆黒のドレスと長い黒髪。
白磁の肌。
古くなった血液のような、赤黒の口紅がぞっとするような笑みの形を描く。
祈りを終えた少女はゆっくりと立ち上がり、ハルバートを掲げあげた。そして身じろぎも出来ずにいる男へと向かって、神の愛と自らの信仰の象徴を振り下ろすのだった。

＊　＊

コアンの森在住のエルフ、ホドリュー・レイ・マルソーの長女テュカは、自分は今、夢を見ていると思っていた。

寒冷紗がかかったような朦朧たる視野。そのなかで人間達が行き交う。

何が起きているのか？　感じ取り洞察しうる思考力が働かない。ただ、目に映る物、耳に入る音を受け容れるだけだった。

空に浮かぶ雲や目に映る風景が、時折流れるように動く。止まる。また、動き出す。それに伴って身体が揺すられる。

どうやら、荷車のようなものに載せられているようだった。

動いては止まる。また動いては止まる。

荷車の窓から見えるのは、荷物を背負い抱えた人間達が疲れ、そして何かに追い立てられるかのような表情で歩いている姿だった。

荷物を満載した荷車がガラガラと音を立てながら通り過ぎていく。

また動き出す。そしてしばらくして止まる。

暗かった壁が切り開かれて、そこから外の光が差し込んで来た。

眩しい……。

ふと、視界がぼんやりとした黒い人影で覆われた。

「Dou? Onnanoko no yousuwa?」

視界の外にいる誰かと何か会話しているようだが、聞き取ることも理解することも出来なかった。

「クロちゃ～ん。どう？　女の子の様子は？」

「伊丹二尉……意識は回復しつつありますわ。今も、うっすらと開眼しています」

そんな会話も、テュカにとっては意味を為さない音声でしかなかった。

高名な原型師が、最高の情念と萌え魂を込めて作り上げた、そんな造形の美貌と肌をもつ少女が、力無く横たわっている。流れる金糸のような髪をまとい、うっすらと開かれた瞼の向こうには、青い珠玉のような瞳が垣間見られた。

伊丹は少女のように見えるエルフ女性を眺め見て、これからの困難を思った。

熱は下がって安定。バイタル（心拍・呼吸数・血圧の標準値がどの程度なのかは判らないが、上がるでもなく下がるでもなく、安定していることは悪いことではないと黒川は語った）も安定しているとは言え、気をつかわないわけには行かない状態だ。

「遅々として進まない避難民の列。次から次へと湧き起こる問題。増えていく一方の傷病者と落伍者。逃避行ってのは、なかなかに消耗するものだねぇ」

それは愚痴だった。「喰う寝る遊ぶ、その合間が人生」がモットーの伊丹にとって、現状がいつまで続くか判らないことは苦痛以外の何物でもないのだ。

疲労。人々の悲壮な表情。餓えと渇き。赤ん坊の悲鳴にも似た泣き声。余裕をなくして苛立つ大人達。事故によって流される血液。照りつける太陽。落とす間もなく靴やズボンにこびりついていく泥、泥、泥。

ぬかるみにはまって動けなくなってしまう馬車。その傍らで座り込んでしまう一家。しかし村人達には為す術がない。彼らには落伍者を無感動に見捨てていくことしか出来ないのだ。助けようにも精神的にも体力的にも余力がなかった。「せめて我が子を……」と通りゆく荷馬車に向けて赤子を捧げる父親。

キャラバンからの落伍は死と同義だった。乏しい食料、水。野生の肉食動物。盗賊。そんな危険の中に身を曝して生き続けることは難しい。

見捨てるのが当たり前。見捨てられるのも当然。生と死はここで切り分けられてしまう。それが自然の掟だった。

誰か助けて。

その祈りに力はない。

誰か助けて。

神は救わない。手をさしのべない。ただ在るだけだった。

誰か……誰か誰か。
神は暴君のように命ずるだけ。死ねと。
だから、人を救うのは人だった。
動けなくなった馬車に緑色の衣服をまとった男達が群がった。ただ、脱輪しただけならば助けようはあると言う。
「それっ、押すぞ!!」
「力の限り押せ～、根性を見せて見ろっ!!」
号令に全員が力を込める。泥田のような泥濘から馬車が救われ、再び動けるようになると、男達は礼の言葉も受け取ろうともせず、馬を使わない不思議な荷車へと戻っていく。
村民達は思う。彼らはいったい何なのだ、と。
この国の兵士でもない。
村の住民でもない。
ふらっとやってきて、村に近づく危機を知らせ、そしてこうして逃避行を手伝う。気前が良いと言うよりは、人の良すぎる不思議な笑みを顔に張り付かせている異国の人間達。そんな印象が村民の一部に残った。
それでも馬車が荷物の重みに耐えかねて、壊れてしまった場合の彼らは冷酷だった。
荷物を前に呆然と立ちつくす村人の元に、緑色の男達の長と村長がやって来る。

そして村長から、背負えるだけの荷物を選ぶように説得される。荷物を棄てるなど村人達の考えもしないことだった。荷物とは口を糊するための食料であり、財産だ。これらなくしてどうして暮らしていけと言うのか？　だが、村長はそれでもと荷物を棄てるように告げる。嫌々ながら、緑色の服をまとった連中の言葉を伝えさせられているという態度だった。そして未練が残らないようにと火を放つことを強いられる。家財が燃え上がってしまえば、もう歩きだすしかない。明日はどうするのか？　あさっては？　全く希望の見えない状況で、泣く泣く歩くしかないのだ。

今やキャラバンには荷車の列と、徒歩の列とが出来ていた。そして時間の経過とともに徒歩の列が増え、荷車の列は減りつつある。

黒川は伊丹に尋ねた。

「どうして火をかけさせるのですか？」

「荷物を前に全く動こうとしないんだもの。それしかないでしょう？」

「車両の増援を貰うというわけにはいかないのでしょうか？」

自衛隊の輸送力なら、この程度の村民を家財ごと一気に運んでしまうことは簡単なのだ。

だが、伊丹は困り顔をすると後頭部を掻く。

「ここは一応、敵対勢力の後方に位置するんだよね。力ずくで突破すれば出来ないこともないよ。でも、俺たち程度の少数なら見逃しても、大規模な部隊が自分たちのテリトリーの奥に向かって移動を開始したら、敵さんもそれなりに動かざるを得ないと思うんだよね。偶発的な衝突。無計画な

戦線の拡大。戦力の逐次投入。瞬く間に拡大する戦禍。巻き込まれる村民達。考えるだけでゾッとしちゃうってさ」

そんな伊丹の言葉に、黒川は苦笑を返す。伊丹が一応は上に向かってお伺いは立てたのだということが、その言葉から知れたからだ。

「だから、俺たちが手を貸す。それぐらいしか出来ないんだよ」

伊丹の言葉に黒川も頷かざるを得なかった。

コダ村の避難民のキャラバンがその場所を通りかかったのは、太陽があと少しで最も高いところに昇るという頃合いだった。

キャラバンの先頭を行く第三偵察隊の高機動車。しかし、その速度は歩くのとそう大差なかった。なにしろ徒歩の村人と、驢馬や農耕馬の牽く荷車の列だ。歩くだけの速度でも出ていればまだマシと言えるかも知れない。

「しっかし……もうちょっと速く移動できないものですかねぇ」

倉田三等陸曹が愚痴った。

「こんなに遅く走らせたのは、自動車教習所の第一段階の時以来っすよ」

迂闊にアクセルを踏み込むと、たちまちキャラバンを引き離してしまう。倉田はオートマのリープ現象を利用してアクセルはほとんど踏み込まず、両手もただハンドルを支えるだけにしていた。

バックミラーには、バックレストにしがみつくようにして前を見ている子どもの姿が映っていた。既に、高機動車の荷台は疲れて動けなくなった子どもや、怪我人でいっぱいなのだ。すぐ後ろを走る七三式トラックも、狭い荷台に怪我人や身重の産婦が載っている。もちろん、危険な武器や弾薬、それと食料といったものは軽装甲機動車に移した。

伊丹は航空写真から起こした地形図を見て、双眼鏡を右の地平線から左へと巡らせる。地形と現在位置を照らし合わせて、これまでの移動距離を積算して、残余の距離を目算する。道のりばかりでなく、高低差、川や植生といった情報も重要だ。

「妙に、カラスが飛び交ってますよ」

倉田の言葉に「そうですねぇ」などと適当に答えながら再び前方に双眼鏡を向けると、カラスに囲まれるようにして少女が路頭に座り込んでいるのを見つけた。

「ゴスロリ少女？」

それは、ちょっとしたイベントとか繁華街……例えば原宿などで目にする機会の増えた服装である。その定義については諸説紛々であるが、伊丹はこの少女の服装を黒ゴスであると認識した。

年の頃十二～十四歳。見た目も麗しく、まさに美少女であった。

そんな少女が荒涼たる大地の路頭に座り込んでいる。黒曜石のような双眸をじっとこちらへと向けていた。

「うわっ。等身大の球体関節人形？」

倉田も双眼鏡をのぞき込んで呻く。
その少女はそれほどまでに無機的な、そして隙のない造形をしていたのだ。
とはいえ、倉田が求めるように車を駆け寄らせて少女を眺めるわけにもいかない。コダ村のキャラバンは同人誌即売会入場口に向かう一般列のごとく遅々たる動きであり、このまま高機動車が少女に近づくには時計の秒針が五回転するほどの時間を必要とすると思われる。
そこで伊丹は、勝本や東（ひがし）といった隊員を徒歩で先行させて、話しかけさせることにした。
服装からみると、この近くの住民と考えるよりは、銀座事件の時に連れ去られた日本人と考えた方が納得がいくように思えたからだ。
だが勝本や東が話しかけても少女とのコミュニケーションがうまくいっているようには見えなかった。座り込んだ少女に職務質問をする新人警察官。そして、それを無視する家出少女みたいな感じになってしまっていた。
キャラバンが少女のもとにたどり着くと少女は待ちくたびれたかのように立ち上がり、ポンポンとスカートの砂埃を払った。そして、やたらとでかい鉄の塊とおぼしき槍斧を軽々と抱え高機動車に並んで歩き始める。
「ねぇ、あなた達はどちらからいらしてぇ、どちらへと行かれるのかしらぁ？」
少女が発したのは現地の言葉であった。
もちろん、言葉に不自由な伊丹達が答えられるわけもない。辞書代わりの単語帳をひらいたりし

ながらどうにか片言で通じる程度だ。東も勝本も肩をすくめ、とりあえず歩き出す。
コミュニケーションの空白を埋めたのは、高機動車の席の間隔が広く取られているのを利用して、倉田と伊丹の間に座り込み、前を見ていた七歳前後の男の子だった。
「コダ村からだよ、お姉ちゃん」
「ふ〜ん？　この変な格好の人たちはぁ？」
「よく知らないけれど、助けてくれてるんだ。いい人達だよ」
少女は、歩行速度で進む高機動車の周囲を、一周する。
「嫌々連れて行かれているわけじゃないのねぇ？」
「うん。炎龍が出たんだ。みんなで逃げ出してきたんだよ」
伊丹達は外人同士の会話を分かったような分からないような表情で聞いている典型的な日本人の態度をとるしかなかった。
とりあえず東と勝本には列の後方で村人のケアをするように指示して、少女から情報をとるのは直接自分ですることに決める。単語を確認して、話しかけるつもりで男の子と少女との会話が切れるのを待った。
「コレ。どうやって動いてるのかしらぁ？」
「僕が知りたいよ。この人達と言葉がうまく通じなくてさ……でも、荷車と比べたら乗り心地は凄く良いんだよっ！」

「へぇ〜、乗り心地が良いのぉ？」
　すると黒ゴス少女は、コラコラコラと制止する間もなく、ズカズカと伊丹の座る助手席側から高機動車に乗り込んでしまった。もちろん、伊丹の膝の上を跨ぎ越えてだ。運転席や助手席のドアがなく、開け放たれていることが災いしたのかも知れない。
　高機動車は大人が十人は乗れる。
　前席は正面を向き、後席は左右から中央に向かって座るように椅子が配置されている。その中央は装備などを置くため十分な広さがあって、現状のように道交法を無視できるのであれば、子どもだけなら無理無理に二十人近くは乗ることが可能なのである。
　しかし、そうだとしても、荷物もあり子どもや老人も既に多く、朝の通勤ラッシュに近い状態だ。そんな車内に「ちょっと詰めて」などと言いながら乗り込んで来る少女は、村人達からも歓迎されなかった。あからさまに苦情を言わないが皆迷惑だなぁという表情で迎えた。
「ちょ、ちょっと。狭いよおねぇちゃん」
「ん〜ちょっと待っててぇ」
　ただでさえ窮屈なのに、長物を持ち込もうとしているのだ。
　ハルバートは長い。そして重い。上手く車内に収めようとして、縦にしたり横にしたり、誰かの頭や顔やらにゴチゴチとぶつけてしまった。結局、皆が窮屈な思いをしながら身をちょっと寄せたり動かしたりして、車内の床に転がすように置くこととなった。

その上で、自分自身がどこに座ろうかということで腰のおろし場所を探すのだが、どこにもない。仕方なく、黒ゴス少女が腰をおろす場所として選んだのは、御者という訳ではなさそうなのに、なんだか一人だけ前方の良い席に座っている男の膝であった。

「ちょっと、待て」

乗り込んで来る段階から唖然として対応に困っていた伊丹である。

黒ゴス少女を制止しようとしたが、うかつに手を出して危険な箇所を触ったりしたらセクハラやらなんやらと言われて、えらいことになりそうな予感がしてつい手を引っ込めてしまった。しかも言葉も通じない。「ちょっと待てって!!」「あちこち触るな」「小銃に触るな、消火器に触るな」「とにかく降りろって」「わぁっ、危ないものを持ち込むな」と日本語で、いろいろと怒鳴ったり抗議したりするのだが、馬の耳に念仏というか、蛙の面(つら)になんとやらという感じで完璧に無視されていたのだ。

そこに来て少女が、ちょこんと腰をおろしたのは自分の膝。

「ちょっと待て!」と言わないわけには行かない事態である。

一方が押し退けようとすれば、一方はせっかく確保した居場所を奪われまいとする低級な紛争が勃発する。

「●×△、□○○○!!!!!」

「△□×¥!○△□××××!」

こうして、言葉を介さない苦情と抵抗と強引さのやりとりのあげく、伊丹がお尻の半分をずらして席の右半分を譲ることで、どうにか落ち着くこととなったのである。

05

自衛隊は性格的に隊員の安全を重視している。その為に海外派遣などでは、まず現地で守りの強固な宿営地を築き、それを拠点とし、危険時には立て籠もるようにして任務を遂行して来た。最近ではイラクでのサマワがその例と言えるだろう。

人命軽視の旧軍を反面教師にし、国内向けの政治的な配慮と、人命救助を主とする災害派遣の活動をしていくうちにそれが習い性となってしまった、とでも言うべきだろうか。特地派遣隊もまた、守備を重視している。

何よりも守るべきものは『門』の向こう側……本土だ。すなわち、この世界に置いて特地派遣隊の使命とは『門』を守ることにあった。『門』を含むアルヌス丘を占拠し、その周辺に安全地帯を、軍事的・政治的な方法によって確保することが、特地派遣隊に求められている。航空写真からの地図の作製、周辺地域に隊員を派遣しての調査も、全てそのための手段である。

そしてさらに、前世紀の遺物とされている要塞建築がこれに加わった。

土と鉄条網の野戦築城ではない。鉄筋とコンクリートによって造られる恒久的な防御施設である。

『門』周辺を確保してからおよそ三週間。昼夜を問わない施設科の活躍によって、アルヌス丘は強固な防塞へと変貌していた。

その構造は、担当した幕僚の性格が現れるかのようで、几帳面なほどの六芒星構造であった。

この要塞の航空写真を見た普通の人々は、大抵は函館にある五稜郭みたいと口にする。

普通の人々の中でも、真面目な自衛隊幹部になると軍事史を紐解いて、この稜堡式城郭の利点とか欠点とかを論じたりしながら、守備や攻略の方法について検討を始めたりする。

だが、ホンのちょっと方向性の違うマニアックな人間だと、ニヤリとして魔法陣みたいという言葉を呟いたりした。そう、魔術とか魔法とか神秘的なことに対して無縁な人間が全くの悪気なしで、神秘の代表格とも言える『門』とアルヌスの丘の周辺に六芒星を、魔導関係者がそれを知ったら正気を失ってしまうほどの規模と正確さでこしらえてしまったのである。

＊　＊

さて、場面変わって。

高機動車が、七三式トラックが、軽装甲機動車が、エンジンの咆哮をあげて砂塵を巻き上げなが

ら疾駆していた。
車内に収容されていた女、子ども、老人はその急ハンドルと加速に振り回され、あちこちに身体や頭をぶつけていたが、歯を食いしばって懸命に耐えている。
車窓から見えるのは、逃げまどうコダ村の人々。そして、それを空から覆う黒い影。
炎龍である。
コダ村を脱出して三日、どうやら無事に炎龍の活動域を脱出できたと思った矢先に、唐突に現れた炎龍が、獲物を見つけたとばかりに避難民達に襲いかかって来たのだ。
炎龍がここまで進出してきたのにはそれなりの理由がある。
炎龍出現の知らせを聞いたコダ村とその付近の村落の住民達が一斉に避難し、巣の周囲では餌となる人間やエルフを見つけることが出来なくなってしまったのだ。そのため、わずかな臭いを頼りに、人間がいるであろう地域まで遠出してきた。そして、避難に手間取ったあげく、多量の荷物を抱えていたが為に移動速度の遅くなっていたコダ村の村民に狙いを定めたのである。
「怪獣と闘うのは、自衛隊の伝統だけどよっ！　こんなとこでおっぱじめることになるとはねっ！」
桑原曹長が怒鳴る。「走れ、走れ」と倉田に向かって怒鳴る。アドレナリンに高揚しているのか、その声には喜色すら混ざって聞こえた。
炎龍が、うずくまって動かなくなった村人に狙いを定めて襲いかかろうとする。それを見て伊丹

は併走していた軽装甲機動車に向けて怒鳴った。
「牽制しろ！　ライトアーマー！　キャリバーをたたき込めっ！」
軽装甲機動車上で50口径のレバーを笹川陸士長が渾身の力を込めて引き、工事現場の削岩機のような音が連続した。
極太の薬莢がカートキャッチャーからこぼれてまき散らされる。硝煙で汚れ、すすけた真鍮色の薬莢がカラカラとボンネットを転がった。そして12・7㎜の銃弾が炎龍の背に当たり火花を散らす。
だが強靱な龍の鱗は重機関銃の銃弾を全く寄せ付けない。
「全然、効いてないっすよっ!!」
笹川の言葉に、伊丹は怒鳴り返す。
「かまうな!!　当て続けろ!!　撃て撃て撃て！」
遊戯用空気銃のＢＢ弾は、当たったからといって死ぬわけではないが、それでも弾を浴びせられるのは嫌なものである。銃弾が効かないほどの強固な装甲に覆われていても、生き物ならば必ず感覚があるはず。伊丹は、部下達に絶え間ない射撃を命じた。
六四小銃の筒先が炎龍を指向する。消炎制退器から、炎が花弁のように広がった。
浴びせられる銃弾に、さしもの炎龍も辟易した様子を見せる。獲物に襲いかかる勢いをそがれ、あたふたと走る農夫を取り逃がしてしまった。

忌々しそうに、頚をふる龍。
つぶれた片目に突き立っている矢が、その強面を引き立てて見るからに恐ろしい。やくざの顔についた傷みたいなものだ。
炎龍が火炎放射器のような炎を吹き放つが、周囲を走り回る車両を捕らえることは出来なかった。
「ono! yuniryu!! ono!」
背後からの少女の声。
振り返った伊丹の視界に、ぱっと金糸のような髪が広がっていた。
蒼白の表情をしたエルフ少女が、細い指で自らの碧眼を指し示して「ono!」と連呼する。
この瞬間、伊丹は言葉は通じてなくても不思議と意思が通じたような気がした。
「目を狙え!!」
隊員達は龍の頭顔面部を狙い始めた。
炎龍は明らかに厭がり、顔を背け動きが止まった。
「勝本！　パンツァーファウスト！」
ライトアーマー内で取り出されたのは、110㎜個人携帯対戦車弾（パンツァーファウストⅢ）。厚さ７００㎜もの鉄板を（70㎝もあるようなものを「板」と呼んで良いかどうかは別として）貫通する能力のある、個人携行する火器としては凶悪な破壊力を有する武器である。

重機関銃を撃っていた笹川士長と入れ替わって勝本三曹が、上部ハッチから身を乗り出した。
だが、これは先っぽが重い上に執り回しがききにくい。しかも安全管理を重視する自衛隊では、構えてすぐ撃つような習慣はない。
「後方の安全確認」
馬鹿、とっとと撃てと誰もが呟いたが、日頃の訓練内容を思い出して「自衛隊だし……」と思ってしまう。
照準を執っている間に、炎龍は身をよじらせて中空に逃れようとする。
ライトアーマーの急加速に、勝本は振り回されて照準から目標を逃してしまった。
「ちっ!!　揺らすな東!!」
「無茶、言わないでくださいっ！」
コンピューター制御されてるわけじゃないんだから、行進間射撃なんて無理だぁ、などと思いつつ勝本は筒先を炎龍へ向けた。
車の急制動とガクビキ（引き金を引く際に力が入って、銃全体をゆすってしまうこと。当然命中しない）によって、引き金を引いた瞬間から、パンツァーファウストが外れることは見えていた。
後方にカウンターマスを放出。前方に向けて弾頭が加速しながら突き進んでいく。
姿勢を崩していた炎龍は、安定をとろうとして翼を広げた。そして飛来する弾頭を跳び避けるように後ずさったが、突然脚をもつれさせて倒れ込む。

見るとハルバートが地に着き立っている。
高機動車の中から、黒ゴス少女が荷台の幌を切り裂いてハルバートを投げつけていた。その柄が地を行く動物ではない炎龍の脚を払ったのだ。
外れていたはずの弾頭に向かって炎龍が倒れ込んでいく。
ノイマン効果によって発生したメタルジェットは、強固な龍の鱗をもってしても阻むことは難しい。炎龍の装甲はユゴニオ弾性限界を超えたライナーによって浸食され、穴が穿(うが)たれる。
人間で言えば左肩に相当する部分が左腕ごとごっそりえぐり取られていた。
空気を振るわせる悲鳴。
絶叫。
ドラゴンの咆哮は、その眼光と同じく魂を揺さぶり、戦士の勇気を砕く。その場にいた者すべての魂が凍り付いた。
攻撃に、一瞬の間があいてしまった。
その隙に、空に舞う炎龍。
翼を広げ、よたよたとよろめくようにしながら、高度を上げていく。
自衛官達は、その後ろ姿を黙って見送るだけであった。

＊　＊

炎龍が撃退された。

そんな話を聞くと、誰もが「嘘だろう？」と疑う。

単騎よく龍を征すドラゴンスレイヤーが登場するのは、お伽噺の中だけというのが常識だからだ。

徒手で地熊を倒す。水牛を倒す。このくらいは鍛えようによってはあり得るかも知れない。だが鷲獅子（グリフォン）や剣歯虎（サーベルタイガー）、さらには毫象（マンモス）を素手で倒すというのはどうあっても無理と思える。これと同じくらいの理由で、古代龍と相対することは自殺行為と考えられていた。

魔法の甲冑と武器で身を固めた騎士の一団だろうと、さらには魔導師や神官、エルフ弓兵や精霊使いの支援を得ようとも、古代龍を倒すことは絶対不可能。それがこの世界の常識だった。だからこそ人々はその存在を災厄と同義として受け止めているのだ。

だが、「倒すことは出来なかったが、それでも撃退に成功した」という噂が、一カ所だけでなく様々な方面から伝わって来ると、人々はどうにか信じるようになった。信じても良いという気になった。ただし、噂には尾ひれ羽ひれがつく物だ。「もしかすると事実かも知れない。けど、炎龍と言うのは間違いではないか？」と考えたのである。

炎龍の活動期は五十年ほど先と言われていたし、そもそも古代龍を倒せるような存在を想像することはどうにも難しかったのだ。だから現れたのは古代龍たる炎龍ではなく、それに劣る大型の亜龍（例えば無肢竜の類）ないし新生龍だったのではないか、という考えが説得力をもって迎えられた。

とはいえ、亜龍であっても齢を重ねたものは、古代龍なみに大きくなるし、新生龍だって翼竜などよりは遙かに大きく危険なのだ。従ってそれを撃退したとなれば「龍殺し」に準じた戦功と言っても良い。避難民の四分の一が行方不明ないし死亡という事実も、「よくぞ、その程度で済んだものだ」と受け止められる。

この世界で「死」とはそういうものなのだ。森の中に迷い込んでも死、川岸で遊んでいてうっかり落ちても死。これらは本人の不注意かあるいは運命とされる。平和も安全も当然ではない。だからこそ、人としての力量をもって追いすがる死……ドラゴンの形状をした天災を振り払った者の功績を人々は讃える。誰もが「で、その偉大なる勇者ってのは、誰なんだ？」と関心を抱くのだ。

＊　＊

コダ村の村民の内、生き残った者の身の処し方は大きく分けて三つあった。

ひとつが、近隣に住まう知り合いや親戚を頼る者。これはかなりの幸運の持ち主と言える。知り

合いや親戚の保証や支援を得て、住処を確保し、職を得る機会があるからだ。

ふたつ目が、親族や知る者もない土地で避難生活を送る者。これが大多数である。身寄りもなく、誰からも助けを得られない場所で、住む場所と職をどうやって得るか。考えるだけで難しい。明日への不安はどれほどのものか。だが、生き残ることが出来ただけでもよかったと不安を押し殺し、皆、それぞれの幸運がさらに続くことを祈りつつ各地へと散っていったのである。

彼らは去り際に伊丹ら自衛官達の手を握り、感謝の言葉をひたすら繰り返した。

避難民達にとって自衛官達は謎の存在だ。何の義理も恩もないのに、自分たちの避難を助け、こともあろうに炎龍と戦いすらした。

言葉が通じないことや見た目からも、国に属す騎士団や神官団でないことは確かだ。これが外国の軍隊なら、殺戮と略奪が当たり前だがそれもしない。無論、盗賊の類でもない。

一番理解しやすいのが、異郷の傭兵団が雇い主を求めて旅をしているという結論だった。ここ最近になって国や貴族達が兵士をかき集めているという事実がこれを裏打ちした。

しかし、傭兵団だとすれば、何の利得もなく他人のために働くことなどあり得ない。だから、いつ、どんな見返りを、自衛官達が求めて来るかと恐々としていたのである。

ところがである。最後の最後まで見返りの類を求めてこない。

それどころか、どこへ行っても自慢できるほどの功績をうち立てたというのに、まるで敗戦したかのごとく憔悴し、肩を落とし、死者を埋葬し、悼んでいる（たまたま神官がいたので略式ながら

葬祭も出来た）。別れ際に手を握ると、感極まって涙を流す者すら居る始末。

立ち去る自分達が見えなくなるまで手を振っている自衛官達の姿を見ると、コダ村の村民達は苦笑を押しとどめておくことが出来なかった。彼らの献身と無償の支援は確かにありがたい。ありがたいのだが、そんなことで「連中は果たしてやっていけるのだろうか？」そんな呆れた気持ちになるのだ。

「いくらなんでもお人好し過ぎだろう？……あんなことで、やってけるのかねぇ」

「他人の心配してる場合じゃないぞ。俺たちだって、これからどうしたらいいか……」

「そうだな」

「ま、いくら領主や貴族が馬鹿でも、あれほど腕の立つ連中をほっとくわけないさ。なんて言ったって、炎龍だぞ、炎龍。あれと互角に戦ったんだ」

「確かに。でもよ、あの連中のことだから、安く買いたたかれたりしないかねぇ」

いくらなんでも、そこまで間抜けじゃないだろう？　と言いたくなったが、貴族共の阿漕（あこぎ）なやり方をよく知る村人は、いささか心配になるのだ。

とりあえず、一風変わった衣装と価値観をもつ傭兵団（自衛官達）の一行が、良心的な雇い主に巡り会えますように感謝の気持ちを込めて、それぞれの神に祈ることにした。

ちなみに、コダ村住民の幸運はこれで終わりではなかった。

彼らは行く先々で人々から証言を求められる事となる。すなわち「ドラゴンが撃退されたという

のは本当か？」と。

「ホントに炎龍なんだって、俺はこの目で視たんだから。そんな可哀想な人間を見るような目で俺を視るなよ。……え、誰だって？　緑色のまだらな服を着た連中だよ。もちろんヒト種だよ。エルフとかドワーフとかじゃない。多分、東方の民族だろう。言葉は通じないんだが、頭は悪くなさそうだった。一生懸命言葉を覚えようとしてたしな。気持ちの良い奴らで、俺たちが避難するのを助けてくれたんだぜ。無償でだぜ、無償！　ホントだって」

彼らの言葉は、吟遊詩人のそれと違って語彙が少なく描写も下手くそ。だが自らの目で見た光景、その場での体験には英雄譚的脚色も不必要だった。

聞く者は想像力をかき立てられ、強烈な印象を受ける。見てきた事実だから、その時アレはどうだったんだ？　の問いに、語り手は答えることも出来た。

そして、語り手がドラゴンが片腕を吹き飛ばされる瞬間を描写すると、固唾を呑んで聞いていた者はみな呻くのだ。

「そりゃ、すげぇ」

やがて、謝礼を受け取ろうともせず、ほがらかな笑顔で颯爽と立ち去って行く彼ら。

本人達が聞いたら「誰のこと？」と尋ねたくなるような、今時アニメにも出てこない英雄物語のキャラクターのごとき人物像が、人々の間を伝播していくこととなった。

避難民達は、酒場で、街角で、「あんたコダ村から来たんだって？」と呼び止められては、その

時の話を尋ねられる。口によって語る言葉が違い、目によって見たことの描写も異なる。それがまた不思議な立体感をもたらすのだ。

コダ村の村民達は語り部の仕事だけでも、帰村するまで食べるに困らなかったと言う。

＊　＊

「騎士ノーマ。どう思われますか？」

宮廷では侍従武官の地位を持つ女性准騎士ハミルトン・ウノ・ローが、街のあちこちで耳にした噂について、先輩たる同僚に論評を求めた。

多くの客でにぎわう居酒屋の一角を、数人の騎士と従者達が占領している。店はそれなりに汚く、テーブルとテーブルの間は狭い。怒鳴るようにして声を出さなければ隣に座る者にすら声が届かない。そんな喧噪の中で騎士や従者達が肩をぶつけ合うほどに身を寄せて料理に手を伸ばし、酒杯を口に運んでいる。

見ると、コダ村から来たという臨時雇いの女給が、盆を手にあちこちに酒を運んでいた。彼女は注文を取り、料理を運んだ席で、求められるままに見てきたことを語り、幾ばくかのチップを受け取っていた。

ひげを清潔に切りそろえた騎士ノーマは、忌々しそうに苦い表情をした。

本来なら清潔な宮廷で、貴族の令夫人や令嬢を相手に高級な料理を口にしている身である。皇女殿下の騎士団と言えば、宮廷の飾り物であり実戦と最も縁遠い軍隊だったはず。そんな侍従武官が、今や野卑な料理と濁った酒を口にしている。任務とは言え、自分にふさわしくないと受け容れがたく感じているのだ。

なんでまたこんな目に……ノーマは、自分の主を呪いたくなる不敬を押さえ込むので精一杯だった。皇帝陛下の直々のご命令とあらば、アルヌス方面の偵察という任務自体は仕方ないだろう。ただ、皇女殿下が動くのであれば騎士団全軍を引き連れ、従卒に傅かれつつ優美に旅程を楽しめるはずだったのだ。ところがわがまま娘が下した命令は、本隊をはるか後方に残して少数での偵察行。おかげで自分を含めた侍従武官四人と従者数名だけでこの皇女のお守りをしなければならない。しかも身分を隠して、薄汚い身なりになって、食べるものと来たら粗末な黒パンに濁った葡萄酒……。

ノーマは女給に手を振り酒の追加を注文すると、この状況を苦とも思っていない様子の後輩を見て、小さく嘆息した。ハミルトンはノーマが返答するのを無邪気な顔をして待っている。仕方なく応えてやることにした。

「……これだけ多くの避難民が言うのだから、嘘ではないだろう。皆で口裏を合わせていると考えるのも難しいしな。だが、炎龍というのもいささか信じがたく思える」

「わたしは、ここまで皆が口をそろえて言うんなら、信じても良いような気になって来てます」

女給は、ワインの瓶をテーブルにどんと置いて「ホントだよ、騎士さん達。炎龍だったよ～」と

言う。

騎士ノーマ・コ・イグルは「ははは。私はだまされないぞ」と軽く応じた。古代龍や新生龍、無肢竜、翼竜などをひっくるめてドラゴンと呼称するから、何かと間違ったんだろうという態度だ。

この反応には、女給も口を尖らせた。

ハミルトンは「まぁまぁ、気を悪くしないでよ。わたしは信じるから。よかったら話を聞かせてくれないかな」と数枚の銅貨を渡した。チップとしては破格の額である。

これには女給も機嫌を直して「ありがとう、若い騎士さん」とかわいげのある笑顔を見せる。身なりのせいか年増女に見えたが、この女給、意外と若いかも知れない。

「これだけして貰ったんだ、とっておきの話をしてやらなきゃいけないね」

女給はそう言うと、話し始めた。

炎龍が現れたという話が伝わると、コダ村は蜂の巣をつついたような大騒ぎとなった。女給メリザの元に隣の鍛冶屋の奥さんがかけ込んできたのは、陽が中天に達する頃合い。メリザが家で洗濯物を干している最中だった。

「メリザ！　メリザッ！　大変だよ」

日頃から、村の噂話に興じる仲である。家にいないと見ればどこにいるか直ぐにわかるので、物

干場までかけ込んで来たのだ。

メリザは、畑仕事に出ている農夫の夫に知らせるため、洗濯物を踏んづけて水切りしていた息子を走らせる。そして自分は家に戻ると、とる物もとりあえず荷物をまとめ始めた。

夫が帰って来たのはその後、直ぐだった。

息せき切って帰ってきた夫が開口一番、「無事か!?」と叫ぶ。どう伝わったのか、村が既にドラゴンに襲われてしまったと勘違いしていたようだ。

無傷の女房の姿に安堵したのか、その場で座り込んでしまう夫。だが無事でも危険が去ったわけでもなく、本番はこれからなのだということをメリザは夫に言い聞かせ、直ぐに荷造りをするようにと尻を叩いた。

農耕用の荷車に家に備えた食糧と水瓶を積む。さらに什器、わずかばかりの衣類や、爪に火を灯すような思いをして貯めたなけなしの蓄えを積み込むと、それだけで荷車はいっぱいとなってしまった。

驢馬に荷車を牽かせ、息子と夫がそれを背後から押す。そんな状態で道を進み、村の中心に入ると、既に多くの荷車や、村人達で道は渋滞していた。

荷物を積みすぎた荷車が壊れてしまい、道を塞いでしまったのだ。

時間が浪費されてしまった。どうにか村を出たが、その時には太陽は西の空にさしかかっていた。

陽が暮れれば野宿し、陽が昇れば道を進む。だが避難民達には、歩みが遅い者も速い者もいて、三日も過ぎると年寄りや子どもを連れた家はどんどん遅れ、列は縦に伸びて先頭は見えなくなってしまった。

泥濘に車輪を取られた荷馬車が動けなくなり道を塞ぐこともあった。早くどけろ、少しは手伝えといった怒号と罵声が飛び交い、人々の心はささくれ立っていった。あちこちで喧嘩がおこり、荒れた道の凹みに車輪をとられた荷車が横転する。荷物が散乱し、子どもが泣きわめき途方に暮れた女達は絶望にうなだれた。

だが、そんな自分たちを助けてくれる者達がいた。

「それが、まだらな緑色の服を着た連中さ。全部で十二人。女が二人いたね」

女給の声は、騎士達だけでなくその外側にまで届いた。いつの間にか居酒屋は静かになっていた。メリザが村でのことや、緑の人達に女性がいたことを話したのは、この店では初めてだったから誰も彼もが聞き入っているのだ。

「女はどんな姿だった？」

ノーマの問いにメリザは鼻を鳴らした。

「男ってのはみんなそれだねぇ。まぁいいや……背の高い女がいたね。日中は兜を被っていてよく見えないんだけど、野宿の時にチラと見えたよ。

馬のしっぽみたいに束ねてるのを解いた時、あたいは女ながら見惚れたねぇ。カラスの濡れ羽色

って言うのかい？　艶の入った黒髪がとっても綺麗でさ。どうしたらあんな色艶になるのか、言葉が通じるんだったら教えて貰いたかったよ。体つきもほっそりとしていてね、異国風の美女っていうのはああいうのを言うんだろうね」

女の描写に、男達は色めきだった。

「ほぅ、で、もう一人は？」

「ありゃあ、猫みたいな女だったね。小柄でさ。髪は栗色で男みたいに短くしてた。元気な娘で、面倒見もよくって子ども達はなついてたね。それと腕っ節が凄くて男連中は結構怖がってたね。ウチの亭主が、モルの旦那と喧嘩をおっぱじめた時、やってきて足をびゅんと目にもとまらない速さで振り回して、大の男二人をあっという間にのしちまったんだ……」

周囲の男達は、瞬く間に興味をなくしていく。ある種の白けた空気が場を支配してしまった。どうにも彼女の話は、とりわけ男共には人気がないようだ。ま、さらに言葉を続けると態度がコロと変わるのだが。

「体つきはすごかったね。さっき言ったように小柄なんだけど、胸が牛並みに突き出ていてね。あたいははっきり言って嫉妬したよ。そのくせ腰は細く締まってるってのが許せないね。顔は綺麗と言うよりは可愛いって感じでさ」

「おおっ！」

やっぱり……。

男達の歓声にメリザは「ちっ」と舌打ちした。客が喜ぶのはいいが、女としてはやっぱり面白くない。

「ま、そういうわけで色々とあったけど、あたいらは何とか進んでいたのさ。だけどね、あいつがやって来たのさ」

村人達は水が不足し、食べ物も満足に食べることが出来ないでいた。それでもわずかでも進もうと気力だけで頑張って来たが、それも限界に達した。

進める者は進むが、動けなくなった者はその場で座り込んでしまう。

動けなくなった子どもや年寄りは緑色の服の連中が、馬がなくても動く荷車に乗せてくれた。だけど、全員を乗せられる訳じゃなかった。

「もうダメかも。せめて息子だけでも。あたいは本気で神に祈ったね。でもダメだった。神官連中が神様はいるって言うからいるんだろうけど、少なくとも助けてはくれないね。あたいは金輪際、神様の類に頼み事はしないことにしたよ」

それまで空は晴れていたのに急に日が陰った。雨でも降るのかと思って空を見上げてみんな凍り付いた。

「赤い龍。足がついて腕が付いて、コウモリの羽みたいな翼を広げたでっかい奴さ。それが空を覆っていたんだ」

その龍が天空から舞い降りて、目の前にいたモルの旦那とその女房がいなくなった。

一瞬のことだった。地面には二人の下半身が転がっていた。
何が起こっているか、理解するよりも早く逃げ出した。子どもを抱えると荷物なんか捨てて、とにかく走った。
荷車が横転して、それに巻き込まれて死んだ村人も多い。
みんな逃げ出した。炎龍があたりを焼き払い、ほど良く焦げたところを炎龍に喰われていく。
蜘蛛の子を散らすように、ただ逃げるしかなかった。蟻の巣をつぶす子どもみたいに、炎龍は村人を踏みつぶし、食らいつくしていった。
もう絶望しかなかった。
「ところがさ、緑の人達がやってきたんだ」
メリザは淡々とした口調で語った。
ものすごい速さだったと。
馬でも無理って言うほどの速さで荷車が走っていた。その荷車に乗っていた緑の人達は、手にしていた杖を構えると、魔法で龍を攻め始めた。
でも、炎龍には少しも効かない。彼らの魔法でも鱗に傷一つつかない。だけど、緑の人達は諦めなかった。
周りを走りまわって、村人達が少しでも逃げられるようにと、攻めるのを止めなかった。
そのおかげで、逃げおおせることが出来た村人も少なくない。

お返しとばかりに炎龍は緑の人達に襲いかかった。だけど、ものすごい速さで駆け抜ける荷車の前には、さしもの炎龍も飛びかかることが出来なかった。一箇所に留まらない彼らには、龍の炎も届かなかった。

それでも、炎龍は彼らのすばしっこさに少しずつ慣れていった。離れた所から魔法を浴びせるしかない彼らは、少しずつ不利になっていった。

「ところがさ……緑の人達の頭目が何かを叫んだんだ。そしてついにアレが出た」

「アレとは？」

「特大の魔法の杖さ。あたいらは勝手に鉄の逸物と呼ばせてもらっているよ。呪文もしっかり聞いたよ。コホウノ・アゼンカクニとか言ってた。とんでもない音と一緒に、炎龍の左腕が、吹っ飛んだんだ」

それこそ無敵を誇った炎龍が敗退する瞬間だった。

炎龍は傷を負い、大地を震わす大音声の悲鳴とともに、その場を無様にも逃げ去っていったのだ。

物語りが終わり、人々は余韻に沈黙する。

「て、鉄の逸物……？」

例えるにしても凄すぎる名称に、愕然としてしまった部分がないわけでもない。

少しの沈黙を経て、騎士達は感想を交わし始めた。居酒屋も次第に元の喧噪を取り戻していった。

「と、とにかく、立派な者達です。異郷の傭兵団のようですが、それほどの腕前と心映えならば、是非にでも味方に迎えたいと思いますよ。いかがでしょう姫様？」

朱色の髪の女騎士はいきなり話を振られ、囓りつこうとしていたマ・ヌガ肉を皿に置いた。マ・ヌガ肉とは、家畜の大腿骨を芯にして、周りにミンチした肉を巻き薫製にしたものである。我々の感覚で言うソーセージとかハムの一種だ。これをスライスせずに直火で焼いて、がぶっと囓りつくのが醍醐味である。

皇女ピニャ・コ・ラーダは、酒に手を伸ばしながら言った。

「妾は、無肢竜を撃退したという者共が使ったという武器に興味がある」

ゴダセン議員の「遠くにいる敵の歩兵がパパパという音をさせたら、味方が血を流して倒れていた」という言葉と、コダ村の避難民達の言葉との間に符合するものを感じるのだ。連合諸王国軍がアルヌス丘で壊滅したことも、その魔導武器と関係があるのではないか。

ピニャは、女給を呼び止めると尋ねた。

「女。お前の見たという連中が所持していた武器は、どのような物だった？」

メリザは首を傾げつつも、見たとおり感じたとおりを告げた。

「女」という呼びつけ方がいささか癪にさわったが、チップをはずんでくれた若い女騎士さんの顔

を立てて素直に応じることにした。
「つまりは、その者共の使った武器は鉄のような物でできた杖である。それは、はじけるような音と共に、火を噴くと言うのだな？」
「あれは、あたいが見たところ魔法の武器だね」
「で、無肢竜を撃退した杖……鉄のイチモツとやらも同じものだったか？　何かに似た形状があるか？　出来るだけ見たままに言え」
「無肢竜じゃなくて炎龍だって言ったろう？」女給はそこまで言って、ニヤッと嫌らしそうな笑みを浮かべた。そして、その場にいた男連中を見回す。
「あんたみたいなのをカマトトと言うのさ。逸物はイチモツに決まってるだろうさ……ま、良家のお嬢様には想像もつかないのかも知れないねぇ。でもね、男を知ってる女に尋ねりゃ誰だって口をそろえてこう言うよ。ありぁ、男連中のナニにそっくりだってね。もっとも、小脇に抱えるほどでかくて、黒くて、ぶっといナニを持ってるような男は、ここらにゃあ居ないだろうけどね」
女給はキシシと粗野に笑いながら、注文をとりに次のテーブルへと去って行った。
何のことだかよく解ってないピニャの視線が、解説を求めてぐるりと男連中をめぐる。だが、その場にいた男には応じようもなく、気まずそうに目を背けるのだった。
男共に目を逸らされたピニャの視線は、最後にはハミルトンへとたどり着く。
「お前、確か婚約者がいたな……」

お鉢が回ってくるとは思わなかったのだろう。
准騎士ハミルトン・ウノ・ローは、口に含んでいたスープをブッと吹き出すと、慌てて短髪を振り乱して首を振り、手を振った。
「た、確かにいますけど……わたくしは乙女ですっ！　あんなものの話を口に出来るわけないじゃないですかっ！　……あっ」
男達の視線が彼女に集中する。「ほう、あんなもの、か」とピニャの胡乱な視線が彼女を貫く。
ハミルトンは顔を真っ赤にして俯き小さくなるのだった。

06

さて、避難民達の身の振り方三つの内、二つまでは述べた。
最後の一つがある。
それは、伊丹ら自衛官達に付いていくという選択肢だった。この方法を選んだのは、避難民達でも、ごく少数の二十三名である。
正体不明の武装集団に付いていくという選択肢は、それこそ深淵に飛び込むに似た心境だったに違いない。下手をすると身ぐるみ剥がれた上で、奴隷に売り払われるという結末だってあり得る。

だが、他に方法がなかったのだ。というのは彼らは炎龍の襲撃によって両親を亡くした年端もいかない子どもだったり、逆に子どもや孫を喪った年寄り、そして傷病者であり、通常であれば緩慢な死が決定づけられた者達だったからだ。

もちろん、そうでない者もいる。例えば伊丹達自衛官に並々ならぬ興味を抱いた魔導師カトーとその弟子とか、エムロイ神殿の神官とか、だ。

だが、ほとんどの者は、「これからどこに行く？　行きたいところへ送っていくよ」と尋ねられても困る者ばかりだった。

伊丹は、残った二十三人をどこまで連れて行けばいいのかと村長に尋ねた。すると「神に委ねる」という意味の単語を並べられた。

伊丹は首を傾げつつ何度も問い返した。

こうしたことは言葉がうまく通じなくても、ニュアンスとして伝わって来るものがある。「責任を負う者はいない」「どこへでも行け」「好きなようにしろ」と翻訳できる言葉が述べられたことがわかると、伊丹は深々とため息をついた。

村長は、自らの家族を乗せた馬車に乗り込むと、伊丹に対してこう言った。

「お前達が、義侠心と慈悲に富んだ者であることは、よく理解している。お前達から見れば儂等は薄情者と見えよう。だがな、儂らは自分とその家族を守るだけで精一杯なのじゃよ……理解してくれ、と思っては貪欲の罪で罰せられような」

振り返りもせず去って行く村長。
伊丹を含めた自衛官達はその無責任ぶりに呆然として、残された者も皆、自分達は見捨てられたのだと理解したのである。
高機動車の後方に乗っている親を亡くした子どもや、怪我人、エルフの少女……いくつもの瞳が伊丹に向けられた。伊丹がどのような決断を下すのかと、不安げな色に染まっていた。言葉が通じないからこそ、伊丹の表情のわずかな変化をも読みとろうとしていた。そんな中には、興味深そうな面白ずくな色に染まった黒ゴス少女の瞳もあったのだが。
だが伊丹は、皆が思っているほどの重責を感じてなかった。
「ま、いっか……。大丈夫、まかしておきなって」
無邪気なほどの笑みに、ホッとした空気が流れた。
伊丹の任務とは、この世界の住民について調査することである。交流し、親交を深め、この世界についての知識を得るために必要に資料や情報を収集して来ることだ。拡大解釈すれば、自らの意思で付いてきてくれる住民を得ることは、大成功ってことではないだろうか？　そう考えたのである。
お役人的発想によれば、これはホントは大問題である。
この時点で「何が問題なんだ？」と思った諸兄等はお役人にはなれないし、なりたくもないだろうから安心して頂いて良いのであるが、お役人様達にとって、こういった拡大解釈をする人間は困

ったちゃんとして、とても嫌われるのである。
「き、き、君は……」
檜垣三等陸佐は、自分が何をしたかよく判っていない部下を前に頭を抱えた。
深部情報偵察隊の幹部連中も蒼然として、窓の外で隊舎の前に止められた車に乗る避難民達が、周囲を珍しげに眺めているのを確認した。
「だ、誰が連れて来て良いと言った？」
「あれ？　連れて来ちゃまずかったんですか？」
ポリポリと後ろ頭を掻く伊丹。檜垣はしばし逡巡した後に、「ついて来たまえ」と命じて、執務室を出たのである。

＊　＊

「陸将……各方面に派遣した、偵察隊からの一次報告がまとまりました」
「おうっ！」
幕僚の呼びかけに気さくな返事をしたのは、狭間（はざま）陸将である。
この人は東京大学の哲学科などという、普通では滅多に入れない学校を卒業したというのに、陸上自衛隊に二等陸士から入隊して内部で順調に昇進を重ね、ついには陸将になったという立志伝中

の人である。栄達したいのなら、いくらでも早道があるというのにわざわざ遠回りを好むのは変わり者と言える。極希（ごくまれ）にいる運転免許証の『種類』欄を埋めてしまう人に近いかも知れない。座右の銘は『たたきあげ』だとか。

狭間は老眼鏡をはずすと、執務机の上に積み上げられた書類の束から、柳田（やなぎだ）二等陸尉へと視線を移した。

この柳田二等陸尉は防衛大学を優秀な成績で卒業したということで、日頃の言動にエリート意識が漂いとても鼻につく。しかし、この狭間に対してだけは頭が上がらない様子であった。その理由というのが、彼が東大を受けて落ちたからだとまことしやかに語られている。人は他人と自分を測るのに、いくつかの物差しを使う。学歴という物差し、キャリアという物差し、実務能力、そして自衛官ならば戦士としての力量……人は他人に対して、どれか勝っているところを探したくなるのだ。そして、その全てに置いてかなわない相手を前にしたらどうするか。そんな時は、素直に無条件降伏して「この人すげぇ」と思えば良いのだが、柳田について言えば自尊心が高すぎた。おそらく、何か不幸な幼児体験からか、あるいは親から受けた教育がそういう種類のものだったのかも知れない。あらゆる分野で自分より優れた人物に、素直に感心することは出来ず、結果としてその存在を心の底で恨み憎んだというのである。

「どうだ、何かわかったか？」

クルーカットのごま塩頭を軽くなで上げて、狭間は椅子の背もたれに上体を預けた。キィという

音をたてて、安っぽい事務椅子が悲鳴を上げる。彼は、柳田が自分に対して、逆恨みを抱いているなど思いもしない。ただ「こいつ、ちょっと要注意だな」と勘が働くので気をつけて扱っている。

「二三、貴重な報告が入ってますが、資料でしかありませんので、そのように性急に結論を急がれましても……」

「そうだろうな。堅実にやってくれ」

狭間にしても、ちょっと偵察した程度で何もかもが解るとは思っていない。ただ、感触とでも言うか、この土地に住む人々の傾向性のようなものがつかめることを期待しているのだ。

現地住民との関係性というものは、部隊の安全に始まって、この特地における日本の評価、政治的な影響へと深く結びついていく。民情を無視した行動を起こして反感を醸成し、抵抗運動など起こされてもたまらない。従って、この土地の住民が何を持って正義とし何を持って悪と感じるかという、単純なことであるが、そうした規範意識への理解が、案外に大切なのである。例えれば、イスラム文化圏では犬を嫌う、成人男性は髭を生やしていることが好まれる……などである。

「各隊共に言葉の点で、かなり苦労してるようですが、ほとんどが平穏な一次接触が出来たようです。この辺の住民は、見た目が『人間』タイプで、主な産業は農・林業といった一次産業でした。集落ひとつひとつの人口もそれほど多くないようですね。第六偵察隊の赴いた人口五百人規模の集落では、どうにか商店めいたものがあったそうです。扱われていた品目は、衣料品や工具・農具類・それと家庭で使われる油を灯すランプといった生活雑貨でした。……これが商店の取り扱い品

目と価格のリストです。デジタル写真が添付されてます」
こんな説明を加えながらA4版コピー紙の束を机に置いた柳田は、こういう仕事についてはさすがに優秀で遺漏がないところを見せつける。
狭間がパラパラとめくって見ると、調査に赴いた隊員のコメントなども併せ、通販のカタログのようにも見える。だがこれらの資料は、この土地における経済の実体を把握する上で極めて貴重なものであった。こうした資料はただちに本土（門の向こう側）へと送られて、政府のシンクタンクが分析するための貴重な材料となる。
「あと、この土地の政治体制といったものが類推できるようなことは、まだ報告されてないですね。どこの集落にも村長とでも呼ぶべき人物がいて、住民をまとめているようではあります」
「その村長が、どんな方法で決まっているのかだな」
それがわかれば、この世界の政治体制の主流が民主制か、あるいは寡頭制か、はたまた独裁制かを類推することができるかも知れない。
柳田は、わざとらしくため息をついて調査の困難を呟いた。
「住民を何人か、こちらに招けるといいんですが……」
「コミュニケーションが上手くできていない状態で、こちらに連れて来るのはまずいだろう？後々、拉致だとか強制連行とか言われても困るからなぁ」
「それでなんですが……」

柳田が、下地ができたとばかりに本題に入ろうとした。狭間も、話の流れから部下がこの話をしたかったようだと受け止める。

「都合の良いことに、伊丹の隊がコダ村からの避難民の護送をしてます」

「おう。あのドラゴンが出たとかっていうところだったな」

「ええ、そうです」

この時点で、狭間を始めとした幹部連中の認識は、熊か、鮫が出たといった程度でしかなかった。その程度のことで村人が村を捨てて逃げるというのも大げさだと感じるのであるが、危険な野生動物が出没することが希な現代日本では、こうした害獣災害は想像することも難しいので「こういう土地だし、そういうこともあるのか？」ぐらいに受け止めている。

実際に、このアルヌス丘に攻め寄せてきた現地軍が騎乗していた飛龍が、対空火器で対応できたことも、それほどの脅威として考えられない理由の一つと言えるだろう。

「それでなんですが、コダ村の住民をここで受け容れるというのはどうでしょう？　これならば、必要な措置の範囲として内外に説明可能です。当人達も感謝こそすれ、拉致されたなどとは考えないでしょう？」

柳田は説明した。

このアルヌス丘近くに、難民キャンプを作ってそこへ住民を収容する。今回のコダ村の逃避行は、害獣出没によるものだから期間を限定した一時的避難でしかない。その間のこととして期間を

区切って考えるなら、各種の研究や調査に協力して貰うメリットの方が大きいのではないか。日常的にコミュニケーションを交えることで、言葉の問題もかなり解決するだろうし、この特地の政治や経済にかかわる情報も間違いなくとれるはずだ。

実は、市ヶ谷や官邸の方からも、特地の内情が理解できる情報の要求が激しいのである。柳田は、矢のような催促をうけている。従って早めに成果を上げておきたい等々の説明を並べた。

狭間は、指先でトントンと机を叩きながら「戦闘時はどうする？　敵性武装勢力の活動はほぼ停止していると言っても、ここは彼らの攻撃目標でもあるのだぞ」と、分かり切っていることをあえて尋ねた。

「我々と接触した住民を、敵対勢力がどのように扱うかも心配しないわけにはいかないしな」

過去の出来事を振り返ってみれば、異教徒・異民族と親しくしたという理由で、自国民を虐殺した例に事欠かないのだ。

「敵の近接時には、こちらに収容して安全を確保しましょう。まぁ、敵が地元住民を虐待しようが虐殺しようが当方には関係ないことですが、さすがに見て見ぬ振りをするわけにもいかないでしょう」

狭間は眉を顰めつつも、地元民を収容するという考えには頷いた。自分自身も同じように考えていたから、この意見についての異議はない。不快の原因は身も蓋もない柳田の言いようであった。

だが、人間一人で考えられることは限界があって、見落としや、間違いが必ずついてまわる。住

民を防塞に収容するとしても、様々なリスクや問題が起こりえる。例えば敵方の人間が、避難民に紛れて入り込んで破壊工作を行う等である。だからといってリスクを避けるため地元住民を遠ざけていれば良いと言うわけでもないのも柳田の指摘したとおりである。

東京の銀座に軍隊を送り込んできた敵性勢力を交渉のテーブルにつかせて、力ずくででも頭を下げさせるには、是が非でも地域の実情を把握し、この土地、地域、そしてこの世界の政治がどのようになっているかを調べなくてはならないのだ。

狭間は、戦闘時における避難民の扱いについて、もう一度検討するように指示しようとした。その時である。

「入ります」

常日頃から開放されているドアには「ノック不要。入室許可」と書かれた紙が貼り付けられているため、檜垣三等陸佐はとりあえず声をかけて執務室へと入り込んだ。

「ご報告いたします。第三偵察隊が戻りました。戻りましたのですが……実は、その、伊丹の奴が……」

こうして、なし崩しに避難民達の受け入れが決まってしまうのである。

「よう、伊丹」

声をかけられて伊丹は足を止めた。

上司連中からの嫌味やお説教を、とぼけた表情で馬耳東風と聞き流すこと小一時間。査問会にも似た会議はそれでもどうにか「連れてきてしまったものは、どうしようもない」という言葉で幕引きが為された。

市ヶ谷（防衛省）には、避難民の中で自活しての生活が難しい傷病者・老人・子どもを保護したと報告することになる。いろいろと言われるかも知れないが、「人道的な配慮」の一言で強行突破するしかないと、苦々しい表情をしつつも認めるしかなかったのだ。

「そのかわり、お前が面倒をみろ」

別に伊丹に、自分の財布で連中を養えと言っているのではない。避難民達を保護するにあたって、そこから派生する諸々の諸手続は一切お前がやれという意味である。それが、この件を問題としない代わりの条件となった。

伊丹は、とりあえず避難民の食事と寝床の手配をする算段を考えながら、暗い廊下から階段へと向かっていた。糧食斑に頼み込んで食事を出してもらうことは出来る。しばらくは戦闘糧食になるだろうが、この際贅沢は言えない。問題は寝床だ。こちらでは寝起きする隊舎がまだ完成しておらず、隊員達ですらプレハブ建物を利用しているのだ。天幕（テント）を借り出して来るしかないか……。書類を用意して、必要事項を記入して、捺印して……ああめんどくさい……そんなことを考えて廊下を歩いているところだったのだ。

かけられた声に、大儀そうに振り返る。

すると暗がりに置かれたベンチに座り込む男と、たばこの火が見えた。天井近くまで立ち上る紫煙。陰影の向こう側で口元だけを微妙にゆがめた陰湿そうな笑み。

柳田二尉であった。

「伊丹。お前さん、わざとだろ」

「何がです？」

年齢的には柳田二尉の方が若いが、昇進したばかりの伊丹からすれば柳田のほうが先任だ。階級が同じ場合、先任者が上位になる。さらに加えて、伊丹は柳田があまり好きではなかった。好きでない相手とは出来るだけ関わりにならないようにすることが伊丹の処世術である。礼儀正しくするのも、余計な摩擦を生まず作らず、相手の記憶からフェイドアウトしたいからだ。

「とぼけるなって。みんな判ってんだよ。それまでは定時連絡だけは欠かさなかったお前が、突然通信不良で連絡できなくなってましたって、誰が信じる。おおかた避難民をどっかに放り出せって言われると思ったんだろ？」

「いやぁ、そんなことは……こっちはホラ、異世界だしぃ。電離層とか磁気嵐の都合とか、思うようにならんもんですなぁ。この世界の太陽黒点ってどーなってるのかなぁ……あはははは」

伊丹は嗤いながらがりがりと後ろ頭を掻きむしった。どうにも苦しいが、別に信じてもらう必要もないのだ。誰も信じていないとしても、報告書には『通信不良のため指示を受けることが出来ず、やむを得ず現場の判断で避難民達を連れ帰った』と記される。そしてそれが公式の見解として

記録されていくのだから。
「ふん、韜晦しやがって。ったく……」
柳田はたばこを口に運ぶ。大きく煙を吸ってから吐きだしたのは煙だけでなくため息か。
「ま、遅かれ早かれ地元民との交流は深めなきゃならんかったからな、スケジュールが早まっただけで問題にもならん。……上の連中はそう考えているが、裏方のコッチとしちゃあ、たまらんぜ。段取りが狂っちまったんだからよ」
柳田の言い様が妙に癇に障る。
それは人の負い目につけ込もうとする小ずるさの気配を感じたからだ。
「いずれ、精神的にお返ししますよ」
たばこを煙缶に押しつけてグリグリと捻りながら、柳田は肩をすくめた。
「足りないな。大いに足りない」
「あんた、せこいですなぁ。恩を着せて俺に何をさせようと？」
柳田は、薄笑いのまま「ちょっと河岸変えて、話をしようか」と腰を上げた。

陽はゆっくりと傾き、日の沈む方角であるが故に西と位置づけられた空がゆっくりと紅く染まり出す。
そんな空を見渡せる、西2号（仮）隊舎の物干場に二人の男が相対していた。

柳田はフェンスにもたれつつ、たばこに火をつける。そして話を始めた。

「これまで集めることが出来た情報から見ても、この世界は宝の山だということがわかる。生物の遺伝子配列は、我々の物と非常に近似している。おそらく姿が似ている種同士なら交配も可能だろう。それがどういった理屈によるものかを考えるのは学者連中に任せることにしても、この世界で我々が暮らすことは十分に可能だ。現に俺たちはこの世界の大地に立ち空気を吸っている。食い物は『門』の向こうから運んでいるがな……それにしたところで、我々の食い物を喰ったこの土地の生き物に健康被害がなければ、この世界の物を俺たちが喰ってみようという話もいずれ出て来る。

この世界には公害や環境汚染もない。土地も広く、植物相も多彩で豊かだ。そしてなによりも我々の世界で稀金属・希土類とされている地下資源もかなりの量が埋蔵されていると予測されている。住民達の文明のレベルは我々から見れば、蟻と巨象ほどの格差があって、我が方に絶対的に有利だ。そんな世界との唯一の接点が偶然にも日本に開かれた。これは幸運だとも言えるし災厄とも言える。

ニューヨーク、ロンドン、上海の株式市場では日本と結びつきの深い資源開発系の企業が軒並みストップ高。原油、鉱物関係の相場はゆっくりと下落中。永田町の議員連中は経団連の重鎮と連日勉強会。アメリカを始めとしてEU諸国からの接触で外務省も大忙しだ。だがな、肝心の我が国の政府はこの件を扱いかねてる。中国やロシアといった国が他の資源輸出国と協調して『門』のこちら側を国際共同で管理すべきだという意見をまとめ始めているからだ。鯨問題程度なら我が国の伝

統的な食文化を守るためだ、全世界を敵に回そうとも大いに突っ張るべきだが、こと経済がかかわるとなると、世界の半分を敵に回して突っ張っていけるほど我が国は強くない。

なぁ伊丹、永田町の連中は知りたがっているんだ。

この世界は、世界の半分を敵に回しても、つっぱっていくだけの価値があるかどうかをな」

「それだけの価値があったら？」

「物を持つ側が強いのはお前も知っているだろう。人民解放軍がどれだけチベット人やウイグル人を殺そうと、冷凍餃子に毒を入れようとも、ロシア人が金だけ出させた上で天然ガス採掘の契約を一方的に破棄したり、グルジアから南オセチアを切り取っても、最終的には連中の思惑どおりになる。それは連中が、みんなが欲しがっている物をかかえてるからだ。極端な話、全世界から縁を切られようと、この世界から日本がやっていけるだけのものを十分に得られるなら、それなりに強気に振る舞うことが出来るんだ」

伊丹は肩をすくめた。

「柳田さん、あんたがどれだけ国のことを考えているかはよくわかった。実に愛国的だね。俺も見習いたいよ。だがね、人には役割ってものがあるでしょうよ。実際、今の国際情勢がどんなものであるか教えてもらっても全然ピンと来ないんだ。実際に、今俺の頭の中にあるのは、連れてきた子ども達の今夜の寝床と飯の事なんだから。国際情勢と俺の仕事が、どう関わってるんだ？」

「言って聞かせたろ？　この世界、この土地が価値あるものかどうかを一刻も早く知りたいと。い

や、違うな。価値あるものがどこにあるか知りたいんだ。この世界が日本のものになるとしても、国連の共同管理になるにしても、どこに何があるという情報を握っている者が圧倒的に有利だ。お前、自分がその情報に最も近いところにいると自覚してるのか？　他の偵察隊がしたことは、村でどんなものが売られているかをちょっとばかし調べて、わずかばかり単語帳の語彙を増やした程度でしかない。それに対してお前は、この土地の人間と信頼関係を掴んで来た。何がどこで作られて、どんな物がどこに埋蔵され、どのように流通しているか、その気になれば調べられる立場にいるんだぞ」

「ちょっと待ってくれよ、柳田さん。その辺の子ども達つれてきて、金銀財宝はどこにありますか？　石油はどこにありますか？　って聞いて、教えてくれるとでも？　恥をさらすようだが俺は地理の成績は劣悪だったぜ。学校に通ってる俺でさえそうだったんだ。教育制度のない世界の子どもが、自分の生活範囲の外にあるものを知るわけないだろう。断言してもいいが絶対に知らないね」

そう言い返しつつも、荷馬車に書籍を満載させたプラチナブロンドの少女とその師匠の老人はどうかなぁと思う伊丹である。言語学者をつれてきて彼らの書籍を翻訳させた方が早いのではないかと思ったりした。

「知っている人間を探して、情報を得ることが出来る。これは絶対的な要素だ」

その言葉に伊丹は二の句が継げられなかった。

「伊丹よ。近日中にあんたは、大幅な自由行動が許されることになる。その任務がどんな名目に

なるかは、官僚達の作文能力次第だからなんとも言えないが、どんな文言が命令書に列んでいようと、最終的な目的は一つだ」

「たまらんね、まったく」

伊丹は、盛大に舌打ちした。

「ふんっ。いままでは、税金でのんびりさせてもらったんだ、借りの多い稼業だけに、いざとなったら嫌です出来ませんですは通じないぞ。せいぜい働くことだ」

柳田はそう言うと、たばこを物干場から放り捨てた。

＊　＊

先のことの見通しは立たないとしても、現実的に必要とされる諸々の事を丁寧に片づけて行くだけで、物事というのは次第に形になって来るものである。できあがった物は雑多で、無計画で、まとまりに欠いた物になるだろう。それでも、その中で生活する者にとっては、日常の場面として慣れ親しんでいくことになる。

とりあえず食事を手配する。

とりあえず寝床のためにテントを立てる。

とりあえず、怪我人病人を医官に診てもらう。

とりあえず衣服の手配をする。
子どもの面倒を避難民達のお年寄りや、年長の子ども達に見てもらうよう何とか意思疎通する。
こうして『とりあえず』を積み重ねつつ数日、どうにか一息つくと、それを暫くの間なんとか続けられる形にしないといけない。テント生活だって、長引かせて良いものではない。まして子どもや老人である。やはり屋根と壁のある家での生活が望ましい。
黒川と栗林の連名で、そんな意見具申を受けた伊丹は、アルヌスの丘から南に外れること約二キロ。その森の中にコダ村からの避難民である子ども達や老人達のキャンプを建設することにした。
利便性の問題から当初は丘の中腹にという話が出たが、戦闘に巻き込まれる危険も著しく高くなるので、地形や周辺の状況を見てこのような場所を選ぶことにした。
もちろん、実際に建設するのは施設科の隊員達である。だが、そのための書類の文面を考え、資材や、消耗品、予算について記した資料を用意するのは、伊丹の仕事となった。書類事務に詳しい仁科一等陸曹に文面その他いろいろについてアドバイスをもらい、点や丸のつけかたにすら嫌みな指摘事項をつける柳田の笑みに内心辟易としつつ、どうにか上のハンコをもらって提出を済ませた翌日は、丸一日寝込んだほどだった。
「これ、お役所の公務員だったら片手間でこなす仕事なんですけどね」
仁科一曹の言葉に、つくづくお役所勤めを選ばなくて良かったと思う伊丹であった。
「同じ国家公務員、でも特別職が付くか付かないかでこれほど違う。俺、特別職国家公務員でラッ

キー」

こんな寝言をしみじみと唸ったとか、吼えなかったとか……。

準備には異常に手間がかかる。だが始めると早いというのが自衛隊の仕事であった。

瞬く間に森を切り開き重機をもって地をならして、簡易ではあるが屋根のある家が並べられていく。

そんな光景を、レレイはあんぐりと口を開けて見ていることしか出来なかった。

「……これで、ようやく荷車から荷物を下ろせるわい。儂はもう寝る」

ほとんどやけっぱちのような口調で言い捨て、テントの中へと消えていく師匠に、レレイも大いに同意したかった。

馬が牽かないのに、馬よりも速く疾走する馬車。

炎龍すら撃退する魔法の杖。

アルヌスの丘に築かれた堅牢にして巨大な城塞。

けたたましい音を立てて空を飛ぶ、巨大な鉄のトンボ。

一本切り倒すのに、樵(きこり)が半日かかるほどの巨木を瞬く間に倒してしまう、のこぎり。

土木作業員百人分は働いて地面を掘り返してしまう、巨大なスコップのついた鉄の車。

そして、瞬く間に家を建ててしまう技術力。

はっきり言って、驚き疲れていた。

知識のない子どもや老人達のほうが、素直に驚けている。素直に感心し、素直にそういうモノなのだと納得して、その便利さを受け容れている。なまじ、多くの知識を有しているが故、理解の難しい非現実的な出来事に、レレイの頭脳は最早オーバーヒート寸前であった。

「……こんな凄い光景を見過ごしたなんて知ったら、お父さんきっとがっかりするわね。あとで教えてあげなきゃ……」

体調の快復したエルフの娘が、こちらで貰った伸縮性のある軟らかい布で出来た上衣にズボンという出で立ちで（後で知ったが、ジーンズとTシャツと言うらしい）、唖然と作業を眺めていた。実に羨ましい。

レレイとしては見なかったことにして、ベットに潜り込みこころの平安を維持したいと思ってしまうのに。まぁ、森の守護者という立場も忘れて、ただ呆然と見ているしかないほどの驚きというのも理解できる。

だが、賢者として生きることを選んだ以上、理解できないことをそのまま放置しておくことは許されない。世界の不思議を、知性でもって征服することこそ、賢者としての誇りであり野心なのだから。

圧倒され、くじけそうになる心を叱咤して前に進む。

動き回る鉄の車に近づこうとすると、作業をしている人達に恐い顔で睨まれてしまった。何かを

怒鳴っているが、察するに「危険だから」と言っているのではないかと思えた。これほどの巨大な車両が動き回っているのである。もしぶつかったり巻き込まれたら、自分などひとたまりもないだろう。その危険を防ぐためにレレイに近づくことを禁じ、警告しているのだ。

そこで、作業現場の片隅で炊煙の香りをあげている車に近づいてみる。そして、どのような構造になっているか観察することにした。

これは見ただけで理解できた。

それにしても『移動させることが出来る竈』というのも凄い発想だと思える。軍隊はもちろん、交易などでキャラバンを組み長距離の旅をする商人達も喜ぶのではないかと思うのだ。野営するにしても、竈をしつらえる作業というのは結構手間がかかるものだから。

そんなことを考えながら、炊飯車の前に立っていると、作業をしていた男性が何かを言いながら微笑んだ。

「ちょっと待ってろよ。もうすぐ、できるからなぁ」

残念なことに、現段階では彼が好意的に、レレイに対して何かを伝えようとしていることだけが理解できるだけだった。

レレイの見るところ、彼らはこちらの言葉を覚えようとしてる様子が見て取れる。積極的に話しかけて来ては、単語を繰り返している。その成果もあってたどたどしいながらも、多少の意思疎通もできるようになった。だが、彼らがこちらの言葉を覚えるのを待つのでは、何も学ぶことが出来

ない。彼らが使う道具、技術、そして考えていることを理解しようと思うならば、彼らの言葉を学ぶしかない。レレイはそう決心して、男性へと話しかけることにした。

古田陸士長は、自慢の包丁技をふるいながら微笑んで見せた。

元老舗料亭の板前だったというのは伊達ではない。そんな彼が自衛隊に入ったのも、自分の店を持つための資金稼ぎだ。任期を勤め上げた時にもらえる退職金はそのための大事な資金となるだろう。

女の子が、山積みになっている食材を指さして見せた。

「ん？」

「uma-seu seru?」

大根を指さして、さかんに何かを言っている。同じ単語の繰り返しに、いささか鬱陶しくなって、突っ慳貪な口調で「大根だよ。大根」と返した。言ってから「あっ、いけね。優しくしなきゃ」と、すぐに思い返す。

「Dai-kon?」

「そう。だいこん」

古田は大根を、どんどんかつらむきしていく。

今日は、日本食の粋とも言える刺身を一品だけつけることになっていた。刺身のつまと言えばやはり大根だろう。

魚を生で食べる文化は今でこそ世界的な流行にあるが、受け容れられるのにはとても時間が必要だった。欧米では魚を生で食べるなど野蛮なことだと考えられていたのだ。さて、この世界ではどうかな？　そんなことを考えながら、古田はプラチナブロンドの少女に言葉を返していた。

「sou daikon」

「だ・い・こ・ん」

レレイは首を傾げつつも推察した。daikonという単語の前につけられたsouという言葉は、きっと肯定を意味する単語ではないかと。

間違いない。この野菜の名称は「だいこん」なのだ。

「だ・い・こ・ん」

男性は微笑むと、「sou sonotouri」と言いながら大きく頷いた。頷きながら、楽しそうに大根と呼ばれる野菜を見事に削り、一枚の布……包帯のようにしていく。その見事の包丁技に、この世界の男性というのは、みんなこれほど料理達者なのだろうか？　などという感想を抱いた。

こうして、賢者レレイ・ラ・レレーナはちょっとした誤解も含めながらも、天才と呼ばれる知性でもって、猛烈な速度で日本語の習得を始めたのである。

07

三度に渡って行われた連合諸王国軍によるアルヌスの丘攻撃は、結果として戦闘とはとても呼べないものとなり果てていた。例えるなら前方が断崖絶壁であることに気付かないまま進んだ集団自殺とでも言えよう。もちろんそうなった理由の最たるものは、敵についての情報を全く提供しなかった帝国にある。

当時、連合諸王国軍に軍旗を連ねた国は、諸侯国併せて二十一カ国。総兵力は約十万である。遠近東西、様々な国の兵士が一同に会する光景は、見事なまでの壮観であった。

裸馬同然の馬にまたがる軽装騎兵。

重厚な鉄の装甲で馬を覆った重装騎兵。

大空を舞う翼竜に騎乗する竜騎兵。

一歩一歩、歩む毎に地響きが聞こえそうな巨大な毫象を連ねる戦象部隊。

小柄ながら精強な印象の南国兵。

方形の鉄楯を連ねる重装歩兵。

林のような長槍を並べる槍兵。

さらには弩、投石機、石弓等が所狭しと集められている。
帝国では軍馬同様の扱いを受けるオークやゴブリンにまで鎧を着せている国もあった。
それぞれが、出身の国毎に異なる軍装の煌びやかさを競っているかのようであった。
この大戦力を三十万と号して、大地と空ことごとくを埋め尽くし進むのだから勝利は当然。だれもがそう考えて疑わない。
そもそも、アルヌスの丘は聖地などと言いつつも、実際にあるのはなだらかな斜面をもった小高い丘でしかない。
見通しを妨げる林や険しい森があるわけでもなく、道を塞ぐ大河や、切り立った崖があるわけでもない。ただの荒涼たる大地が、やや盛り上がっている。それだけの土地であった。
頂上をおさえ斜面の上方に位置取ったとは行っても、地形による助けは極わずかと言っても良い。さらには、現地にいる帝国軍の報告によると侵入した異世界の兵とやらは、何を考えているのか地面に穴や溝を掘り、見た目は斧の一振りでも断ち切れそうな、細い針金で作った柵で周囲を囲う程度のことしかしていないと言う。
ドワーフが作るような地下城が建設されているならやっかいであるが、ヒト種の手だけでそれをするには時間がかかる。一ヶ月や二ヶ月で完成させることなど殊更無理だ。
そうなれば、勝つのは単純に戦力の多い方である。
エルベ藩王国の国王デュランは、白髪の交じり始めた髪をたくし上げながら、この程度の敵に連

合諸王国軍を呼集した皇帝モルト・ソル・アウグスタスの真意に思いを巡らせていた。

この程度の敵、帝国の軍事力をもってすれば、諸国の軍勢を集めることなどしなくとも、いとも簡単にねじ伏せることが出来る。

にもかかわらず、あえて連合諸王国軍を呼集した理由を考えるとするならば、軍事上の理由ではなく、何か政治的な意味を持つとしか思えなかったのである。

例えば諸王を集めることで、己の権威のほどを国の内外に知らしめるという目的はどうだろうか？　だが、それが目的ならば、諸王のみを集めて会盟の儀式を行えば済む。無理に大戦力を呼び集める意味はない。十万もの戦力を集めたには、何かそれなりの理由がなければおかしいのである。十万人分の食糧を集めるにも莫大な費用を必要とするのだから。

この大戦力をもって、どこかの国を攻めるという可能性もあるが、大陸を守るためと称して連合諸王国軍を呼集した以上、その軍でどこかを攻めるというのは大義名分に欠けるだろう。

「さてデュラン殿、どのように攻めましょうかの？」

通常ならば、リィグゥ公王のこの言葉も軍議の場にて真剣に検討されるべき課題である。だが、

「これほどの大兵力を擁しては、区々たる戦術はあまり意味を為さない。鎧袖一触、岩に卵を投げつけるがごとくの結果となるだろう」という理由で、真剣に論じられていなかったのだ。

実際、リィグゥ公王の問いかけは戦術を検討するというより、無用の心配をし続けているように見えるデュランを揶揄するような響きがあった。

「リィグゥ殿。貴公も少しは真剣に考えて下され」
「とは言われてものう。我が軍だけで攻めよと言われれば、陣立てや戦術を考える必要もあろうかと思うが、物見によれば敵は精々一万を少し超える程度と言うではないか。それに対して我らは三十万と号しておる。一斉に攻め立てれば労することもなく戦も終わるであろう？　敵の様子だのは丘で敵と相対している帝国軍と合流してから調べればよいのだ」
「確かにその通りなのだが」
「貴公も、歳に似合わず神経のか細い男なのだなぁ」
だがリィグゥの嘲笑も、思考の袋小路にはまっていたデュランには気にならなかったのである。

大軍の移動は時間がかかる。街道が十分に整備されていない事も理由となるが、何よりも規模そのものが足かせとなった。何しろ、最前列の部隊が出立してから、最後尾の部隊が動き出すのに半日近くかかるのだから。
宿営地の建設にしても時間がかかるため、通常で十日かかる行程を二十日も必要としたほどだ。
それでも、どうにかアルヌスの丘を視野に収めた連合諸王国軍は、予定通り丘の全周囲の包囲をしようと、敵から適切な距離をとっての布陣を開始した。
この時の適切な距離を彼らは彼ら自身の経験から割り出した。つまり、魔法の支援を受けた弓矢、石弓、投石機……こうした投射武器の届かない距離を安全と判断したのである。しかも、丘の

中腹に張り巡らされた塹壕や小銃掩体は巧みに偽装されており、それと注意して見ない限り気が付くこともなかった。

そのため、前衛として隊列の最前列にあったアルグナ王国軍の将兵四千は、自ら虎口へと入り込んでしまった。

丘の近辺にいるはずの帝国軍の姿がなかったことも理由となるだろう。もしかして、既に帝国軍は敗退してしまったのかも知れない。だとしたら、生き残った将兵の救出も必要だ。アルグナ国王はそう考えて兵を丘へと進ませたのである。

アルグナ国はこれといった特徴のない小国だ。産業も農・牧畜が中心。特徴がないからこそ魅力に欠け、帝国や周辺の諸国から併呑されずに済んだとも言える。従って矢玉よけに錆斧をもたせたオークやゴブリンを配し、その後ろに主力の重装歩兵と弓兵、そして少数の騎兵、魔導師が続くという至極一般的な編成の部隊であった。

彼らは通常、次のような展開で戦闘を行う。

散開した弓兵が矢を放ちながら、剽悍なオークやゴブリンを嗾けて敵陣に突入させこれを混乱させる。

肩を接するほどに密集した重装歩兵達が方形の楯を連ねて城壁とし、足並みをそろえて前進し主力同士の戦闘を開始する。

魔導師の数に余裕があるなら、この段階で魔法の撃ち合いもある。

そして、最後に歩兵が切り開いた道を騎兵が馬首を並べて突入して勝利を決定づける。これが彼らの考える戦闘であった。

だから、彼らはその時自分に起こった事に全く気付くことは出来なかった。

彼らを襲ったのは陸上自衛隊特科部隊の曲芸とも言うべき一斉射撃だった。

陸上自衛隊の特科部隊は爆煙を連ね並べて、中空に富士山を描いてみせるほどの精巧な技術をもつ。その砲撃技術の粋をつくして打ち出された榴弾が、面の広さをもって、ほぼ同時に着弾をしたのだ。

従って、その有様を一言で言えばこうなる。「一瞬で叩き潰された」と。

被害者は連合諸王国軍の前衛集団アルグナ王国軍、それの後に続いていたモゥドワン王国軍、併せて約一万人。

待ちかまえて、標的がキルゾーンに入るのを確かめての砲撃だ。だから最初から威力斉射だった。そしてその一斉射だけで第一回の戦闘は終わった。

「隊列の中段にいてそれを見た儂は、最初アルヌスの丘が噴火でもしたのかと思った。姫は、火山と言うものをご覧に成られたことがおありか？　儂の故郷は山岳地帯で、幼き頃に一度見たことがあるのだ。それこそ、山が吹き飛ぶような爆発でな。それと見紛うほどの大変な爆発だった。前触れの地震もなく、ただ空気を切り裂くような音がしたかと思ったら、とんでもない大爆発が起きた。あまりのことに心の臓が口から飛び出すかと思ったほどだ。そしてそれはたった一度きりのこ

とだった。
何が起こったのか……それを確かめようと儂らは歩みを止めて前方へと目を凝らした。だが、遙か前は煙に覆われていた。
煙が晴れるまでにどのくらいの時間がかかったのか、長かったように思えたし、それほど長くはなかったかも知れない。
やがて煙が晴れた。そして儂らの目に入ったのは、大地がかなり広い範囲で耕されたようになっている様子だった。掘り返された土砂にはアルグナとモゥドワン両国兵の死体が混ざっておった。丁度、この粗末なパエリアの米粒と具のようにな……」
病床のデュランは、その時の光景を思い返すかのように瞑目した。
その傍らには、看護の修道女が付き添って、デュランの口にパエリアを運んでいる。だが彼は食べようともせず、顔を背けた。
「両国の王はどうなされたのですか？」
ピニャの問いにデュランは、首を振った。
「なんと言うことか……」
戦闘後の連合諸王国軍を探してアルヌス周辺の村落をめぐること数日。あちこちの聞き込みの結果、ピニャは連合諸王国軍の将兵が統率を失って故郷へと引き揚げて行かざるをえなかったことを確認した。

引き揚げると言っても敗残の兵である。健在な将兵など殆どいなかったとも言う。敵の追撃がないからこそ、生きているというだけでしかない。そんな状態での長い道中である。おそらく戦場で戦う以上の苦難が彼らを待ち受けているだろう。事実、落伍した兵の死体があちこちで地元の農民達によって埋葬されていた。

やがて、ピニャはホボロウの神を祀る修道院の一つに、高貴な身分を持つ者が収容されているという噂を耳にした。早速駆けつけてみると、それがエルベ藩王国の王であることがわかったのである。

身分をあかし案内をされたピニャの目に入ったのは、左腕と左下肢を失い病床に横たわるデュランの姿だった。

彼はもとから六十を超える年齢であったが、負傷のためかあるいは別の理由でか髪はすっかり白くなってしまっていた。

この身体での長旅は不可能。生き残った供回りの兵も逃げ散ってしまった。わずかに残った忠実な者を国元に帰して危急を知らせることとし、自身はこの修道院で体力の回復を待つ事にしていたと言う。だが、地方の小さな修道院のこと。医者が居るわけでもなく、食事も十分と呼ぶにはいささか足りない。体力の回復を待つどころか、じわじわと消耗していくばかりだったのである。

実際、失われた下肢の断端から膿の腐臭すら漂っていた。

顔も土色に曇り、血の気がない。瞼の下は隈で黒く染まっていた。このままではそう長くは生き

られないだろう。
「見ての通りこの様じゃ……三度目の総攻撃でな。麾下の兵と共に丘の中腹までなんとか進んだのだが、鉄で出来た荊が我らの道を阻んでいてな。これにひっかかって進みあぐねているうちに、光が雨のごとく降り注いできた。そして、あっと言う間に吹き飛ばされた」
「デュラン陛下、早速帝都に知らせを走らせます。そして医師と馬車の手配を。とりあえず我らの下に身をお寄せいただき体力の回復をはかってください」
覇権国家たる帝国の皇女とは言え、宮廷儀礼上は一国の王たるデュランが目上になる。ピニャは膝をつくと、無事な右手をとりデュランに頭を下げた。
だがデュランは首を振った。
「姫には申し訳ないが、帝国の世話になろうとは思わぬ。第一、もうそんなに長くはないであろう」
「何故ですか？」
「儂はずうっと考えていた。何故、皇帝は連合諸王国軍を、この戦いに呼び集めたのか……こうなってみて初めてわかった。皇帝はこうなることを知っていたのだ。おそらく帝国の兵も、敗亡し帝国軍は大損害を負っていたはず……健在な我らは目障りであったのだろう。つまりは、皇帝は我らの始末を敵に押しつけたのだ」
敬称をつけずに、ただ「皇帝」と呼ぶ声にデュランの怒りが込められていた。どうせ死んでいく

身だ。ならば、言いたいことを言わせて貰う。そんな気持ちが込められていた。
「姫。知らなかったとは言わせませぬぞ。姫とて帝国の軍に身を置かれる立場。帝国軍がアルヌスの敵と戦いどうなったのか……ご存じであられたはず」
「はい。確かに帝国の軍が以前、敗れ去ったことは存じておりました。しかし、しかしです。どのような敵が待ち受けているのかも知らせずに、ただ諸侯をアルヌスに差し向けたなど、全く存じませんでした……」
「行かれよ姫。不実の鎧を纏い、欺瞞の剣を片手に我らの背後に立たないでいただきたい。連合諸王国軍は、この大陸を守るために最後の最後まで戦い抜きました。だが、儂らの最大の敵は、なんと背後におった。帝国こそが我らの敵だったのだ。姫、重ねて言う。早く行かれよ」
「陛下。最早、お怒りをお鎮め下さいと申しても無理でありましょう。なれどせめて教えてください。敵はどのような者なのですか？　どのような魔導を、そしてどのような戦術を用いるのですか？　貴重な戦訓をお示し下さい」
「教えてやらぬ。儂らはそれを知るに我が身を犠牲にした。ならば、姫もそれを知りたくば自らアルヌスの丘に赴かれるが良かろう。汝が将兵の血肉を代価とすれば敵が教えてくれるやもしれぬ」
ピニャは必死だった。皇帝は敵を侮っている。戦闘力の差は、戦略や権謀によって補えると信じて疑っていないのだ。だが、ピニャは敵と我との間には根本的な力量の差があると感じていた。このまま敵の詳細を知らせなければ、帝国は決定的な敗亡をしてしまう。そんな予感に囚われてい

た。

歯のギッと噛み合わせる音と共に帝国の皇女は目を座らせた。

「そうは参りません。なんとしても教えて頂く。もし、お話し頂けないと言われるのであれば、エルベ藩王国そのものを質とさせていただく。陛下が何も言われずに冥府へと渡られたら、妾は兵を率いてエルベ藩王国に攻め入り、ことごとくを焦土といたします」

これにはデュランも驚いたようだった。

「な、なんと。兵を奪い、家臣を奪い、我が命までも奪おうとしておきながら、さらに国土と家族すらも奪うと言われるか……皇帝が皇帝なら、その娘も娘と言う訳か……良いでしょう。好きなようになさるがいい。どうせ我が身は滅ぶのだ。故国が帝国に併呑され属州となりはてるのも、遅いか早いかでしかない。死神の足音を聞く儂には、最早関係のないことだ。冥府で我が一族が来るのを待つことにする。そして後からやって来られる皇帝と貴女達を嗤ってやることにしましょう」

「死に瀕して、自棄に成られたか……帝国は絶対に負けません」

ピニャは立ち上がると、死にかけの王を見下した。

「強ければ、力があれば何をやっても許される、それはもう仕方のないことだ。そのまま居直られればよい。しかし、我らとて意地がある。誇りもある。それを踏みにじられれば、この程度の意趣返しはして当然、されて当然と心得られよ。アルヌスの敵は脅威の軍隊。神のごとき武器と、神のごとき戦術をもって、我らを赤子のごとくひねりつぶした。敵を呼び込んだ帝国も同じ運命をたど

るであろう。強ければ何をやっても許される。ならば、アルヌスの敵はさらに強いぞ。帝国軍など累卵も同様。その事実に気付き、真に悔い改め助けを求めても、最早誰も応じることはないのだ。その時になってザマを見るがよいっ！」

デュランは力を振り絞ってそれだけのことを言い放つと、はあはあと息を荒くしながら病床に身を埋めた。

ピニャは、もう言葉もなかった。

権力や腕力をもってしても、人の内心の城壁を攻め崩すことは難しい。出来なくはないが、それをすればこの王は死ぬだろう。

だからこの王から情報をとることは無理として諦めたのだった。

心に残るのは、頑なデュランに対する怒りであり、諸侯をここまで離反させた皇帝への憤懣である。

「姫様……頼みますから、騎士団でアルヌスに突撃するなんて言い出さないでくださいよ」

デュランの部屋を後にした途端、背後から投げかけられた言葉にピニャは大きなため息をついた。

「ハミルトン。お前、妾を馬鹿だと思っているのか？」

「いいえ。違いますけど、今にも『妾に続け』とか言って駆け出しそうな雰囲気でしたから」

もし駆け出すとしても、それはアルヌスに向けてではなく帝都に向けてだろうと思う。思うが、それを口にするわけにもいかない。

一見すると美貌の貴公子としか思えない女騎士ハミルトンを前にして、ふとホントはこいつ男ではないかと確かめたくなり、彼女の薄めの胸板を手の甲で軽く叩いてみた。すると一応、柔らかな手応えがあった。

思わず、何をやっているのだろうと自分の緊張感の無さに呆れる。いや、緊張が続き過ぎたために精神がこんな形で息抜きを求めたのかも知れない。

「まあいい。突撃するかどうかは別にしても、一度はアルヌスへ行かねばならない。敵をこの目で見ておきたいからな」

「あ～姫。この人数でですか？　危険ではないでしょうか？」

「はっきり言って危険だ。だからお前、守ってくれよな」

ピニャはそんなことを言いつつ、修道院を後にするのだった。

＊　＊

中華人民共和国　北京
南海楼

蠹徳愁国家主席の机上に、共産党国家戦略企画局からの第二四次極東情報報告の綴りが提出された。それは横書きの簡体字で充ちた書類の束。かなり厚みがあり、ずっしりとした手応えをもっていた。

蠹は、秘書官の差し出した報告書に視線を降ろす。

それは題字こそ極東情報となっていたが、内容の殆どは日本、特に最近では特地に関わる情報ばかりが多くを占めるようになっていた。

「特地か……」

蠹も最初は、何かの冗談かと思った。

日本のアニメ文化が、世界に大きな影響を与える力をもっていることは忌々しくも知っている。彼の息子も、親に隠れて見ているくらいだ。だから、銀座に異世界に渡る『門』が開いて、中からファンタジー映画さながらの怪異や中世の騎士があふれ出て来たなんて報道も、最初は何かの創作を取り違えた誤報かと思ったのである。

だが、実際のニュース映像や、大使館員などの報告と照らし合わせると、事実であることは疑いようがなかった。まぁ当初は「日本にとっては災難なことでお気の毒様」というのが蠹の感想であった。ところが、自衛隊が『門』から出てきた軍隊を排除し終えてみれば、『門』の向こうに広がっている可能性に、嫌でも気づかざるを得なかったのだ。

そこには広大な大陸や手つかずに近い莫大な資源があると予測される。しかし、それが日本の物となるのは正しくない。明らかに間違っているのである。

確かに日本の国土は狭く資源はない。だがそれでも先進国である。既に充分に豊かなのだ。

そう、それらは、今の中国にこそ必要な物なのだ。

中国の人口は十三億。更に増えつつあるこの数に豊かな生活を約束しようとすれば、莫大な資源と広い土地が必要となるだろう。国際社会から、横紙破りだなんだと言われても、国民に未来と豊かな生活を与えるためには、十三億人に行き渡るだけの資源とエネルギーを確保しなければならない。

もし、『門』が北京あたりに開いたなら、全ての問題は解決しただろう。特地の開拓と開発に多く人民を送り出す。さすれば、中国の負担は軽減されるし、資源も『門』の向こう側で自給できるから、無理なごり押しや、他国から口汚く罵られるようなこともする必要は無くなるのだ。なのに『門』は日本にある。この過ちの修正は容易ではない。

薹は報告書をざっと斜め読みするとため息をついた。

「『門』が東京にあるかぎり、我が国にとれる手段はそう多くない。特地の開発について、我が国の取り分をどれだけ確保できるかだ」

薹の秘書官は、薹の思考を助けるかのように応じた。

「日本の独占だけは許せません」

「そうだ。従って日本政府が特地で行う全てのことに、制約を課していくよう工作を進めてくれ」
「かしこまりました」
「我が国は日本との友好を推し進めつつ、主張するべきことは主張するという硬軟織り交ぜた交渉に挑む。理想としては、人民の半分近くを特地に送り出したいがな」
「特地にもうひとつの中国を作るのですね？」
「そうなったら、喜ばしいことだな」
薹はそう微笑んで、報告書を机の引き出しへと納めたのであった。

ある時期を境に、テレビや新聞の論調に微妙な変化が起きた。
公共放送のドキュメンタリーは、植民地化時代のオーストラリアの原住民のアボリジニーやタスマニア人が、植民して来たイギリス人流刑者によって殺されたり、民族そのものが滅ぼされた歴史を取り上げた。
あるいはスペイン人に滅ぼされたインカ帝国。
ローマに滅ぼされたカルタゴ。
それらの番組は事実を一つの目的に従って切り抜いて強調し、印象づけるように作られていた。
バラエティで、ドラマで、クイズ番組で、週刊誌で、新聞で、様々な形で受け手の意識にのぼらないよう加工されたメッセージが流れ出した。

圧倒的に有利な立場の文明が、弱い立場の民族を圧迫して滅ぼしていった過去。
滅びて行く民族の悲惨な姿を特に強調して描く。
視聴者は、弱者に同情する。同情心を持つように誘導されていく。
そして強者は理性的でなければならない、抑制するべきであるという結論を与えられるのだ。
飢餓に襲われたアフリカで次々と死んでいく子ども達の映像が、人々の無意識に刷り込まれる。
ふと、振り返る。振り返ることを誘導させられる。
我が身が加害者になりつつないか？　と。
『門』その向こう側で、自衛隊は何をしているのか？　確か、敵と交戦しているはず。
『門』の向こうでの戦闘は、以前より多くの人々の関心を惹いていた。だが、さしたる状況の進展はなく、『門』を確保して敵の来襲を撃退したと伝えられるだけであった。自衛官に被害者が出ていないため気付かなかったが、交戦による敵側の損害は？　門の向こう側における民衆の被害は？
国会で、質問に立つ野党女性議員。その質問に防衛省の政務次官が答える。
「三次にわたる戦闘で、敵側の死者はおよそ六万となります。交戦による非戦闘員の被害はありません」
絶句する野党議員達。
要は、敵が防備の強力な我が方に対して無謀な攻撃を繰り返した、強いて言えば日露戦争時における『二〇三高地』の逆の例でしかない。敵が馬鹿なだけだ。

従って国民の大多数は、彼らが絶句した理由を理解できなかった。

戦争で死者が出るのは当然のこと。負ければ味方が多く死に、勝てば敵が多く死ぬ。それだけである。銀座事件における被害によって怒りに駆られる国民の多くは、それを当然のこととして受け容れていた。だが、自分は理性的で、一般大衆とは一線を画していると思っている人間や、自分は他人に対して同情的な心を持っていると信じたい、『いわゆる善良でありたい』人々にとって、それは耐えることの出来る数字ではなかったのである。

『陸上自衛隊の失態!?　民間人被害者百三十名!?』

『政務次官の答弁に虚偽の疑い!!』

『誰も知らない特別地域での戦い。膨大な敵側戦死者の中に本当に非戦闘員は居ないのか？』

こういった記事が毎朝新聞と旭新聞のトップを飾ったのは、それからほどなくしてだった。

テレビや新聞社の記者達が、防衛省や官邸に押し掛けて、マイクとカメラの放列を総理大臣と防衛大臣へと向ける。

任期満了に伴い、総理大臣職を退いた北条元総理の跡を継いだ本位（もとい）総理に対して記者達の辛辣な質問がぶつけられた。

閣僚や政務次官の汚職の発覚が相次ぎ、任命権者としての責任を追及されることが続いていた総

理は、自然と回答が慎重になった。その姿がまた「返答に窮している」「言葉が重い」などという表現で報道されて、それがさらなる支持率の低下に繋がる。

国会でも、野党による追及が始まった。

予算委員会の席は閣僚や省庁の次官達と向かい合う形で、与野党の議員達が座っている。

質問席に、野党の議員が立って質問を発する。その都度、担当部署の次官や大臣が前に出てきて質問に応じるのだ。

「今回報道された被害者とされる民間の被害者は、特別地域の武装勢力との戦闘によって生じたものではなく、災害によって発生したものです」

防衛省政務次官の回答に対して、野党議員が尋ねる。

「災害とはなんですか？　その災害と自衛隊との関わりは？」

「災害については、危険な猛獣によるものという報告です。映画の怪獣級の危険な生命体であるという内容です。その怪獣の攻撃を受けていた民間人を自衛隊特地派遣隊の偵察隊が救助するために、これと交戦するに至ったものです」

「ちょっと待ってください。怪獣ですか？　そんな生命体が特別地域には生息しているということですか？」

「もちろん怪獣そのものではありません。が、それに近い存在です。特地甲種害獣、通称ドラゴンと呼称しています。よろしければ、この場では怪獣と称させて頂きますが、その怪獣の身体の一部

がサンプルとして、送られてきています」
「何とも信じがたい話ですがそれを信じるとして、つまり今回の事件は、自衛隊とその通称『怪獣』との交戦に非戦闘員が巻き込まれたと言うことですか？」
「違います。通称『怪獣』による襲撃を受けていた非戦闘員を自衛官が防衛・救助するために、武器を使用したものであり、その被害の全ては怪獣によるものです」
「政務次官、あなたは以前質問した時に、非戦闘員の被害はないとおっしゃった。しかし、こうした事件が発生し、これほど多くの被害者が出ているのに、全く発表されなかったのは何故ですか？」
「前回の質問の主旨は、『門』を確保した我が自衛隊に対する、敵武装勢力による攻撃。それに伴う、非戦闘員被害の有無についての質問であると、考えたからです」
「死亡者についてはわかりました。これほど多くの被害者が出た災害です。今後同様の事件があればその都度発表して頂きたい。それと、自衛隊が救出した人々はどうなっていますか？」
「近隣の村や町に避難したという報告です。もともと怪獣の出現により、それまで住んでいた村落を放棄して、避難する途上で怪獣に襲われたということです」
「なるほど。それで、生存者は全員が避難できたのですね。その後の避難生活について把握していますか？」
「いいえ、そこまでは。我々はまだ『門』の周辺をわずかに確保しただけですので、避難民達の避

難後については確認できません。ただ、怪我人やお年寄り、それと身寄りのない子どもは自活しての生活が難しいという現場指揮官の判断があり、自衛隊の方で保護しております」

「なるほど、当事者がいるのですね？　では委員長……」と野党議員は矛先を変えた。

「実際のところ、当事者から話を聞かないことには、報告された内容が真実かどうか確認しようがありません。『門』の向こうは危険だという理由で報道関係者や我々議員が立ち入ることが許されない有様です。それでいて、政府の一方的な報告をそのまま鵜呑みにしろと言われても、我々としては躊躇わざるをえません。そこで、当事者たる自衛官や、被災者の方を参考人として招致したいと考えるのですが……」

実際に事件に関わった自衛官と、保護されている現地人から直に話を聞きたい。政府当局に疚しいことがないのであれば、拒絶する理由もないし応じられるはず。このような論調で野党側は要求を繰り返した。

野党やマスコミの追及に辟易としていた官邸および与党も、それで真実が伝わり攻撃をかわすことが出来るならば……という理由で、現場指揮官と現地人代表数名を、『門』のこちら側へ呼び寄せることにしたのである。

08

さて、その現場指揮官である。

伊丹は、朝っぱらから運用訓練幹部の斜め前の席に座り、彼の冷ややかな視線を無視しながら携帯でお気に入りのサイトのネット小説を読んでいた。

『門』のこちら側で携帯が利用できるようになったのもつい先日のこと。

アンテナが設置されるまでは、休暇の度にわざわざ門を越えて銀座に出なければならなかったのだ。それが携帯用の共同アンテナが設置されたことで、『門』の向こう側と個人的なやりとりもしやすくなった。ありがたい話である。

「しばらく見ないうちに随分と更新が進んでる。おっ、これは後で保存せねば……」

Ｗｅｂ小説は、本屋に列ぶ小説と違ってオリジナルあり、二次創作ありと様々なジャンルを楽しむことが出来る。その数も膨大であり、全てを読むことなど不可能と言って良い。だからこそ、良い作品に出会えた時はラッキーと思う。逆に数行読んでみてついていけないと思うと、すぐに諦めて他の作品をあさる。

掲示板等で良作と知って伊丹が読もうとした時には、ネット上から消えている作品も少なくな

い。もう一度読みたいと思った時には消失している場合もある。すると、伊丹は悲しくなる。

「あ～二尉、聞いてます？」

伊丹は、斜め後ろからかけられる声を聞き流そうと努力した。

通りのよい女声であるのだが、耳に入らない。今は休憩中につき、仕事に関わることはあんまり耳にしたくないという意思表示のつもりだった。

だが、「うほん、おほん」という運用訓練幹部（中隊参謀みたいなものだと思えばよい）の咳払いが、伊丹を小説に没頭させてくれない。こんな時は、出来れば個人の執務室が欲しいなと思う。

「二尉」

「ぐおっ！」

それは、響きとしても音量としても普通の声であったが、伊丹の下腿に激痛を発生させていた。音声が他人を害することが出来るのか？　この世界では音声に攻撃能力が与えられるのか？

そんな風に思いつつ振り返ると、栗林と黒川が胡乱な目で伊丹を見ていた。漫画的表現で言えばジト目と称される視線である。ちなみに、伊丹の下腿に激痛を発生させたのは栗林の半長靴のつま先だった。

武道有段者の拳や爪先は凶器も同然である。まして栗林は格闘徽章持ちだ。それを無抵抗な人間に対して振り回すなどはたして許されるのか。こんな悪逆無道を許してもいいのかと思いつつ目撃者であるはずの運用訓練幹部に視線を送ると、彼は視線を窓の外に向けてくつろぐ。伊丹の味方は

どこにもいないようだった。
「話を聞いて下さいませんか？」
「俺にぃ？」
黒川の言葉に、伊丹は携帯電話をパタンとたたんで机の引き出しに放り込むと椅子ごと振り返った。
気怠そうな口調で「俺なんかに相談してもしょうがなかろうに」と呟く姿に、今の彼の心情がとてもよく表れている。
「で、なによ？」
伊丹が背もたれに体重をかけると、事務用椅子がキィと音を立てた。
「テュカのことです」
黒川が切り出したのは、第三偵察隊で保護している避難民の一人で、金髪碧眼のエルフ娘、テュカ・ルナ・マルソーのことだった。
「彼女がどうかしたのか？」
「実は……」
黒川によると、「彼女はおかしい」という。
どうおかしいのか、具体的には食事をかならず二人分要求する。支給品類も衣服など必ず二人分要求する。居室も二人用を一人で使用している。最初はそういう文化なのではないかと思ったので

黙って見ていた。だが、どうもそうではないようだ。
「個人的に欲張りなだけとかじゃないの？　エルフが食欲魔神っていう設定だとか？」
「違います。食事だって二人分っていうのは、二人分の量ということではなく、つまり食器を二セットの二人分を要求するということなんです」
栗林が記録を巻りながら言う。
「うん？　誰かに、食べさせてるとか？　ペットを隠れて飼っているとかはどうだ？」
「一セット分は、手をつけずに必ず廃棄してます。衣服類だって、彼女が余分に請求するのは必ず男物です」
これには、伊丹のカンに障るものがあった。チクとした頭痛と共に、深いところに鎮めたはずの記憶が呼び起こされそうになった。
「ふ～ん。で、理由を尋ねてみたか？」
「言葉がうまく通じてないので、よくわからないのですが、一番言葉のわかるレレイちゃんに同席して貰って尋ねてみました。どうして食事を残すの？　って」
「そしたら？」
「彼女にも『わからない』『食事時に』『いない』という答えでした」
沈黙の時間が流れる。その間に、『誰か』と同居しているつもりなのでは？　という考えが浮かんだ。

「もしかして、脳内彼氏でも飼ってるとか？」
伊丹は茶化すように言った。だが、黒川や栗林は、伊丹が期待したような反応は示さなかった。脳内彼氏、あるいはそれに類似する存在を彼女らも疑っていたのだ。しかも、彼女の場合は保護された経緯が経緯だ、深刻な事態が予想される。
「はっきり言って、それならば良いのですが」
黒川が心配そうに呟いた。
「医官には相談したか？」
「精神科医はこちらに来ておりません。それに、『亡くなった家族を一定期間、生きているかのように扱う』という葬送の可能性も否定できませんわ。なにが正常で、何が異常か、わたくしたちだけで勝手に判断するわけにも参りません」
「それならレレイの師匠……カトー先生に尋ねてみてはどうだ？　あの爺さんなら詳しそうだ」
「尋ねてみました。わたくしたちとほぼ同じような見解を抱いているようでしたわ。カトー先生によると、彼女はエルフと呼ばれる種族の中でも、さらに稀少な存在だそうです。『珍しい』『知らない』という答えでした」
現段階でも意味の判明している語彙は多くないので、微妙な言い回しが難しいのだ。『理解ができない』『情報がない』『自分には推測できない』……など各種の単語がみんな「知らない」という単語になってしまう。このあたりはもっとコミュニケーションを進めて理解を深める必要があっ

た。

「やっぱし、妖精種のエルフだったかぁ」などと、つい興味が先に立ってしまう。だが、そんなことよりも、彼女の精神状態だ。

「彼女と、よく話してみるしかないだろ？　もう、いないはずの誰かを居ると思いこんでいるのか、それとも居ないのは承知してるが、あえてそう振る舞っているのか」

「もちろん、そう致します。でも、わたくしとしては正直言って判断に困っています。あまり、うち解けてくれないので」

これには、伊丹も首を傾げた。

第三偵の凸凹ＷＡＣ。そのなかでも黒川は避難民の子ども達には絶大な人気を誇っていた。結構、勝手な振る舞いで周りを困らせる黒い神官少女（レレイによると「子ども、違う。年上、年上の年上、もっと年上」だと言う）ですら、黒川の言葉には割と素直に従うのだ。

視線を栗林に向ける。

「わ、わたしには、そんな感じは無いです。第一、わたしにはカウンセリングとか出来ません。心理学とかよく解らなくて」

確かに、このちびっ娘爆乳脳筋女は拳で語り合った方が早いタイプだ。『こころ』などという繊細な問題をこいつに扱わせるのは、脳外科手術をのこぎりでやるようなもんだと理解した伊丹は、栗林の言葉にはっきりと頷いた。

「わかった。後で俺も話してみる。ったって、俺だってうまく意思疎通できるかわからんけどな」
「最近は、子ども達のほうが日本語を憶えてきています。きっと、わたくし達がこちらの言葉を覚えるよりも早いと思いますわ」
伊丹は、テュカは子どもではないだろうが……と指摘しようとしたが、会話がここまで進んだところで、廊下から桑原曹長の声が聞こえてきた。
「隊長、そろそろ時間です。黒川、栗林、お前等も早く来い」
「あ、はい」
いそいそと栗林らは廊下へと出ていった。
「武器搬出!!」の号令と共に、５０２中隊の隊員達が、小隊毎に列を作って武器庫へと入っていく。整然と銃架に列んだ小銃と銃剣、拳銃を抜き取っていく。第三偵の面々もこの行列の後に続いて、武器庫から銃を取り出していった。
建物を出て舎前で彼らは六四小銃の消炎制退器を一回転させて締め直す。座金がのびないようにするため、銃架にしまう際にゆるめてあるからだ。これによってゆるゆるだった二脚や剣止めもしっかり固定される。
さらに、黒ビニールテープを持ち出して、部品が脱落しないように要所要所へと巻き付けていく。実戦である。乱暴な扱い……例えば銃剣格闘もありえるので、わりと念入りにしないといけない。

二脚を立てて隊毎に銃を並べ置き、銃剣を腰に下げる。銃剣は、既に実戦仕様として刃がつけられていた。グラインダーで削りあげただけの刃だが、ザラッとしていてかえって良く切れそうだった。

隊員達が集まって座り込み、配布された弾を弾倉へと込めていく。

弾倉は各位6個。20発×6個で一人あたり携行は、１２０発になる。手榴弾も配られる。

５・56㎜機関銃のミニミを預けられている古田陸士長が、金属製ベルトリンクで繋がれた弾を箱弾倉に折り畳むようにして丁寧に入れている。

勝本が自分の小銃の他に、受領してきたパンツァーファウストⅢと称される110㎜個人携帯対戦車弾を、軽装甲機動車に積みこんでいた。これでないと特地甲種害獣、通称ドラゴンに効果的な攻撃が出来なかったことから、携行数を増やすことになったのだ。

軽装甲機動車搭載の12・７㎜重機関銃を笹川が操作している。弾の帯には黒く塗装された徹甲弾の割合が非常に多くなっていた。

そして、予備の弾や各種物資の積み込み作業を終えて、全員それぞれが武器を携行すると隊形の確認を行う。

桑原曹長の号令で、横に、縦に、方陣に、隊形を素早く組む練習だ。

間隔を広げたり、密集したりを素早く行う動作も確認する。それぞれが連携し、警戒を担当する方角の確認も徹底する。一人が欠けたら、誰がそれをカバーするのか、どう対処するのかも個々人

は十分に理解しているはずだが、それでもなお繰り返して確認する。
　このあたりが、新旧・テレビ版等の自衛隊トリップものドラマを研究した成果なのかも知れない。強力な火器を有した自衛官達が次々と倒れていくのは、ほとんどが味方から離れて孤立し、無数の敵に取り囲まれてしまうことが理由として描かれていたのだ。結局の所、協同連携、相互支援が鉄則ということになる。
　こうして準備を終えた伊丹達は、整列し伊丹の号令で小銃に弾倉を取り付けた。装弾、装填、閉鎖を確認し、最後に安全装置を『ア』の位置に合わせる。
「海自では『合戦用～意！』とか言うらしいんだが……」
　凛とした雰囲気の中、伊丹の気の抜けたような言葉に一同脱力する。
「どっちかって言うと、元ネタはアニメでしょうに？」
と、出所不明（但し女声）のつぶやきが妙に響いた。
「とにかく、営門を出たら危険地帯ってことになってる。それなりに気を張ってくれ」
　こうして、彼らはアルヌスの丘を出て仮設住宅のならぶ難民キャンプへと向かうのであった。

　難民キャンプの住民は現在の所二十五名である。コダ村出身者は二十三名。エルフの村落出身者が一名。それと途中から紛れ込んできた黒ゴス姿の神官少女一名である。
　建物そのものは所謂プレハブであるが、後の増加の可能性も考慮して四人家族用、十世帯分が用

意されていた。とは言ってもそれぞれの家に住む彼らに家族・親族という関係はない。それでも同じ村落出身が理由なのか大人が子どもを、年長者が年下の面倒をみるという形で共同生活が成立している。

電気もガスも水道もないが、この世界では元々そういうライフラインなど存在しないのが当たり前なので、誰一人として困っていない。水は、近くの泉まで子ども達が水瓶を抱えて汲みに行き、下水排水関係は、キャンプの片隅に穴を掘って処理している。衛生の問題があるので汚物等はさらし粉等で処理し、飲み水は伊丹達がペットボトルを運んでいた。

糧食関係は一日三食のうち、昼と夕食の二回を伊丹達が供給している。

朝食については食材を届けておくと彼らが自分たちで調理する。実際は、それでは不足するので子ども達や老人達が森の中に入って野草などの食材を探してきて食べている。昼食はもっぱら戦闘糧食Ⅱ型である。夕食はキャンプ内にしつらえた竈で、古田ら隊員達と子ども達がわいわい言い合いながら作っている。

やろうと思えば毎食を供給することも出来るのだが、彼らの自立心を損なう可能性があるので行っていない。自衛隊側からの支援は、自助努力を支援する範囲に限る。これはイラク派遣以来の自衛隊支援活動の根幹となる精神であった。彼らの共同生活の運営が良好なら、食事も三食自炊を目指す。さらに何か職業を得て、住はともかく衣食については自弁できるようになることを理想に据えているのだ。

とは言っても、無理はさせられない。なにしろ住民の構成はまずお年寄り女性二人、男性一名。それに怪我をしていた中年代の女性二人、男性一名。そして子どもが十九名なのだから。

ちなみに中年代の三人は骨折を含む怪我をしているので、年少の子ども達の面倒をみることは出来ても、労働は難しいだろう。

ところが比較的意思疎通が早くできるようになったレレイという少女からの聞き取りによると、子どもと見なされていた十九名の内、まず黒ゴス神官少女とエルフの少女、そしてレレイ本人が子どもではないらしい。だから、十六人が子どもということになる。

では、子どもではない三人それぞれの年齢が幾つかということになるのだが、黒ゴス神官少女については恐くて尋ねられない。レレイによると「子ども、違う。年上、年上の年上、もっと年上」ということである。具体的に数字を確認しようとして通訳を求めたら無表情のレレイが顔を引きつらせて、プルプルと首を振って嫌がったくらいである。

ちなみにレレイ自身は十五才ということであった。この世界では、この年齢で大人と分類されるようだ。

エルフが長命種であるというのはファンタジーによくある設定なので、理解しやすい。テュカは百六十五という数字を自ら示した。

こうしてみると数字についての理解がスムーズに出来たように思われるが、これでも結構手間がかかっている。

レレイの場合、彼女は親指の先と人差し指の先をくっつけ中指を一本だけ立てた。ＯＫサインの薬指小指をたたんだサインである。その後、親指を立てて拳を作るサムズアップサインを示した。

これが十五を意味するのだが、当然の事ながら日本のそれと所作が異なるため、結局小石を並べて、一個が人差し指一本、五個だと親指を立てる、十だと親指と人差し指で丸を作る……といった法則を確認する必要があった。

こうした方法を組み合わせることで、実に片手だけで六十九まで数えることが出来るという仕組みだった。ホントはもっと数えることが出来るようであるが、指が攣ってしまったのと同時に実用性に欠けるので、確認が後回しになっている。実際、レレイが日本語で数を数えることが出来るようになる方が早かった。

伊丹達が、キャンプに到着すると、レレイや子ども達が迎えてくれる。とは言っても黒川が出ていくと、小さな子ども達はみんな彼女のほうに行ってしまうのだが。

隊員達が、飲料水、食材、医薬品、戦闘糧食、日用品等を降ろす。

その代わり年かさの男の子が白い帆布製の、枕ほどのサイズの袋を二つ、高機動車に積みこんだ。結構重そうだ。そして、その少年に声をかけつつ、レレイとテュカの二人が高機動車に乗り込む。

レレイはポンチョにも似た貫頭衣姿。浅茶色の生地にインディオ風の模様が入っていた。それと革製のサンダルという服装。手にしたくすんだ色の杖を立てている。

それに対しテュカは、細い体躯を緑のTシャツとストレッチジーンズにバスケットシューズという出で立ちで包んでいた。尖った耳さえなければ、アメリカ西海岸あたりの女子高生と言っても通じそうな印象だ。そんな格好でアーチェリーと矢の束を抱えている。

荷物運びをした男の子はそのまま避難民キャンプへと戻って行く。彼の行く先では、年かさの少年や少女達が集まって働いているのだ。

アルヌスの丘の麓には、撃墜された翼竜の死体が無数にころがっている。カトー先生によるとその竜の爪やら鱗やらはその強靭さから高級武具の材料となる。そのために大変な貴重品らしい。それなりの価格で取り引きされると言うので、子ども達に勧めて集めさせたのだ。朽ちかけた死体から鱗や爪を剥ぎ取らせて集め、肉や汚れを綺麗に落として乾燥させる作業は子ども達が行った。これを今回初めて、レレイとテュカが街へ売りに行くのだ。

これが継続的な収入に繋がるなら事業として成り立つかも知れない。そうなれば彼らの自立を助長することにもなる。

ロゥリィという名の神官少女も何が目的かはわからないが、乗り込んで来る。彼女は相変わらず漆黒のゴスロリドレス姿で、手には見た目も重そうなハルバートを抱えていた。

伊丹達は商取引の様子や街の住民達の反応を観察できる情報収集のチャンスなので、足の提供ついでに彼女達に随行することにしていた。さらに、地元の商人が何に興味を示すかを見るためと称して柳田からいくつかの商品サンプルを持たされていた。

ちなみに、戦死した連合諸王国軍の兵士達、あるいはそれ以前に攻撃してきた帝国軍将兵の鎧や持っていた武具、財布などは、自衛隊によって彼らごと土中に埋葬されている。

これをもし集めたら莫大な財産……金融機関のない世界で兵士は受け取った俸給を身につけて歩くものだし、身分の高い騎士やら貴族やらもいる……となるはずだが、倫理的にいろいろあるので自衛隊としては手をつけていない。実は、この配慮が流通貨幣の大量消失という形で帝国と周辺諸国に、ちょっとした経済的打撃を与えているのだが、それがわかるのも後々のことである。

それと主(あるじ)を失ってあちこちうろうろしていた馬も、集められる限り集めた。

これも動物愛護団体からのクレームを恐れてのことだが、膨大な数の馬の飼い葉をどうするかが深刻な問題となりつつあった。敵方の遺棄物資に馬用の飼料があったためにこれを与えているが、無くなるのは時間の問題。アルヌス周辺は荒野、少し離れて森なので馬に食べさせる牧草がどこにもないのである。

こうした馬の引き取り手を探すことも、伊丹の任務の一つとしてさりげなく付け加えられていたのである。

さて、レレイ達に託された竜の鱗だが、翼竜2頭分で、全部で２００枚ほどになる。これに加えて『竜の爪』も3本ほどあった。

これでも欠けたり、折れたり、傷ついたり、あるいはサイズが小さかったりで使い物にならなさ

そうなものは取り除いた。それでもこの量になった。

アルヌスの丘に散在する翼竜の屍体全てをあさったら、どれほどの鱗が収穫できるかと考えると、カトー老師を始めとした避難民達は、大人も子どもも目眩がしそうになって、皆、額をおさえてしまった。

最初は「自活しろ」というような意味のことを言われて、避難民達は悩みで頭を抱えた。住む場所を手に入れるにしても、食べるために畑を耕すにしても、木を切るにしても、狩猟をするにしても、年寄りと怪我人と子どもばかりでは無理だからだ。

レレイやテュカあたりは、本気で身を売るしかないと思ったくらいだ。ところが、「手助けはする」と言われて、食材は届けられるし、家は建ててもらえるしで、おまけに何か仕事になりそうなことはあるかという話をしているうちに、価値があるモノなら好きにして良いと、アルヌスの丘に散在する翼竜の死骸から鱗を集める権利を与えられてしまったのである（彼らはそう認識した）。

それはもう、財宝の山を前に「好きなだけつかみ取りしてよい」と言われたようなものだった。気持としては、「いいの？　ホントにいいの？」である。

でも、悲しいことに小市民である。両手、ポケット、懐に収まる範囲までなら、これでアレを手に入れて、服を新調して……等々の使い道を考えられるが、もっと取れ、全部残さず取れ……などと言われると、これまで慎ましい自給自足な生活を送ってきた村人や子ども達にとって、想像できる範囲を超えてしまう。

『竜』あるいは『龍』の鱗とは、実のところそれほどのお宝なのである。

竜の鱗にはいくつかの種類がある。市場で取り引きされる際にはその種類や状態でグレードの分類がなされていた。

最上級とされるのはやはり古代『龍』の鱗であり、美品であればその一枚で、スワニ金貨十枚ほどの値が付くと言われている。もし炎龍の赤い鱗で出来た鎧などがあれば、（加工も、とても難しいため）それは神話級の宝具として国が買える価格で取り引きされることになる。「あれば」の話だが。

それに次ぐのが新生龍のものである。だがこれらの二種は市場で出回ることは「ほとんど」あり得ない。かつて説明したように、人の手で『龍』が狩られることはないからだ。もし人の手に入ったとすれば、それは古代龍や新生龍が脱皮したことによってうち捨てられた鱗を集めたものであろう。実際、いくつかの英雄譚や神話には龍の鱗から作られたという鎧が登場し、現物が戦神の神殿に祀られていたりする。

さて、翼竜の場合は、兵科として竜騎兵を採用している国では安定的に入手できることに加えて、一枚一枚のサイズも比較的に小さいために、ぐっと値が下がって現実的な価格で取り引きされている。鱗一枚の相場がデナリ銀貨30～70枚といったところだ。

デナリ銀貨一枚とは、慎ましく暮らせばヒト一人五日は食べられる額である。従って、今回の二百枚を取り引きしただけでも、レレイ達は結構な金持ちになれる予定であった。

もちろんこれだけの品物を売るためにはそれなりの相手を選ばないといけない。
とにかく安全に現金で決済したいので、レレイとしては大店を取引相手として選びたかった。しかし大店の店主が突然やってきた小娘を、はたして相手にしてくれるかが心配……かといって小規模の店では支払う金が無いと、掛け売りを求められてしまうだろう。手形や為替の類は、いくら賢者といえどもわからないというのが、レレイの正直な心情だった。
そこで、幸い師匠であるカトーの旧い友人に商人がいるということで、少しばかり遠いがその人のところまで赴くことにした。往復路についてはすこぶる頼りになるジエイカン達がついてくれるだろうし……と、レレイは伊丹達の顔を見る。
「ん？　何かな？」
視線の合った伊丹に問われ、レレイは無表情のまま「別に」という意味のことを答えた。
「で、そのリュドーという人は、どこにお店を構えているの？」
付き添ってくれるエルフのテュカがロウリィとともに問いかけてくる。レレイは要点のみを過不足無く伝えた。
「イタリカの街。テッサリア街道を西、ロマリア山麓」
「テッサリア街道、ロマリア山、それからイタリカの街……っと」
桑原曹長が航空写真から起こした地形図に、名称の判明した地物について書き込みをしている。

今回の行動では、レレイから様々な地名を聞き取ることが出来、アルヌス周辺の地形図について言えば、ほぼ完成と言って良い状態になりつつあった。

「なるほど、アッピア街道に、ロマ川、クレパス平原、デュマ山脈か……」

レレイも近辺の地形を詳細に描き出している地形図に興味津々といった様子だった。彼女の知る地図とは、山や川や湖を描いて、だいたいの位置関係が合っていれば上等とされる。それが、非常に細密に描かれた地図があるのだから興味を持つなと言うのが無理だろう。レレイは自分の知っている場所が地図上にあることがわかると、次々と指さして名前を教えてくれた。そして、さらに彼女が興味を示したのが方位磁石である。

桑原が地図と実際に自分たちの向かっている方角を過たずに一致させる秘密が、ここにあるらしいとレレイは感づいたようだった。

御歳五十歳の桑原は、「この世界の北極と磁北極のズレはどの程度なんだろう?」などと思いつつ、レレイを我が娘をみるような気分で磁石の取り扱い方を教えていた。まぁ、実際には走行している高機動車の中でのこと、方角は小刻みに変わり、磁針そのものも揺れ動いて、正確に扱うことなど出来ないのであるが。

「鬼軍曹と呼ばれたおやっさんが、可愛い女の子相手には相好を崩しちゃってまぁ」

バックミラーに映る桑原の姿をチラと見て、倉田はボソッと呟いた。

一般陸曹候補学生の前期課程で、『ハイポート走』（小銃を「控えつつ」したまま走ることと思

って貰えばよい。似た体験をしてみたければ、四キロの鉄アレイでも抱えてマラソンすることをお勧めする。ただし『抱えて』である。ぶら下げて、ではない）をさせられた経験が、なんとも言えない恨み辛みとして倉田の心中には積もっていた。それが、孫娘を愛でる爺さまのような姿を見せられて、なんとも霧散してしまうのだ。

ロゥリィは、テュカとなにやら話をしていた。

だが現地語で、しかも早口だから伊丹達には到底理解できない。ただ、なんとなくテュカがロゥリィにからかわれているのは理解できた。最後には、テュカがぶすっと頬をふくらませて黙り込んでしまった。それを見たロゥリィが、いたずらっぽい笑みを浮かべて、黒川に視線を送る。そして、何か言おうとするのだが、その途端にテュカは顔と細長い耳を真っ赤にして止めさせようとするのだ。

見ているこちらとしては「何だろね？」という気分だ。

テュカの慌てる様が楽しいらしく、ロゥリィはなんとも楽しそうにほくそ笑んでいた。レレイに「年上の年上の年上」と言われるだけあって、百六十五歳のテュカであっても、子ども扱いされてしまう格の違いがそこはかとなく感じられた。

「伊丹隊長、右前方で煙が上がってます」

運転している倉田が、右前を指さした。

ほぼ同様の報告が無線を通じて、先頭を走る車両からも入ってくる。

伊丹は、双眼鏡で煙の発生源あたりを観察してみるが、まだ距離があって確認するのが難しい状態だった。車列を停めさせて倉田に尋ねる。
「倉田、この道、煙の発生源の近くを通るかな？」
「というより煙の発生源に向かってませんか？」
「嫌だよぉ。前方に立ち上る煙って、これで二回目だろ？　どうにも悪い予感がするんだよねぇ」
次いで、伊丹は桑原に意見を求めた。
桑原は地形図を参照して、煙の発生源あたりに、カタカナでイタリカと記入された街が存在していることを示した。テッサリア街道を進む車列は、当然のことながらイタリカへと向かっている。
次に、伊丹はレレイに双眼鏡を渡して意見を求めた。
レレイは、双眼鏡を前後逆さまにに構えてしまい眉を顰めたが、直ぐに間違いに気付き双眼鏡を正しく構えると前方へ向けた。
「あれは、煙」
レレイは、日本語でそう答えてきた。
「煙の理由は？」
聡いレレイは、伊丹の質問の意図を直ちに理解した。
「畑、焼く、煙でない。季節、違う。人のした、何か。鍵？　でも、大きすぎ」
「『鍵』ではなくて、『火事』だ」

単語の過ちを訂正しておいて、伊丹は思索し、指示を下す。
「周囲への警戒を厳にして、街へ近づくぞ。特に対空警戒は怠るなよっ」
桑原と黒川が銃を引き寄せた。それぞれ左右に目を配り出す。テュカは黒川に列び、レレイは桑原と列んで一緒に周囲を警戒する。そして車列は再び進み始めた。
ロゥリィは、伊丹と倉田の間に身を乗り出してきて、「血の臭い」と呟きながら、なんとも言えない妖艶な笑みを浮かべるのだった。

＊　＊

イタリカの街は、二百年ほど昔に当時の領主が居城を建設し、その周辺に商人を呼び集めて、城壁を巡らして作り上げた城塞都市である。
当時は政治上、そしてテッサリア街道とアッピア街道の交点という交通上の要衝として大きく発展したのだが、帝国が拡大して国境が遠のくにつれて政治的な重要性が薄れ、現在は中くらいの地方商市といった程度におちついている。これといった特産品などもないが、周辺で収穫された農作物、家畜類、あるいは織物等の手工業品を帝都へと送り出すための集積基地としての役割を担っている。
現在は、帝国貴族のフォルマル伯爵家の領地である。

フォルマル伯の当主コルトには三人の娘があった。アイリ、ルイ、ミュイである。末娘のミュイをのぞいた二人は、既に他家に嫁いでいた。コルトとしては、末娘のミュイが成長したら婿を取らせて跡継ぎにしようと考えていたようである。

ところがミュイがいまだ独身のままコルトとその妻が事故死してしまったことから、街の不幸が始まった。

長女アイリはローウェン伯家、次女ルイはミズーナ伯家とそれぞれに嫁いだ家がある。従って相続についての権利はミュイに劣る。それが帝国の法であって争いなど生じる余地はない。しかし、末妹のミュイがいまだ十一歳であったことから、どちらが彼女を後見するか……則ち実権を握るかで争いが生じてしまったのである。

長女と次女の間での冷静な話し合いが次第に熱を帯びてきて、ついに醜い罵り合いとなった。末妹は間に挟まれておろおろするばかり。二人の罵り合いは、爪を立てての引っ掻き合い、髪の掴み合いに発展し、これを鎮めようとしたそれぞれの夫を巻き込む大騒動となった挙げ句、ローウェン伯家とミズーナ伯家の兵が争うという、小規模紛争となってしまったのである。

それでも双方の諍いは無制限に拡大することはなかった。それぞれの兵力がさして多くなかったこともあるし、それぞれの夫が妻ほど頭に血が上っていなかったことも理由としてあげられる。

領内の治安はフォルマル伯家の遺臣と、ローウェン伯家とミズーナ伯家の兵によって厳正に保たれ、商人の往来は保護され、領民達の生活も脅かされることはなかった。イタリカの価値は交易に

あり、これを荒廃させてしまえば、利益を得るどころではなくなってしまうということを誰もがよくわきまえていたからである。

こうして事態は膠着化する。

姉妹の争いは帝都の法廷へと移り、やがて皇帝の仲裁によってミュイの後見人が決するであろうと誰もが予想していた。

しかし、帝国による異世界出兵が事態をさらに悪化させた。

ローウェン伯家とミズーナ伯家、それぞれの当主がそろって出征先で戦死してしまったのである。これによってアイリもルイもフォルマル伯爵領に関わっている余裕が全く無くなってしまった。ローウェン伯家もミズーナ伯家も兵を退いてしまい、あとに残されたのはミュイとフォルマル伯爵家の遺臣ばかりである。

幼いミュイに家臣を束ねていく力などあるはずもなく、領地の運営も惰性でなされるようになった。心ある家臣が存在する以上の確率で、私欲に素直な家臣が存在し、気が付けば横領と汚職が横行し、不正と無法がはびこっていた。

民心はゆれ動き、治安は急激に悪化する。

各地で盗賊化した落伍兵やならず者が、領内を旅する商人を度々襲うようになり、これによって交易は停止し、イタリカの物流は停滞してしまう。

さらに盗賊やならず者達は徒党を組んで、大胆且つ大規模に村落を襲撃するようになった。数人

の盗賊が、十数人の盗賊集団となり、現在では数百の規模となった。そしていよいよイタリカの街そのものが盗賊達に襲撃されたのである。

街の城門上に陣取って、弓弦を鳴らしていたピニャは、退却していく盗賊達の背に向けて数本の矢を放ったあと、大きなため息をついて弓矢を降ろした。

周囲には傷ついた兵が、のろのろと立ち上がり、あるいは倒れた兵士が血を流している。石壁には矢が突き刺さり、周囲では煙が立ち上っていた。見渡すと、農具や棒をもった市民達も多い。

城門の外には、盗賊達の死体や馬などが倒れている。

「ノーマ！　ハミルトン！　怪我はないか？」

破られた門扉の内側にある柵を守っていたノーマは、大地に突き立てた剣を杖のようにして身体を支え、肩で息をしつつ、わずかに手を挙げて無事を示した。それでも、鎧のあちこちには矢が刺さっていたり、剣で斬り付けられたような跡が付いている。

彼の周囲は激戦であったことを示すかのように、攻撃側の盗賊と守備兵、双方の遺体が転がっていた。

ハミルトンに至っては既に座り込んでいた。

両足おっ広げて、なんとか後ろ手で身体を支えているが、今にも仰向けに倒れ込みたいという様子。剣も、放り出していた。

「ぜいぜい、とりあえず、はあはあ、何とか、はあはあ、生きてます」
「姫様。小官の名がないとは、あまりにも薄情と申すモノ」
「グレイっ！　貴様は無事に決まってるだろう。だからあえて問わなかったまでだ」
「それは喜んで宜しいのでしょうか？　はたまた悲しんだほうが良いのでしょうかな？」
堅太りの体格で、いかにもタフそうな四十男が少しも疲れた様子も見せず、剣を肩に載せていた。
見ると返り血すら浴びていない。剣が血に染まっていなければ、どこかに隠れていたのではと思いたくなるほどに体力気力共にまだまだ大丈夫という様子だった。グレイ・アルド騎士補である。一兵士からのたたき上げで、戦場往来歴戦の戦人であった。
ピニャの騎士団は、構成する騎士の大部分が貴族出身である。しかも騎士団としての実戦経験が無いため、こうした叩き上げの兵士を昇進させ部隊の中核としていた。
帝国では兵士が騎士（士官）になる道は著しく狭い。だが、一端通ってしまうと士官としての待遇に差別はなかった。これには、自分たちは戦功著しい優秀な古参兵と、同等の能力を有しているのだという貴族側の自負心がある。能力で昇進してきた者を、出身を理由に粗略に扱うような者は、自分の能力に自信がなく家柄にしか頼るものがないだけであると評価されてしまうのだ。
「姫様、何でわたしたち、こんなところで盗賊を相手にしてるんですか？」
ハミルトンは責めるような口調で苦情を言い放った。いささか無礼ではあるが、言わずにいられ

ない気分だった。

「仕方ないだろう！　異世界の軍がイタリカ攻略を企てていると思ったんだからっ！　お前達も賛同したではないか？」

アルヌス周辺の調査を終えて、いよいよアルヌスの丘そのものに乗り込もうとしたところ、ピニャらの耳にひとつの噂話が入った。

それは「フォルマル伯爵領に、大規模な武装集団がいる。そしてイタリカが襲われそうだ」というものだった。

それを聞いたピニャは、アルヌスを占拠する異世界の軍がいよいよ侵攻を開始したと考えたのである。「分遣隊を派遣して、周辺の領地を制圧しつつ帝都を包囲しようという魂胆か？」と察した。

ならばこちらとしても考えがある。ピニャとしては、やはり初陣は地味な偵察行より、華々しい野戦が良い。丘の攻略戦では帝国は大敗を喫したが、野戦ならばという思いもあった。だからアルヌス偵察は後に回し、麾下の騎士団にイタリカへの移動を命じつつ、自分達は先行したのである。

どのような戦法をとるにしても、敵の規模や戦力を知らなければならない。もし、敵の戦力が少なければイタリカを守備しつつ、その後背を騎士団につかせて挟撃することも出来る、とも考えていた。

ところが、実際にイタリカに到着してみれば、街を襲っていたのは大規模な盗賊集団だった。し

かもその構成員の過半が、「元」連合諸王国軍とも言うべき、敗残兵達であったのだ。

これに対して、イタリカを守るべきフォルマル伯爵家の現当主はミュイ十一歳。

彼女に戦闘の指揮がとれるはずもなく、兵達の士気は最低を極めていた。かなりの人数が脱走し、残った兵力も極わずかであった。

ピニャとしては落胆を禁じ得なかったが、街が野盗に蹂躙されるのを黙って見ているわけにもいかず、伯爵家に乗り込むと身分を明かして有無を言わさず伯爵家の兵を掌握するとイタリカ防戦の指揮を執ったのである。

「とりあえず三日守りきれば、妾の騎士団が到着する」

実際は、もう少しかかるかも知れないとは言えない。

ピニャのその言葉を信じた街の住民や伯爵家の兵達は力戦奮闘した。だが敵も落ちぶれたとは言え元正規兵であり、攻城戦に長けていた。

街は攻囲こそされないものの堅牢なはずの城門が破られ、一時は街内へと乱入されかかったのである。とりあえず住民達が民兵として農具をかざして力戦したからこそ、第一日目をなんとか戦い抜けたのだが、正直、後少しで負けるところであった。

物心共に被害も甚大だ。

少なかった兵はますます少なくなり、民兵も勇敢な者から死んでしまった。残された者は傷つき、疲れている。こうしてわずか一日にして、兵や住民達の士気は下がりきってしまった。そし

て、ピニャには彼らの士気をあげる術が、どうにも思いつかない。
これが、彼女の初陣の顛末であった。

09

ピニャ・コ・ラーダは、皇帝モルト・ソル・アウグスタスとその側室……いわゆるお妾であるネール伯爵夫人との間に生まれた。
モルト皇帝の公認の子どもは八人いる。その中では彼女は五番目の子で、女子としては三人目であった。ちなみに、非公認の隠し子も含めると彼女の兄弟姉妹は十二〜十五人前後に増えるのではないかと言われている。
皇帝から実娘として公認されているため、ピニャには皇位継承権がある。しかし、順位としては十番目（皇帝の弟達が彼女より上位にいる）になるため、皇位継承者としての彼女の存在が意識されることは、ほとんどなかった。適当な年齢に達すれば、外国の王室か国内の有力貴族に持参金を抱えて嫁に入り、目立たないが優雅で気楽なサロン生活が送れる身分なのだ。
彼女の存在が宮廷のサロンで目立つのは、政治的な意味合いよりも彼女の個性に発する部分が大きかった。幼少の頃は、常に何かに苛立っており、落ち着きに欠け、過激な言動といたずらをして

は周囲を困らせることが多かったのだ。

それがどうにか落ち着きだしたのは十二歳頃、貴族の子女らばかりを集めた『騎士団ごっこ』をはじめてからである。

まことしやかに流布している風説によると、女優ばかりが出演する歌劇を見て、その華やかさに影響されたからだと言われている。もちろん真偽のほどは確かではないが、この時期に何かきっかけとなる出来事があったことだけは確かなようである。

帝都郊外にある古びた、しかし堅牢な建物を勝手に占拠すると、子分とも言える貴族の子女を集めて集団生活を始め、彼女なりの軍事教練らしきものを始めたのである。そこは貴族の子弟、しかも十一～十四歳の子ども達のすることだ。おままごとのような集団生活と軍隊ごっこであって、衣食住の全てにおいて散々な失敗の繰り返しだった。それでも、そうした失敗も含めた何もかもが新鮮で、楽しいものとして子ども達は感じていたようである。

子ども達を心配して様子を見に来た大人達は、彼らの楽しげな様子を見て安堵しつつ、やがて飽きて親が恋しくなって帰ってくるだろうと温かく見守ることにしたのだった。

実際に、子ども達も二日ほどたつと笑顔で帰ってきて、親たちは「楽しかったかい？」と温かく出迎えることになる。

ピニャの、天賦の才能はこの時期に開花を始めた。それは自己を含めて、仲間の力量を過不足無く見極めることが出来るということにあった。

彼女には、仲間達が二日程度で飽きてしまい、三日を過ぎたあたりで帰りたがるということが見えていたようである。そこで彼女は仲間を全員一度帰宅させた。これならば「楽しかったねぇ」という気分のまま帰ることも出来る。そして、それは第二回騎士団ごっこへと繋がる。

一週間ほどあけて、第二回騎士団ごっこが開かれた。

兵舎として使われたのは、前回と同じ建物であったが、今度は料理人や小間使いを巻き込んでのごっこ遊びで、衣食住の環境は確実に改善されていた。これを見た子ども達の親も、そして子ども達自身も内心安堵したことだろう。

こうして、彼らの騎士団ごっこは、まず遊びとして周囲から温かい目で見守られつつ始まったのである。

「ごっこ遊び」とは言っても一応軍事教練らしきことをする。

例え、遊びから来たものであろうと「子どもの言動がきびきびしてきたように見える」「体力がついて元気になってきた」「食べ物の好き嫌いがなくなった」「規律正しくなってきた」「社交的になって、よい友人を持つようになった」等の変化が現れると、皇女様の騎士団ごっこは子ども達によい影響を与えていると好意的に見られはじめた。回を重ねるたびに寄付や、施設の提供を申し出る貴族などが現れて、貴族社会で子ども達に参加を奨励しようとする雰囲気が出来てきたのである。

この時期に集まったピニャとその仲間達は、第一期生と呼ばれている。この第一期生によって、

戒律や規約が作られ、団員の誓いだとか、各種の儀式、階級といった制度が制定され、彼らの日常生活における規範となっていくのである。

騎士団創設から二年、ピニャが十四歳になると騎士団の『訓練』と呼ばれる合宿生活は、二～三ヶ月の長期に渡って行われることが多くなった。学業などはこうした訓練の一環として、何人もの宮廷学者が『兵舎』に招ねかれて授業するために疎かになることもなく、親たちはこのあたりから「ごっこ遊び」と言うよりは一種の『少年教育機関』的な意味合いでこの騎士団活動を見るようになっていた。

ピニャの始めた騎士団活動は、ここで発展を止めたとしても、有意義なものとして帝国の教育史に残ったと思われる。子ども達の自立心を高め、規律正しい生活を身につけ、年長者を敬愛し、若年者を愛護する。それは、あたかも兄弟姉妹のごとく（実際、義理の兄弟姉妹関係を結ぶ相手を選び出し、とある儀式のもとその関係性を続けていくのである）。こうした騎士団の気風は、好ましいものとして大人達に見られていたからであった。

類似の少年団組織が、あちこちで発足し始めたのもこの頃である。これらの少年団は現在も、この頃の騎士団の気風を受け継いだ集団として継続している。

ところが、ピニャはあくまでも軍事組織としての発展を志向していた。

ピニャ十五歳の頃。彼女は自分たちの行う軍事教練によって体力がつき、剣術や弓、乗馬等の基礎的な訓練に慣れて来たと見るや、外部から教官を招聘することにしたのである。

この時、騎士団に出向せよという命令を受けた軍将校、下士官がどのような気分になったかを知る術はない。だが、退役間近な将校や下士官ならまだしも、将来を嘱望された若手将校や下士官にとっては、『皇女様のごっこ遊び』につき合わされるのは、落胆と失望を感じさせるのに十分だったと思われる。

その為だろうか、「いつまでもこんなことにつき合ってられるか」という思いを込めて、騎士団の団員達に対して本格的……ではなく本物の軍事教練が施されたのである。そして、それこそがピニャの求めていたものであった。

将校達は、騎士団の子ども達が、もうこんなことは嫌だと降参することを期待していたようである。しかしピニャは、仲間の過半はこの訓練を乗り越えていけると見極めていた。

こうして、騎士団の軍事組織的な性格が明確になっていく。座学、実地訓練共、その内容は軍に所属する兵士や士官達の学ぶそれに勝るとも劣るところはなく、彼らの素質もあってか騎士団の団員達は優秀な軍人として成長していくことになる。

ピニャ十六歳の頃、騎士団ではその方向性を決定づける重要な出来事が発生した。

男性騎士団員達の卒業である。

門閥に属さない貴族の子弟にとって、その将来を賭ける道は軍人になるか、官僚になるかである。尚武（しょうぶ）の気風をもった騎士団に属していた青年達が、軍人を志さない理由はなく、またそれを止める術も権利も彼女にはなかった。

「元騎士団員として、恥ずかしくない軍人となってほしい」という言葉を贈り、彼女は青年となった一期生の卒業を見送ったのである。

こうして、騎士団を構成する中核団員の多くは『女性』ばかりとなった。もちろん、そろそろ花嫁修業を、という親の願いから女性団員も次々と騎士団を離れていく。それでも残る者がいて、新規に入って来る者もいる。

この時期の騎士団がもっていた幼年士官学校的雰囲気から、貴族の子ども達の入団希望者は以前よりも増えつつあり、その規模は拡大傾向を示していたのである。

それから三年。この間に騎士団出身の男性軍人の多くが若手将校として現場で活躍を始めると、彼らの優秀さが高級将校の目にとまるようになった。

騎士団の卒業の時期……薔薇の咲く頃……が近づくと各軍の指揮官達が、自分の部下にとわざわざスカウトにやって来るほどとなった。だが彼らの目当てはあくまでも男性団員であり、軍が女性に活躍の場を与えることはなかった。

そのために、あるいはこれこそが彼女の真の目的として、ピニャは多くの女性団員と少数の男性団員（立身出世の必要がない門閥貴族出身の子弟＋ピニャのスカウトしてきた実戦経験豊富な熟練兵）、そして補助兵によって構成された『薔薇騎士団』を設立したのである。

その誕生は、貴族社会からも宮廷からも祝福されたものであったが、あくまでも実戦を経験することのない儀仗兵、女性要人の警護、儀式典礼祭祀等の参加、そして軍楽隊的役割を求められての

ことという暗黙の了解が、そこにあった。
しかし帝国を取り巻く情勢は変わった。
事態がここに至ると、薔薇騎士団とはいえ後方に引っ込んでいるわけにはいかない。あくまでも実戦をと希求する団長ピニャの指令を受けた彼女たちは、赤・白・黄色それぞれ薔薇を紋章とした軍旗を先頭に、アッピア街道を進んでいたのである。

盗賊の攻撃を受けたイタリカの街は、見るも無惨な姿となっていた。
城門は攻城槌によって破られて、内側に倒れている。城壁の内側に立つ木製の櫓や鐘楼などは、そのほとんどが火矢を受けて黒煙を空高くあげていた。
外から降り注いだ矢が、城壁を越えて城壁に面した家にまで届き、家々の屋根にはりねずみのごとく突き立ってる。そして、城壁を挟んでその内外に、盗賊側、イタリカ側双方の死体が散らばって、地面の各所には赤黒い流血の血だまりができあがっていた。
まだ体力のある者は、城壁の内側で起きた火災を鎮火させるべく走り回っている。小さな火には水をかけるが、火の手の強い建物は破壊するしかない。
女達は中程度や重傷の者を手当てし、子ども達はあたりに散らばり落ちている武器や矢の回収作業をしていた。
負傷の程度の軽い者は、スコップを手に死者を埋葬するための穴を城外で掘っている。本来なら

簡易にしても葬祭を行わなければならないところである。しかし、その数が多すぎるため、葬祭を省いての埋葬となってしまった。盗賊の遺体に関しては、大きな穴を一個掘って、全員丸ごと放り込むのが精一杯であった。

こうして、兵士も、商人も、酒場の女給も、男も、女も、老いも、若きも、関係なく街の人間は一人残らず駆り出されて働いていた。払暁から昼過ぎまで続いた戦闘から、休む暇もなく作業に追い立てられ、誰もが疲労していた。

「姫様……あの、少し、少しでよいのです。休ませてもらえませんか？」

作業の監督をしていたピニャの元に、住民代表の老人がおずおずと話しかけてくる。

皆が疲れ切っていることは見れば判るし気持ちも理解できる。だが、今は少しでも早く死者を葬り、燃える民家や鐘楼の火を消し、城門や柵の修理を済ませて、武器の手入れを終えなくてはならないのだ。

その重要性を知るピニャは、休みたいと訴えかけて来る老人に対して、むっすりといかにも不機嫌そうな表情を見せることで、苦情を言いにくくすることしかできなかった。

「盗賊共はまだ諦めてない。態勢を立て直したら、すぐに攻め寄せて来よう。その時に壊れた城門と、崩れた柵で防げるというのなら、休んでもよいぞ……」

「し、しかし」

この老人から見れば、ピニャは理不尽なことを強いて来る暴君にしか見えないだろう。立ってい

る場所が違うために、見えているものが違うのだ。彼らに理解をしてくれと求めることは甘えなのかも知れない。ならば仕方のない。

「私はお前に頼み事をしているのではないぞ」と、頭ごなしに命じるのみであった。

「グレイ、城門の具合はどうだ、直せそうか？」

門扉の具合を見ていたグレイがピニャを振り返った。

「姫様、小官の見立てたところ直すのは無理ですな。蝶番の根本から完全にひしゃげております」

「ならばどうすればいい？」

「いっそのこと塞いでしまってはいかが？」

ちょっとした作業で出入りする程度なら城門脇の小口が使えるし、この事態にあって商取引で馬車や荷車などを出入りさせることもない。門扉を開いて内側から撃って出るといったことも考えられないから、防戦という目的に置いては城門など塞いでしまっても問題はないのだ。

「悪くない。そうしてくれ」

グレイは市民に指図すると、木材、堅牢な家具などを集めてきて、門扉のあった場所に積み上げる作業を始めさせた。

「そんなものばかりでは燃えるだろう。まずくないか？」

ピニャの言葉にグレイは肩をすくめて、火がついたなら燃え草をどんどん放り込んでやりましょうと応じた。

言われてみて確かにとピニャは頷く。燃えさかる炎ほど強固な防壁はないかも知れないと理解したのだ。

ピニャは振り返ると、城壁の上へと顔を上げた。

「ノーマ!!　そっちは、どうだ？」

城壁の上では、弩銃や弓を手にした兵士達が、外へと警戒の目を光らせていた。ノーマは振り返ると、声を投げ降ろしてきた。

「今のところ、敵影なしです」

「そのまま警戒を怠るな。敵がいつ再び攻め寄せて来るかわからんぞ」

ノーマは、この指示に頷くと、額からにじむ血を拭こうともせずに部下の兵士に監視を命じるのだった。

「さぁさぁ、お腹がすいたのではないですか？　食事の用意をしてまいりましたよ」

そこに、そんな声が聞こえたかと思うと大鍋を載せた荷車がやってきた。運んでいるのは伯爵家のメイド達である。出てきたのは大麦を牛乳で煮詰めたドロッとした粥と黒パンである。どちらもあまり美味いものではないのだが、空腹は最高の調味料とも言う。

ピニャも、食事の臭いに空腹感が刺激された。すきっ腹を抱えたまま突貫工事を続けても効率も落ちるばかりと考え、交替で食事をとりつつ作業を続けるように命じる。そうしておいて、自分も食事をとるべく、空腹と疲労で重くなった身体を引きずるようにして、フォルマル伯爵家の館へと

向かったのである。
　警備の兵士などの男手は、ほとんどが城壁守備に出向いているため、伯爵家の城館は門から玄関に至るまで人の姿はない。彼女を出迎える者もなかった。
　かといって誰もいないわけではない。屋敷の中庭では大鍋がいくつも置かれ、大麦の粥が煮立てられ、黒パンが焼かれていた。炊き出しのために城館のメイド達は全員駆り出されて、忙しく立ち働いているのだ。
　どうにかピニャを認めて出迎えたのは、伯爵家の老執事とメイド頭の老女だけである。
「皇女殿下、お帰りなさいませ」
「ああ。すまないが食べ物と、何か飲み物を……」
　老メイドにそう伝えて、ピニャは自分の屋敷でもあるかのように、ソファーへとどっかり座り込んだ。
　傍らに立つ白髪の執事が、ピニャに葡萄酒の入った銀のコップを差し出した。
「皇女殿下、どうやら守りきることが出来たようですな」
「まだだ。奴ら、またすぐに襲って来る」
「連中と戦わずに済ますことはできないのでしょうか？　話し合いでなんとか」
「争いを避けるのは簡単だぞ。城門を開け放って、街の住民も財貨も食べ物も何もかも、連中の手に委ねてしまえば良いのだ」

争い事を避けたい一心の老執事は、ピニャの言葉に光明を見たのか、ほっとしたような表情をする。

「そのかわり全てを奪われ、男は殺されるだろう。若い娘は奴隷だろうが、その前に多分きっと、いや必ず陵辱されるぞ。妾などは見ての通り佳い女なのでな、野盗共が寄ってたかって群がって来る。一人や二人ならなんとかなるかも知れないが、五十人百人を相手にして正気を保つ自信はないぞ。時に、ミュイ伯爵令嬢はどうかな？」

「み、ミュイ様はまだ十一歳ですぞ」

「そういう幼い少女が好きという変態がいるかも知れないぞ……いや、きっといる。必ずいるな……でもいないことを神に祈って、敵に対して城門を開け放ってみるか？」

老執事は額の汗をぬぐいつつ、呻くように言った。

「で、殿下。あまり、虐めないでくださいませ」

「ならば、戦うしかあるまい？　平和を求めて、相手の言いなりになるのも道の一つだが、それは結局の所、滅びの道だ。戦は忌むべきものだが、それを避けることのみ考えると結局の所全てを失うのだ。ならば、歯を食いしばって戦うしかない」

ピニャは差し出されたワインを一気に飲み干した。

「ふぅっ」と、ひと心地ついたのか口元をぬぐって大きなため息をつく。そして、老メイドが運んできた大麦粥とパンに手をつけた。だが一口で眉を寄せた。

「味にしても、量にしても物足りない」
老メイドは、毅然として首を振った。
「いけません。疲労の強い時は、胃も疲れているものです。味の濃いもので腹を満たしてはかえって健康を損ねます」
ピニャは、老メイドの言葉に理があることを素直に認めた。考えてみれば、城館のメイド達はこの事態に至っても動揺が少なく、黙々と炊き出しなどの作業に従事している。そもそも彼女は炊き出しなどの作業を命じた記憶もない。とすれば誰の指図か？　執事は今の会話のように、恐れおののいているばかりで何も出来ない臆病者だ。となれば、この老メイドではないか？
そう考えてピニャは老メイドに尋ねた。
「お前は、このような事態の経験があるのか？」
「かつて、ロサの街に住んでおりました」
ロサの街は、三十年ほど前に帝国の侵略を受けた街で、どうにか帝国軍を撃退したものの政治的な敗北から帝国に併合されて、現在は廃墟となっている。
その戦いの際、この老メイドはロサにいたのだろう。戦いとは、なにも弓や剣や魔法を撃ち合うばかりではない。攻められる街にあって兵士を励まし、武器を手入れし、食糧を管理しつつ食事の手配を遺漏無く整えることもまた戦いとなる。
その意味で、この老メイドは実戦証明済みの存在だった。

伯爵家の当主が幼く、全く頼りにならないという状況下で、メイド達に動揺がないのも、この老メイドが彼女たちの上に君臨しているからであろう。

ピニャは、老メイドの言を受け容れ、食事を腹八分目で止めることにして、布巾で口元をぬぐった。

「では、客間にて休ませて貰う。もし、緊急を知らせる伝令が来たら、そのまま部屋にまで通すよう」

そう老メイドに伝えて、ふと湧き上がった悪戯心から次のように尋ねてみた。

「もし、妾が起きることを拒んだらなんとする？」

すると、老メイドは「水を頭からブッかけて叩き起こして差し上げますとも」と凄みのある笑顔を見せた。

ピニャはコロコロと高らかに笑った。そしてベッドで水浴びしないですむようにしようと言いながら、客室へと向かうのだった。

ところがである。結局のところ彼女を叩き起こしたのは水の冷たい感触だった。

顔を布でぬぐい、濡れた衣服の上に鎧を手早くつけつつ、ピニャは怒鳴った。

「何があった！　敵か？」

濡れそぼった朱髪を振り乱すピニャの姿になんとも言えない艶気を感じつつも、事態の急変を知

らせに来たグレイは、そんな気分は隠して報告した。
「はたして、敵なのか味方なのか、見たところ判りかねますな。とにもかくにもおいで下され」
城門にたどり着いて見ると、戦闘準備を整えた兵士と市民達が、城壁の鋸壁から、あるいはバリケードの隙間などから、門前の様子を盗み見ていた。
「姫様。こちらからよく見えます」
フォークシャベルを手にした農夫の一人が、積み上げたバリケードの隙間を譲ってくれた。
覗いてみると狭い視界の向こう側に、四輪の荷車が三台停まっている。……ただしこれを牽く馬や牛の姿を見ることが出来ない物だった。
ピニャは、動力となる馬や水牛、そして兵員を大きな箱の中に収容して城壁に近づく『木甲車』という攻城兵器の存在を知っている。だから、門前に停まる三台のそれを『木甲車』に類する物ではないかと考えた。
よく観察すると、三台中二台の天蓋は布あるいは皮革製に見える。
これでは矢玉や熱湯、溶けた鉛を避けることは出来ても、岩程度の質量のあるものを投げ落とせば潰れてしまうだろう。するとやっかいなのは、後ろの一台だ。この一台は木製どころか、鉄で全面を覆っているかのように見えるのだ。
その『鉄』甲車内には、やはり人間がいるようだ。天蓋には『長弩』らしき武器を備えていて、なるほど、矢や石礫(いしつぶて)を避けつつ城壁に近づき攻撃も可能とする工夫のようだった。

だが、いかに優れた兵器とは言っても、それだけで城市は落ちない。

矢を放ち、雲霞のごとく城壁に攻め上る兵がいてこそ、これらの攻城兵器は生きてくるのだ。だが、見渡せる範囲では他に敵の姿はいない。また、門のあったところに築かれたバリケードを、破壊しようとするなどの敵対行動を起こす様子もなかった。

兵器の存在を見せつけ守備側の戦意を低下させようとする意図ならば、それなりの示威行動を示すものだが、それもしないとなると何が目的でここにいるのかが分からなくなる。

「ノーマ!?」

「他に敵は居ません」

尋ねたいことがわかったようで、直ぐに答えがあった。

『木甲車』内にいるのは、斑……深緑を基調として茶色や、薄緑を交ぜた配色の衣装を纏い、同じ斑なデザインの布で覆われた兜を被った兵士達だ。

手には、武器なのか杖なのか判別の難しいものを抱えている。その険しい表情や鋭い視線などから、この者達が油断のならない力量を有した存在であることはわかる。

「何者か!?　敵でないなら、姿を見せろっ！」

ノーマによる誰何(すいか)の声が、頭上の城壁から厳しく響いた。

どんな反応が起こるのかと、ピニャもイタリカの兵士も、住民達も皆、息を呑んで見守っていた。

待つこと、しばし。ふと、木甲車の後の扉が開いた。
そこから、一人の少女が降り立つ。年の頃十三〜十五ぐらいだろうか？　身に纏っているローブや、手にしている杖などから魔導師であることは一目でわかった。
杖を見るとオーク材のくすんだ長杖……すなわちリンドン派の正魔導師であることは明白だ。となれば、いかに年若く見えようとも、攻撃魔法も魔法戦闘もこなすはず。
先ほどの襲撃では、盗賊側に魔導師は確認されていなかった。だからこそ守り切れたと言っても過言ではない。だが、もし盗賊側に魔導師が加わったとなると、かなり難しい戦いを強いられることになる。
その困難さを考えて、ピニャは舌打ちしてしまった。
続いて降りてきたのは、見たことのない衣装を纏った十六歳前後の娘だった。
その衣装は上下ともに肌にぴたっとしていて、ほっそりとした身体のラインがあからさまになっていた。さらに丈が短くて腹部や背中あたりの白い肌がチラチラと見えてしまうのは、男性連中には目の毒だろう。
ピニャはこの衣装が、それが目的のデザインなのだということを、女として直感的に理解していた。
問題は、この娘が笹穂状の耳をもっていることだった。すなわちエルフだ。しかも金髪碧眼持ち。

まずい……向こうには魔導師ばかりかエルフまでいる。エルフは例外なく優秀な精霊使いと聞く。特に風精霊を使役した雷撃の魔法は、強力なものとなれば一軍を壊滅させる力があることで知られている。リンドン派の魔導師と、エルフの精霊使いの組み合わせ。騎士団を率いていたとしても、戦場で出会いたくない相手と言えるだろう。

油断している今こそ、二人を同時に倒してしまうチャンスではないか？　弩銃で狙撃をすればあるいは上手く行くかも知れない。

そんな風に二人を倒す方法を考えていたが、その後に出てきた娘を見て、ピニャは、濡れそぼった衣服が急激に冷えていくのを感じた。

フリルにフリルを重ね、絹糸の刺繍に彩られた漆黒の神官服。

黒髪を黒い紗布のついたヘッドドレスで覆う、いとけない少女。

「あ、あれはロゥリィ……マーキュリー」

それは死と断罪と狂気、そして戦いの神エムロイに仕える使徒だった。

皇帝は国家最高神祀官を兼ねるため、国事祭典に使徒を招聘して会談を持つこともある。従ってエムロイの使徒と謁見する機会もあった。だからピニャは、彼女を見知っていたのだ。

「あれが噂の死神ロゥリィですか？　初めて見ますが、見た感じじゃここのお屋敷のご令嬢ほどでしかありませんね……」

魔導師の少女や、エルフ少女と比べても、ロゥリィは小さく幼そうに見える。

が、自分の体重ほどもありそうなハルバートを、細枝のような腕で軽々と扱って、ズンと大地に突き立てる腕力が凄まじい。

「見た目に騙されるな。あれで、齢九百歳を超える化け物だぞ」

帝国などこの世に影も形もなかった時から延々と生き続ける不老不死の『亜神』、それが使徒である。これでもロゥリィは、十二使徒の中でも二番目に若い。

使徒・魔導師・エルフの精霊使い……この三人の組み合わせがもし本当に敵ならば、ピニャはさっさと抵抗を諦めて、逃げ出す方法を考えようと思ってしまった。

「だけど、エムロイの使徒が盗賊なんぞに与しますかねぇ？」

グレイの問いを、ピニャは首を振って否定した。

「あの方達なら考えられなくもないのだ」

使徒に人間の物差しは通じない。彼そして彼女らは、皇帝や元老院の権威や法、あるいは正義といったものに全くの無関心なのだ。いや、逆に軽蔑していると言っても過言ではない。

ピニャは惨憺たる思いで語った。

「神という存在は、正しく生きようが悪徳に生きようが関係なく、祟る時は祟るし、悪しきことを起こしてくる。善良に生きても病にかかるし、暴虐の限りを尽くす暴君が長命だったりする。誰が祀ろうとも、何を祈ろうとも、それはあまり関係ない。

神という存在はヒトには理解できない存在なのだ。あるいは、ヒトには理解できない価値感があ

るのかも知れないがな……ただの気まぐれだと言い張る者もいる」
ピニャの感想を受けて、グレイは呻きながら額に流れる汗をぬぐった。
「神官連中の耳に入ったら大変なことになりますぞ」
「そうだろうな。何しろ、連中は神の御心の代言者として神殿にいるのだからな。その神の御心がなんだか理解できない、でたらめに近いものだなどと言ったら、神官連中の存在意義に関わる。そりゃあ反発されるだろう」
多神教の世界では信仰の対象に正邪の別はない。異端審問の類もない。特定の神が嫌いになれば他の神に帰依すればいいのだ。だが、神官団という宗教組織が、政治と結びついて様々な力を有していることもまた確かである。いたずらに神を貶せば、それを理由に攻撃されたり嫌がらせをされることも起こり得る。
結局の所、それは人のすることなのだが、信仰と結びついているから「それが神槌である」と詐称される場面も少なくないのだ。
「し、小官は、聞きませんでした」
結構信心深いグレイは、ぶるぶると首を振って背中を向けて両手をあげてしまうのである。そんなグレイの背中をピニャは面白そうに笑うと、バリケードの隙間から外へと視線を向けた。
「おっ……来たな」
再び目を門前に向けると、こちらに歩み寄って来る魔導師の少女の姿があった。

10

イタリカの街。その門前は物騒な気配に充ち溢れていた。

普段ならその場所は、荷車や馬車が行き交い関税の手続やら支払いの手続で追われる商人の姿で賑わっている。だが、今は無惨なまでに破壊されている。代わりに木材や家具等、手当たり次第にかき集めて来たことの判る適当な資材を山となるほどに積み上げて、来る者全てを拒む構えを見せていた。

三階建てビルに相応する高さを持つ石造りの城壁上には、守備の兵士達がずらりと並んで、石弓、弩、弓矢を構えてこちらに向けている。

一度の発射で、何本もの矢を放つことが出来る機械式の連弩なども設置されていた。

投げ降ろすためだろう、瓦礫とか石とかも山積みにされていた。

また、通常なら武器とは考えることのない物まであったりする。例えば、火が焚かれてその上に置かれた大鍋が湯気をあげている。

これが河原とか、山のキャンプ場ということなら、芋煮会でもしてるのかと思うところである。

だが、それが城壁の上でとなるとのんびりとした食事の支度などでないことが直感的に理解できて

しまうのだ。

「熱湯を浴びせられるのだけは勘弁して欲しいところですねぇ」

高機動車運転席の倉田のつぶやきを耳にして、伊丹は「聞いてないよ～」とか言いたくなってしまった。熱湯というのは、テレビの旧いバラエティ番組などでは捨て身ギャグ用小道具として扱われたこともあってその威力が軽視される傾向にあるが、現実的には化学兵器並みに凶悪な代物なのだ。

もし、その熱さによるショックで死ねなければ、かなり長い時間苦しみ抜くことになる。

全身の火傷による漿液性炎症は果てのない体液の滲出を引き起こして、結局のところ体液の大量損失を招く。これによってもなお死ねないとすれば、さらに皮膚を失ったが故の細菌感染がおこり、壊死組織の腐敗、敗血症と徹底的に苦しみ続けることになる。万が一、回復できたとしても、ケロイドや組織の引きつり等の不自由と苦痛を、一生背負うことになるのだ。

もし、あれが熱湯などではなく実は鉛を溶かしたものだと知ったら、伊丹は直ちに全力疾走で逃げるように号令してしまっただろう。と言うのも、伊丹は自殺の手段として、灯油をかぶって火をつけるという方法を選んだ者の姿を見たことがあり、その人物が生き残ってしまったが故に味わった苦痛の一部始終が彼の記憶の深奥に根太く刻み込まれていたからだ。

イタリカの守備兵が手にする武器は、伊丹らのものと違って見た目にも鋭さとか、熱そうとか、いかにも切れそうとか、『凶器』と呼ぶにふさわしい禍々しさがある。

テレビやドラマ、小説や漫画の中で『殺気』という言葉がよく出てくるが、現代社会に生きる伊丹はそんなものを感じ取ったことはない。ある種の武道の達人になれば察知したり、発することが出来るのかも知れないが、現実的にあるものと言えば、このように実際に目にしたものから連想される痛覚であり、痛いのは嫌だなぁ、熱いのも嫌だなぁというイヤ～な気分。そして警戒されてる、敵意をもたれているという気分の綯い交ぜになった感覚が緊張を引き起こして、殺気めいたものとして感じられるのである。

この気分に負けた後ろ向きな心境を『臆病風に吹かれる』と言っても良いのかも知れないが、伊丹はそんな状態だったので……、

「何者か!?　敵でないなら、姿を見せろっ！」

などと頭上から鋭く響く誰何の声を聞き取れずとも、その真意を語調から理解して、がばっと振り返り「お呼びでないみたいだから、他の街にしない？」とレレイに告げたとしても仕方のない話かも知れない。

「見たところ、街の人も忙しそうだし、この様子じゃあのんびり商談ってわけにはいかないと思うんだよね。何と戦っているのか知らないけど、巻き込まれるのはゴメンだし。ボクとしては、我が身と君たちの安全安心を何よりも優先したいなぁって常日頃から心に留めているのだけど、どうだろ？」

「確かに、熱烈な歓迎ぶりっすねぇ」

などと運転席の倉田はつぶやき、桑原曹長は無線で「こちらからは手を出すな。敵対行動と見られるような挙動はするなよ」と緊張感を孕んだ口調で指示を下す。二人とも、手にした小銃の筒先を油断無く外に向けている。

しかし、レレイは相変わらずの無表情と抑揚に欠けた発音で「その提案は却下する」と告げた。

「でもさ、現実的に見てもこの城門の有様じゃ、俺たち中に入れないけど」

「入り口ならば他に存在する。イタリカの街は平地の城市。東西南北の全てに城門があり、他が健在なら出入りは可能となる」

実際に、城市の出入り口が一つしかないというのは考えにくい話である。

「イタミ達は待っていて欲しい。私が、話をつけてくる」

レレイはそう言うと、腰を上げた。それを見て「ちょっと待って」とテュカが止めた。

テュカも伊丹同様に、なぜこの街にこだわる必要があるのかと尋ねた。

伊丹のように臆病風に吹かれているわけではないが、冷静に考えても戦時下の街に入って利益があるとは思えないのだ。巻き込まれる恐れは十分……というより、街に入ったら完全に巻き込まれることになる。街側の人間として戦うことを強いられるだろう。

レレイは答えた。

「入れるかどうかは問題ではない。この場で、私たちが敵ではないことだけは理解させておきたい。このまま立ち去れば、私たちが敵対勢力だと誤認される恐れがある。後日この街を訪れるにし

ても、他の街に行くにしても、そういった情報が流布すると、今後の活動に差し障る」
「でも、あたしたちの都合に、この人達を巻き込むことにならない？」
テュカはそう言って、伊丹や黒川達へと視線を巡らせた。
「この人達は、何も求めずにあたしたちを助けてくれているのよ。そんな人を危険なところに巻き込むわけにはいかないでしょう？」
「だからこそ行く。私たちはイタミ達に恩を受けている。私たちの都合でここまで来て、イタミ達が敵と思われたり、評判が落ちるのは私の求めるところではない」
「イタミ達のため？」
「そう。この特徴的な乗り物の主は、イタミ達をおいて他はない」
こう言われてしまうと、頷かざるを得ないテュカであった。
「大丈夫。商用で来たことを告げて、事情を確認するだけだから問題ない」
「わかったわ。でもそう言う理由なら一人で行かせるわけにはいかないし、外に出るなら、矢除けの加護が必要よ」
テュカはそう告げると、精霊語による呪文を唱え始めた。
すると、ふと、風がそよいだような気がする。
そうしておいて、レレイ、テュカ、そしてロウリィの三人が車外へと降り立ったのである。
「イタミ達は待ってて」

再度告げて、三人は、ゆっくりと城門へと歩み寄っていった。
守備兵達の構える弓矢や弩銃の尖端が、ゆっくりと動いて彼女たちを追尾している。
これを見守る伊丹としては、いくら「待ってて」と言われたにしても気分が良くない。なんとなく「大人として、男として、自衛官として、人としてどうよ」という文字が、彼の脳内スレッドに次々とアゲられていくのだ。
しばしの逡巡。
伊丹は憶病に徹してガタガタブルブルと震えていることもできないという意味では、ヘタレであった。要するに見栄とか、虚栄心とか、そういった類のものをちゃんと持ち合わせているのだ。
もちろん、一般の大人はそれを「見栄です」とは言わず、任務とか、義務とか言い換えて自分を騙そうとする。だが伊丹自身はそういうところは素直なので、平気で「俺、恐ぇのは嫌なんだけど、みっともないのも嫌だよなぁ……」などと呟いてしまうのだ。
そして盛大な舌打ちの後に六四小銃を車内に残し、とっても重たい防弾チョッキ2型の襟をしっかりと寄せつつ車外へと降り立ったのである。
ちなみに、彼らの個人装備はイラクＰＫＯに準じている。
彼の腿には拳銃が下がっているので武装してないわけではない。小銃を置いたのは、外見的に武器っぽく見えるものは持たない方がいいだろうなぁと思っただけである。
「俺も行ってくるわ。っていうか、行かないわけにはいかないでしょう。というか行かせてくれ」

「誰も行くななんて言っておりませんわ」
身も蓋もないセリフを口にしたのが誰かまではあえて言及しまい。ただ女声だったということだけは確かである。
しばし、間の抜けた数秒が過ぎた後に伊丹は「桑原曹長、あとは頼んだよ。なんかあったらすぐに助けに来てよ」などと告げて、レレイ達の後を小走りに追ったのだった。

ピニャは決断を強いられていた。
確固たる判断材料がないままに、どうするべきかを決めなければならないのだ。それは賭博的要素の強い決断であった。
「グレイ、どうすればいい？」
歴戦のグレイをしても、ピニャの質問に対して明確な答えを出すことが出来なかった。誰も結果の保証などしてくれない。そんな状況で、判断を下さなくてはならない重圧が背中に重くのしかかっていた。『指揮官の孤独』と呼ばれる状態である。
武器を構える兵士達は、皆ピニャの下す決断を待っている。
弓を引き絞る弓兵の手が小刻みに震えている。
農夫がフォークシャベルを抱えて待っている。
剣を手にした兵士、街の住民達、すべての運命がピニャの判断にかかっているのだ。

まず、エムロイの使徒たるロゥリィ・マーキュリーと、それに続くエルフ、魔導師は盗賊に与しているか否か？

答え……否。否としたい。

理由……もし当初から盗賊に与しているのなら、最初の攻撃から参加していたはず。そうしていればイタリカの街は今頃陥落していた。

しかし、ロゥリィ達が最初から盗賊に与していたとは限らない。戦いに加わらず日和見を決めていて、あと一押しと見て参加したかも知れない。初戦に参加していなかったという理由はロゥリィ達が盗賊側に与してないと考える理由としては乏しい。

そもそも盗賊でないとするなら、ロゥリィ達はこのイタリカの街に何の用で現れたのか？　戦時下の街に訪ねて来る意味は何か？

いっそのこと、ロゥリィ達の入城を拒否してしまおうか。だが、入城を拒否したことで彼女らを敵側に押しやってしまうおそれもある。

それに、ロゥリィ達が敵でないのなら、ピニャとしては是非とも迎え入れたかった。

もし、ロゥリィ達を味方に引き入れることが出来れば、心強い援軍となってくれるだろう。なにしろエムロイの使徒と、エルフと、魔導師だ。兵士も、街の住民達も必勝を確信して奮い立つはず。

自分が、兵士達に必勝を信じさせるようなカリスマに欠けていることは、ピニャは痛切に感じて

いた。
もし、勝てると思わせることが出来なければ、きっと脱走する住民が出て来る。一人でも逃げ出せば、その後はもう雪崩をうって我先に逃げ出そうとするはず。そして統制がとれなくなり、結局盗賊達の思惑通りとなってしまうのだ。
ロウリィ達が何の用でここまで来たかは知らないが、彼女らを説き伏せることが出来れば住民達に「援軍が来た！」と告げることが出来る。
いやいや、説き伏せている時間など無い。無理矢理、強引にでも味方にしてしまわなければならない。
あるいは、入城を拒絶するかのどちらかだ。
こうして、ぐるぐると思考が巡り決断のつかない状況の中で、ついに城門小脇の通用口の戸が外から叩かれた。
息が止まる。
そして、唾をグビと呑み込むとピニャは決断した。勢いだ。勢いで有無を言わさず、巻き込んでしまえ。巻き込むと決める。
三本ある閂を引き抜くと通用口を、力強く、勢いよく、大きく開く。
「よく来てくれたっ!!」
クワァバンッという鈍い音と妙な手応えに、ふと我に返って見る。するとロウリィも、エルフの

娘も、魔導師の少女も、通用口の前で仰向けに倒れている男へと視線を注いでいた。
男は、白目を剥いて意識を失っているようだ。
やがて彼女たちの、やや冷えた視線がゆっくりとピニャへと注がれる。
「……もしかして、妾？　妾なのか？」
白い魔導師の少女が、黒い神官少女が、そして金髪碧眼のエルフ娘が、そろって頷いた。

＊　＊

事故であることは理解できるので、レレイも、ロウリィも、ピニャを非難したり、怒ったりするよりも、まずは意識を失った伊丹を介抱すべく動いた。
大の男一人分プラス装備によってずしりと重い体を、加害者の女にも手伝わせ城内へと運び込む。そして通気をよくするために衣服をゆるめようと試みた。
まず兜らしき、かぶり物をとる。
次いで衣服をゆるめようと思うのだが、布製と思っていた上着は金属のような硬い板が仕込まれた鎧であった。外見的にもそうだが、紐だとか、箱だとか、用途の判らない色々なものが身体のあちこちに装着されていて、どう手をつけて良いのかわからないので、とにかく襟元だけをなんとか開く。

枕代わりにロゥリィが膝を貸し、テュカは伊丹の腰に手を回して、取り付けられていた水筒を引っこ抜いた。

守備の兵士達も街の住民達も、「なんだ、どうした？　何があった？」と寄ってきた。既に緊張感がふっとんで、誰も彼も野次馬モードである。

ピニャは「あわわ、はわわ」と動転しているだけで、何も出来ない。

レレイは、とりあえず学んだ範囲で伊丹の様子を診察していた。

瞼を開いて眼振の有無、口や鼻、耳を覗き込んで出血や損傷の有無、首や顔面、頭部等に触れてみて手で触れて判る範囲での外傷の有無が着眼となる。これらに異常が無いことを確認して、初めてホッと息をついた。

そうしておいて、ようやくピニャへと非難の視線を向ける。

「貴女、何のつもり!?」

ところが、非難第一声はレレイではなくテュカのものだった。

テュカは伊丹の頭に水筒の水をどぼどぼと浴びせながら、戸を開けるのにその前に人がいるかも知れないと気を配るのは、ヒトであろうとエルフであろうとドワーフであろうとホビットだろうと知性を持つ者なら当たり前のこと、不注意に過ぎる、とピニャを強く、とても強く非難した。

激昂のあまり「まるで、ゴブリン以下よっ！」とまで言い放つという無礼をしてしまうのだが、自分の不注意が原因であることはピニャも重々承知しているので、身分云々を別にして恐縮するば

かりであった。そりゃあもう、皇女殿下に似つかわしくないほどの謙虚さであった。
誰かが強く怒っていると周囲の人間は一緒に興奮するか、逆に冷静すぎるまでに鎮静するかのどちらかである。この場合のレレイは冷静になった。そして、自分たちがイタリカの街の中に入り込んでしまっていることに気付いた。
見ると、通用口は閉じられてしっかりと閂も下りている。
見渡すと、守備の兵士とか街の住民とかが周囲をぐるりと取り巻いている。
思わずロゥリィと視線を合わせる……が、黒い神官少女は面白げに微笑むだけであった。

伊丹が意識を回復したのはほどなくしてからである。
痛たたと、痛打した顎をさすりながら、目をあけると黒い神官少女ロゥリィの顔が逆さまとなって視野一杯に伊丹を覗き込んでいた。
彼女の黒髪の尖端が伊丹の顔あたりまで降りてきていて、チクチクと痛い。
この神官娘は容姿こそ幼いくせに、遊び慣れた大人の女性のような、話の解る悪戯っぽさをもっていて、冗談とも本気ともつかない際どさを楽しんでいる様子が見受けられた。彼女の手が伊丹の頭を抑えるように、それでいて抱えるようにして、彼女の膝の上にその頭を載せている。そして、その漆黒の瞳にどういうわけか妖艶な女を感じさせられてしまう。
「あらぁ、気が付いたようねぇ」

それは、この世界の言葉であったが、単語も覚えていたし状況からの推察も比較的しやすい。何よりも鈴の音のようなロゥリィの声が、とても聞き取りやすかった。

「ちゃんと、憶えてるかしらぁ？」

伊丹は頷いた。

目前で突如迫ってくる通用口の戸。顔面から顎にかけてを痛打して揺すられる頭。直後に真っ暗になる視界。どうやらしばしの間、意識を失っていたようだった。

視野一杯に広がっている、ロゥリィの顔の外側……つまり周囲は、たくさんのヒトがいて伊丹を注視している。レレイの心配そうな表情も目に入った。

ふと、テュカが誰かを口汚く罵っている……らしい声も聞き取れた。

外国語というのは勉強に没入しているとある日突然、周囲のヒトの言葉が翻訳しなくても理解できてしまう時が来るらしい。脳の言語野で回路が形成されることでこういう現象が起こるのだが、どうやら顎を痛打して脳を揺さぶられたことがきっかけになったようだ。

重たい防弾チョッキ2型を着込んでいるので、伊丹は少しばかり苦労しながら身体を起こす。

なんでだか上半身はびしょびしょになっていた。

誰かを怒鳴りつけていたテュカも、伊丹の様子に気付いたようで、興奮をおさめ「ちょっと、大丈夫？」と声をかけてきた。

「ああ、みっともないところを見られちゃったなぁ」

伊丹は上衣のファスナーを挙げ、防弾チョッキのボタンを留めた。
そして、レレイから鉄帽を受け取って被る。乱れた装備を装着しなおしていく。
桑原曹長からの呼び出しが小隊指揮系無線機を通じて聞こえていたので、伊丹は胸元のプレストークスイッチを押して返答した。
『二尉、ご無事でしたか？　心配しました』
「どうにかね。ちょっくら意識を失ってたみたいだ」
『もうちょっと返事が遅ければ、隊員を突入させるとこでしたよ』
する必要もない戦闘を回避できたのは幸運とも言えるかも知れない。こんなロクでもない事故で、死傷者を発生させて要らぬ恨みを残すのは損以外の何物でもない。桑原もそう考えていたからこそ、今まで待ったのだろう。捕虜となった味方の救出と、不必要な戦闘の回避。どちらを取るべきか、決断の強いられるところである。
「現況を確認して連絡するから、今少し待機していてくれ」
『了解』
「で、誰が状況を説明してくれるのかな？」
伊丹は周囲の人々へと向かって告げた。
ロウリィは、テュカへと視線を巡らせ、テュカはレレイへと視線を巡らせる。レレイはピニャへと視線を巡らせて、ピニャは助けを求めるように周囲へと視線を巡らせる。最後に周囲の皆が、視

線をささっと逸らせてピニャが取り残されたような、情けなさそうな表情になる。
なんとなく温いというか、ほのぼのというか、……あえて言うならば、まったりとした空気が漂っていた。

11

陸上自衛隊特地方面派遣部隊本部では、幹部自衛官……佐官級の部隊長達が集まって怒号にも似た激論が交わされていた。きっかけさえあれば、今にも掴み合いが始まりそうな勢いである。
そんな部下達の様子を眺め見る狭間は、よっぽど溜まってたんだろうなぁと、しみじみと思う。
陸上自衛隊特地方面派遣部隊では、多くの隊員が鬱屈していた。何しろ『門』のこちら側に来たとしても、することがないのだから。
今、やっていることと言えば、拠点防御。そして少数の偵察隊を派遣しての情報収集・整理、そして集められた情報に基づく運用方針、部隊行動基準の手直し等々と、幹部の机仕事ばかりである。
拠点防御と言っても、実際の戦闘は大小併せても数回ほどで、今では敵対勢力の動きは全く見られない。と言うよりも無人の野になってしまったかのごとく、敵の姿そのものが見られなくなって

しまったのだ。

だから普段の活動は、周辺の警戒警備と陣地の構築、補修整備が中心になる。

これにしたところで、陣地防御を担当する第五戦闘団が行うから、打撃部隊である第一と第四の戦闘団は、陣地内とその周囲で、地味な訓練ばかりの毎日を送っていた。

ちなみに第二と第三は門のこちら側に来ていない。第六以降の戦闘団に至ってはまだ編成すら終了していない有様である。

別に遅れているわけではない。防衛省の都合でゆっくりとやっているのである。攻勢に入るわけでもないのに、今すぐ定員一杯動員する必要はないだろうという、背広組の考えだ。その背景には「お金の事情」があると言われてしまえば文句も言えないのが制服組の立場なのである。

そんな鬱屈している隊員達の耳に、「ドラゴンが出た」「ドラゴンと戦って、住民を救った」などという某偵察隊の活躍は、ある種の羨望のタネとして響いてしまった。

本土にいて平和を満喫しているのなら、無為にも似た毎日を過ごそうとも、まだ耐えられる。だが『門』のこちら側は戦場のはず。第五戦闘団に属する、特科や高射特科の隊員達は戦果を自慢し、普通科の隊員達は銃撃前の緊張と、引き金を引いた際の手応えについて熱く語る。施設科の隊員達は、野戦築城、滑走路の敷設等々と、作業服を泥だらけにしている毎日だ。

任務を与えられ、活躍している連中が目の前にいるというのに、それに比べて自分は……。そんな忸怩（じくじ）たる思いが、日々続く無為が、第一・第四戦闘団の隊員達を静かにしかし確実に腐らせてい

た。そして、そんな隊員達と向かい合う幹部達にも、汚濁にも似た鬱屈は蔓延しつつあったのである。

そこへ降って湧いたのが伊丹からの援軍要請だ。

これを小耳に挟んだ幹部達は色めき立った。そりゃもう、大騒ぎとなってしまった。

伊丹からの援軍要請の要点は以下のようなものだった。

①イタリカという街を含む地域全体が、ここ一ヶ月近く『敵武装勢力』の指揮系統からはずれた集団によって、略奪、暴行、放火、無差別殺害等の被害を受けている。伝聞情報ながら複数の集落が被害を受け犠牲者は多数に及ぶ模様。

現在、第三偵察隊が訪問した市街地が襲われつつあるという状況にある。現地の警備担当者、市民が懸命な防戦にあたっているが、被害甚大。大規模な二次攻勢も間近である。

市代表ピニャ・コ・ラーダ氏より当方に治安維持の協力依頼を受けた。為に支援を要請するものである。

②敵武装勢力の指揮系統からはずれた集団、通称『盗賊』は、特地におけるものとしては高度な装備を有し、騎馬、歩兵、弓兵等の兵種が確認され、数も六百を超える。魔導師と称される特殊能力者については不明。

③『盗賊』を取り締まることが可能な官憲組織が現地にはない。当該地域の行政機関代表フォル

マル伯爵家の某（なにがし）が、上位機関に対して援軍を要請しているが、現地到着には最低でも三日を要するとのこと。

これはすなわち、無辜の民を救うためにという大義名分の元、スカッと叩きのめすことの許されるとっても美味しい悪漢が現れたのである。ここはすなわち、欲求不満の解消もとい、経験値を上げるチャンス！

こうして狭間陸将の元へ、佐官連中が半長靴の音を響かせながら、怒濤のごとき勢いで集まったことが騒ぎの経緯であった。

最早、議論にらちが明かないと見たのか、「是非、自分にやらせてください！」と狭間に決断を求めて来たのは、第一戦闘団長、加茂一等陸佐であった。

第一戦闘団は打撃部隊として、普通科の一個連隊を基幹として特科、高射特科、戦車、施設、通信、衛生、武器、補給等の各職域を集めた連合部隊である。戦闘団というのは聞き慣れないかも知れないが、普段は訓練や管理がしやすいという理由で職域（兵科）別に編成されている部隊を、実戦に即した形に組み直したものと考えていただければよい。

「自分の、第１０１中隊が増強普通科中隊として、既に編成完了しています。呼集もかけましたっ！　直ぐにでも出られます」

加茂一佐の後ろから柘植（つげ）二等陸佐が、はた迷惑なことを言い放ちながら、一歩進み出た。どこの

誰に何が迷惑かというと、実際に出ることになるかどうかわからないというのに呼集をかけられた隊員達にとって、である。今頃、完全武装をして営庭に整列するべく走り回っていることだろう。

「いいや、ダメだ。地面をチンタラ移動してたら、現地への到着に時間がかかりすぎる。その点オレの所なら、すぐにたどり着ける。隊長、是非私の第四戦闘団を使ってください」

健軍一等陸佐が一歩進み出た。第四戦闘団は、ヘリによる空中機動作戦を旨とした戦闘集団……米軍で言うところの空中騎兵部隊たることを求めて編成された。

「ちゃんと大音量スピーカーと、コンポと、ワーグナーのCDを用意してあります」などとほざいたのは401中隊の用賀二佐である。「パーフェクトだ用賀二佐」などと健軍が誉め讃えている。健軍も同行する気満々のようだ。

「……」

狭間は右手の親指と人差し指で眉間を摘むとマッサージした。

いったいどうしちゃったんだろう、こいつらは……キルゴア中佐の霊にでも取り憑かれたのだろうか、などと思ったりする。脳みそまで腐ったのかも知れない。

とは言っても、速やかに援軍を送らないといけないのも確かなのだ。となれば、足の速い第四戦闘団が適している。

決して、キルゴア中佐の霊に取り憑かれたわけではない。それが現実的な理由だからと必要もないのに説明した上で、狭間は、健軍へと命令を下した。

加茂一佐や柘植二佐を含めた他の佐官達は、この世の終わりとばかりに呆然と立ちつくす。喜色を隠さなかったのはもちろん、健軍と用賀だ。

「音源は、どこの演奏だ？」

「もちろん、ワルシャワ・フィルです」

そんなことを言いながら去っていく2人を見送りながらも、数時間後に何が起こるのか、実際に目にしなくても、思い浮かべることが出来る狭間であった。

ＡＨ－１コブラ、ＵＨ－１Ｊヘリの大編隊がＮＯＥ（低空飛行）しつつ、大音響スピーカーがハイヤ・ハー！　ホヨトヨー！（Ho-jo to-ho!）とワーグナーの旋律を天空に響かせる。

右往左往する盗賊集団。

大空に現れたのは、死の翼だった。

対空ミサイルが飛んで来るわけでもないのに、ヘリはフレアを撒きちらし、放たれた光弾は重力に牽かれて放物線を描く。それに続く数十条の軌跡はあたかも天使の翼のごとく白い。

地元民はそれを見て、天使の降臨よ、戦女神の降臨よと畏れるだろう。

ＡＨ－１コブラからロケット弾が発射され、大地を炎が舐める。

天空から降り注ぐ銃火が、盗賊集団をなぎ倒していく。

俯瞰する彼らの前に死角はない。隊員達は、大地に降り立つこともなく、機上から銃撃をもって盗賊集団の掃討を終わらせてしまうことだろう。

それを目撃した現地の住民達は、その光景を黙示録として語るのだ。あたかも地獄のようであったと……。

さて、その頃、イタリカの住民達は城壁や防塁の修理工事に精を出していた。

エムロイの使徒、エルフの精霊使い、魔導師ばかりでなく、噂に聞いていた『まだら緑の服を着た連中』が援軍として来たと知り、街の人々は勇気百倍。兵士達の士気も一気に盛り返したのである。

「炎龍を撃退した」と噂されるほどの実力をもってすれば、盗賊化した敗残兵共などどれほどのものだろう。もちろん『まだら緑の服を着た連中』は併せても十二名でしかないから、自分達も戦う必要はあるだろう。だが、苦しくなってもホンのちょっと我慢していれば、『鉄の逸物（いちもつ）』を抱えた彼らが駆けつけてくれて、盗賊連中を追い払ってくれるのだ。それは安心感を与えてくれる。

これまでの暗い絶望的な雰囲気は一掃され、人々の表情は希望と明るさに充ちていた。誰だって住み慣れた土地や家を捨てて逃げたくはない。守れるものなら、この街を守りたいのだ。そして、伊丹達の存在はそんな彼らの希望となった。

住民達の眩しげな視線が、夕陽を背景に立つ伊丹達の背中へと注がれていたのである。

ところがである、伊丹がピニャに求められたのは最前線の一角となる南門の防衛であった。これでは、臨機応変に動き回って誰かを助けに赴くことなど出来ない。

彼女の説明によると、この南門は一度門扉を破られているという。防備の施設もほとんどが破壊されて修復もままならず、今現在最も防備が手薄な、いわば弱点であり、次回の戦闘で激戦となることが予想される位置なのである。

前回は、内側にしつらえた土塁と柵で乱入を防いだのだが、乱戦となってしまい多数の被害が出た。現在住民達を総動員して柵を修復し、土塁の増強工事をしている真っ最中だという。

伊丹としては、城壁・城門で作る一次防衛ラインを固守するために、そちらに戦力を集中すれば良いのではと考えるのだが、ピニャは、城門と城壁で一度防ぎ、これを破られたら、内側の柵で防ぐという二段階の防備に固執していた。

どうにも彼女は、城門が破られることを前提に戦術を構築しているようである。

援軍が来るまで敵を払いのけながら持てば良いと考える伊丹と、今しばらくは援軍が期待できないから、敵に可能な限り出血を強いて戦意を削ろうというピニャとの違いが、このような形になるのかも知れない。実際、上手く機能するならばピニャのやり方も悪くないので、伊丹は口を差し挟むことはやめることにした。

伊丹は部下達と共に城門上に集まると、夕焼けによって茜色に染まりつつあった中世ヨーロッパの都市を思わせる石造りの美しい街並みを俯瞰した。

地方都市とは言えイタリカは人口五千人を超える。テッサリア街道とアッピア街道の交差点を中心にして、街道に沿う形で商店や宿場が軒を連ねて東西南北に列ぶ。そしてその背後に各種の倉庫

街、馬小屋、商家などの使用人の住宅などが列んでいるのである。
北側の森には、ひときわ大きなフォルマル伯爵家の城館があり、その周辺には豪商達の邸宅が並んで、いわゆる高級住宅街を形作っている。
これらの街並みと若干の森を取り囲む形で、東西南を石造りの城壁が取り囲んでいた。北面の守りは切り立った崖が自然の城壁代わりだ。街道の延びる谷間にだけ城壁が設けられているのである。
伊丹は、そのままぐるりと振り返って城市の外側へと視線を向けた。
地平線まで伸びていく街道。農耕地や、牧草の生えた休耕地、灌木、林、そして掘っ建て小屋のような家が数軒。そして、その向こう側……。
伊丹の双眼鏡には、既に盗賊側の斥候が捉えられていた。騎馬の敵が数騎……ゆっくりと移動している。守備側の備えの確認をしようというのだろう。
さらにその遠方、地平線近くには盗賊本隊の姿も見えた。
「敵の攻勢を、真正面から受けることになりますねぇ」
桑原曹長の言葉に伊丹は頷いた。確かにその可能性もある。
包囲攻撃という選択肢は、盗賊側にはない。
この街を六百弱程度で包囲するには絶対的に数が足りないし、攻め落とすのにも時間がかかってしまうからだ。これでは盗賊行為には不向きである。同じ理由で穴を掘っての侵入とか、平行壕を

掘りつつ近接するという戦術もとれない。

とすれば盗賊の攻撃は、攻め口を決めての強襲しかなかった。ただ、この場合は数を頼んでの力攻めではなく、攻める側の有利を利用したものとなるだろう。

攻める側の有利とは、いつ、どこを攻め口とするかを自由に決められることにある。この自由を利用して、まず一箇所に攻撃を集中させる陽動をかけ、防備が手薄になったところを襲うという方法が一般的なはずだ。

その際の攻撃目標は、陽動にしろ、主攻にしろ脆弱な場所が対象とされるはず。

「なるほど、南門の守りをことさら少な目にして見せるのは……」

長い防衛線のなかで守りの脆弱な部分をつくることで、敵の攻撃箇所を限定したいのかも知れない。

そうして考えれば彼女の作戦も理解できる。

前回の戦いも、守りの薄い場所をわざと作り容易に突破できると錯覚させて、敵が全面攻勢に入ったら一歩引いて守りの堅い二次防衛ラインで消耗戦に持ち込むというものだったのだろう。実際に、敵側も容易に城門が破れたために主力を突入させたら、実は内部の守りの方が堅くて、消耗を強いられ退却せざるを得なかったようだ。

守る街の大きさに比べて、攻める側も守る側も戦力が少ないから、どうしてもこういう戦い方になってしまうのだろう。

脆弱な南門に伊丹達を配したのも、少人数の伊丹達を囮として敵前にぶら下げ、ここを決戦場にしようという意図なのだ。それに気が付いてみれば、城門の内側に構築された柵と土塁の補強に、彼女が熱心な理由も理解できるというものだ。

「とは言っても、敵が二度もその手に乗ってくれるかな？」

である。

敵だって、一度失敗すれば考える。ことさら守りの薄い場所を素直に攻めるだろうか？

それに、この戦術には重大な問題が孕んでいるのだ。

「古田！　機関銃、ここ」「東、小銃はここ」

桑原曹長が、隊員達の配置と担当範囲を次々と決めていく。

隊員達は石造りの鋸壁の谷間に、二脚を起こした六四小銃を置いた。

概ね三階建ての建物の高さから、見下ろすようにして撃ちまくることになる。近づかれてしまえば敵側から放たれた矢がこのあたりにも降り注ぐだろうから、矢の射程外にＦＰＬ（突撃破砕線）をひくことにして、それぞれに何か目印となる地物を探させる。

陽が完全に没するまであとわずか。栗林が、隊員達に個人用暗視装置を配って歩いている。黒川は車両及び装備の留守番が命じられている。

伊丹達の背後には、農具や棒などを手にした市民達が集められて、指示を不安そうに待っている。そこへ仁科一曹が歩み寄ると、単語帳片手にたどたどしい言葉と、両手を開いたり、土を掘る

まねをしたりの身振り手振りで、麻袋に土を入れて運んで来るように指示していた。
他には燃え草となる木製の物や、篝火などの設備についても片づけさせている。住民達は夜になろうとしているのに、「灯りはいらないのか」と首を傾げつつも作業に取りかかった。
こうして、自衛官達が準備を進めていくのをレレイやテュカと共に眺めていたロゥリィは、鉄帽に個人用暗視装置の取り付け作業をしている伊丹の背中に向かって尋ねた。
「ねぇ？　敵のはずの帝国に、どうして味方しようとしているのかしらぁ？」
「街の人を守るためさ」
するとロゥリィは破顔した。
「本気で言ってるのぉ？」
「そういうことになっている筈だけど」
伊丹のおどけたような言い方に、ロゥリィは「お為ごかしはもう結構」と肩をすくめた。
帝国は、伊丹達にとって敵なのである。
敵の敵は味方という考え方からすれば、ここは盗賊の味方をしてもおかしくないところだ。なのに伊丹達はそれをしない。
ピニャは帝国の皇女として、フォルマル伯爵家を守っている。その為にイタリカを守ると、それに協力しろと伊丹らに交渉という名の命令をしてきたのである。
その場にはロゥリィも同席していたが、あんまり気に入らない態度だったので、出て行ってやろ

うかと思ったほどだ。
だが伊丹は「イタリカの住民を守る」ことには同意した。形の上でイタリカを守るという目的が一致する。だから共闘することが出来るのだろう。
それでも敵国の皇女たるピニャの指揮を受け容れる意味がわからない。現に、苛烈な攻撃を受けることが予想される南門で捨て駒にされているではないか。
「理由が気になるのか？」
伊丹は不器用なのか、暗視装置がうまく鉄帽に固定できないようであった。作業しやすいようにそこでロゥリィに鉄帽を持ってもらい、両手で装着していった。
背丈の差があるため、その光景は遠目にはロゥリィに祈りを捧げるために、伊丹が頭を垂れているかのようにも見える。
「エムロイは戦いの神。人を殺めることを否定しないわぁ。でも、それだけに動機をとても重視されるの。偽りや欺きは魂を汚すことになるわよぉ」
作業を終えた鉄帽を、伊丹がロゥリィから受け取ろうとする。だが、ロゥリィは伊丹に手渡さずに、自らの両手をさしのべて伊丹の頭に載せようとした。
伊丹は首をくぐめてロゥリィに鉄帽を載せて貰った。
ロゥリィの疑問に対しては、唇をゆがめる。どうやら笑ったようだ。それがロゥリィにはことさら意味ありげに見えた。

「ここの住民を守るため。それは嘘じゃあない」
「ホントぉ？」
「もちろん。ただ、もう一つ理由がある……」
ロゥリィは、真実を見極めようとしてか伊丹の目を覗き込んだ。
「俺たちと喧嘩するより、仲良くした方が得かもと、あのお姫様に理解して貰うためさ」
ロゥリィは邪悪そうに微笑んだ。伊丹の言葉を彼女流に理解したのである。
「気に入った、気に入ったわぁ。それ」
お姫様の魂魄（こんぱく）に恐怖というものを刻み込む。わたしたちの戦いぶりを余すことなく見せつける。
「自分は、こんなのを敵に回しているのだ」と身体が震え出すぐらいに。そうすれば、喧嘩するより仲良くしたいと思うことだろう。
「そういうことなら、是非協力したいわぁ。わたしも久々に、狂えそうで楽しみぃ」
ダンスの相手に挨拶するかのごとく、ロゥリィは黒いスカートを摘んで優雅な振る舞いで頭を下げるのだった。

戦闘は、夜中過ぎから始まった。
それは日の出まであと数刻という頃合いを見計らっての攻撃だった。
深淵のような暗闇の向こう側から、盗賊側弓兵による火矢が東門へと降り注ぐ。

東門の防衛を任されていたのは、正騎士ノーマ・コ・イグル。

ノーマの指揮にて、警備兵や民兵による反撃の弓射が行われる。民兵と言っても、これまで弓を手にしたこともないような農夫や若者達ばかりだ。当たることなど最初から期待されてない。ただ、そんな彼らの矢も、敵を牽制するくらいには有効だったし、ごく希に命中して敵に損害を与えることもある。

こうして、しばらくの間、弓射戦が続いた。

互いに、兵士が、農夫が、そして盗賊に身を落とした兵士達が、うめき声を上げながら倒れていった。

すると弓兵の間隙を縫うようにして、堅牢な楯を並べ鎧で身を固めた歩兵が城壁ににじり寄ってきた。様々な国の軍装を纏い、楯の大きさも形も、円形だったり方形だったりする。その出身の多国籍ぶりを感じさせる光景であった。

これに対して、腕まくりした商家のおばさんや、年長の子ども達が石を投げ、岩を落とし、溶けた鉛や熱湯をふりまいた。当たるかどうか解らない矢よりも、これらの方がはるかに効果的で、破壊力があった。

壁の下では、頭上に掲げあげた楯で壁をつくった盗賊達が、降り注ぐ雨のようなこれらを避けつつ、城門へとどうにかたどり着いた。寄せ手は矢に傷つき、岩に押しつぶされ、石礫を頭部に受けて昏倒し、そして熱湯にのたうち回ったが、それでも退くことがない。

まるで、アルヌスを落とせなかった恨みをここではらそうとするかのごとく執念を見せて城門に取りついた。巨木を攻城槌として、城門を叩き始めた。

盗賊達……連合諸王国軍の敗残兵達にとってアルヌスでの戦いは戦争ではなかった。

敵の姿も見えず、何が起こっているか理解できないのに、一方的に味方だけが倒れていく。その凶悪なまでの理不尽さに歯噛みし、自分達が相対するのはこんな敵だと教えてくれなかった帝国を憎悪し、自分達を無駄な死へと追いやるだけだった無能な将帥を罵倒しつつ、泥水をすすりしがみつくようにして生き残って来たのである。

指揮官を失い、僚友を失い、所属する軍を失って、補給もなく、食糧もなく、荒野を彷徨した彼らは、盗賊と呼ばれる身に落ち故郷を失った。やがて同様な境遇の者が集まって、数を増し、ここまでに至ったのである。

帝国に対する意趣返し、そんな逆恨みにも似た暴力的な思いだけが彼らを駆り立てていた。要するにこれは八つ当たりなのだ。

これが戦争。剣で敵を切り、矢を撃ち合い、火をつけ、そして馬蹄で蹂躙する。

これこそが、戦い。犯して、奪って、殺して、殺される。

これこそが戦争。血湧き肉躍る戦争を味わおう。

そう、既に彼らは戦争そのものが目的となっていた。自分たちの戦争。自分たちの満足のいく戦争。わかりやすい殺戮と、わかりやすい自分の死。死んでいった戦友達が味わうことの許されなか

った贅沢な手応え。刺し、斬り、刺されて倒れるという肉の感触に充ちた戦争。敵の温かい血を浴びて、冷たい大地を抱擁しながら息絶える。それを味わうためだけに彼らは前に進んでいた。これが無ければ、彼らの戦争は終わらないのだ。

何本もの梯子が城壁にかけられる。

これを、楯を構えた盗賊達がわらわらと昇って行く。

飛んでくる矢を避けるために楯をハリネズミのようにしながら、兵士がいよいよ城壁上へとたどり着いた。

勇敢な農夫が、矢を受けながらも斧を振るって梯子をたたき折る。兵士達は、その勇気に賞賛の思いで弓撃った。「おみごとっ！」と喝采しながら農夫を殺す。

支えを失った梯子が、兵士達と共に地面へと倒れていき、激しい衝撃で人の形をしたものがまき散らされた。農夫もそれを追うようにして大地へと、抱きついていく。

大地を叩く衝撃とともに、歓声が上がった。

それはあたかも祭りのごとき陽盛な狂乱。剣で楯を叩いて、兵士達がそれぞれの言葉で歓呼の声をあげた。

これこそが戦いの神エムロイへの賛歌。

戦いの熱狂こそエムロイに捧げる供物。戦いの篝火は、死んでいく戦士達の霊魂を燃料として激しく燃え上がる。

火矢の炎は城壁の鐘楼を包み、闇を背景に周囲を赤々と照らしていた。

使徒、ロゥリィ・マーキュリーはしばし耐えていた。

両の腕で自らを抱きしめて耐えた。

額に汗を流して耐えていた。

「な、なんでぇ？」

周囲に漂う戦いの魔気が、彼女の肉に染みる。精神を犯す。

「ここに攻めて来るんじゃなかったのぉ？」

戦の炎が心を焦がし、腹中の底から沸き上がる甘美な衝動が、脊柱を突き抜くように駆け上がる。

これに耐えかねて腕が、脚が勝手に動きだす。魔薬に酔った巫娼のように猛り舞う。

「あっ、くぅ」

内からあふれ出る快感に狂い絶頂が彼女を貫いた。闇を背景に黒い亜神が身を捩った。それはあたかも舞い踊るかの様にも見える。

「大丈夫なのか？」

ロゥリィの狂態に驚いて伊丹が駆け寄ろうとしたが、レレイとテュカに止められる。

「彼女は使徒だから……」

よく解らないが、それがロゥリィが煩悶に苦しむ理由らしい。
レレイは告げる。
戦場から離れていてもこれだ。離れているからこそこれで済む。だが、もし彼女が戦場の真っ直中にいたらどうなるか。
敵と見なした者を、衝動的に殺戮して回る。そうしないわけには行かなくなる。これを押しとどめることは誰にも、多分彼女自身にすら不可能なのだ。
レレイの説明に、慄然とする伊丹であった。

「盗賊なら農村あたりを襲ってればいいんだ！　城市を陥そうとするとは、生意気な!!」
騎士ノーマはそう怒鳴りつつも気付いた。こちら側の矢が当たってない。いくら、こちらが素人ばかりにしても、飛んでいく矢の軌道が微妙に目標からそれるというのもおかしな話なのだ。まるで風の守りを受けているとしか思えない。
「まさか、敵側に精霊使いが？」
ノーマは剣を抜いて、城壁上へとたどり着いた盗賊、南方兵を一刀のもとに斬り伏せた。斬られた兵士が、壁から転落して大地へと叩きつけられる。
だが、すぐ後に北方の斧を手にした髭面の盗賊がノーマへと斬りかかってくる。
これを剣で受けると、その後ろから槍を抱えた盗賊が、その後ろから棍棒を抱えた敵が、モーニ

ングスターを抱えた敵が、双剣を手にした敵が、半月刀を手にした敵が次々と守備の兵士や民兵達に襲いかかった。それは、洪水を手で防ごうとするようなものだった。ノーマは瞬く間に敵の群れに飲み込まれてしまった。

次から次へと溢れ出てくる盗賊達。その勢いにイタリカの住民達は押しまくられ、後ずさり、留まることが出来なかった。

ピニャの作戦は、当初より微妙な齟齬を見せていた。

一次防衛線である城門が破られることは織り込み済みだった。でも、崩れ始めるのが早すぎるのである。既に、城壁上が戦場となって、警備兵や民兵が駆逐されつつある。

「味方が脆すぎる。士気は上がっていたはずなのに」

敵はこちらの計略を警戒して、もっと慎重に攻めて来るはずだった。

だが、蓋を開けてみれば、敵に慎重さなど影も形もなかった。

戦術も計略も関係ないとばかりに、ただただ攻め寄せて来る。いかにも戦慣れした敵兵が、勢いに任せてひたすら突き進んで来る。

そして、これを受ける民兵も警備兵も、最初から腰が引けていた。そのせいか、ピニャが期待したほど敵を拘束できず、消耗させることも出来ていない。

それでも、全体的な状態としては、まだ作戦どおりと言えなくもない。

「現実は、頭で考えることとは違う」……この言葉を、言葉として知っているピニャは、現実と予定が解離することは、当然と考えている。だから何故、自分が計画していたことと現実が異なって行くのかまでは、考えを巡らせることが出来なかったのだ。

なんとなくの違和感、奥歯に物の挟まったような感触を感じながらも、ピニャは敵の主目標が東門であるとみなし、予定通り主戦力を東門内側に作り上げた防塁へと移動させることにした。

東門も、南北と西の門と同じく、内側に防塁と柵を並べて二重の守りが形成されている。

二重の守りと言えば聞こえが良いが、最初の守りは突破されることを前提にした、言うなれば捨て駒の消耗品扱いなのだ。

最初の戦いでは、市民達はそのことを理解できなかった。だが、今となってみればわかる。城門の守りにまわされた市民や兵士は最初から見捨てられていると。そのことに気付いて頑張り続けられる人間がどれほどいるだろう。

背後に築かれた土塁と柵。そこにはどんどん味方が集まって来るのに、自分達の所には来てくれないのである。今ここで苦しい思いをしている自分達が、ここで殺されるのを見ているだけ。それを見て絶望しない者がどれだけいるだろうか？

自棄になって無闇に剣を振るう者もいたが、そんな力は続くものではなく、たちまち切り刻まれて倒れてしまった。

「緑の服の人達は!?　援護は!?」

彼らが来るはずがない。だって、彼らも捨て駒として南門に配されたのだから。

こうして、城門に配された最後の一人が倒れるまでの殺戮を、市民達は眺めさせられることになったのである。

東門を占拠した盗賊達は、そのまま内部へと乱入して来ると思いきや、そうは振る舞わなかった。剣で槍で天を突き上げ、数回の歓呼を上げる。それは、読んで字のごとくの血祭りであった。そして、ゆっくりと城門が開かれて、外から騎馬の兵が招き入れられる。

馬蹄の音と共に現れた騎馬兵は、城壁から落下した民兵や守備兵の遺体を引きずっていた。彼らは、城門内へ向かって市民の遺体を投げ込み始めた。

石を投げていた子どもや、おばさんの遺体が放り込まれる。

農夫や職人の頭が投げ込まれる。切り刻まれた身体の一部が、やはり柵へと投げ込まれる。

敵が勢いに任せて攻め込んで来るのを待っていた市民達の前に、彼らの友人や親戚、親や子の死体が山積みにされていった。

柵を挟んで対峙する市民達は、歯噛みして泣きわめき、絶望する友人を支えた。そんな彼らを盗賊達は嘲笑する。

罵声を浴びせる。

柵に籠もって出て来ることの出来ない臆病者と罵った。

死体を人形遊びの道具のように弄んだ。

ただの農夫や商人に武器を持たせただけの民兵が、これを見てどうして耐えられるだろう。

「こんちくしょうっ!!」

血気盛んな若者がフォークシャベル片手に柵を飛び出していき、それを留めようとした者、一緒に駆け出す者が防塁から飛び出してしまった。後は、誰も彼もが勢いにつられて飛び出していく。

こうして城門内の戦いはピニャの意に反して始まり、彼女の作戦は破綻したのである。

嬌声あげるロゥリィの苦悶は、次第にその度合いを上げているようであった。

息を切らせ髪を振りみだし、身体を弓のように反らせる。頭を掻きむしるようにして抱え、悩ましげに啼泣する。両の脚で床を踏み蹴る。

熱に魘されたように喘ぎ、爪を立て表情をゆがめて、呪いに絡め取られ、舞うことを強いられた操り人形のごとく身体を震えさせ、痙攣させ、そして手足を振るう。

自らの意思で止めることが、停めることが出来ないのだ。呪いの舞い。狂気の舞い。だが、同時に美しく麗しいダンスのようでもあった。

レレイの説明によると、戦場で倒れていく兵士の魂魄が彼女の肉体を通してエムロイの元へと召されていく。その魂魄の性質、戦いの気質にもよるが、それは亜神にして神官たる彼女にとって魔薬にも似た作用をもたらすらしい。

いっそのこと狂いきってしまえば楽になる。狂乱に身を任せてしまえばよい。だが、狂いたいの

に狂いきれない、狂うことが許されない。今ひとつ突き抜けることの出来ないもどかしさが、彼女を責め苛み、苦しませている。

「ダメよ、駄目、ダメなの。このままじゃおかしくなっちゃう!!」

咽の奥からの絶叫。彼女の声を背中で聞いていた戸津が、「やべーよ、勃っちまった」と呟いた。

「言うな、俺もだ」

ペドフィリアの気など全くない彼らだが、彼女の嬌声から何を連想させられたかは言うまでもないだろう。律動的に身を震わせるロウリイの声は、それほどに艶めいていた。

さすがに、女性として思うところもあってか栗林が伊丹に「まずくないですか?」と声をかけてきた。テュカも赤らんだ頬を掌で押さえている。レレイはよくわかってないのか、きょとんと冷静な様子。

伊丹は、深々とした嘆息をもって答えに代えた。

ここは敵味方から既に忘れ去られたかのようである。敵の姿はまったく見えないし、味方からの連絡もない。故に東門の状況を把握することもできない。

アルヌスからの援軍が到着するのもそろそろのはず。攻撃誘導もしなければならないから、誰かを送り込む必要はあるのだ。

「栗林っ!」

栗林が「はいっ」と返事して一歩進み出た。
「済まないが、ロゥリィに付いてやってくれ。男だと色々まずそうだ。あと、富田二等陸曹と俺。この四人で東門へいく。桑原曹長、後は頼む」
「ロゥリィ行くよっ！　少しの間辛抱して！」
栗林のかけた声に、ロゥリィはハッシとしがみつく事で応えた。だが、それまで耐え続けた彼女には最早待つということが出来なかった。
ロゥリィはビル三階ほどの高さを持つ城壁から軽々と飛び降りると、東に向かって脱兎のごとく走り出した。
伊丹達も、後を追う。
城壁を駆け下りると手近なところにあった七三式トラックに乗り込んだ。富田がエンジンをかける。エンジンの咆哮とともに彼らは東へと向かったのである。

薄暮に覆われた空を、ＡＨ－１コブラの三機編隊を先頭にして、ＵＨ－１Ｊ等のヘリコプターの集団が飛んでいた。
空気を切り裂くローター音。
薄闇に覆われた大地が、下方を流れるように過ぎ去って行く。かなりの高速で移動しているのがわかった。

「健軍一佐！　あと五分で現地到着です」
コ・パイからの報告を、健軍は頷いて受けた。
用賀二佐が、「３ＲＣＮ（第三偵察隊）からの報告によると、既に東門の内部で戦闘になっとるそうです。段取りとしては、東側から接近して城門と、門の外側の目標を掃討していこうと思っとります」と報告する。
健軍は、これも頷いて受けると、一言「二佐に任せる」とだけ返した。
機内の隊員達も、小銃に弾倉を装着していた。
「あと、二分!!」
用賀は、そう言いながらコンポのスイッチを入れた。
ボリュームを最大に調節し、再生のボタンを押す。
管弦の音色が流れ始めた。
木管の軽快なリズムの盛り上がりは天馬の疾駆、主題となるメロディが続いて、軽快なラッパが高らかに鳴り響く。
それは、八騎の戦女神をイメージしたものだった。
小銃の支度を終えた隊員の一人が、映画の真似をして被っていた鉄帽を腰の下におく。それを見た同僚が律儀に尋ねてやった。
「何やってんだ？」

「タマをまもるのさ!!」

剣を叩きつけられて、血しぶきが飛び肉片が舞う。

人体の頭部が、浜辺のスイカのようにたたき割られ、撃剣の音が、建設工事の現場のごとく響いた。

絶命の叫び。苦痛に呻く泣き声。

怒りの怒号。裂帛の気合い。

ラッシュアワーの駅のごとく、人の群れがぶつかり合う。

誰も彼もが、周囲の出来事に気を払うことが出来なくなり、ただ敵が視野に入れば、剣を槍を振るう。腰が砕け、地を這いながら敵の居ないところへと隠れ、逃れようとする者もいる。だが、騎馬の馬蹄に踏みつけられ、つぶされていく。

そこかしこに散らばる死体、遺体、遺骸、屍体。石畳の地面は赤黒い血をもって塗装され、敵も味方も区別無くその身に血を滴らせていた。

だから遠くで、空気を叩く音が響き始めたことに気付かない。

どこからともなく、ホルンの音と共に、女声による歌が天空を駆けめぐっていることなど誰も気にも留めなかった。

ところが、時が停まった。

土塁を、柵を飛び越えて彼女が降り立ったその瞬間に。
人馬を蹴倒して、敵も味方も問わず彼女の周囲からはじき飛ばされ、周囲にぽっかりと穴が空いたかのごとく、疎なる空間が産まれた。
その瞬間に全てが停まった。
その破壊力と、衝撃に音が止み、戦いの喧噪が途絶える。空間を支配するのはオーケストラの調べ。

「Ho-jo to-ho!　Ho-jo to-ho!　Ho-jo to-ho!」

突如現れた真っ黒な何かに、衆目が集中する。

「Ho-jo to-ho!　Ho-jo to-ho!　Ho-jo to-ho!」

それはフリルにフリルを重ねた漆黒の神官服を纏った少女。

「Ho-jo to-ho!　Ho-jo to-ho!　Ho-jo to-ho!」

彼女は、両膝を地に着けていた。
彼女は、左手を大地においた。
彼女は、後ろ手に回した右腕に、鉄塊の如きハルバートを握っていた。
彼女は、伏せていた顔をあげる。神々しいまでの狂気を湛えた双眸を正面へと向ける。その黒髪は、凶々しいまでの神聖さで白銀のように輝いていた。
その瞬間、ファンファーレを背景とした女神の嘲笑と共に、城門は爆発し炎上した。

12

UH－1Jの三機編隊が、門外の盗賊に対して銃撃を浴びせつつ上空を通過する。
通り過ぎる際には、お土産よろしく手榴弾を投げ落として行くという丁寧さは、用意周到・頑迷固陋（ころう）とまで言われる陸上自衛隊の性格を態度で表している。
攻撃は、多方向からの波状攻撃によってなされていた。
東から西へ、それが過ぎると今度は別の編隊が南東から北西へ向けて、さらに北東から南西へ、旋回して再び攻撃位置へ……次から次へと、左右から、前後から、連続して停滞することない銃火に、大地はムラ無く塗りつぶされ、動く標的は確実に殲滅されていった。

盗賊達は、蜘蛛の子を散らすように走った。懸命に走ったつもりだった。だが、走ろうが騎馬だろうが、逃れられる余地はない。

殺し、奪い、犯し、焼き払った盗賊が攻守を逆さまにし、銃弾を受けて大地にひれ伏していく。ばらまかれる銃弾を受けて、次々とうち倒されていく。

気丈な者が、弓を引いて矢を射かける。だが、上空にむけて放った矢に力はない。届かずに落ちるか、届いたとしても小石ほどの威力もなかった。

機上の隊員の一人が小銃を構え、視野の周囲にぼんやりと見える照門の中央に照星を置き、これを盗賊の頭部に重ねた。ヘリの移動速度、盗賊の逃げる方向と足の速さ……。それらを加味してリードをとる。

「正しい見出し、正しい引きつけ、正しい頬付け。コトリと落ちるように……」と呟きつつ、重さを2・7キロで調節された引き金をひく。

三発の発射。

右の肩に発砲の衝撃を受け止めながら、薬莢を回収しないでよいという事実に不思議な感動を憶えていた。

いつもの貧乏性にも似た注意が薬莢の行き先にむかうが、ヘリの床を転がった薬莢はそのまま地上へと落下し、倒れた盗賊の傍らへポトポトと落ちる。

硝煙に燻された真鍮の筒は、飴色に曇って輝いてなどいなかった。

戦士の躯を供犠として、燃え上がる炎。
イタリカの城門は紅蓮の炎に包まれ、地平線から昇る太陽によって周囲は輝きと熱とに照らされた。
完全武装の兵士が、ズタズタに引き裂かれていく。
死神の羽音。鳥などの生き物と違って、もっと猛々しく、荒々しいはじけるような音の連続。
鉛の豪雨が浴びせられ、大理石の壁は軽石のごとく穴だらけになっていった。
馬にまたがり、咽を涸らすほどに指揮の声を挙げていたピニャも、突然のことに声を失い、呆然とした面もちで惨劇をその目に焼き付けた。
回転する翼をもつ鋼鉄の天馬。それに人が乗って天空を我が物顔で往来していた。
天空を舞う兵士と言えば竜騎兵が有名だ。だが、ピニャが目にしたものは生き物のそれとは違う。もっと禍々しい別の何かだった。竜騎兵の攻撃はもっと優しいのだ。弓や槍や剣は互いに敵意を交わし合うものなのだ。だが、これは違う。絶対的で一方的な拒絶であり、徹底的なまでに凶暴だった。
鋼鉄の天馬が火を放つたびに大地の何もかも、石も珠も問わず、あらゆる全てが破壊され撃ち崩されていく。馬の頭部が爆発したかのようにはじけ、周囲の人を巻き込んで転倒する。

「Ho-jo to-ho! Ho-jo to-ho! Hei-a ha! Hei-a ha!」

死の交響曲。宮廷での生活で様々な音楽に接する機会があったが、ピニャはこれほどまでに、美しく荘厳な演奏を耳にしたことがなかった。ホルン、ファゴット、様々な管弦の音色と、歌手の大音声が戦場を満たし、死への伴奏を叩きつけていく。交響楽団の名演奏をエンドレスに編集されたそれは、最も盛り上がる場面を繰り返し、繰り返しピニャの耳に流し込んでいた。

「Ho-jo to-ho! Ho-jo to-ho! Hei-a ha! Hei-a ha!」

ピニャは、氷の剣を背筋に突き立てられたような身震いを感じていた。あらゆるものが一瞬のうちに、人の手で逆らうことの許されない絶対的な暴力によって、叩き潰されていく。感動、負の方向への感動と、正の方向への感動。その入り混じった交錯が、彼女の肉体と精神をはげしく揺さぶる。

「Ho-jo to-ho! Ho-jo to-ho! Hei-a ha! Hei-a ha!」

ピニャの魂魄が、左右からの鉄の連打を受けて打ちのめされる。

人とはなんと無価値で、無意味なのかと、絶対的な無力感を突きつけられていた。

「Hei-a ha!ーーーーHei-a ha!ーーーー」

これまで敵と言えば、等身大の存在であった。
だが、それは明らかに違った。
正視することの許されない、だが目をそらすことすら許されない何か。

「Ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!!

Ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!ha!!」

ワルキューレの嘲笑と呼ばれる歌詞を歌い上げる女声に、ピニャは徹底的に打ちのめされた。誇りも名誉も彼女が価値あるものとして、頼ってきた全てのものが、一瞬のうちに否定された。
意味のわからない歌声が、彼女にはこう聞こえる。
なんと矮小な人間よ！
無力で惨めで、情けない人間よ！

お前の権力、権威など何ほどのものか。お前達が代を重ねて営々と築いてきたものなど、我らがその気になれば一瞬にして、こうだっ!!

ピニャは涙を流しながら確かに、女神からの蔑みを感じた。と、同時に自分を遙かに凌駕する偉大なるものの存在を知った。

強大なもの。

まぶしきもの。

彼女の心に湧き上がったのは尊敬であり、畏敬の念。

そして、それら尊崇すべき存在が、自分とは全くの無縁であることの絶望。お前は決してそれらのようにはなれないのだと突き放してくる宣告。

かつて、ピニャの将来を定めたと言える歌劇を見た時の憧れと感動が、この時ことごとく塗りつぶされしまった。

「やばいっ！　ロゥリィの奴、敵の真っ直中に出ていきやがった！」

伊丹のオタク的部分は、ロゥリィがとてつもなく強いと感じていた。

だが、現実的かつ常識的な部分が、あの見た目が華奢で小柄なロリ少女が、強いと思えるのはどうかしてると、盛んに訴えていたのも確かなのである。

そのためにどうしても心配になった。共に過ごした時間もそれなりにあるので情も湧いている。

見捨てるとか放っておくという発想はどこを探しても出てこなかった。
伊丹は、トラックを降りると「つけ剣」と自ら号令して小銃に銃剣を装着した。
栗林も、富田も着剣している。銃剣の柄を掌底で二度叩いて装着を確認する。
互いに見合わせて安全装置を『ア』より『レ』へと捻る。「はなれるなよっ」と告げて、前進を始めた。
だが真っ先に、鉄砲玉みたいに突っ込んで行ったのは栗林だった。
伊丹と富田は「ちっ、あの馬鹿女」と呟きつつも、距離をあけないように人垣をかき分けて懸命に追う。
「突撃にぃ、前へ！」
目標を定めて数歩進み、小銃を構えて短連射。
更に数歩走って、今度は腰だめに小銃を短連射。
訓練に訓練を重ねて身にしみこませた動作が、繰り返された。
盗賊の数人が、血しぶきをまき散らしながら倒れる。
見ると、ロゥリィは舞うようにハルバートを振り、叩きつけ、ぶん回して、楯もろともたたき割って敵を蹴散らしていた。危うげな様子は少しもなく、軽快なヒップポップのような軽やかさだった。その周囲には既に屍体の山が築かれている。
敵は楯を使って圧迫し、押し退けて突き飛ばそうとし、楯の上を越えて剣を突きだしている。楯

の下縁りで脛を打とうとしてくる。だが、ロゥリィはふわっと身を退くと、大上段に構えたハルバートを叩きつける。

それはあたかも薪割りのようで、楯ごと敵を二つに引き裂いた。

背後に回り込もうとする敵には、鈍く尖った石突きが待っている。振り返りもせずに突き出されたハルバートの柄が深々と敵の腹部に突き刺さった。

四方八方から同時に突き出される槍を、まるで棒高跳びのようにハルバートを支えにして中空に舞ってかわす。

黒薔薇のように広がるロゥリィのスカート。徹底的に黒で固めたガータベルトとショーツ、そしてなめらかな曲線で描かれた美脚を、シンクロナイズドスイミングのように見せつけて、回転する勢いをそのままハルバートに乗せて円を描く。

プロペラのような旋風が、盗賊達の首を高々と跳ね上げていた。噴水のごとく吹き出す血潮。

赤い雨粒をその頬に受けながら、風を斬り、鉄を斬り、肉を断つ。

恐怖と憎悪と殺意を寄り合わせた力任せの大剣が、ロゥリィの頭上に振り下ろされる。

だが、ロゥリィの清澄な眼差しが毛一筋ほど隙を見いだし、命を賭した渾身の一撃を空回りさせる。

ロゥリィはスカートの縁を左の指先で摘みつつ闘牛士のそれに似た身のこなしで、猛牛のごとき突進をかわした。

そこへ、これに栗林が加わった。
喊声を上げながら銃剣による直突！　ロウリィを背後から襲うとした敵を貫く。
発砲しながらの反動で、刺さった銃剣を引っこ抜いて、そのままの勢いで後ろの敵に斜めから斬撃。直突、直突、構えを入れ替えて銃床を使っての横打撃。直打撃、打撃、打撃！　ぶっ倒れた敵の鼻先に銃口を突きつけて、引き金を一回引く。
斬り付けてきた敵の剣を小銃で受け止める。小銃の二脚が吹っ飛び銃身を覆う下部被筒が派手に凹むが、気にせず脛を掃蹴。派手に倒れた敵の鼻面を、兜の上から半長靴で踏みつぶす。
カラカラとちぎれた二脚が落ちた。「あちゃ～」と呻いて武器陸曹の顔を思い出す。だが、このために八九式ではなく六四式小銃を持ち込んでいるのだ。栗林は「消耗品、消耗品」と自らに言い聞かせながら、小銃を握り直した。
前時代的で野蛮な白兵戦。だが栗林は、それを特技としていた。
小柄ながらまるで猫のような俊敏さで、敵を寄せ付けず手を焼かせ、逆に圧倒していた。敵が距離を置いたかと思えば、小銃を短連射。弾が尽きて、手投げ弾を敵の頭上を越えるように投げ込む。
ラッシュ並の混雑だ。敵の肉体そのものが楯になってくれると判断する。実際、背中を突き飛ばすような爆発に狼狽したのは敵だ。混乱し戦意を喪失し、楯を列べて防ごうとする。
そこへ素早く拳銃を抜いて、問答無用の三発連射。所詮は木製の楯。九㎜拳銃の弾を受けて、一

発目で板が割れ、二発目で砕け、三発目がその向こう側の敵兵に当たる。
切り開かれた突破口にロゥリィが突っ込み、抉り、傷口を拡大していく。その間に栗林は小銃の弾倉を交換。
伊丹と富田は、自分達が手綱をひかないとやばいと思って、彼女らの背中を守った。小銃と拳銃と銃剣とを駆使して敵を背後に回り込ませないことにだけ集中する。
少し距離を置いて、頭を冷静にして見ると女性二人の戦いぶりは実に見事だった。特にロゥリィは無敵の強さを見せていた。脳内麻薬の作用か、それともそういう性格なのか、実に二人とも爽快な笑みを見せている。いっちゃった表情である。だがここは戦場だ。そういう女性の顔はベッドの上でこそ見たい。
二人は即興ながら見事な連携を見せた。
銃剣で突き、ハルバートを叩きつけ、銃撃し手榴弾を投げ、ハルバートの柄で払い、蹴りや鉄拳をもって敵を支え、圧迫し、突き放し、押し返す。
弾倉の交換ももどかしい。栗林は弾が切れたと見るや「隊長！　銃」と叫んだ。
伊丹は自分の銃を栗林に放り投げた。代わりにガラクタ寸前となった栗林の銃が帰ってくる。
敵味方入り乱れた乱戦の真っ最中だったイタリカの警備兵や民兵達も、敵の勢いが急激に萎んでいくことに気付いた。周囲を見渡す余裕が出来て、はじめて伊丹達の存在に気付く。
エムロイの使徒だ！　緑の人達が来てくれたぞ！　の声と共に次第に秩序を取り戻し、構えた農

具を連ね、互いを助け合う連携を取り戻し始める。そして爆音と、オーケストラの音に今更ながら気付いた。

「Führet die Mähren fern voneinander, bis unsrer Helden Haßsich gelegt!

Der Helden Grimm büßte schon die Granei

Ha ha ha ha ha ha ha ha!

Ha ha ha ha ha ha ha ha!

Ha ha ha ha ha ha ha ha!」

すると、天を覆っていた黒煙を切り裂くようにして戦闘ヘリが姿を見せた。

その威容に人々は圧倒された。空を見上げ、指をさして天空から舞い降りた鋼鉄の天馬に見入っていた。

ＡＨ－１コブラの20㎜Ｍ１９７ガトリング砲の砲口がロゥリィ達に押しまくられて密集しつつあ

る敵へと向けられる。
それを見て、伊丹と富田が互いに見合わせて頷いた。
伊丹がロゥリィを、富田が栗林の首根っこをとっつかまえると、背後から抱き上げて「下がれ下がれ!!」と怒鳴りつつ後ろへと後退。
伊丹等が下がるのを待ちかまえていたかのように、毎分六百八十～七百五十発もの発射速度で吐き出される直径20㎜の砲弾は、瞬く間に敵をミンチへと変えていった。
コブラが、弾をばらまきながら高度を下げてくる。それは最終的な破壊だった。
燃えさかる戦いの炎、全てを一瞬にして吹き飛ばす豪雨であった。
ほどなくして、ガトリング砲の射撃が止んだ。オーケストラの演奏もようやく終わりを告げて、耳にはいるのはローター音。そして後に残るのは、煙をあげる焼け跡。
ＵＨ－１Ｊヘリが、次第に集まってきて上空にホバリングする。
綱が降ろされて、それをたどって次々と自衛官達が懸垂降下してくる。機敏な動作、統率のとれた振る舞いで、周囲を警戒し、敵味方の生存者を捜していく。
最早、誰も軽い調子で『緑の人』などと声を掛けられなくなっていた。その数にしても実力にしても、いずこかの兵士であることは間違いないからだ。尊崇の念を込めて、富田に対してどこの誰かと尋ねる者がいた。「自衛隊」という答えを得る。
ロゥリィは強力なローター風によって、吹きさらされる髪を気にしつつ、風で舞い上がりそうな

スカートを押さえ込みながら、周囲を見渡す。だが、少なくとも彼女の周囲に立っている敵はなかった。

ふと、気付く。

自分が誰かに抱え上げられていることに。

彼女の身体を支える左腕が脇の下から胸元に上がり、手袋に包まれた掌が彼女のささやかな右の乳房を押さえ込んでいることに、ロゥリィ・マーキュリーは気付く。そして、その桜色の唇をニィとゆがめて、その隙間から鋭い犬歯を覗かせるのだった。

＊　＊

ピニャは、伊丹、ロゥリィ、テュカ、そしてレレイの四人を前にして、語りかけるべき言葉が見つからず窮していた。

昨日はこの四人を謁見して、高みから協力を命じる立場だった。

背もたれに身体を預け、典雅に茶など喫しながら、重要なはずの問題をまるで些細な雑用仕事でも扱うかのように臣下に結論から突きつける。それがピニャの、宮廷貴族の考える優雅な仕事の進め方なのである。

昨日は、そこまでとは言わなかったが、それに近い態度をとることが出来た。

だが、今日の自分の体たらくはどうだ。惨めな敗残者ではないか。

確かに盗賊は撃退できた。市民達は勝利と生き残ったことを素直に喜んでいる。

無論、失われた命を悼み、家族を亡くした悲しみを乗り越えるのにも時間が必要だろう。街や荒廃した集落の再建も難題だ。だが、身近な者が命を賭して得た勝利だからこそ、今は喜ぶべきなのだ。悲しむばかりでは彼らが頑張った甲斐がないではないか。

その意味では、ピニャも勝利者の側にいて勝利を喜ぶべきなのだ。なのだが、この惨めな気分によって徹底的に打ちのめされていた。

少しも勝ったとは思えない。

勝利したのはロゥリィや、伊丹達「ジエイタイ」を自称する軍勢だ。不当にも神聖なアルヌスを土足で占拠し続けるこの敵は、鋼鉄の天馬を駆使し、大地を焼き払う強大な魔導をもって、ピニャが手を焼いた盗賊らを瞬く間に滅却してしまったのだ。

今、彼らがピニャに対して、そしてイタリカに対して牙を剥いたら、彼女にはどうすることも出来ないだろう。帝国の皇女とフォルマル伯爵公女ミュイは二人そろって虜囚となり、帝都を支える穀倉地帯は敵のものとなる。

住民達は、どうするだろうか？　抵抗するだろうか？

いや、かえって喜ぶ。きっと、彼らを歓呼の声で迎えるだろう。何しろ、住民達の勝利を決定づけたのはジエイタイなのだから。「緑の服を纏った人達」の廉潔なる様は、コダ村の住民達によっ

て、口々に語られている。
政治を解さない民は単純だ。自分の利益、しかも一時的な利益に簡単に釣られて靡いてしまう。
もし、彼らが開城を要求して来たら……妾は彼らの前に膝をつき、取りすがって慈悲を請い、我とミュイ伯爵公女の安堵を願い出るしかないのかも知れない。
妾が、敵に慈悲を請う？　誇り高き帝国の皇女ともあろう者が!?　まるで、宿場の安淫売のように男の袖を引くと言うのか？
ピニャは、ギッと奥歯を噛みしめた。
今の自分なら、足の甲にキスしろと求められたら、してしまうかも知れない。どのような屈辱的な要求にだって、応じてしまう。そこまで自信と心とをへし折られていた。
ピニャは、伊丹等が要求を突きつけて来るのを、恐る恐る待っていた。
待っているつもりだった。だが、次第に視界が彩りを取り戻して、ピニャに現実の風景を示し始める。耳が周囲の音声をあつめて、ピニャの意識へと届け始めた。
「捕虜の権利はこちら側にあるものと心得て頂きたい」
レレイが、ピニャの傍らに立つハミルトンの言葉を健軍一等陸佐に通訳していた。語彙の関係上、伊丹だけでは通訳が難しいので、まだまだレレイの手伝いが必要なのである。
健軍は、直立不動の姿勢のまま頷く。
「イタリカの復興に労働力が必要という貴女の意見は了解した。それがこちらの習慣なのだろう

が、せめて人道的に扱う確約を頂きたい。我々としては情報収集の為に、数名の身柄が得られればよいので確保されている捕虜の内、三～五名を選出して連れ帰ることを希望する。以上約束して頂きたい」

「ジンドウテキという言葉の意味がよく理解できぬが……」

苦労するのはレレイだ。無表情の彼女が額に汗して、意味を伝えようとしている。

曰く「友人、親戚、知り合う者に対するように、無碍に扱わないことと解される」と彼女なりの理解で説明するのだが、ハミルトンは眉を寄せるばかりだ。

「私の友人や親戚が、そもそも平和に暮らす街や集落を襲い、人々を殺め、略奪などするものか！」

声を荒げ怒鳴りかけたハミルトンを制するように、ピニャは声をかけた。

「良かろう。求めて過酷に扱わぬという意味で受け止めることにしよう。此度の勝利にそなたらの貢献は著しいのでな、妾もそなたらの意向を受け容れるに吝かではない」

ハミルトンも、これまでずうっと黙していたピニャが口を開いたことに安堵したようである。

レレイと健軍がぼそぼそと言葉を交わし、レレイが通訳した言葉を伝える。

「そのような意味で解していただければよい」

思わず口を挟んだが、ここはどこで、今自分は何をしているのか？

ピニャは自分の持っている知識、解釈力を総動員して現状の確認を急いだ。

そもそもこの男は誰だ？

ピニャの目前に立つのは、闘士型の体躯をもつ壮年の男だった。この男もまだら緑の服を着ているが、兵卒とは明らかに違う気配を有している。

物腰こそ柔らかいが、額に刻み込まれた皺と肉の厚みを感じさせる頬はいくつもの苦難困難を乗り越えてきた男のものである。この男の堂々たる態度を裏打ちするもの、それは自信なのだろう。積み上げてきたものと実証に裏打ちされた自信。ピニャが求めて得られないものである。

察するにジエイタイの長であろう。

気が付くと、ピニャは伯爵家の領主代行として気怠そうに椅子に腰掛けている。隣にはフォルマル伯爵公女ミュイが執事とメイド長に挟まれて腰掛けていた。

喋っていたのはハミルトン。彼らと交渉し、意見を述べ、要求を聞き入れて物事を決定していたのは彼女のようであった。ピニャがボヤッとしている間、懸命に交渉の場を支えていたのだろう。

ピニャは、慎重に言葉を選びつつ状況を確かめようとした。この場で、いったい何の約束がされようとしているのか？

傍らに立っていたハミルトンを指先で招く。額や身体の各所に包帯を巻いたハミルトンが顔を寄せてきた。

「ああ、ピニャ様。お心が戻られましたか、ご心配いたしました」

「すまない。心配かけたようだ」

そして、この場で決しようとしている内容を、再度確認するようにと指図した。
「おほん。では、今一度条件を確認したい」
ハミルトンは朗々と歌い上げるようにして、条件を挙げていく。
「ひとつ。ジエイタイは、此度の戦いで得た捕虜から、任意で三〜五名を選んで連れ帰るものとする。この捕虜、および捕虜から得られる各種の権利一切は全てジエイタイ側にあるものとする。なお、フォルマル伯爵家と帝国は、所有することとなった捕虜を、求めて過酷に扱わないことを約束する。
ふたつ。フォルマル伯爵家ならびに帝国皇女ピニャ・コ・ラーダは、ジエイタイの援軍に対する感謝の印として、ニホン国からの皇帝ならびに元老院に対する使節を仲介し、その滞在と往来における無事を保障する役務を負う。なお、使節の人数、滞在の諸経費等の負担は協議によって定めるが、百スワニ相当分までは無条件で伯爵家ならびに皇女が負担するものとする。
みっつ。ジエイタイの後見するアルヌス協同生活組合は今後フォルマル伯爵領内とイタリカ市内で行う交易において関税、売上、金銭の両替等に負荷される各種の租税一切を免除される。
よっつ。以上の協約発効後、ケングン団長率いるジエイタイは、協約で定めた捕虜の受け取り以外、伯爵家、および市民の財貨一切に手を着けず、可及的速やかにフォルマル伯爵領を退去するものとする。ただし小規模の隊、及びアルヌス協同生活組合については、フォルマル伯爵家との連絡役務を果たすため、今後も領内往来の自由を保障する。

いつつ。この協定は一年間有効。なれど双方異存申し立て無き時は、自動的に更新されるものとする。

以上　フォルマル伯爵公女ミュイ

後見役　帝国皇女　ピニャ・コ・ラーダの名において誓約する。

帝歴六百八十七年　霧月三日」

ハミルトンは、羊皮紙に書き込まれた文章を読み上げるとピニャの前に差し出した。

何度も読み直してみたが悪い話ではない。と言うより、どうなっているのだ？　と思うほどの好条件である。ジエイタイは勝者がもつ権利のほとんどを求めていないのだ。

使節の仲介は煩雑だし、百スワニの出費は確かに痛いが、必要経費の範囲とも言える。これで済めば儲けものと言えよう。

ハミルトンが頑張ってくれたようだ。

ピニャは人の能力を見極めることについてはいささかの自信があった。だが、どうやらハミルトン・ウノ・ローの交渉能力については見極めを誤っていたようである。でも、どうやったら圧倒的な戦闘力を有する敵に、勝者の権利を快く放棄させるような約束を取り結ぶことが出来るのだろうか？　魔法でも使ったか？　女の武器を使って交渉をとりまとめたか？

いずれにせよ、外務局あたりに知れたら、ただちにスカウトがくること間違いなしである。騎士団としてもこの交渉能力は貴重だ。

ピニャはそんなことを考えつつ、羊皮紙の末尾にサインをして、封蝋に指輪印を押捺した。
隣席に、お行儀よく腰掛けているミュイ伯爵公女にもサインと捺印が求められた。
ハミルトンが健軍の前に出て、羊皮紙を差し出す。
これをレレイとテュカが確認して頷いたのを見て、健軍は漢字で署名を書き込む。
ロゥリィは何故かそっぽを向いて不機嫌な様子で関わろうとしない。伊丹は何故か右目周りに黒々としたアザをつくって、ぼやっと突っ立っていた。
協約書は二通作成する。
二通目の作成中に、ピニャの手元に一通目が戻ってきた。
改めて書面を確認して見ると、健軍の署名が目に入る。そこに書かれている文字を見て、なんともカクカクとしているなと感じるのだった。

協約は直ちに発効され、４０１中隊は飛び去っていく。
戦いの後始末に忙しい住民達も、一時手を休め彼らが空の向こうに見えなくなるまで、帽子や手を振っていた。
レレイやテュカ、ロゥリィは、商人リュドー氏の元へ向かって、商談を済ませた。
取引に関わる税がかからない特権商人は儲けが大きいので、どんな商人だってお近づきになりたがる。しかも古くからの知り合いであるカトー先生の紹介となれば粗末に扱えるはずもなく、交渉

は至極簡単に進んだのだった。
竜の鱗二百枚を、デナリ銀貨四千枚＋シンク金貨二百枚で、取引することに成功した。
ただし、銀貨四千枚を現金で決済することはやっぱり不可能だった。リュドー氏も頑張ってくれたのだが、フォルマル伯爵領内を盗賊達が荒らしたために、イタリカでは交易が停滞していた。さらに帝国とその周辺で貨幣が不足気味になっていたことも理由となってデナリ銀貨千枚をかき集めるのが精一杯だったのである。
結局、残る三千枚のうち、二千枚については為替で受け取ることとなった。
残りの銀貨千枚分は割り引くことにした。その代わりにレレイはリュドー氏に一風変わった仕事を依頼したのである。
それは各地の市場における相場情報の収集であった。出来る限り多品目で手の届く限り詳細に、事細かく価格を調べて欲しいと求めたのだった。
この申し入れには、リュドーも鼻で笑った。
一般市民に小売りするのと違って、商人間では何がいくらで売れる等という情報は、価格交渉の為の重要な武器であり手の内だった。これを単刀直入に尋ねる商人も、教える商人もいないのだ。
だが、レレイは商人としては素人であるため、何がいくらで取り引きされているかを知らない。知らないからこそ情報を集めようと思ったのである。ただし、より広く、より大規模に。そして代価を支払って。

「銀貨千枚ねぇ」

これまで、情報なんてものにこんな大金を支払う者などいたためしはないが、値が付いたのであれば、それはもう商売である。賢者カトーの愛弟子が求めるのだから重要な意味があるのかも知れない。また、商品の品質はよりよいものがモットーでもある。

こうして、リュドー氏は八方手を尽くして情報の収集に力を入れることを約束したのであった。

13

西へと向かう街道を、イタリカへと急ぐ騎兵集団があった。

赤、黄、白の三色の薔薇で彩られた旌旗をたなびかせ、馬蹄の音を轟かせている。

金銀に輝く胸甲と装飾鮮やかな武装。バナーの翻る騎槍の林が怒濤のごとく突き進んでいた。

特に先頭をいく騎士。

金色の長髪を風になびかせて、壮麗な武装で身を固めた女騎士が、鞭で黒馬を激しく責め立てていた。彼女の愛馬は、その責め苦を軽く受け止め、躍動する筋肉は力強く大地を蹴っていた。

彼女の見る風景は流れるように過ぎていた。だがまだ遅い、まだ足りない。そんな思いで握る手綱に力がこもる。鞭撃つ手にも力が入ってしまう。

「ボーゼス！　急ぎすぎだ」
女声ながら落ち着いた重みのある響きが、先頭の騎兵にかけられる。
背後を駆ける短栗髪の女騎士。馬は白馬。彼女らから大きく引き離される形で、騎兵集団が続いている。
ボーゼスと呼ばれた女騎士は、振り返ると鈴のような声色で言い返した。
「これでも遅いくらいよっ！　パナシュ」
「たが、君の馬が保たない。兵もどんどん落伍している。これでは現地にたどり着いても戦えないぞ」
「いいのよっ。落伍しようと最終的にイタリカへたどり着けばいい。今は時間が敵よっ！」
「しかしっ！」
「最終的に少数しかたどり着け無ければ、少数での戦い方をすればいい。今は少しでも早くたどり着くこと。それが第一よ」
こうも言い切られれば、パナシュとて引き留めようがない。ボーゼスの後を追いつつ、例えそうであっても少し速度をゆるめるようにと言い聞かせるのがやっとであった。
ボーゼスは不承不承ながらわずかに手綱を引く。すると馬も走る速度をゆるめ、多少は後続との距離が縮まった。
「パナシュ……わたくしたち、間に合うかしら？」

「大丈夫。姫様はきっと保たせるさ」
「でも……」
ボーゼスは、逸る気持ちを抑え込むので精一杯のようであった。遠く地平線の先へと伸びる街道。その遙か先、イタリカの方角一点のみを見つめていた。
だから、最初にそれに気付いたのはパナシュであった。
「ん？」
前方から何か近づいてくる。
帝国の幹線街道とはいえ、古代に作られたものを荒れるに任せているため道幅は狭く、向かい合った荷馬車がすれ違えるほどでしかない。騎馬隊がこのまま全力で進めば、前方から近づく何かと激突することは必至だった。
しかもその前方の何かは、意外なほどの速さでこちらに近づいてくる。箱形で、遠目ではよくわからないが、荷車のようにも見える。
「ボーゼスっ!!」
「分かってるわ」
「わかってないっ！　前を見ろ」
パナシュに指摘されてようやく気付いたのか、ボーゼスは舌打ちしつつ身を起こし、馬の手綱を引いた。

パナシュは左腕を挙げて後方に停止を知らせつつ、手綱をひく。
続いていた騎馬隊の騎士達は安堵したかのように、息を切らせいきり立った馬をなだめながら速度を落とした。馬も人も誰も彼もが、ぜいぜいと肩で息をしており、汗でびっしょりとなっている。
「ええいっ邪魔くさい。道をあけさせなさいっ！」
後方の兵に排除を命じるが、それをパナシュが「待てっ」と、止める。
「あれは、イタリカの方角から来る。臨検してみよう。何かを知ってるかもしれないだろ？」とボーゼスをなだめつつ、ゆっくりと先へ進むのだった。

＊　＊

「なんて事をしてくれたんだっ!!」
烈火のごとく怒り、手にしていた銀製酒杯を投げつけるピニャ。
意気揚々と捕虜を引見し、自らの功績を誇ろうとしたボーゼスは、突然のことに何が起きたのか理解できなかった。額の激痛とピニャの怒気にすくみ上がってしまう。顔に落ちてくる暖かな感触に手を触れ、その手をぬらした血液を見て、初めて右眉の上が深々と割れているという事態に気付いたのである。

美しい顔をつたい落ちる血液が、顎の先からポツポツ、ポタポタと絨毯に落ちてシミを広げる。

「ひ、姫様。どうしたと言うのですか!?　我々が何をしたと言うのです？」

ショックに座り込むボーゼスの額に手巾をあてながら、懸命に寛恕を求めるパナシュ。だが、ピニャも、傍らに立つハミルトンも怒るというよりは最早、あきれ果てたという様子で二人を見下ろすのだった。

夕刻。

騎士団を引き連れてイタリカに到着し、街が無事であったことに安堵したボーゼスとパナシュは、ピニャに対して到着を報告するとともに戦闘に間に合わなかったことを詫びた。これについてピニャは責めるようなことは言わず、逆に予定よりも早くの到着を誉めたのである。

これに気をよくしたボーゼス達は、ピニャの初陣と戦勝を祝賀する言葉を述べ、さらにここに来る途中で遭遇した異国の者、おそらくアルヌスを占拠する敵の斥候であろうと思われる……を捕虜としたので、ご引見下さいと連れて来させた途端にこの仕打ちがなされた。

二人は自分らが何故に責められるのか、詰問され、酒杯を投げつけられねばならないのか、理解できなかった。

「こともあろうに、その日の内の協定破り。しかも、よりによって彼とは」

ハミルトンは、謁見の間となった広間の隅へ連れ込まれた捕虜へと歩み寄った。

床に力無く座り込んでいるのは伊丹であった。
その肩に手を置いて「イタミ殿、イタミ殿」と揺すりながら声をかけてみる。だが伊丹は、全身ドロまみれの擦り傷だらけ、さらには、あちこちを打撲したのか身体の各所にアザをつくっており、体力気力とも尽き果てているという姿で、まともな返事も出来ない。
ここに来るまでにどれだけの酷い目にあったかが、想像できる有様であった。
「ハミルトン、どうだ？　イタミ殿の様子は」
「相当に、消耗されているご様子です。すぐにでも休ませませんと」
ピニャは、フォルマル家の老メイド長に振り返ると「済まないが、頼む」と告げた。老メイドと執事は「かしこまりました」と、壁の華となっていたメイド達をかき集め、伊丹を取り囲むようにして、運んでいった。
それを見送った後で、振り返るピニャ。
その時の彼女の表情はまさに般若そのものであった。自分よりやや背の高いパナシュの頬に対して平手というより、掌底でぶん殴って尋問するかのごとく詰め寄った。
「貴様等、イタミ殿に何をしたっ!?」
「わ、私たちは、ごく当たり前の捕虜として扱ったまでです」
ごく当たり前、とは……帝国では捕虜を虐待することであった。例えば連行途上、ひたすら馬で追い立てて走らせる。疲れ果てて座り込むなどすれば、槍先でつついたり、刀の峯や鞭で打ったり

して無理矢理立たせる。それでも立たなければ、殴る蹴るなどの暴力でいたぶるという具合である。こうして抵抗する気力、逃亡する体力をそぎ落とすことが、奴隷として売る際、素直に従わせる上で必要なことだと考えられていたのである。

ピニャは「なんて事を、なんて事を……」とつぶやきながら体中を駆けめぐる怒気に、わななく拳を握りしめながら耐えていた。

理性的に考えてみれば、ボーゼスやパナシュのした行為を非難することは出来ない。なにしろ彼女たちは、アルヌスを占拠する者を敵とは思っても、そんな相手とピニャが協定を結ぶなど想像すら出来なかったのだから。

だが現実は、時として理不尽なまでに理屈を超越する。実際に、協定は結ばれ自衛隊はその協定に基づいてイタリカを退去した。故に知らなかった、通知が遅れていたの類の言い訳は一切通用しない。何しろ、協約の即時発効はピニャが求めたものなのだから。そして伊丹が捕らえられたのは協約発効の後、しかもその往来の自由を保障するとしたフォルマル伯領内である。

これは協約破り以外の何物でもない。

協約違反を口実に戦争をしかけ、有無を言わさず敵を滅ぼすという手口は、実は帝国がよく用いる手法だった。通信網の整ってないこの世界では、連絡の不行き届きで和平協定締結後も末端の部隊間で戦闘が行われてしまうということは、よくあるのだ。

自分達が愛用した手口であるが故に、相手がそれをすると思ってしまう。

ピニャは、背筋がゾッとした。
天空を覆った楽曲の音が、ワルキューレの嘲笑が耳にこびり付いて離れない。彼女の騎士団が、イタリカが、そして帝国のあらゆる全てが業火に焼かれて滅んでいく様が目に浮かぶようであった。
ハミルトンから、ピニャと自衛隊の間で協約を結ばれたことを説明されたボーゼスとパナシュも、自分達が何をしたか、そして伊丹等が「話せばわかる」などと言いながら、何故抵抗せずに捕らえられたのかを理解した。
「い、イタミ殿の部下がいたであろう。その者らはどうした？」
「あの者等は、逃げおおせました」
自分達の隊長が捕らえられたというのに、取り返そうともせず脱兎のごとく逃げ出した伊丹の部下を、彼女達はさんざん嘲笑したのである。だが、彼らからすれば反撃すら許されない状況では、逃げ去るしか選択肢がなかったということを、また知るのである。
もし、全員を捕らえることが出来ていれば、全員を始末して行方不明になってしまったとしらを切る方法もあるのだが、逃げられてしまったとなってはその手は使えない。そもそも使徒ロゥリィ・マーキュリーが相手方にはいるのだ。考えるだけ意味のない選択肢であった。
「姫様、幸いなことに此度は死人が出ておりません。ここは策を弄されるよりも、素直に謝罪をされてはいかがかと、小官は愚考するところであります」

広間の隅でことの次第を聞いていただけの、グレイ・アルドが口を開いた。
「だがしかし、あ奴らは盗賊にすら『ジンドウテキ』などと称して、過酷に扱うなと言いだす連中。イタミ殿の受けた仕打ちを知れば、烈火のごとく怒り狂って攻めて来るのではないか？」
「そこも含めて、謝罪するしかないのではありませんか？」
「妾に頭を下げろと言うのか？　謝罪せよと？……だが、関係者の引き渡しや処刑を求められたら応ぜざるを得なくなるぞ」
「では戦いますか？　あの鋼鉄の天馬と、大地を焼き払う魔導、そして死神ロウリィ・マーキュリーを相手に……。小官としては、それだけはゴメンこうむりますぞ」
グレイのような歴戦の兵士にすら、あの光景は恐怖という名の楔を打ち込んだのである。ピニャも、どれほど屈辱的なことでもしてしまうと覚悟したほどだ。それを考えれば謝罪なんて大したことではないはず。
とは言え、ここにいる誰もピニャにそれを強いることは出来ない。関係者たるボーゼスやパナシュも、罪を認めれば自らが窮地に立たされることとなるためにそれは避けたいのである。
冷酷で重苦しい空気がその場を支配した。
しばしの沈黙の後、グレイは緊張した雰囲気を解きほぐすように、おどけた口調で語った。
「ま、そのあたりはイタミ殿のご機嫌次第なのでしょうがね」
それは、暗にこの場に居合わせているご婦人方に、伊丹のご機嫌とりを頑張って下さいと、告げ

たものだった。

＊　＊

我が国には、宝塚歌劇団（たからづかかげきだん）というものがある。

女性のみで編成され、歌と踊り、そして演劇を楽しませてくれる、戦前から存在する伝統のある由緒正しい劇団だ。オタクたる伊丹にはいささか敷居の高い世界だが、『ベルばら』以外に好みの漫画原作のストーリーを演目に加えてくれるなら、見に行っても良いかもしれないと思っていた。

さて、イタリカからアルヌスへの帰還途中、目前に現れた騎兵集団を見た瞬間、伊丹は宝塚が野外公演でもしているのかな？　と思ってしまった。

ものの見事に女性ばっかり。しかもみんな美人・麗人・佳人・かわいい娘。

もしかしたら正真正銘の男性もいるかも知れないが、約半分が男装の麗人で、残りの半数は女性っぽい女性と来ては、どうしても女性のみの集団と認識せざるを得ないのである。

さらに、徹底的なまでに華美に彩られた武装だの旗だの、華奢な飾りでピカピカしている馬鎧。金糸銀糸の刺繍のはいった軍装等などを見ると、やっぱり中世から近世のフランス宮廷を舞台とした漫画原作の恋愛活劇っぽく見えてしまう。

手を挙げてこちらに停止を命じながら、馬を寄せてくる女性。

白馬に跨りショートの髪は栗色。白を基調として銀糸の刺繍や飾りをつけた衣装に銀の胸甲をつけ、黒い裏地の白のマント姿。腰にはサーベルというか、レイピアというか装飾のついた細身の剣を下げているが、これがまたピカピカに磨かれていて曇り一つ無い。

凛とした表情も突き刺すような視線も、妙にキメポーズっぽく見えてしまう。男役の女優さんっと言った雰囲気で、こういうのが好きな女子高生あたりが見たら、さぞかし黄色い悲鳴をあげて喜ぶんだろうなぁと思ったりする。

倉田はポカンとした表情で、「俺、縦巻きロールの実物なんて初めて見ましたよ」と感慨深く呟いていた。

倉田の視線の方角……白い女性の背後から、少し敵意っぽいものの混ざったような視線をこちらに突きつけている女性が居た。黒馬にまたがり、豪奢な金色巻き毛は腰まで伸びている。なるほど、いわゆる縦巻きロールと言われる髪型であった。それに物理的機能があるの？　と尋ねたくなるほどに巨大なリボンがくっついている。

見た目からしても、お嬢様タイプの美女で、ツンッと高みから見下してくる（実際、馬上から見下してきている）視線は「私の脚をお舐め、豚野郎」とか、いかにも言ってくれそうである。言われたら「はい、畏まりました」とか言って素直にやっちゃいそうだ。

伊丹はこの女性騎馬集団の旗印になっている三色の薔薇から、前述のショートヘアの女性を白薔薇様、こちらの金髪お嬢様を黄薔薇様と、脳内であだ名付けた。

桑原曹長が無線で注意喚起を命じ、隊員達は一様に銃を引き寄せて警戒のレベルを高めるが、伊丹としては厳に発砲を戒めた。協定違反に成りかねないからだ。この時点で、ロゥリィやレレイ達は、昨夜からの徹夜が堪えたのか後席でぐっすり眠っていた。

伊丹等、第三偵察隊の車列は、現時点で先頭が七三式トラック、次が高機動車、しんがりが軽装甲機動車なので、この女性騎士軍団は最初に接触した七三式トラックへと近づいた。

白薔薇が馬を歩み寄らせ、富田に声をかける。

富田は、二十七歳の二等陸曹。ちなみにレンジャー徽章持ち。こちらの世界の言葉は、単語ノートを片手になんとか意思疎通できるという程度である。そんな状態であったから、富田はなんとか片言と身振り手振りを交えつつ、白薔薇の誰何に応じようとしていた。

白薔薇曰く、「どこから来た？」

富田曰く、「我々、イタリカから帰る」

言葉が不自由ながらも、なんとか片言でも応えようとしてる努力を認めたのだろう、白薔薇は彼に解るように、できるだけ言葉を短く句切りながら話しかけようとした。これに対して、黄薔薇は言葉の不自由な富田を小馬鹿にしたように鼻を鳴らし、三台の車両へ胡乱そうな眼差しを向けるのだった。

白薔薇曰く、「どこへ？」

富田が単語帳をぺらぺらっと捲りながら告げる。「アルヌス・ウルゥ」と。

これを聞いた白薔薇は「なんだとっ!?」と声を荒げた。
正体不明の敵に占領されている場所に、いかにも異邦人とおぼしき連中が帰るなどと言っている。
しかも馬が牽くわけでもないのに動く荷馬車に乗り、見慣れない武器らしきものを抱えている。この集団を見て、怪しく思わない方がどうかしている。
女性騎馬軍団はこの一言で殺気立った。「何！　すると敵かっ！」天に向けられていた騎槍がさっと降ろされ、その鋭い切っ先が伊丹達を指向した。
素早く、騎馬の列が整えられていく。このあたりの統率は見事にとれており、彼女たちが歌劇団の類ではなく、きっちりとした戦闘訓練を受けた兵士の集団であることを伊丹等に知らしめた。なにしろ馬の足並みすら、きっちりとそろっているのだから。
見ると伊丹の部下連中も小銃を構え、笹川に至っては、軽装甲機動車搭載のキャリバーを手にして、重い金属音をたてて槓桿を引いた。
黄薔薇が、冷たい眼差しをして黒馬から下りて、つかつかつかと歩み寄って富田の襟首を掴みあげ、「もう一度、言ってごらんなさい」と、お上品に凄む。
白薔薇は、この異邦人が言葉を間違っていると思って、再度繰り返してもう一度、「貴様等はどこから来て、どこへ行こうとしている？」と尋ねた。
黄薔薇に襟首を掴みあげられた富田は、息が苦しいのかあるいは別の理由か、その顔を紅くしつ

つ、「イタリカから来て、アルヌス・ウルゥへ向かう」を意味する単語を列べたのである。
富田が苦労しているのを見て、さすがにほっておくわけにもいかず、伊丹は桑原曹長に、「おやっさん、絶対にこっちから手を出させないでよ」と告げながら、小銃や拳銃、銃剣といった武器っぽく見えるものを外して、車を降りた。
そして白薔薇・黄薔薇の二人の注意を惹くように声をかける。
「えっと、失礼。部下が何かいたしましたかね？」
だが、ヒステリックになった女性には、そのノンビリとした声かけは、いささか癇に障ったようである。
身に覚えのない罪で攻め立てられるような気分を味わいつつ、伊丹は「おちついて、話せばわかる」という言葉を繰り返すしかなかった。
だが、女性達は聞く耳を持たない。
彼女たちからすれば、これが初陣だ。しかも慌てていたが故に精神的な余裕もない。こういう時に頼りになる歴戦の下士官連中は歩兵であったり、騎士であっても歩兵部隊を率いる立場なので、後方はるか彼方。
言葉もうまく通じない。そんな状態で何をもって疑わしく、何をもって安全と判断するのかの基準が与えられてないのだ。あらゆるものが怪しく感じられた。疑念が疑念を産んで増殖していき、剣を抜くしかなくなってしまうのは、ある意味必然であった。

のこと出てきた代表格らしい男に対して、白薔薇ことパナシュは、剣を突きつけて降伏するように命じた。

ここにいる怪しい連中全員を捕縛し、武装を解除しなければ安全と安心を得ることが出来ないと思いこんでしまったのだ。

ここにいる敵は何をしでかすか解らないから、油断は決して出来ない。少しでも怪しい素振りを見せたら攻撃するしかない。そのように気を張った状態の彼女たちにとって、訥々と「話せばわかる」を繰り返す男は苛立たしく、邪魔なだけである。

黄薔薇は「ええぃっ！　お黙りなさいっ」と激昂して、伊丹を平手で殴りつけてしまった。

これを見て殺気立つ自衛官。だが桑原が「待てっ!!」と命じ、伊丹が「今は逃げろ、逃げろっ、行けっ!!」と叫んだ。

途端、エンジンの轟音があがり、第三偵察隊の車両が土煙をあげる。

突然のことで騎馬隊は驚いた馬を抑えるので精一杯となってしまった。そして、ようやく後を追おうとした時には、土埃を巻き上げて走り去っていく自衛隊の車両は、もうはるか彼方へと消え去ろうとしていた。

数騎の騎兵が慌てて後を追ったが、とうてい追いつくことは出来ないだろう。

こうして、伊丹は独り取り残されたのである。

「いててて」

首の痛み、背中の痛み、足の痛み、頬の痛み、右目の周りの痛み……痛くない所なんてないほど、体中が痛みを訴えていた。

意識を取り戻すというか、苦痛で目が醒めてしまった伊丹の視界は、妙に薄暗かった。

夜なのか、それとも雨戸を閉め切った部屋なのか……。とにかく薄暗い。

これまで味わったことのないような、軟らかい羽毛と絹による掛け布団の感触に違和感を覚えつつ、自分が寝ている場所を知ろうとして周囲を見渡す。首が痛いので、そろそろと身を起こそうとした。

だが、やんわりと触れてくる手がそれを止めた。

その手は伊丹を再びベッドに横たわらせ、掛け布団をきちんとかけなおす。

そして、部屋の隅から燭台が招き寄せられ、柔らかな灯りが伊丹の周囲に広がった。

その灯りに浮かび上がったのは、「お目覚めになられましたか？　ご主人様」と微笑む、いわゆる、メイドさん達であった。

「こ、ここ、ここは⁉」

ついうっかり日本語で話しかけて、彼女たちの困ったような表情を見せられてしまう。伊丹は秋葉原に来た覚えなどないし、メイド喫茶ならぬメイドホテルなんぞにチェックインした記憶もない。

伊丹は、「ここはどこ？」と現地の言葉で話し直した。
「こちらは、フォルマル伯爵家のお屋敷です」
伊丹は、そうか……と頷くと、脳内で状況の整理を始めた。
周囲を見たところ、ここは監獄に類する施設では無いようである。
伊丹はイタリカに向けて走らされたから、おそらくここはイタリカの街だろう。ならば傅いてくれているメイドはフォルマル伯爵家のメイドではないか？
こうして待遇が改善されたところを見ると、ピニャには協定を破る意図はないのだろうと思える。とすれば、無事に帰れる可能性もある。無理に逃亡をはかる必要もないかも知れない。
「水を、もらえないか？」
メイドは、暖かな微笑みを見せると、「かしこまりました」とちょこんとお辞儀をして、去っていった。代わりに、別のメガネをかけた長身のメイドさんが伊丹の側に進み出て跪いて控える。
伊丹は、この娘の顔を見て思わず眼を擦った。
「どうされましたかニャ？」
「いや、なんでもない」と言いつつ、こういう世界だしこういうこともあるのだろうと無理矢理納得しようとした。というのも、メガネのメイドさんの頭に猫耳がはえていたからだ。しかも、ピクッピクッと微妙に動いていて作り物とは思えない。
「状況は？」

「はい？」
「いや、街の様子とか、お屋敷とか、それと俺の取り扱いとか、いろいろ……」
猫耳メガネのメイドさんは、困ったような表情をした。
すると、脇から「ただいま、夜半過ぎでございます。街の者は寝入り、すっかりと静かになった頃合いでございます」と、老メイド長が現れて話し始めた。
老メイド長の話によれば、街は平穏を取り戻しつつあると言う。明後日、犠牲者を合同で弔う予定。ただ、周辺の村落の被害がどれほどなのかまだわかっていない。領内が元の活気を取り戻せるまで、どれほどの時間がかかるか想像も出来ない。
ピニャ率いる騎士団の本隊や、落伍していた騎兵、歩兵が五月雨式に到着しつつある。ほぼ八割近くが集結を済ませたので、ピニャは領内の各所へ出動を命じ、治安確保のために働き始めている。
「それとイタミ様におかれましては、ピニャ様は、賓客としての礼遇を命ぜられました。そしてこの度の無礼を働かれました騎士団の隊長様は……」
白・黄二人の隊長はピニャに烈火のごとく怒鳴られ、黄薔薇ことボーゼスは女性なのに額に銀杯をぶつけられて、深い傷を負った。傷が残るかも知れず、騎士団の女性からは同情を集めていると言う。
非常に丁寧且つ詳細な説明を終えると、老メイド長は伊丹に対して、腰をおとして頭を垂れた。

「この度は、この街をお救い下さり、真に有り難うございました」
この席にいた、メイド達五〜六人もメイド長に倣って深々と頭を下げた。猫耳だけでなく、ウサ耳らしきものも見える。
「このイタリカをお救い下さったのはイタミ様とその御一党であることは我らフォルマル家の郎党、街の者も全てが承知申し上げていることでございます。そのイタミ様に対して、このような仕打ちをするなど、許されることではございません。もし、イタミ様のお怒りが収まらず、この街を攻め滅ぼすと申されるようでしたら、我ら一同みなイタミ様にご協力申し上げる所存。ただ、ただ、フォルマル家のミュイ様に対してだけはそのお怒りの矛先を向けられることなきよう、伏してお願い申し上げます」
さらに深々と頭を下げられると、伊丹としても心配するなと告げるしかなかった。と同時に、この家の者が帝国の皇女だの、帝国だのに忠誠心を抱いているわけでは無いことを知った。ここにいるメイド達の忠誠心は、あくまでもミュイに対するものであり、主人に対して不利益であると判断すればピニャを背中から刺すことだってあり得るのだ。そして、それは伊丹とて例外ではないだろう。
メイド長やメイド達が伊丹に頭を垂れるのは、あくまでもフォルマル伯家の利益を図るためなのだ。それを知らずに調子に乗れば、えらい目にあう。
伊丹が水を頼んだメイドが、コップを差し出した。

寝たままでは飲みづらいので、伊丹が身体を起こそうとすると、猫耳メガネのメイドが手を出して身体を起こすのを手伝ってくれる。全身が打撲と筋肉痛で辛いので、とても助かった。

「イタミ様。モーム、アウレア、ペルシア、マミーナの四名をイタミ様専属と致します。どうぞ心やすく、何事であってもご命じ下さい」

水を運んでくれたメイド……これはヒトのようだ。そして長身の猫耳メガネのメイド。さらにその後ろのウサ耳と、外見的にはヒトっぽく見えるが緋色の長い髪が妙に太くて無数の蛇みたいになっている少女……併せて四名が伊丹に跪いて、頭を垂れた。

「ご主人様、宜しくお願い申し上げます」

愛らしい少女・女性達に声をそろえて言われると、なんとも言えない浮ついた気分になってしまう。調子に乗ったらまずいだろうと思いつつも、ちょっとは調子に乗ってもいいんじゃないかなぁ、と思わずにいられない伊丹であった。

さて、少し時間を巻き戻して、夕刻のイタリカ。

その城市の外に、隊長を捕虜とされた第三偵察隊の面々が、大地に伏せ隠蔽し、暗くなるのをじっと待ちかまえていた。

「隊長、今頃死んでるんじゃない？」

双眼鏡で街の様子を監視しつつ、栗林がぼやいた。捕虜になった伊丹が女性騎士連中にこづか

れ、追い立てられ、走らされていたのを遠くから見ていたのだ。彼女の口振りにはどこか願望めいた響きもあった。

栗林はよく知りもしない癖に「オタク傾向あり」というだけで「キモオタ死ね」と、脊椎反射反応を示すタイプである。もちろん、ホントに死んで欲しいと願っての「死ね」ではない。目の前で伊丹が殺されそうになれば、きっと助けるし積極的に後ろから頭に照準を合わせようとも思わない。ただ、深く考えることなくそう言っているだけなのだ。伊丹に「脳筋爆乳馬鹿女」と言われる所以だ。

そのことをわかってる富田二曹は「あの程度なら、大丈夫だろ?」と、顔をドーランで迷彩に塗装しつつ答えた。

傍らで時が来るのを待っているレレイやテュカ、ロウリィでさえも、頬や鼻筋、額といった光があたったときに反射する部位に、栗林の手によって緑や茶色の化粧が施されていた。まぁ、着ている衣装はいつもと変わらないが。

「あれでもレンジャー持ちだからな」

「誰が?」

「だから伊丹二尉」

「うそ?」

「いや、本当」

「冗談？」
「マジ」
「そのマジ、ありえない～勘弁してよ～」
レンジャー徽章にあこがれをもっている栗林は、この瞬間、自分の気持ちがなんだか汚されたような気がした。
日本語による会話がまだ十分に理解できていないテュカとロゥリィはきょとんと聞いているだけであったが、かなりのレベルで理解できるようになっているレレイは持ち前の好奇心を発露し、栗林にイタミがレンジャーとやらを持っていてはいけないのかと、質問した。
困る栗林。苦笑しつつ「伊丹隊長の、キャラじゃないのよねぇ」と呟くのだった。そして、鋼にも比肩されるほどの強靭な精神、過酷な環境にも耐え抜いて任務を遂行するという美化率二百四十パーセントのレンジャー像を語って聞かせたのである。
これには、無表情冷静キャラのレレイもわずかに頬をほころばせた。
どっちかというとスライム並に軟らかい（故に、砕くことも断ち切ることも不可能）精神と、過酷な環境は可能な限り避けまくり、なんとなく任務を済ませてお茶を濁すという、美化すれば『余裕のある』、普通に評すれば『不真面目』な人物像を、伊丹に対して抱いていたからだ。
もちろん、レレイ達に関わるようになった第三偵察隊が、コダ村の避難民達を救い、炎龍を撃退し、避難民の住処をつくり、イタリカを襲った盗賊を撃退しているのもその眼で見ている。だが、

それはあくまでも第三偵察隊全体、あるいは自衛隊の行ったことだ。

事実、レレイが通訳して聞かせたことで、ロゥリィもテュカも、ころころと笑った。栗林の語るような精強なイメージは桑原や富田に対して、女性としては栗林に対してこそふさわしく、暇さえあれば……暇がなければ無理矢理つくって、本（実際には漫画）を読みふけっている伊丹には似つかわしくないのだ。

実際に、アルヌスはずれの森につくられた難民キャンプの、木陰のベンチで昼寝をしつつ本（実際にはコミケでなければ入手できないような同人誌）を読んでいる伊丹の姿を、彼女たちは何度も目撃している。

「さて、そろそろ行こうか？」

富田の声でみな腰を上げた。

楽しく会話をしているうちに、あたりは夕闇に包まれ、丁度良い頃合いとなっていたのだ。

栗林はやれやれと唇をとがらせる。

「また徹夜かぁ……これって、絶対お肌によくない」

とかなんとか言いながらも、昨晩の立ち回りで腰のあたりが大いに充実した感じになって、しかも肌がいい感じに艶々になっているのは、栗林とロゥリィの二人である。

こうして昨夜の激戦に引き続き、今宵は潜入救出ミッションとなったのである。

……と、言ってもイタリカの警戒はザルを通り越して無警戒であった。
古くから居る警備兵は実戦の直後で気は抜けてるし、疲れてもいる。
その上、威張りくさった騎士団のお嬢様集団が到着して「案内しろ」とか「宿舎はどこだ？」とか頭越しに指図する。厩舎に馬を運べ、飼い葉はこうしろああしろ……と実にやかましい。さらには顔も知らない歩兵達が、あとからあとからと到着して来るから、いちいち誰何するのも馬鹿らしくなってしまうのだ。
騎士団の兵士達も、知らない顔は地元の警備兵とか住民ぐらいにしか思わないから、見ず知らずの人間がふらっと入り込んでも、誰も気にしないという状態だった。
そんなわけで、ロゥリィやらテュカやらレレイは、堂々と開いていた城門をくぐり抜けることに成功してしまったのである。この三人なら、万が一見とがめられても、あれ？　まだ街を出ていなかったのかな？……ぐらいにしか思われない。
「顔にペイントを施す必要なんてなかったわねぇ」
などとテュカは呟きつつも、城壁を上がって見張りの兵隊の耳に、精霊魔法「眠りの精の歌声」を注ぎ込んで、朝までぐっすりと眠らせる。
で、外に合図をすると栗林や富田、倉田、勝本といった面々が昇ってくるという算段であった。
夜の街は静かになっていて人の気配もなく、富田達は誰に見とがめられることもなく、あっけないほどにフォルマル伯爵邸へと到着した。

さすがに、ここは警戒の兵が立っていたが、富田達にとってはどうということもない。個人用暗視装置を使えば、暗闇の中でも誰かが居ることはすぐにわかる。巡回警備が通り過ぎてから、静かに野分け草分け進めばよいのだ。

こうして建物までたどり着くと、富田は鎧戸（しころ板という幅の狭い薄板を一定の間隔で平行に取りつけた扉）のおりた窓の一つを選んで、しころ板の一枚をそっと破壊した。

「ご主人様、宜しくお願い申し上げます」

と、下げられた四つの頭。その一つから伸びるウサ耳がピクッと立った。

その耳の挙動たるやまさしく、警戒する兎のごとしである。ついで、別の頭のネコ耳も小刻みに動いている。

「マミーナ、どうしました？」

老メイド長の冷厳な視線に、マミーナと呼ばれたウサ耳娘が告げる。

「階下にてしころ板の折れる音がいたしました。どうやら、何者かが鎧戸をこじあけようとしています」

ウサ耳メイドといっても、彼女の発する雰囲気は暗殺者のそれであった。猫耳メガネメイドの瞳も、剣呑に輝きはじめ愛玩猫というよりは、豹のような雰囲気になる。

「この街の者であれば、お屋敷に不法に立ち入ってどのようなことになるか知らぬはずもなく、ピ

ニャ様の騎士団の者であれば正面玄関から入ればよく、あえて不調法なことをする必要もない。盗賊は滅したばかり……おそらくイタミ様の手の者であろう」

老メイド長はそう断じると、「ペルシア、マミーナ。二人でイタミ様のご配下をこちらまで案内してきなさい」と指示した。

「もし、他の者であったら？」

「いつもの通りです」

「かしこまりました」

ネコ耳娘とウサ耳娘が立ち上がった。その敏捷な挙動は、野生の肉食動物を思わせるが、二人は音もなく部屋から出ていった。

伊丹はオタク的好奇心から、老メイド長に尋ねることにした。

「あの二人は、どういうメイドさんですか？　種族とか……」

「マミーナは、ヴォーリアバニー（首狩ウサギ）、ペルシアはキャットピープルでございます。こちらに控えるアウレアはメデュサ。モームはヒトです」

「はぁ、随分とたくさんの種族がいるのですね。こうして多種族が一緒の職場で働くということは当たり前なのですか？」

「いいえ、滅多にないことでございます。先代のお屋形様は開明的な方で、種族間におこる摩擦の殆どは貧困によるという信念を抱いておいでした。その為にヒト以外の者を積極的に雇い入れる

ようにされていたのです……まぁ、……『ご趣味』ということもおありでしたが」
「なかなか親しみの持てそうな方ですね」
「イタミさま、センダイさまにニたニオイ、アル」
アウレアが、伊丹に向けてウニョウニョと長い緋色の髪を伸ばそうとするのを、モームが横からピシャ！と、つっこみを入れるかのごとくはたき落とした。
「アイタタ」
「ご主人様への、失礼は許しませんよ」
「ハイ」
アウレアが、餌を取り上げられた子猫のような表情をしたために哀れみを誘うが、老メイド長から、メデュサは吸精種でこの髪で他者の『精気』を吸い取る、十分に躾はしてあるが、時に本能に負けそうになるので「ご注意を」と言われてしまった。
ほどなくして、部屋の戸が開く。
すると、マミーナとペルシアに案内された、栗林や富田、倉田、勝本、ロゥリィ、レレイ、テュカらが姿を現した。
ロゥリィの姿を見るや、老メイド長やメイド達は「まぁ！　聖下御自ら脚をお運びいただけるとは……」と彼女の周囲に集まった。
敬虔な信徒達が跪礼して祝福を求めると、ロゥリィも柔らかな表情になって静かに掌を向けた。

イメージとしては掌から温かい気だか光線だかが出て、信徒達がそれを浴びて喜んでいるという雰囲気だろうか？

とは言っても、死と断罪と狂気、そして戦いの神、エムロイの信者ってどんなものなんだろうとも思ってしまう伊丹である。まあ、世には教祖がサリン殺人で死刑判決を受けるような信仰すら後生大事にしている連中もいるのだから、それにくらべたらはるかにマシなのかも知れない。

厳粛な雰囲気の漂うなか、倉田は場を壊さないように静かに伊丹のベッドの傍らまで来ると、

「随分と羨ましい待遇のようですね、二尉」などとひそひそ語った。

倉田がケモナーでもあることを知る伊丹としては「どうだ、羨ましいか？」である。まぁ、伊丹自身にはケモノ属性もメイド属性もないので、そういうのが趣味の奴を喜ばせてやるほうが楽しい。

「あとで紹介してやろう」

そう告げる伊丹であった。

14

既に夜半であったが、ピニャは床にも入らず執務室で独り思索していた。

このままではまんじりとせず、寝入ることもできないだろうから。

自分が犯したことになってしまう失敗を糊塗する方法を定めない内は、安らぐことが出来ないのだ。どうすればいい。どうすれば……。そんなことばかりを考えていた。

ピニャが執務に借りているこの部屋は、フォルマル伯爵家先代当主の書斎であったと言う。上品な調度品が並び、重厚な一枚板からなる机と、座り心地の良い椅子が中央に据えられている。そして羊皮紙とインクの香りが仄かにただよっていた。

先代の持ち物だろうか？　蟲獣の甲皮から削りだしてつくられた単眼鏡と、羽ペン、それとメイドを呼ぶための小鈴が文盆の上に無造作に載せられている。そして机の傍らには、分厚い表紙をもった収税報告の綴りと、土地管理台帳、そして関税の受納記録が置かれていた。……そうだ、後見をする以上、フォルマル伯家の実務を管理する代官を選任しなくてはならないだろう。こうしたことも、ピニャが考えなくてはならないことであった。

羽ペンを弄びながら、羊皮紙の切れ端にアイデアを書き込んでは乱線でかき消し、再び書いては消す。

羊皮紙の上には「協定違反行為を無かったことに出来ないか？」と記されていた。

しかし、伊丹の部下連中は逃げ失せてしまった。

中途で事故でも起こして全滅でもしない限り、彼らはアルヌスに帰り着いて、何があったのか報告するだろう。報告をしない理由がない。

報告をさせないためには、捕らえるか殺すしかなかったのだ。

設問　今から後を追って、彼らを捕縛することは可能か？

答え　不可能。

そもそも炎龍すら撃退する連中を、現有戦力でどうやって殲滅する？

考えてみれば、自分らの隊長を見捨てて逃げ出すなど、なんと不甲斐ない連中なのだろうと思う。連中の能力なら、ピニャの騎士団など一瞬で殲滅できたはずなのだ。にもかかわらず、そうしなかった。そうしなかったのは何故だ……おかげで自分がこうして苦しむ羽目になる。いささか被害妄想気味だが、悪辣な奸計に嵌められたのではと思えて来たほどであった。

羊皮紙にボーゼスとバナシュの二人の似顔絵を描く。そしてバカとか阿呆といった罵詈雑言で二人を飾りあげていく。そして最後にはぐしゃぐしゃと羊皮紙を握りつぶして、ピニャは思考を先に進めた。

協定違反行為が知れてしまうことは、最早防ぎようがない。時を巻き戻すことが出来ない以上、仕方ないと諦めるしかないのだ。

頭を抑えて「諦める、諦める……」と念じる。

ピニャの考えるべきは、実現不能な課題に悩むことではなく、この失点による損害を、どのように軽減するかなのだ。

戦争は外交の延長。外交はカードゲームに似ている。強力な鬼札を手にした敵と戦うには、三つ

の方法が考えられる。その鬼札を重要な局面で使わせない。あるいは無意味な局面で使わせる。そしてその鬼札に匹敵するカードを入手すること。

とはいえ、テーブルの向こう側にどんな相手が座るか解らないうちに、こちらの出方を決めるのは不可能だろう。今は、相手側を利する手札を極力減らすことが重要なのだ。

こちらの失点は二つある。そのうちの一つは、往来を保障するとしたはずの自衛隊を襲ってしまったことだ。もう一つが虜囚とした伊丹を、彼らの言うところのジンドウテキでない扱いをしてしまったこと。

前者については、アルドの言う通り速やかに謝罪してしまうのも選択肢の一つだ。いや、一番良い方法かも知れない。

自衛隊はジンドウテキと称して、捕虜の扱いにすら気をつかう相手だ。「いい人」であることは間違いない。となれば、連絡の不行き届きであることを説明して頭を下げれば、交戦中の敵にだって容赦してくれるかも知れない。なにしろ実質的に損害は出ていないのだから。

だが、謝罪は逆に付け入る隙を与えることにもなる。代償としてどのような要求がつきつけられるのか……それが恐怖であり不安の種となった。自衛隊の圧倒的な戦闘力、破壊力を直に目にしてしまえば、どのような要求をされても拒絶は出来そうもない。

敵は、圧倒的な戦闘力をピニャに見せつけた。そして交渉しようと言ってきた。

ピニャは仲介役だ。帝国の外交担当者は敵の恐ろしさを理解しているのか？　皇帝は？　宰相

は？

今この時点で、敵をいささかなりとも知っているのは、まさにピニャだけなのである。

帝国の強気で居丈高な外交交渉、武力を背景にした恫喝を、ピニャはこれまで頼もしく思っていた。若手の外交官僚達が巧みな弁舌で論戦を挑み、拒絶できない要求を積み重ねていき、敵が膝を屈して許しを請う姿を想像しては、悦に入っていたのである。

だが、今回それをやらかしたらどんなことになるか……。

「胃が痛くなってくる」

ピニャは引き出しから新しい羊皮紙を取り出すと、インクにペンを浸して皇帝宛の報告書を綴り始めた。いかに敵が強大で、恐るべき戦闘力を持っているか、見たままを記述していく。ところが……中途まで書き連ねていくと次第にペン先が重くなってきた。最後にはガシガシと紙面を乱線で塗りつぶし、ペン軸そのものを折ってしまった。

「こんな内容、夢でも見たのか？　と馬鹿にされるだけだ」

自分でも信じられないのだから。

報告の件は、後回しにすることにした。ハミルトンにも相談したい。

「まずは、イタミの件を何とかしよう」

伊丹は今この館で休んでいる。

彼さえ口を噤んでくれれば、失点を減らすことも出来るのだ。いや、上手くすればこちらの手札

にすら出来るかも知れない。

問題は、どうやって伊丹を説得するか。よくあるのが贈賄、あるいは伊丹が男であることを利用しての籠絡、そしてその両方である。

だが、誰がその任を遂行するにふさわしいだろうか？

もちろん、自分自身が……と考えた。しかし、相手は十人程度の小隊の隊長程度に過ぎない。特別任務の小隊だとしても、イタミという男の地位は、帝国で言えば百人隊長程度だろう。そんな格下の相手に、自分自身というカードを切るわけにはいかない。皇女というカードは、もっと重大な局面でこそ使われるのだから。

となれば、誰がいいか。

ハミルトンならばいいかも知れない。男にも慣れているらしいし。だが彼女は現段階ではピニャにとって重要な参謀役であり、万が一の交渉役としても力をふるってもらいたかった。だから、除外する。

ここまで考えて、ふとボーゼスとパナシュの二人の名前が浮かんだ。

自分のしでかしたことは自分で責任をとれということで、罰にもなるから丁度良いように思えた。

それに、あの二人ならば適任である。なにしろその容姿はなかなかのものだ。ボーゼスは、金細工のような繊細な美しさと豪奢な金髪を誇る美形で、しかもパレスティー侯爵家の次女と家柄もよ

い。

パナシュはカルギー男爵家と家柄こそボーゼスに劣るがその凛然たる眼差しと才気だった容貌で比類がない。あの二人に言い寄られて、墜ちない男などいないはずだ。

イタミ程度の男には惜しい限りだが、今回の役割の重要性からすれば、これぐらいのカードは切っても良いと思えた。

そもそも、性格的にそういう任務が二人に遂行可能か……と、までは考えが及ばず、ピニャはこれが名案とばかりに早速実行に移すことにした。というより指示を下してしまわないといつまでも落ち着けなかったのだ。

机に置かれた鈴に手を伸ばして、鳴らす。

心を落ち着かせるために用意された、濃いめの香茶を口に運ぶ。すると、蝋燭の炎が風に揺らいだ。

視線をあげると、メイドの一人が姿を現す。エプロンドレスを両手で摘み、膝を軽く屈し頭を垂れるという作法に基づいた挨拶にピニャは頷いて応じた。

「お呼びでございましょうか？　殿下」

「うん。ボーゼスとパナシュの二人を呼んでくれ」

「お二人とも、もうお休みかと存じますが」

「かまわない。起こしてくれ」

「かしこまりました」
メイドはそう言うと部屋を後にした。ピニャは部下を迎えるために机周りを簡単に整える。特に二人の悪口を記した羊皮紙はビリビリに破って棄てた。

＊　＊

倉田は、この世の春を謳歌していた。
エルフの娘とか、無口無表情の知性派魔法少女とか、暗黒神官の少女的姐さんとか、どうにも伊丹の好むタイプばかり現れるのはなんでだっ！　やり直しを要求するぅ！　と、かねてから心の底でずうっと念じていたのである。
そして、ようやく自分好みのキャラが現れたのである。となれば、興奮を抑えることは難しい。いや、喜びは素直に表に出してこそ、喜びである。これを押しとどめることなどかえって害悪であると、声を大にして言いたい。
特に、猫耳メガネメイドのペルシアの存在は、ツボにはまった。
可愛い系ではなく、黒豹とかライオンみたいな肉食獣タイプのおねぇさんである。
それが、まん丸のメガネをかけているのだが、その双眸は当然のごとく猫目で冷たく切れそうな印象であった。長身でスポーティで、出るとこは出てひっこむところはひっこんでる体躯を、無理

矢理メイド服というふんわりとした衣装でラッピングした感じがまたたまらない。
しかもアキバのメイド喫茶とかパチンコ屋にいるような露出型コスプレ店員と違って、裾も袖もぴっちり肌を覆っていて、これ見よがしなチラリズムなど全くの無縁。働くための制服としてのメイド服である。これぞ本物というところが味噌である。
そんな、猫耳メイドさんに傅かれている伊丹に「羨ましいぞ、コノヤロ。紹介してくれないと後ろ弾（味方を後ろから撃つという凶悪な行為）だぞ」という念を込めて、声をかけた。すると伊丹は苦笑しつつ、取り持ってくれた。
「おい、倉田……こちらのご婦人がペルシアさんだ。ペルシアさん、こいつは倉田だ。よろしくしてやってくれ」
伊丹に紹介されたのをゴーサインと受け取って、早速挨拶。
「じ、自分は、倉田武雄ともうします」と、ピシッと敬礼してしまう。だが、そのかちかちな姿は彼女の「はぁ？」という表情を「くすっ」と綻ばせることに成功した。
ペルシアからするとヒト種の男が、単なる憧憬心で向かってくるのは初めてのことであったのだ。
ペルシアとて雌。容姿にだってそれなりに自信があるし、なによりも潔癖性の子猫から一線を画した大人の雌豹だから、雄の視線を集めるのは嫌いじゃない。だが、ヒト種の雄が向けてくるのは大抵は、下世話な欲望にまみれた視線か、あるいは彼女の獣性に怯えたものなのである。

ところが、倉田はちょっと違っていた。

「猫も女も、男が自分に好意を持つかどうか直感的に理解する」と、ある女性作家は語る。猫であり女であるペルシアは、このクラタと名乗った男がどういう心づもりで自分に対しているか理解できてしまった。

よっぽど捻くれてない限り純粋な好意には、純粋な好意が湧き上がって来るのが人間の情というものである。こうして倉田は猫耳メガネのメイドさんとの間に、良い雰囲気を醸し出すことに成功したのである。

倉田とペルシアの例を挙げたが、こんな感じで、フォルマル伯爵家のメイドさん達と、自衛官達は、なごやかにうち解けていた。

深夜なのにお茶まで出てくる。こういう貴族の館では、当主の気まぐれや我が儘に応えるため、夜だろうと軽食やお茶の支度がしてある。それを不意の来客のためにと、メイド達は流用して、たどたどしいながらも会話を楽しんだのだ。

武闘派の栗林は、ヴォーリアバニーのマミーナと、妙に気が合ったようである。バディ・ムービーの主人公達のように、はまった雰囲気をつくっていた。特に、マミーナは昨日の栗林の活躍を見ていたようで、賞賛の言葉が尽きない。

レレイは、メデュサ種のアウレアに興味があるのか、まじまじ観察したり、ウニョウニョ蠢く触

手にも似た緋色の髪を指先でつついたりしている。レレイが言うには、メデュサはその悲しき習性から虐待されることが多く、その数が減って今では絶滅危惧種らしい。レレイも文献でしかその存在を知らなかったと言う。

ロウリィは、敬虔なエムロイ信徒らしい老メイド長に対して、どことなく辟易とした雰囲気を醸しながらも慇懃に応対し、神の御言葉を伝えていた。

テュカは、ヒト種メイドのモームに、その身にまとっているローライズのジーンスにシャツという日本のファッションについて尋ねられて、自分で購ってきたわけでないからと困りつつも、わかる範囲で着心地などについて答えていた。彼女達からすると、伸縮性のある生地は驚嘆以外の何物でもないのだ。おかげで体の線がくっきり現れすぎて、困っているとはテュカの弁である。

伊丹は、富田と勝本相手に、状況の説明を受けて今後の対応について相談している。せっぱ詰まった状況ではないということも解って、無理に脱出する必要もないだろうという結論に達していた。

こんな有様だったので、ピニャの密命を受けたボーゼス嬢が思い詰めた表情で伊丹の部屋をノックしたとしても誰も気付くことが出来なかった。

ボーゼス嬢が、緊張のあまりノックと言うより、戸を撫でる程度にしか叩かなかったというのも、大きな理由となるだろう。

ボーゼスは、暗闇に等しい廊下にたたずんでいた。

返事のないドアの前で待つこと暫し。

人目を気にしているのか、右を見て左を見る。大きく息を吸って、緊張を解きほぐすようにしながら息を吐く。そしてドアの取っ手に手をかけるが、どうしても押し開くことが出来ないのである。

「イタミを籠絡せよ」と言う命令は、彼女にとって死んで来いと言われるようなものだった。

家の利益や、政治的な目的から配偶者が決まるのは、貴族の家に生まれた者の運命として、とっくの昔に受け容れている。

政略的な目的を達するために内外の賓客を接待し、時に籠絡する手管も、貴族の娘としては当然の嗜みだ。

夢見がちな殿方には絶望的なことかも知れないが、帝国における貴族の娘に清楚な者など一人としていない。どんなにあえかな外見をもっていようと、世事に疎く見えようとも、それは擬態であり、内面はしたたかであるように育てられている。それが、飢える者がいる一方で、何不自由のない生活を送ることを許された、高貴な者に求められる資質だからである。

だが、よりにもよって相手はイタミである。

出来ることなら、サロンで優雅な雰囲気をまとった貴公子然とした装いの青年将校を相手に対等な立場で、洒脱で、智慧に富んだ言葉での戦いを楽しみたかった。

最高の武器（宝石）と戦闘服（ドレス）と香水で武装した自分を見せびらかし、恋愛遊戯という

名の演習で磨き上げた技を実戦で試す。

甘美なる肢体で誘惑し、香粉の香りに酔わせ、これが欲しい？　欲しいでしょう？　与えてあげてもいいわよ。でも、欲しければ私に隷属なさい……と視線で語り、男の精神的な全面降伏との引き替えに、瀟洒な花壇を褥とするのだ。

ところが、どうた。イタミとの出会いは戦場ですらない。剣を交えることもなく、感情のおもむくままに嬲って、罵倒して蹴倒して、踏みつけて……。後で真相を知って愕然としている有様。最早戦いにすらならない。さらに今の我が身の無様さはどうだ。ありあわせの夜着。しどけなく垂らした髪。額の傷を隠すための厚く塗り重ねた白粉。まるで安宿の淫売のようではないか。精神的にも物理的にも最初から敗北している。どの面さげてイタミと相対しろと言うのか。このままこの部屋に入れば、ただの人身御供、懺悔し許しを請うための捧げものとして、我が身は男にむさぼられておしまいである。

男という生き物は、与えた後で「優しくしてね？」と願っても、決して適えてくれない生き物なのだ。絶対に、与える前に「好意」という名の担保をとりつけなくてはいけない。だが何を引き替えに？

イタミを誘惑し制圧する役割は、おそらくパナシュのものとなるだろう。自分はそのための前座だ。自分が供犠となることで罪を帳消しにして貰う。罪という汚れを拭き取るために使った雑巾はそれが例え絹であっても、用なしなのだ。

くやしさの余り、涙が出てきそうになった。だが泣いてはいけない。泣いたら、瞼が腫れてしまう。そうなったら美貌が損なわれてしまう。世には、泣いている女が好きという男もいるが、そういう男の前でも流す涙は決して悔し涙であってはならない。魅せるための真珠涙は、こんな心境ではけっして流れてはくれないのだから。

廊下は静かであった。厚い扉の向こうは寝室。寝室の扉というものは、中でちょっとやそっと声をあげた程度で廊下に音声が漏れだしては来ないように作られている。

いよいよ意を決して戸を開いてみる。期待したのは暗い部屋の奥に、イタミが寝台に横たわっていることである。

ボーゼスは音もなく歩み寄って、寝台に忍び入る。イタミが違和感に目を醒ます前に、官能を以てその口を塞がなくてはならない。

だが、扉を開いてみると部屋の中は和気藹々とした雰囲気であった。

贅沢なまでにふんだんに蝋燭を灯し、メイドや異世界の兵士達が、お茶など傾けている。

しかも、誰一人ボーゼスに気付かない。

「……」

無視である。

「……」

シカトである。

「……」

はっきり言って空気扱いであった。

「くっ……」

ようやく覚悟完了させたというのに、この扱いはどうだ？

パレスティー侯爵家の次女ボーゼスを無視である。

いい度胸である。

自分という存在は、雑巾にすらならないと言うのか？

誰もそう語ったわけではないし、ヒステリーとか被害妄想に類する発想だが、ボーゼスのこころの中では自分の置かれた状況がそのように解釈されてしまった。女は、自分の存在が無視されることは絶対に許さない。

腹の底から沸騰してくる怒りに、彼女の両手はわなないた。

擬音表現は漫画的で稚拙だが、この際あえて使わせて貰いたい。この時の、彼女の振るまいは以下のようなものとなった。

つかつかつかつかつかつか、バシッ！！！

＊　＊

右目の周りの黒々としたアザと、左の頬に真っ赤な手形紅葉。さらに、つかみかかられたので猫に引っ掻かれたような五本線の傷までほっぺたにある。被害者の顔は、そのような状態であった。

「で、なんでこんなことに？」

夜半に、屋敷中の眠りを破った大騒動の果てに、ピニャの前にそろったのは、伊丹ら自衛隊の面々であり、ピニャの送り込んだボーゼス嬢、そしてメイドさん達である。

帝国皇女たるピニャ・コ・ラーダ殿下は、焼けた石ころでも飲み込んだような、腹部の熱痛を感じながら、伊丹の顔面の損傷がどのような理由によるものかの説明を求めた。聞くのがとても恐ろしかったが、立場上尋ねざるをえない。

「べつにあたいらが引っ掻いたわけではないニャ」

「いや、わかってますよ。ペルシアさん」

倉田のフォローを受けて、ペルシア達メイドさんズは退場。

「右目まわりのアザは元々ついていたものよ。『今回の』騒動とは関係ないわ」

ロゥリィ・マーキュリーとレレイ、テュカは証言して、部屋の片隅へ下がる。

残されたのは、自衛官達に両脇から取り押さえられていた、ボーゼス嬢である。

彼女を残す形で、倉田や栗林達は後ろに下がった。
ボーゼスは、俯いたまま「わ、わたくしが、やりました」と蚊の鳴くような声で言った。
この時のピニャのため息は、とても深々としていて、広間中の誰の耳にも聞こえたほどである。
こめかみがズキズキと痛くなって、ピニャは頭を抑えてしまった。
「この始末、どうつけよう……」
「あのぉ、自分らは隊長を連れて帰りますので。それについてはどうぞそちらで決めて下さい。そろそろ明るくなって来ましたし……」
と答えたのは富田である。ピニャが何に悩み苦しんでいるか知らないから、安易なものである。
なにしろ彼にとっては、彼好みの美人がイタミをぶん殴った。それだけのことでしかないのだ。
だがその言い方は、ピニャには突き放すような最後通牒的響きを持って「そっちで勝手に決めて下さい」という意味で受け取られた。
レレイが、いつものように抑揚に欠けた口調で通訳したからさらに効果倍増である。
「それは困るっ！」
ピニャは、このまま帰すわけには……と、引き留める理由を探して、朝食を摂って行ってはどうか、とか、接待を受けて欲しいとか、様々なことを言い引き留めにかかった。
倉田は、とても申し訳なさそうな態度を示しながらも言い訳を続けた。
「実は、伊丹隊長は、国会から参考人招致がかかってまして、今日には帰らないとまずいんです」

この時、レレイの翻訳は、語彙の関係上次のようなものとなった。
「イタミ隊長は、元老院から報告を求められている。今日には戻らなければならない」
これを聞いたピニャの顔は、『ムンクの叫び』の如きものとなる。
帝国では、出世コースにのっている超エリートを、名誉あるキャリアと呼んでいる。将来の指導者層となる人材と目されると、現段階での位階が低くても元老院での戦況報告や、皇帝に意見具申をしたりする機会が与えられるのである。
そんなこともあって、元老院から報告を求められているイタミを、名誉あるキャリアに立つ重要な人材であると勘違いしてしまったのだ。
そんな重要人物になんてことを……、このまま行かせてはならない。なんとしても取り繕わなくては。
この時、ピニャ、決断の瞬間である。
拳を固めると立ち上がって決意表明した。
「では、妾も同道させて貰う!!」

15

「国境の長いトンネルを越えると雪国だった」

アルヌスの丘と銀座を繋ぐ『門』。これを初めて越えようとした時、伊丹は川端康成の書いた雪国の一節を思い起こした。

暗いトンネルから白銀の雪景色へと風景が一変する様相を見事に書き表したそれは、読者を作品世界へと一気に引き込んだ名文中の名文だと思う。

実際、銀座の街中から、突如広がる自然の風景へと出て来るのは、それなりの感動があった。

ところが、今や『門』の特地側も銀座側も、地面はアスファルトで固められてしまった。しかもその周囲は前後左右、天に至るまでを堅牢なコンクリート製ドームで覆われていて『門』を行き来する際に目に入る風景は無機質極まりないのである。

さらに、ドームそのものへの立ち入りも厳しく管理され、ＩＣタグ付きの身分証・指紋・掌紋・皮静脈・網膜パターンといった何重ものチェックを経なければ近づくことすら適わない。

資材や物資を運び込む自衛隊のトラックさえ、厳重な検疫とチェックを経て始めて通過を許されるのである。

こうして、ようやくドームの外へ出るとコンクリートも乾ききって無いような真新しい建築物が何棟も建ち並んでいるし、さらにその建物群も六芒形の防塁と壕によって周囲を堅く守られている。

その外側つまりアルヌス丘の裾野は、野戦築城の教範そのままにお手本のような交通壕と各種掩体が掘られ、鉄条網や鹿砦が偏執狂的にまで列べられ、近づく者を拒むのである。

そして……丘の南側には森がある。

こちらにはレレイらコダ村からの避難民達が住まう難民キャンプがあるが、風景としてみれば森というのは、日本も特地もあまり大差がなくて、植物学者あたりが見なければその差異を指摘することは難しい。

丘の東側は滑走路と格納庫の建設作業が続く土木工事現場である。

その一角では既に空自地区も設けられて、数機のＦ４ファントムの組み立て作業が並行して行われている。

こんな有様であるため世界を渡る『門』に期待される感動は、今ではすっかり失われていた。

強いて言えば大規模娯楽施設、例えばファンタジー世界を演じようとしているアメリカネズミーランドの出入りゲート並に成り下がったのかも知れない。

いや、娯楽性という意味に欠けているから、一般人にとっての駐屯地の営門と言い換えた方がより適切であろう。すなわち、この雰囲気に住み慣れた自衛官達にとっては日常と大差のない連続し

た風景の続きであり、一般人からするとほんのちょっと雰囲気の違う世界がそこにある。『門』の手前と向こう。『門』を挟んだこの両者の風景は、今やその程度の落差でしかなくなっていた。

従って、ピニャ・コ・ラーダと、ボーゼス・コ・パレスティーにとってはアルヌスの丘こそが異世界の始まりであった。

今回の協定違反について、健軍あるいは、彼よりも上位の指揮官に、きちんと謝罪をしておきたいというピニャの申し出を、伊丹はしぶしぶながら受け容れると彼女の同行を許可した。

ただし、伊丹も時間がないため、騎馬の護衛だの側仕えの従者とかをゾロゾロ連れて行くわけにはいかない。だから、「高機動車に同乗できるピニャと、あと一人の合わせて二人まで」が、伊丹のつけた条件であった。ホンネで言えば、それでは同行できないと断って来ることを期待したのであるが……。

ところが、すっかり性根を据わらせていたピニャは、イタリカの治安についてはボーゼスとパナシュに、またフォルマル伯爵領の維持管理と代官選任をハミルトンに押しつけると、「単身で行く」と宣言して、同行の支度を始めてしまった。

さすがに、殿下一人でいかせるわけにはいきませんっと、ボーゼスやパナシュが取りすがって同行を志願。ピニャはボーゼスを指名し、ぱぱっと荷物を整えると、無理矢理という感じで高機動車に乗り込んだのである。

そして、高機動車のあまりの速度に目を回しつつ、アルヌスへと到着した。
アルヌスの風景は、彼女の知るものとは一変していた。
ただの土が盛り上がっただけの丘だったはずが、今や城塞がそびえている。
しかも、何をするつもりなのかその麓の土を掘り返して、平らに整地している様子が遠景からもはっきりと見えたのだった。
ピニャ達を出迎えるかのように上空を訓練飛行中のヘリコプターが三機編隊でＮＯＥ（匍匐飛行）して急旋回する。エンジンの力ずくで空中に制止し、大地を嵐にも似たローター風で掃き清めていく。
そんな中を、第三偵察隊の車列は砂利で整備された道路へとはいった。
ＯＰＬ（前哨監視線）を越えると、いよいよ自衛隊の支配地域である。
ここからＦＥＢＡ（戦闘陣地の前縁）までの広大な地域は、無人のうえに荒野が広がっているだけなので現在は演習・訓練場として使われている。ちなみに、翼竜の死骸もこのあたりに転がっているため、コダ村避難民の子ども達もこのあたりに出没して仕事場としている。
まず見えてきたのは、隊伍を組んだ自衛官達が、旗手を先頭にハイポート走をしている姿だった。前方からすれ違うように走ってくる。
「いちっ、いちっ、いちにっ！」
「そーれっ！」

「いちっ、いちっ、いちにっ！」
「そーれっ」
「連続呼唱ーっ、しょーっ、しょーっ、しょーっ、数えっ！」
……てな感じで、隊員達の練武の声が聞こえ、小さくなっていった。
その隊伍が後方へと消え去っていくのを見送ると、今度は路傍に骨組みしかない建物が見えて来た。
帝都へ進撃すれば市街戦の可能性もあるため、この場所ではカトー先生監修のもと、この世界における一般的な民家の構造を真似た街並みを再現しようと試みられているのである。
そして民家を模した小屋やスケルトンハウスで、ゲリラ・コマンドウ対処の訓練をしているのだ。
最初、ピニャには自衛官達が何をしているのか理解できなかった。
この世界における戦闘とは、騎士や兵士達が武器を構えて「わぁぁぁ」と喊声をあげながら吶喊することだったからだ。
彼我が接触すれば、あとは個人の武技の出番である。目前に現れた敵を、剣や槍、楯を駆使して倒していくだけ。野蛮な辺境部族との違いは、そんな戦いであっても戦意に任せてやたらめったら戦うのではなく、隊列を維持し百人隊長の指揮の下システマチックに前列と後列が交代しながら進むことにある。敵は疲れた者から倒れる。こちらは、常に新鮮な体力と戦意を有する者が前に出

て、疲れた者は後ろに下がって休むという仕組みをもっているのだ。
あとは、野っ原だろうと市街地だろうと本質的にかわらない。現場指揮官のすべきことは兵士の戦意を上手に統御して敵に嗾けることにあり、兵の為すべき訓練と言えば武技を磨くことなのだ。
ところが、ここでは違う。楯を装備しているわけでもないのに、あたかも亀甲隊形のように身を寄せ合っている。時に散らばって走り、立ち止まり、身をかがめ、指先でなにか合図しながら、静と動のメリハリのある機敏なふるまいで、動いていく。
さらには、四方八方に『杖先』を向けている。あたかもハリネズミのごとく。
いったい、何をしているのだろう?……と首を傾げざるを得ない。
「彼らの持っている杖は、イタミらの持つものと同じ物のようだが、ジエイタイとは全ての兵が魔導師ということなのか。もしそうならば、それが彼らの強さの秘密ということか」
「魔導師は稀少な存在ですわ。魔導とは特殊能力だからです。ですが、これを大量に養成する方法がジエイタイにはあるのかもしれませんわ」
ボーゼスは、ピニャの感想をうけてそう解釈して見せた。
あの杖が火を噴き、敵を倒す様子が想像できた。そしてこれが、どこに隠れているか分からない敵を警戒し、探し出し、殲滅するという目的で為されている訓練であることが理解できる。
物陰で待ち伏せて襲いかかろうとしても、二階の窓から矢を射かけようとしても、前後左右から挟み撃ちしようとしても……帝国の騎士も、兵士も、その槍先が剣が届くよりも先にあの火を噴く

杖によってばたばたと倒されていくだろう。
「ちがう。あれは、『ジュウ』あるいは『ショウジュウ』と呼ばれる武器。魔導ではない」
ボーゼスの解釈を、傍らにいたレレイが否定した。
「あれこそが、ジエイタイが使う武器の根幹。彼らは、ジュウによる戦いを上手く進める方法を工夫して現在の姿に至っている」
「武器だと？　あれが、剣や弓と同じく武器と言うのか？」
「そう。原理は至って簡単。鉛の塊を炸裂の魔法を封じた筒ではじき飛ばしている」
この地に転がる翼竜の死骸をあさっていれば、嫌でも穴の空いた鱗や鉛の塊、破片を目にすることになる。レレイの知性は教えて貰わずとも、見て、聞いて、考えた末に鉄砲の原理を導き出していた。
ピニャは目が眩むような思いだった。魔導ではなく、武器と言うことか？　もしそのようなものを作ることが可能なら、兵士全てに装備させることも可能ではないか？
「そう。そして彼らはそれをなした」
もし、そんなことになったら戦争の仕方ががらっと変わってしまう。これまでのような剣や槍をそなえた兵を多数そろえて敵に向かっていくような戦い方はまったくの無意味になってしまう。
「そう。故に、帝国軍は敗退した。連合諸王国軍は敗退した」
突如、九六式装輪装甲車が驀進してきて停車した。後方のランプドアが開くと、なかから隊員が

吐き出される。
飛び出してきた隊員達は、見事なまでの疾さで瞬く間に横一線に展開すると、仮想敵に銃を向けた。
この瞬間に、ばたばたとうち倒される騎兵や歩兵の姿が想像できて、ピニャは眉を寄せた。
「遅い!!　もっと早く、速く、疾くだ。もう一度っ!!」
指揮者の罵声をうけて自衛官達が、ふたたび元の位置へと戻っていく。その姿を見ながらピニャは「根本的に戦い方が違う……」と思い知らされたのである。それは、イタリカにおいて魂に刻み込まれた得体の知れないものへの恐怖とは違う、理性的に敵を理解するが故の恐怖感とでも言うべきものであった。
高機動車の車内にいる伊丹、桑原、倉田……彼らの抱える「ジュウ」は魔導ではなく武器。武器ならばピニャでも、ボーゼスでも手にしただけで使えるはずだ。
この武器について知ること、可能なら入手すること、それだけがこの戦いを少なくとも一方的な負け戦としないために必要なことだと思うピニャ達である。奪うか、あるいは職人の尻を蹴飛ばしてでも同じ物を作らせる必要がある。
そんなピニャ達の決意を表情から読みとったのか、レレイは告げた。
「それは無意味」
レレイは、反対側の車窓を指さした。

反対側の荒れ地では、暴れ狂う巨象にも比肩するほどの巨大な鉄の塊……七四式戦車が轟音をあげて走っていくのが見えた。

「『ショウジュウ』の『ショウ』とは小さいを意味する言葉。ならは対義の『大きい』に相当するものがある」

七四式戦車の鼻先から突き出ている一〇五㎜ライフル砲が目に入った。

「あ、あれが火を噴くと言うのですか？」

ボーゼスが呻くように言ったが、ピニャには思い当たるところがある。コダ村の避難民達が、鉄の逸物と呼ぶ強力な武器があったはず。

「まだ、直接見たことはない。だけど想定の範囲」

同じような物を作れる職人は帝国にはいない。帝国どころか大陸中探してもどこにも居ないだろう。妖精界の地下城にいるというドワーフの匠精に尋ねたところで同じに違いない。これは、まさしく異世界の怪物である。炎龍を撃退したという話も今となれば信じられる。

鉄の天馬。鉄の象。あんなものを大量に作り上げるジエイタイとはいったい何者なのか？

何故、こんな相手が攻めてきたのか？

ピニャの愚問とも言える呟きに、レレイは嘯くように応じた。

「帝国は、鷲獅子（グリフォン）の尾を踏んだ」

「あ、あなたたち、他人事のように言いますわね。帝国が危機に瀕しているというのに、その物言

いはなんなのですか⁉」
ボーゼスの怒りを、レレイは肩をすくめてやり過ごすと言った。
「私はルルドの一族。帝国とは関係がない」
ルルドとは定住地を持たない漂泊流浪の民である。現在でこそ定住を強いられているが、もともとの彼らには国という概念はなかったと言う。
聞き耳をたてるつもりがなくとも聞こえるところにいたテュカも、手を挙げた。
「はい、あたしはエルフです」
「……」
ロゥリィは、あえて言うまでもないと薄く笑うだけ。
帝国とは、諸国の王を服属させ、数多の民族を統べる存在。
皇帝は、武威を以て畏れられることをよしとし、愛されることや親しまれることを民に期待しなかった。
力ずくの征服、抑圧、暴力による支配。その結果がこれである。いかに帝国が支配していると言っても、地方の諸部族や亜人達が心から服しているわけではないのだ。
今更ながら、国のあり方というものを思い知らされるピニャであった。
ピニャは、アルヌスの丘頂上近くに建設された特地方面派遣部隊本部の看板が掲げられた建物に

案内された。
ここで、伊丹達と別れる。
ピニャとボーゼスの二人は制服で身を固めた女性自衛官に誘われ、階段を上り建物の奥へと迎えられた。
そして応接室で、待つこと暫し。
応接間は殺風景と言いたくなるほどに小ざっぱりとして、飾り気に欠けていたが、長椅子の座り心地は最高。置かれているテーブルもよく見ればしっかりとした造りをしていて、その天板は波静まった水面のように平らに輝いている。さぞ、名高い名工の手による者だろうと思われた。
そんな室内のもの珍しさに慣れて退屈しようとし始める頃、戸がノックされた。
ピニャとボーゼスの二人は、跳ね起きるようにして立ち上がった。
見ると初老の域に達しようとしている男が入って来る。
黒に白を混ぜたがために灰色に見える髪をもつ。その髪を精悍なまでに短く刈り上げているが、健軍と違って穏和な笑顔が、芯にある堅苦しさを包み込んで印象的だった。
ピニャの感性からすると着ている緑の制服の飾り気はとても少ない。
胸に彩りの略章が列んでいるだけ。これが一軍の指揮者のものとはとても思えなかった。軍の高位に立つ者なら、胸と言わず肩と言わず、体中を絢爛煌びやかな徽章、宝飾そして、金の刺繍で彩っている。それにくらべて、この貧相さは一兵卒のそれにも劣るように思えるのだ。

だが、ここに来るまでにこの軍が、虚飾を廃し実を重視していることが理解できたために、そう戸惑うこともなかった。

おそらくこの男がこの軍の最高位かあるいはそれに準ずる地位に立つ者だろうと理解した。

後から入ってきた健軍が傍らに立ち、彼に耳打ちするかのように何かを囁いているし、闥達とした振る舞いに、貫禄めいたものも感じられるからだ。

健軍に続いて、陰湿そうな笑みの男や、女の兵士達（女性自衛官）も入ってくる。皆外で見かけたそれと違う、緑色の制服をまとっていた。おそらく戦闘用のまだら緑と、典礼儀式の際に着るものとを分けているのだろうとピニャは推察した。

最後に、レレイが招かれたように入ってきて、初老の男の隣に立った。

初老の男が、笑顔でレレイを労うかのように何かを告げた。

レレイは首を振って、それからピニャの方へと向き直ると、初老の男について「こちらはジエイタイの将軍、ハザマ閣下」と紹介した。そうしておいて、ハザマに向けて、ピニャのことを紹介している。言葉そのものは理解できないが、固有名詞はそのままなので自分の名前が紹介されたことは解るのである。

「こちらは……帝国皇女ピニャ・コ・ラーダ……ニホン語での尊称がわからない」

「『殿下』がよいと思うよ。こちらの言葉で、皇族につける尊称はどのようなものがあるのかね？」

「男女の使い分けがあり、女性に対しては『francea』が適切」
レレイに言葉をならった狭間は、ピニャに対して腰掛けるよう勧めた。
「どうぞおかけ下さい、フランセィア殿下。そして、ボーゼスさん」
その後、狭間達もそれぞれに腰掛けると、レレイの通訳を間に挟んだ会話が始まった。
「協定を結んで早々に、しかも殿下自らお越しに成られたのは、どういったご理由からでしょうか？」
「我が方にいささか不手際がありましたので、そのお詫びに参った次第です。それと、若干お願いしたいことがございまして」
「報告は伺っています。現場で何か行き違いがあったとか？」
「はい。汗顔の至りです」
「そうですか？　ま、帝国政府との仲介の労をとって頂ける殿下のお心を患わせるのも、自分としては本意ではありませんからな……必要なら協定そのものの扱いも考え直す必要もありましょう」
日本人は交渉相手の些細なミスには、寛容さで応じてしまうところがある。故に外交下手と言われるのであるが、協定の存在がイタリカとフォルマル伯爵領を守っていると解釈しているピニャにとって、協定の否定は自衛隊によって侵攻されることを意味していた。従って、狭間のこの言葉は「協定が守れないなら、侵攻するよ」と聞こえた。「仲介の労をとってくれる殿下の云々」の下りは、その意味で解せば強烈な嫌みでしかない。

「いや、それは」

すると、傍らに座っていた陰湿そうな男が、口元をニンマリとゆがめると、口を開いた。

「イタミから聞きましたよ。なんでもこちらのご婦人に手ひどくあしらわれたそうですね」

これがレレイに通訳された途端、ピニャとボーゼスの背筋は冷たい汗が吹き出し始めた。

結局、伊丹の口を封じることはできなかったのだ。二人っきりで話したいと何度か誘ったのに、あの朴念仁は全く受け容れてくれなかったのである。まぁ、伊丹としては自分を理不尽にもぶん殴った女性やその親分に、二人きりで話したいと艶っぽく微笑まれても「おまえ、ちょっと顔カセや」と凄まれているようにしか思えなかっただけなのだが。

「あのアザとひっかき傷。見た途端、笑っちゃいましたよ。イタミは公傷扱いにしてくれって言ってましたが、どう見ても痴話喧嘩の痕にしか見えませんよね。あの男が、そちらのご婦人に何か失礼なことを言ったんじゃないですか？」

ニヤニヤ笑いながら「……イタミが暴力を誘発するような言動をしたか？」と手厳しいことを言うこの男に、ピニャは蛇みたいで嫌な奴という印象を強く抱いた。

こちらの隙や落ち度を見逃さないばかりか、「何で彼に暴行をしたのか？」「暴行されなければいけない理由とは何だ？」と、しつこく、抉るように追及してくる。

彼は、何もしてないのだ。何もしてないのに暴行を受けたのだ。この男の言葉は、その理不尽さ、凶悪さを際だたせ、ピニャらの罪を弾劾する言葉として聞こえた。

「……」

ピニャが答えに窮していると、レレイが何かを『陰湿そうな笑みの男』に告げた。すると男は、陰湿そうな笑みを、皮肉そうな笑みに切り替えて、名を告げた。

「これは失敬。自己紹介が遅れました。自分は柳田と申します。どうぞ、お見知りおき下さい」

ピニャには、「私の名前は、ヤナギダと言う。よく憶えておけよ」という意味に聞こえたのであった。

「さ〜て、飯を食って寝るぞぉ」

残った弾薬を弾薬交付所に返納して、銃を整備して武器庫に収め（栗林の小銃は、この度廃銃となった。剣を受け停めた時の損傷が銃身そのものまで及んでいることが確認されたからだ）、車両の泥を落として……などとやっていたら食事をする時間もなく、既に陽は落ちて夜になっていた。

さらに報告書とかも書いて、提出して、明日の参考人招致と、それが終わったあとの行動についての指示を受けたりして……さすがに疲れた伊丹である。

とりあえず、どっかりとデスク前に座って引き出しに図嚢から取り出した書類などを片っ端から放り込んでいると、机の中に入れて置いた携帯がチカチカと点滅して、メールが届いていることを知らせていた。

誰だ？　と思って開いてみたら、梨紗と、太郎閣下であった。

この両者は、いずれも伊丹のオタク仲間である。太郎の場合は、彼自身が名乗った名前に周囲がとある理由で勝手に「閣下」をつけて呼ぶようになり、それが用いられるようになったのである。

梨紗は、近況報告に類することと、単刀直入に「金を貸して♡」と書いていた。二通目や三通目になると、「至急援軍を請う」とか「我、メシなし、ガスなし、水道代なし」と悲痛な叫びへ変わっていた。わずか一日〜二日でこの内容に至るとは、どうなっているのかと思うところである。

この女は公務員としての安定収入をもつ伊丹を、カードローン代わりに使うことが度々あった。どうせどこかのドルパで異様に高価なアイテムを衝動買いして、生活費に影響しはじめたのだろう。どちらにしても放っておく訳にもいかないので、助けてやらねばならない。

太郎からのメールには、伊丹が近日戻ることを知ってか一度顔を出すようにと書いてあった。季節がずれているので忘れてしまうが、『門』の向こうはもう冬である。年末も近いし、そろそろ休暇を申請しておこうと思う。夏の同人誌即売会中止から半年、冬の同人誌即売会はその分盛況になることが期待された。太郎閣下からの呼び出しも、気軽に人の多いところに出られない彼にかわってゲットするアイテムについての依頼だろう。

参考人招致で本土に戻ったら、まずは「カタログ」を入手しなければならない。

そんなことを考えていると、窓の外から消灯ラッパが聞こえ出す。あちこちの隊舎から灯りが消えていった。

もう、そんな時間であった。いくらなんでも糧食班も食堂を閉じている。

仕方なく机の中に隠匿しておいた缶メシ（戦闘糧食1型／とり飯／たくあん漬／ます野菜煮）をデスクの上に置いて、缶切りをあてた。

すると、廊下のほうから戸を叩く音が聞こえた。

思わず幽霊でも出たかと思って振り返ると、暗い廊下にレレイがたたずんでいた。

「こんな時間に、どうした？」

レレイは各種資料の翻訳のためということで、特例措置として臨時雇いの『技官』の身分が与えられている（もちろん働いた分の給料も出る。ただし日本円）。そのためにかなり自由に歩き回ることが出来るのである。巡察や不寝番に誰何（すいか）された時のために、首から身分証を入れたパスケースも提げている。

「イタミ。キャンプまで送って……疲れた」

そう言って、杖を投げ出すと女の子座りでしゃがみ込んでしまった。

レレイは感情などを顔に出さない上にかなり我慢強い。それだけに「疲れた」などと弱音を吐き出す時は、真剣に疲れ切っていると見るべきだった。ピニャと狭間とのあいだで通訳として働き、相当に神経をすり減らしたのだろう。

「メシは喰ったのか？」

最早言葉を発するのも辛いのか、ウンウンと二回ほど頷く。彼女の伊丹を見る目は、捨てられた子犬のようでもあった。

「あー、もう車を出すのもなんだし、ここで寝ていったらどうだ？　空いてる部屋は結構あるんだぜ」

彼女の住むキャンプまで地上図は二キロだが、道のりだと結構ある。

しかも、夜間は営外に出るには武装しなければならない規則だ。単独でなどもっての他なのだ。従って今から難民キャンプに下りていくなら偵察隊の誰かを叩き起こさないといけない。武器を出すのに書類を出して、それから車を出して……面倒くさいことこのうえない。だったら、空き部屋のベッドにレレイの寝床をしつらえてやった方が楽なのである。

レレイはイタミに任せるとばかりに、ウンウンと二回ほど頷くと崩れるようにして眠りの世界へと旅立ってしまった。

さて、ベッドである。

隊員にはベッドにマットレス一つ、枕一つ、毛布五枚（飾り毛布一枚）、枕カバー一枚、シーツ二枚、掛け布団一枚が与えられる（今は新ベッドが導入されつつありこの限りではない）。

陸上自衛隊ではこれらを用いて、厳密に定められた形にベッドを作ることとなっている。

まず、毛布を三枚敷く。大抵の毛布は横幅がベッド幅二つほどなので、たたんで重ねることになる（この時のたたみ方が、寝心地と形の基礎になる）。

この上に二枚のフラットシーツをかける。その際、角に三角形の折り込みがきちんと出来ている

ことが大切だ。一枚が敷き布団側、一枚が掛け布団側で、眠る時はその間に潜り込む形になるわけだ。

そして、これらの上から毛布を身体側と枕側の双方に被せるように包み込むのだが、やはり角の折り込みはきちんと三角形が描けてなければならない。あたかもプレゼントの包装紙のごとくである。皺もたるみもなく、角はぴしっと折れている。この状態を延べ床と言う。

どちらかと言うと温暖なこの世界では掛け布団は使わないので省かれていた。

こうしてベッドを作ると、伊丹は床に転がして置いたレレイを抱え上げて、ベッドへと放り込んだ。

レレイの真っ白な髪。真っ白な肌は陶器のようで思わず髪の乱れを整えてあげてしまった。

その方面の趣味は伊丹にはなかったはずだが、彼女をベッドに載せて毛布とシーツで包みあげていると、人形遊びの類に喜びを見いだす人々の気持ちが、共感できそうになってしまう今日この頃である。

思わず、ブルブルと首を振って「違う！」と呟いて。そう、俺の歳になれば、このぐらいの娘がいても可笑しくないし、と、心理学的防衛規制のひとつである合理化をはかった。まぁ、高校卒業した年の十月に子どもを出産した同級生女子がいたから、ありえないとも言えない。

レレイは十五歳だと言うが、日本で十五歳と言えばもう少し体つきに凹凸があってもよい年頃だ。だが、レレイはその年齢に比すれば、幼い上に小さく細くて軽いのである。年齢に比べて外見

が圧倒的に若い実例が、他に二人もいるが。

ふと、気づくとレレイを見守る形で朦朧としていた。

どうやら睡魔に捕らわれたようである。

いけない。こんなところ人に見られたら絶対に誤解されてしまう。すぐに部屋に戻って寝なければ、と思った。

ただでさえ、倉田あたりから「二尉は、ツルペタ系が好みでしょ」と揶揄されてるのである。

確かに『いかにも女』というタイプは苦手だ。しかし、ツルペタ系が好みというのも誤解なのである。はっきり言って胸はあった方がよいし、腰はくびれているほうが良いと心の底から思っている。

その意味では、レレイには食指が動かないのである。とは言え、レレイが眠っている傍らに不必要に滞在していたら、あとでどんな噂を立てられるかが心配である。直ちに立ち去らなくてはならなかった。

だが、その頃には身体がじっとりと重くなっていた。

考えてみれば徹夜で戦闘、帰還途中で捕虜になって、小突かれて走らされて、そのまま夜もゆっくり休めないという不眠不休が続いていた。蓄積した疲労から来る睡魔も、相当に強烈である。

こうして、伊丹の意識は途切れる。

結局の所、その意に反してレレイのお腹を枕にして眠ることとなってしまうのだった。

＊　＊

翌日。午前十一時、中央ドーム前。

この日は朝から晴天で陽射しが強かった。そんな中、伊丹は虚ろな表情をしてぼやっと突っ立っていた。

服装は日本側の気候に合わせて九一式の冬服を着ている。温暖なこちら側ではこれが暑くてしょうがないのだ。だから上着は袖を通さずに抱えている。ワイシャツの袖までもまくっていた。

その姿がなんともだらしなく見えて、通りかかった階級の高い人達は大抵眉をしかめる。だが、彼の抱えているのが冬服であることに気付くと、一転して気の毒そうに笑って通り過ぎていった。

こちらにいる限りは夏服で済むのだが、冬の日本へ行くとなれば冬服を着るしかない。季節のずれがもたらす小さな喜劇と言えるだろう。

さらに伊丹を苦しめるのが待ち人がいつまで経っても来ないことである。

「遅い……」

時間という概念にいささかルーズなのが、この世界の人の特徴かも知れない。時計というものが普及していないから、時間に合わせて行動するという習慣がないのである。

待つこと暫し。額に流れる汗を二回ほどふき取って、ようやく待ち人達が現れた。

「栗林ぃ～、富田ぁ～遅いぞぉ」
「済みません二尉。支度に手間取っちゃって」
制服姿の伊丹に対して、現れた栗林や富田『達』は私服であった。
「この暑さなのに、なんで厚着が必要なのよ……」
と、ぼやいてるテュカとか、「……」と何も言わずに、意味深げにじっと伊丹を見るレレイとか、いつもの黒ゴスのロゥリィとかもいる。
ロゥリィはいつも持っている巨大ハルバートを帆布で包装しているが、それが気に入らないのか、なにやらブツブツ言っていた。
「しょうがないでしょ。そんなものむき出しで持ち歩いてたら、銃砲刀剣類所持等取締法違反とか、凶器準備集合罪とか、各種の法令条例で捕まっちゃうのよ。ただでさえ、最近は冗談じゃ済まないんだから。ホントなら置いて行かせたいくらいよ」
「神意の徴を手放せるわけないでしょう？」
「だったら、我慢してよね」
ロゥリィには、『門』の向こうに行かないという選択肢はないようである。
実際の所、参考人招致で呼ばれているのは、炎龍との交戦時において、現場の指揮官であった伊丹と避難民数名である。
そこで「避難民数名を、どうするか」なのだが、こうなると言葉の通じるレレイははずせない。

最近便利使いされて彼女に負担がかかっているが、現状では我慢して貰うしかない。今回の参考人招致では、終わったあと慰労も兼ねて彼女をゆっくりさせるようにと狭間陸将直々の指示が出ている。

テュカを選んだのは、こちらに住むのはヒトという種だけではないという良い例になるからである。見た目で判る程度の違いをもつ彼女の存在は、映像メディアにおいては強力な説得力を持つだろう。

ロゥリィの場合は見た目はヒトと同じ。しかも外見は子どもだし、着ている神官服と合わせたらどこのコスプレ少女を連れてきた？　と言われかねない。

亜神たる証拠の奇跡を示せなどとは畏れ多くて言えないし（その手のことを口にして滅ぼされた者の数は神話を紐解いてみると少なくないことがよくわかる）、その強さを国会で証明されても困る。だから、あんまりメリットがないのである。

それでも行くことになったのは、彼女の「そんな面白いことにわたしぃを仲間はずれにするつもりぃ？」の一言であった。

栗林と倉田は、彼女らのエスコートである。

「おーし、そろったな。そろそろ、行くぞぉ」

伊丹がそう言いかけた時、公用車が伊丹の前に滑り込んできた。

助手席から、柳田が手を挙げながら降りてきた。

「悪い悪い、手続に手間取っちまった」
思わず何の？　と尋ねたくなるほどの気安さであるが、柳田はそう言うと後部座席のドアを開いて客人を降ろした。
「ピニャ・コ・ラーダ殿下と、ボーゼス・コ・パレスティー侯爵公女閣下のお二方が、お忍びで同行されることになった。よろしくしてくれ」
ピニャとボーゼスの二人は降り立つと、伊丹等の前に進み出た。
「おい、柳田。聞いてない」
「あ？　言ってなかったか？　まぁ、いいだろ？　市ヶ谷園（防衛省共済組合直営のホテル）の方には、宿泊客追加の連絡はしといた。それと伊豆の方にも連絡済みだ。二泊三日の臨時休暇だ。しっかり楽しんでこい」
「あのな。このお姫様達に俺がどんな目にあったと思ってる」
「ああ、誤解だろ？　笑って水に流せよ」
「笑えねぇって」
「いちいち気にするな。なにしろピニャ・コ・ラーダ殿下には、帝国との交渉を仲介をしてもらわないとならんからな。その為には我が国のことも少しは学んでおきたいという、ご要望も当然と言えば当然だ」
「それが、なんで俺たちと一緒なんだよ」

「しょうがねぇだろ。案内しようにも、通訳出来そうな人材がまだ育ってないんだから」
そこまで言って柳田は伊丹に近づくと、声をひそめる。そして一通の白封筒を伊丹のポケットへと押し込んだ。
「狭間陸将からだ。娘っ子達の慰労に使えとさ」

16

帝国皇女ピニャ・コ・ラーダは、その日の日記にこう書いている。
「世界の境たる『門』をくぐりぬけると、そこは摩天楼だった。かつてこの地を踏みしめた帝国の将兵は何を思ったのだろうか。自らの運命を予測し得ただろうか？　私は、今この巨大な建物の谷間にあって、自らの矮小さを味わっている。これほどの建造物群を作り上げる国家を相手に戦争をしている帝国の将来を憂えている」
いくらなんでも銀座程度で摩天楼はないだろう。と思うのは、日常的に新宿などの高層ビル群や、テレビなどの映像でニューヨークのような高層ビルの大集団を知るからだ。
巨大な建物といえば帝都の宮殿とか、元老院議事堂、あとは軍事用の城塞しか知らないピニャとボーゼスにとって、銀座の街並みでも十分に摩天楼なのである。

巨大な建造物は、そうでない建物の中でひときわ目立つ。
だから周囲を睥睨する存在感をもって風景の中心軸として鎮座している、というのがピニャの常識である。だが、ここは違う。都市を構成する全ての建物が巨大であった。
一本の巨木の存在は、拠り所となって見る者の心を安らかにさせる。だが、巨木の大集団たる樹海は人々の心を圧倒して飲み込んでしまうのだ。
この街並みも、ピニャとボーゼスの心を打ちのめした。
もちろん、二人だけではない。レレイやテュカ、そしてロゥリィすら、目を丸くして呆然と立ちつくしていた。冬の銀座の真っ直中で、寒さも忘れてずうっとたたずんでいた。
「ま、おとなしくて丁度良いか」
そんな五人を後目に、警衛所で営外へと出る手続きを終えた伊丹に声をかける者がいた。
見た目には、『いかにも』という黒服の集団である。その代表者らしき人物は、一見する限りではどこにでもいそうな中年っぽいオヤジ風の男だった。
「伊丹二尉ですね」
「はい。そうですが」
「情報本部から参りました、駒門(こまかど)です。今回のご案内役とエスコートを仰せつかっています」
満面の笑みを浮かべているように見せつつも、眼が鋭く光って全く笑ってない。それはレンジャー教育を終えたばかりの隊員が発する、迫力のある雰囲気に似ているが、自衛官の場合剥き身の蛮

刀に似るものだ。

この男の場合は、隠されたカミソリっぽい雰囲気があった。それが、生粋の自衛官のものとは違うように感じられた。もしかしたら警察官……特に公安畑の出身者とか、情報関係の職種の人ではないかと思った。自衛隊は、警察との人材交流（つまり自衛官が一定期間警察で警察官として働く。警察官が自衛官として、自衛隊で一定期間働く）が盛んであることの成果かも知れない。

「おたく、ホントに自衛隊？」

「やっぱり、わかりますか？」

「空気が違う感じがするからね。もし生粋の自衛官でそんな雰囲気を身にまとえるような職場があったら、今時情報漏洩とか起きないだろうし」

駒門は、口元をニヤリとゆがめた。

「あんた、やっぱりタダ者じゃないねぇ。流石は二重橋で名をはせたお人だわ。実は、あんたの経歴を調べさせて貰ったんだよ」

「何にもなかったでしょ？」

「そうでもないな。結構楽しませてもらったよ。平凡な大学を平凡な成績で卒業。一般幹部候補生過程を経てビリから二番目の成績で三尉に任官。その時のビリの学生だって、途中で怪我をしたからで、そいつがいなけりゃあんたがビリだった。ああ、ちがうか。（メモの頁を捲る）あんたが合格するのに、そいつが不合格になるんじゃ理不尽だという意見が出たんだ。……その後実部隊配

備。勤務成績は、可もなく不可もなく……じゃなくて、不可にならない程度に可。業を煮やした上官から、幹部レンジャーに放り込まれて、何度か脱落しかけながらも尻尾にぶら下がるようにして修了……あんたその時のバディから蛇蝎のごとく嫌われてるよ……その後で何でか判らないけど、習志野へ移動。万年三尉のはずが、例の事件のおかげで昇進した……と」

黒革の手帳をめくりながら、駒門は伊丹の概略を読み上げた。

「隊内での評価は……『オタク』、『ホントの意味での月給泥ぼー』、『反戦自衛官の方が主張したいことが解るだけマシ』……くっくっくっ、こてんぱんだねぇ」

伊丹はカリカリと頭を掻いた。

「そんなあんたが、なんで『S』なんぞに？」

あちゃ～と思いつつ伊丹は肩を竦めた。その質問をされると痛いのである。

「ちょっと前にね、こんな論文が発表されたそうです。働き蟻のうち一～二割は、怠け者ってね。その二割を取り除くとどうなったと思います」

「？」

「それまで働き者だった蟻のうち二割が怠け者になったそうです」

「なるほど。つまり優秀で働き者な蟻が、優秀なままでいるためには、同じ集団の中で怠け者が存在することが必要だという訳か」

「なんでお前はそうも怠け者なんだって叱られた時に、思わずそういう屁理屈を口走りましてね。

それがどういう訳か変なところに伝わって、優秀な人間ばかり集めると二割が怠け者になってしまうなら、最初から怠け者を混ぜておけば少なくとも優秀な人間が堕落せずに済むだろう……という話になりまして。西普連結成時に自殺者が頻発したということもあって、自殺予防とか心理学的な理由からも、その提案が真剣に取り上げられちまって」

「くっくっくっ、それで、あんたが特殊作戦群へ行くことになったと？　ま、あんたみたいなのがのんびりやってれば、壁にぶち当たって伸び悩んでる奴だって、自分を追い込むほど焦ったりしないだろうからなぁ」

駒門の言葉に、とても深いため息が出てくる伊丹である。

その時。

「ひいいいいいいい」

恋人に、別れの言葉を突きつけられた少女のような、切なく悲しい悲鳴が傍らから聞こえた。

見ると、栗林であった。

顔面を蒼白にして、冗談でもネタでもなく、本気でこころがちぎれそうな表情をしていた。彼女にして見れば、伊丹がレンジャーというだけでも許せないのに、こともあろうに特殊作戦群。このオタクが、怠け者が、憧れの特殊作戦群の一員と聞いてどう思うか。それは絶望であった。この世の全てを呪い、敵とするほどの怒りと悲しみであったのだぁ。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

脱兎のごとく走り去っていった。と言っても、『門』を中心にして周囲を取り囲むフェンスまでであるが。

富田が後を追いかけて、しゃがみ込み泣いている性犯罪の犠牲者を慰めるかのように、背中を優しく叩いている。

それを見て駒門は腹を抱えて笑った。どうにか笑いを堪えようとしてるが、それでも抑えきれずに笑っていた。それも時間を経ることで何とか収まってきて正常な呼吸が出来るようになると、駒門は伊丹の前で背筋を整え、ピシッと実に色気に満ちた敬礼をして次のように言い放った。

「あんたやっぱりタダ者じゃないよ。優秀な働き蟻の中で、怠け者を演じてられるその神経が、凄い。俺は冗談じゃなくあんたを尊敬する」

「嘘よ、誰か嘘だと言って……そうよ、きっと夢なんだわっ。これは夢」

顔を両手で覆って、現実逃避している栗林。そんな彼女の発するどよっとした重暗い空気を避けるには、情報本部差し回しのマイクロバスという乗り物は大変重宝であった。

なんと言っても、車内が広い。

栗林を最後尾に座らせて、伊丹らは運転席側に詰めてしまえば、彼女の発する雰囲気に汚染されずに済む。ロゥリィや、ピニャ達も、栗林が嫌いではない。どちらかというと好感が持てるのだが、今の彼女からは距離を置きたがっている。

このように栗林が前後不覚の状態にあるため、若干の問題が発生した。

「伊丹二尉、どこに行きましょう」

情報本部がつけてくれた黒服の運転士が、伊丹に振り返った。

「まずは、服だな。仕立てる暇もないし、適当に吊しのスーツを売ってる店へ。あの娘の服装をなんとかしないと」

国会に向かう前に、テュカの服装を整える必要があった。何しろ公式の場に出るのだ。それ相応の格好というものがある。

彼女の着ているジーンズにセーターという服装は、日本製であるが故に国会の参考人招致という場にはふさわしくない。

本来なら、こういった配慮は栗林が担当するはずだった。だが、今のところ彼女は機能停止中であったため、こういう事に最もセンスのない伊丹が決定を下すこととなってしまったのである。黒川あたりがいたらきっと止めただろう。

運転の黒服が、無線であちこちに行き先を連絡して、マイクロバスが動き出す。

銀座の『門』周辺につくられた、自衛隊の管理区域、後に銀座駐屯地と呼ばれる場所を出ると、いよいよ銀座の街中へと進み始めた。すると幼稚園児か小学校低学年の子どもがするように、女性達は車窓にかぶりつきになってしまった。

それも仕方のない話である。何しろ、復興の始まっている銀座のデパート街は、クリスマス商戦

のためか煌びやかなイルミネーションと飾り付けで客を集めようとしているし、ショーウィンドウに飾られたマネキンが着飾るブランド物のコート、アクセサリーなど等、女性にとっては目を惹くものばっかりなのだから。

銀座の街は、夏に酷い事件があったと思えないほどに、たくさんの自動車が行き交い、多くの買い物客で賑わっていた。

もちろん、シャッターが降りて再開の目処の立たない店舗もある。店主が亡くなってしまったからだ。

運営そのものが立ち行かなくなってしまった会社もある。社員の殆どがいなくなってしまったからだ。

それでも、多くの人が銀座を復活させ、客を呼び戻そうとしている。これが、日本人の逞しさなのかも知れない。

「随分とたくさんの人間で賑わっているな。ここが市場なのか？」

「あ、あのドレス」

ピニャとボーゼスの会話は微妙に噛み合っていなかった。

そんな中でマイクロバスは、紳士服などを取り扱っている量販店の前に停まった。

店の女性スタッフに「こいつにちゃんとした服装一式、今すぐ着せてください。できれば一番安いのをお願いします。あと領収書下さい」と言ってテュカを押しつける。特に「安い」を強調した

ため、店側は品数の多いリクルートスーツを取り扱うフロアへとテュカを連れて行った。
「ロゥリィやレレイはどうする？」
ロゥリィは店に列んでいる女性用スーツや紳士服を見て歩いたが、「いいわ」と断ってきた。
「見た感じ、趣味に合いそうなものないから。それにこれは神官としての正装よ」
レレイは一言「不要」と答えてくるだけだった。彼女も興味はあっても、自分が着るとなれば趣味ではないという態度である。
まぁ、レレイのポンチョに似たローブは民族衣装で押し通せるだろう。問題はロゥリィの黒ゴスだが、彼女が正装だと言う以上、無理に変えろとも言いがたい。これもゴスロリに非常によく似ている民族衣装です……で押し通すしかない。
一方、ピニャとボーゼスの二人は、店内の男物や女物を問わず物色して、スーツの生地や縫製について目を見張っていた。
今の彼女達の服装は、帝国の貴族社会ではセミフォーマルとして位置づけられる服装であった。非常に高級な生地と仕立てのパンツルックで、例えば園遊会とかで馬に乗ったり遊んだりする際に着るような活動的なデザインである。ある意味、昔の乗馬服に似ているとも言えた。
本当なら、これに腰に剣をつるすのが、騎士団としての略装である。だが、武装を持ち込むことは、柳田から堅く断られていたので今日の彼女たちの腰は軽い。
問題は生地が薄いため、冬着としてはいささか心許ないことだが、移動は暖房の効いたマイクロ

バスであるし、店の中は温かいので困っていない。だから、店の中を見て歩いているのは純然たる興味であった。

「これほどの仕立てと生地。帝国で手に入れようとしたら、相当に高価なものになる」

これらの商品を無数に、所狭しと列べている店の主は、さぞ大商人なのだろうなぁと感心していた。

「二尉……次の予定は？」

運転手の言葉に、伊丹は「どっかで飯を食って、それから国会に行きましょう。参考人質疑は三時からだから、余裕を見て二時に入ればいいでしょう」と応じた。

「食事はどうしますか？」

伊丹は、苦笑して店の名前を指定した。

「で、どうして牛丼なんすか？」

富田が唸った。折角こっちに来たんだから、もうちょっと良いものを食べたいというのが人のこころとして正直なところであろう。

だが伊丹は、銀座から国会議事堂に出るのに、ちょっとばかり新橋へと足を延ばして牛丼屋に入った。牛丼セットの並チケットを八人分買って（半券が領収書となっている）、全員でカウンターに席を取る。

「今日は、参考人招致までは出張扱いになってる。だから交通費と食糧費は公費でまかなわれるんだが、残念なことに今回は一食五百円までしか出ない」
「ご、五百円？」
「で、ここらはちょっとした喫茶店でもコーヒーの一杯で五百円以上とられる土地だよ。そんなところで昼飯を食べようと思ったら、立ち食い蕎麦か、牛丼以外ないでしょ。まさか立ち食いさせるわけにもいかないし、牛丼しかないと思うわけだ。……ま、みんな幸せそうに喰ってるからよしとしようよ」
レレイ達も、不満はないようで牛丼を掻き込んでいた。ちなみに彼女らは、箸の使い方を難民キャンプで覚えている。戦闘糧食を食べ慣れているレレイ達にとって、牛丼の味は意外としっくりと来るようである。
「でも、良いんですか？　お姫様達に牛丼なんて喰わせて」
「こちらの庶民の生活というのを知って貰うのも勉強になるんじゃない？」
高貴な出自のお姫様達も、スプーンを出して貰い牛丼の並盛りに卵をかけて食べていた。『丼もの』という初めてのジャンルにも物怖じしないのは、やはり騎士団のような軍営生活で雑な食事に慣れているからだろう。それどころか、結構美味しいという評価を下していた。
食事を済ませると、一行は一路、国会議事堂へと向かう。

伊丹、レレイ、ロゥリィそしてテュカの四人は議事堂の係員によって、控え室へと案内されていった。

ここでピニャとボーゼスの二人は伊丹等と別れる。

栗林と富田の二人と共に、国会の正門前からマイクロバスで都内某所の高級ホテルへと向かうのである。

彼女らは公式の使節ではないから、公的な施設に迎え入れるわけにはいかないのである。それどころか外務省も、総理官邸も、表向きは彼女たちが日本にいることは知らないことになっている。防衛省も、文書的には彼女らを招致された参考人に不都合があった時の補欠要員として扱っている。

現段階での彼女らが存在するという事実には、不都合なことが多いからだ。

交渉の窓口を得たとなれば、軍事行動よりも交渉を優先させるべきだという意見が出てくるだろう。

だが、外交交渉というものは、特にこういった武力紛争の後始末は、軍事力そのものを背景にしなければうまく行かないのである。ところがそれを知らない、あるいは知っていても無視してしまう頭のおめでたい連中も少なくないのだ。

日本政府は現在の段階で、自衛隊の活動に制限を加えられたくなかったし、外国からの雑音も避けたかった。故に彼女らの存在を、公式には無視することとしたのである。

とは言っても、やはりＶＩＰである。また帝国との秘密交渉において、仲介役を得たことは国益にも適うことであるから、裏では他の名目で予算と人員が出て、このような対応がなされたとも言える。

ホテルのスイートルームに案内されると、二人をひと組の男女が待ちかまえていた。

「歓迎申し上げます、殿下、そして閣下」

本位内閣において首相補佐官に任命された白百合玲子議員と、外務省から出向している事務担当秘書官の菅原浩治である。

ここで、栗林と富田の二人も自衛隊の制服を纏ってあらわれる。レレイや伊丹には及ばないが、二人が通訳役であった。

ピニャもボーゼスも、緊迫の一時を過ごしていた。迂闊な言動が、国を損ないかねないからだ。

ピニャは、ここに講和をするために来た訳ではない。交渉の仲介を引き受けただけである。講和をするよう国に勧めるのと、交渉を仲介するのは根本的に違う。現段階、すなわち圧倒的な軍事的敗北の状況で、講和を勧めるとは降伏を勧めることに他ならないのだから。

故に、仲介役に徹するのである。とは言ってもするべきことは多く、かなり突っ込んだ話も出てその度に額に汗した。

ピニャは、「外交とは言葉による戦争だ」と思うに至った。こんなことならハミルトンにも来て

もらえばよかったと思う。

苦労しているのは栗林や富田も、である。

レレイほどの解釈力・推測力や語彙もないし、伊丹ほどちゃらんぽらんではないので、どうしても細かい表現に気をつかって時間がかかってしまうのである。だが、それでも単語帳をめくりながら、時に両者の協力を得て意思の疎通をはかりつつ、会談の通訳を行っていた。

帝国政府首脳、特にキーパーソンとなりうる人材は誰か？　その人の帝国政権内の地位や立場はどのようなものか？

その人材に、まず「日本という国と交渉をしてはどうか？」と持ちかけるのはピニャである。ピニャにそういった者とのパイプがなければ、仲介役そのものを果たすことができない。その意味で、これが確認されるのは当然と言えた。

第一次交渉団の人数はどのくらいが適切か。

交渉といっても、たった一人で乗り込んで、講和条件について話し合うわけではない。時間をかけて、それこそ様々な形で面談を積み重ね、互いの腹を読み、妥協できる条件を探り合って落とし所をみつけるという果てしない作業の積み重ねなのである。交渉のための要員が複数人になるのは当然のことである。

滞在中の宿泊場所の手配、費用の支払い方法等々……。

当然の事ながら、外交交渉というのは一日や二日ではまとまらない。

数ヶ月、下手をすると年の単位が必要となることだってあり得る。「会議は踊る、されど決まらず」という言葉があるが、利害の調整というのはかくも手間取るものなのだ。ちなみに上述の言葉は、ウイーン会議のことを言い表したものであるが、この会議において妥協が成立したのはナポレオンがエルバ島を脱出したという報が届いたからである。要するに、危機的事態になるまでウイーン会議は何も決めることが出来なかったのである。この例から見ても、今回の交渉には時間が必要となる。従って、交渉中の宿泊場所から宴会の費用まで、現実的な問題を解決しておかなくてはならない。

さらには、交渉を仲介するために、贈賄をどうするかという話も出てきた。贈賄と聞いて眉を寄せているようではまだまだ尻が青い。こういった交渉においては必要経費と思わなければならない。

あからさまに、どのような立場の者に幾らくらい必要かという話すら出た。だが、これについては金銭についての価値観が一致してないことが解ったので、必要性の確認というところで話は止められている。

要人の相互訪問の必要性も確認された。それと、ピニャからは何人かの人材にニホン語を習得させたいという希望が出て、菅原秘書官から検討するとの解答を得た。対等に外交交渉をするのであれば当然のことである。

そして、最後にあがったのが捕虜の取り扱いであった。

日本には、侵攻した帝国軍将兵の生存者、約六千名が犯罪者として逮捕されていた。人数もそうだが、取り扱いの大変さもあって、監置場所に困った政府は急遽瀬戸内の無人島を整備して、そこに集めていた。

この連中の食費が馬鹿にならない。負け戦は下っ端から死ぬから、生き残って捕虜となるのは高位の者が多いのである。故に気位ばかり高くて扱いに困っていた。得られる情報も、軍属ばかりで程度が知れている。そんなこともあって正直言えば、熨斗つけてでも引き渡したかったのである。ただ、あからさまにそれを口にするわけにも行かない。あくまでも、捕虜を解放するのは人道上の理由であり、そして帝国側の求めに応じてという形でなければならない。

ちなみに、六千という数字の中にはトロルやオークといった亜人……こちら側の感覚からするとゴリラ同然の連中も入っている。人間でない亜人という種族の意味が解らなかったし、一応言葉らしきものもあるようなので、後で人権問題になっても困るとヒト同様の扱いをしていたのだ。……ちなみに、その中のごく少数が、『国連による調査』という名目でアメリカに連れて行かれている。

「我が国としては、犯罪者として取り扱っていますので、そちらからの求めに応じて引き渡すという形を取りたいと思っています」

ピニャは六千人という数に呆然としながら「み、身代金はいかほどに考えておられますか？」と彼女の常識に従って尋ねた。膨大な金額になるはずと、額に汗する。

すると白百合玲子補佐官はころころと笑いながら、「現代の我が国には身代金という習慣はありません。奴隷として売買されることもありません。ですから金銭以外による交換条件、通常ならお互いの捕虜を交換するという形が良いのですが、……今回の場合は『何らかの譲歩』という形で代償が得られることを期待してます」と、つけた。その上で補佐官は呟いた。

「仲介なさっていただけるピニャ様を後押しするために、ピニャ様が指定される若干名ならば、無条件での即時引き渡しが可能です。この条件はお役目を果たされるために上手くご利用下さい」

こうしてピニャは、ニホンという国が捕虜というものをどう取り扱おうとしているかを学ぶとともに、元老院や貴族達に交渉を仲介するための武器を得たのである。

「私の掴んだ情報によると、貴方の息子は生きているらしい。彼を取り戻すために、彼の国の者と話し合ってみてはどうか？　必要なら会談の場を取り持ってもよい」

そう言われて心の動かない親が、果たして居るだろうか？

するとボーゼスが口を挟んだ。

「今回は無理かも知れませんが、一度『捕虜』にお会いしたいと思いますわ。お許し頂けますか？　あと名簿も必要になります」

実は彼女の親友が、夫を戦地（銀座）に送り出していた。

先の出征で戦死したと思っていたのが、生きているかも知れないという希望がもてたのである。

ただ、あからさまに「誰それは生きてますか？」と聞くわけにはいかないので、このような物言

いになったのだ。内心では、今すぐにでも帝都に戻って「貴女の夫が、生きてるかも知れないわっ！」と知らせてやりたかった。

菅原秘書官が、「次にお越しの際には、捕虜の収容施設までご案内できるようにしておきましょう。それと名簿については、お帰りの際にはお渡しできるように手配しておきます」と述べた。

こうして、歴史に記されることのない、秘密の会談第一回目が終了したのである。

＊　＊

さて、ＮＨＫの全国放送で視聴率が低く、人々の関心も薄いけど、公共放送という意味合いからも義務的に垂れ流されている番組と言えば、やはり選挙における立候補者の演説と、国会中継の二つが挙げられるだろう。

だが、「有権者諸君っ！」の第一声で名高い自称革命家の登場以来、色物演説への視聴者の関心が国会中継をほんの少しばかり上回っている今日この頃である。

かつて国会中継の視聴率が跳ね上がった証人喚問は今では中継そのものがないし（静止画像と音声のみ）、疑獄事件とか、官僚汚職、偽装事件も、参考人招致程度では嘘をついても罰せられないことから、招かれた参考人がしれっとした態度をとることが多くて、面白味に欠けるのだ。

だが、この日の中継だけは違った。

ネットの巨大掲示板に、国会中継に「特地の美形エルフが出とる」という書き込みがなされるや否や、瞬く間に視聴率曲線は急勾配で上昇することになったのである。

参議院予算委員会の議場は、レレイ、テュカ、ロゥリィの三人が現れると一斉にどよめいた。

伊丹もいるのだが、彼は外見的にはインパクトに欠けているので、なんとなく無視されている感じである。

やはり、短めの銀髪でポンチョにも似たローブをまとっているレレイとか、金髪碧眼笹穂長耳のテュカ、そしてなにやら長くて大きな包みを抱えた、黒ゴス少女のロゥリィ達は、よく目立つ。議員の皆様や、中継のカメラ、そして傍聴席からの視線を集めていた。

最初の質問に立ったのは、少数野党の女性党首、幸原(こうはら)みずき議員である。

幸原みずき議員は、意気揚々と、若干のカメラ写りを気にしつつ大きなボードを片手に質問を開始した。

「伊丹参考人に、単刀直入におたずねします。特地甲種害獣、通称ドラゴンによって、コダ村避難民の四分の一、約百五十名が犠牲になったのは何故でしょうか？」

幸原みずきの手にしているボードには、「民間人犠牲者百五十名!!」と民間人を強調するかのように描かれていた。

「伊丹耀司、参考人」

委員長に名前を呼ばれ、前に出る伊丹。

制服をぴしっと着こなすと、さすがの伊丹もなんとなく、いや、どことなく……もしかしたら凛々しく見えるかも知れない……ような気がする今日この頃である。

「えー、それはドラゴンが強かったからじゃないですかねぇ」

のっけからのこの回答に、幸原議員も絶句した。

「自分達に力が足りなかったからです」とか、日本人のよくする、真面目で自己批判的答弁を期待し、それを元に質問を展開していくつもりだったからである。二重橋濠の防衛戦で名をはせた伊丹という男は、そういう真面目な男だとマスコミで喧伝されていたこともある。だが、どうも、違ったようである。

「そ、それは、力量不足を転嫁しているだけなのではないでしょうか？　百五十名が亡くなっているんですよ。それについて責任は感じないのですか？」

バンバンと百五十人と書かれたボードを叩きながらわめく。

「伊丹耀司、参考人」

委員長に名前を呼ばれ、再び前に出る伊丹。

「えー、何の力量でしょう？　それと、ドラゴンが現れた責任が自分に有るとおっしゃられるのでしょうか？」

「私が言っているのは、あなたの指揮官としての能力とか、上官の能力とかっ、自衛隊の指揮運営方針とかっっ、政府の対応にっっ、問題はないのかと尋ねているのですっ！　それと、ドラゴンの

出現が貴方のせいだとは言ってません。ただ、現場で関わった者として、犠牲者が出たことをどう受け止めているのですか？　と尋ねているのですっ！」

「はあはあっ」と息を荒くしている女性議員を前に、伊丹は後ろ頭をガリカリと掻きながら「力量不足といえば、銃の威力不足は感じましたよ。はっきり言って豆鉄砲でした。もっと威力のある武器をよこせって思いましたね。プラズマ粒子砲とか、レーザーキャノンとか、実用化しないんですかねぇ。パワードスーツは実用化してるじゃないですか。早く導入して欲しいところです。基礎研究は国立の教育機関でやったんだから、介護用とか更生福祉用なんてこだわらず、祖国の国防目的に特許開放してくれたっていいと思うんですがねぇ。軍事は悪だ……なんてどこの発想なんだろう。自衛隊じゃなくったって警察や消防が導入したらどれだけの人が助かるか考えないんですかねぇ。あと大勢の人が亡くなったことは残念に思いますよ」などと愚痴混じりに答えた。

伊丹の混ぜっ返すような態度に与党側からは苦笑が、野党側からは不謹慎だとかのヤジが飛んだ。

「本省の方から補足したいのですが宜しいでしょうか？」

そういって防衛副大臣は、内心の笑いを巧みに誤魔化しながら手を挙げた。

「ええ、伊丹二等陸尉から提出された、通称ドラゴンのサンプルを解析した結果、鱗の強度はなんとタングステン並の強さを有するということが分かりました。モース硬度ではダイヤモンドの『十』に次ぐ『九』。それでいて重さはなんと約七分の一です」

そんな鱗をもつドラゴンとは、いわば空飛ぶ戦車です。こんなものと戦って犠牲者０で勝てと言う方がどうかしているというニュアンスのことを告げた。

幸原議員は、ため息をつくと伊丹に対する質問を早々にうち切り、その対象を変えた。

まずは、レレイである。

さすがに幸原議員も、見た目、中学生程度のレレイに大上段から質問しようとは思わず、当たり障りのないところから始めた。まずは挨拶がてら「えー参考人は、日本語はわかりますか？」と尋ねた。

「はい、少し」

はっきりとした答えに安心したように頷くと、レレイに自己紹介を求めた。そして彼女から、レレイ・ラ・レレーナという名前を得た後、今はどのように生活しているかと尋ねた。

「今は、難民キャンプで共同生活している」

「不自由はありませんか？」

「不自由の定義が理解不能。自由でないという意味か？　それは当たり前のこと。ヒトは生まれながらにして自由ではないはず」

迂闊な質問をして出てきた哲学的な解答に、あわてふためいて「生活する上で不足しているもの、こちらから出来る配慮等はないですか？」と尋ね直す。

「衣・食・住・職・霊の全てにおいて、必要は満たされている。質を求めはじめるとキリがない」

レレイの答えは幸原議員にとって、不満の残るものであった。だからでもないだろうが伊丹に対するものよりもさらに直裁に、百五十名の人が亡くなった原因として、自衛隊側の対応に問題はなかったか？　と尋ねた。

レレイは、驚いたように目を白黒させて暫し呆然とする。その上で、ポツリ「……ない」とだけ答えた。

次に呼ばれたのはテュカである。

「私は、エルフ、ロドの森部族マルソー氏族。ホドリュー・レイの娘、テュカ・ルナ・マルソー」

名前を尋ねられて、テュカは胸を張って答えた。

今日の服装は、リクルートスーツのような濃紺の上下をまとっている。紳士服店で女性店員に無難な吊るしものをと任せた結果がこれである。そのせいか、いつもは高校生ぐらいに見えるテュカも、就職活動中の大学生くらいには見えた。

「不躾な質問をするのであらかじめ謝罪しておきますね。その耳はホンモノですか？」

レレイが通訳するとて、テュカは「は？」という表情をした。そして訝しそうに、「それはどういう質問か？」と問い返す。

レレイが、外見の相違に対する好奇心から出た質問と思われると解説した。

「はい、自前ですよ。触ってみますか？」

テュカは、洒落っぽく微笑むと長い髪を細い指先でたくし上げてその耳を顕わにし、ピクピク動

かして見せた。

その一連の動きと、はにかんだ表情が小動物系ぽくって妙に可愛く見えた。それが原因かどうかは分からないが、一部議員と、傍聴席、マスコミ席からどよめきの声があがる。さらには、目を開けていられないほどのフラッシュが集中して瞬いた。

さすがに幸原議員も「そ、それは結構です」と断って、難民キャンプでの生活などについて質問し、不足はないという答えを得た後、レレイにしたのと同じように、「百五十名の人が亡くなった原因として、自衛隊側の対応に問題はなかったか?」と尋ねた。

かえってきたのは、表情を氷のように閉ざし俯いた姿である。テュカの答えは「よく分からない」であった。理由を尋ねると、「その時、意識がなかったから」とのことである。

最後に登場したのがロウリィである。

今日もロウリィは黒ゴスをまとっている。ただ、いつもは後ろに流してるベールを今日は前に降ろして顔を隠していた。まさに喪服をまとった小貴婦人の如き装いである。

もちろん、薄い紗でできているベールだけに、その顔(かんばせ)を完全に隠せるものではない。が、幼さと気品が入り混じった独特の雰囲気を発していた。わずかに見えるオトガイの線は幼い少女のふくよかなものとちがって、透き通るように細く滑らかだった。そんなところから、体躯は小さいが大人の女を感じさせる。そのアンバランスが妖艶さとなって、ロリ・ペドの趣味がない者にも十分な魅力として感じられた。

手にしている帆布に包まれた重量感のある物体を片手に、ロウリィは正面に立った。
ロウリィの黒ゴスを、喪服の一種と解釈した幸原議員は、この少女からなら政府を攻撃するのによい材料を得られるのではないかと期待した。喪服を着ているのは、家族か誰かを亡くしたのに違いないから……。
だから、悲しんでいる少女の心に寄り添うかのように、優しく、親しげに話しかけようと試みた。
「お名前を聞かせてもらえる？」
「ロウリィ・マーキュリー」
「難民キャンプでは、どんな生活をしている？」
「エムロイに仕える使徒として、信仰に従った生活よぉ」
「どのような？」
「わりと単純よぉ。朝、目を醒ましたら生きる。祈る。そして、命を頂くぅ。祈る。夜になったら眠るぅ。まだ、肉の身体を持つ身だから、それ以外の過ごし方をすることもあるけれどぉ」
「い、命を頂く？」
「そう。例えば、食べること。生き物を殺すこと。エムロイへの供犠とか……他にもいろいろねぇ」
最初に「食べること」を持ってきたがために幸原議員を始め、他の議員達も、彼女の言う「命を

頂く」という言葉を、食事をする行為に付随するものと受け取った。実際食事をするとはそういうことなのだから。おかげで、「殺す」という言葉を文字通りに解釈せずにやり過ごせたことは、議事堂にいた者の精神衛生にとって幸運なことだったかも知れない。

こうして、一通りの質問を済ませると、幸原は「あなたのご家族が亡くなった原因に、自衛隊の対応は問題がなかった？」と尋ねた。

これには首を傾げたレレイである。なんと翻訳しようと迷ってしまった。なぜなら、ロゥリィは使徒であり、もし彼女に家族がいたとしてもそれは遙か彼方、大昔に亡くなっているはずだからだ。少なくとも今回の出来事と関係はない。

しばし質疑が中断され委員長から「どうしました？」という声が飛んだ。

そこでレレイは、この質問の主旨は、ロゥリィ・マーキュリーの家族のことか？　コダ村の避難民の件か？　と尋ねた。

どちらも同じ事だろうと思っている幸原議員は、自衛隊や政府にとって不都合なことを隠すため、翻訳過程で悪質な操作がなされているのではないかと邪推した。その為、強い口調でもう一度尋ねた。

「レレイさん、こちらの質問通りに尋ねてください。ロゥリィさんの家族が亡くなられた理由に、自衛隊の対応は問題がなかったか……と」

仕方なく、レレイは幸原議員の言葉通りに質問を翻訳した。

しばし、沈黙するロゥリィ。幸原みずきは「しめたっ！」と思った。彼女の琴線に触れた。某(なにがし)かの情緒的反応が望める。だがロゥリィが発したのは「貴女お馬鹿ぁ？」という日本語だった。

しんと静まりかえる議場。

「し、失礼。今何と言ったの？」

幸原みずきは、戸惑いながらも問い返した。

「あなたはお馬鹿さんですかぁ？　と尋ねたのよぉ、お嬢ちゃん」

ロゥリィはレレイを介さず、日本語で話していた。

「おじょ……失礼ですね。馬鹿とは何ですか馬鹿とは？」

「お馬鹿な質問をするからよぉ」

そう言いながらベールをたくし上げるロゥリィの眼は、馬鹿を見下す蔑視の視線であった。

「さっきから黙って聞いてると、まるでイタミ達が頑張らなかったと責めたいみたい。炎龍相手に戦って生き残ったことを誉めるべきでしょうにぃ。四分の一が亡くなった？　違う、それは違う。四分の三を救ったのよぉ。それが解らないなんて、それでも元老院議員？　ここにいるのがみんなそうなら、この国の兵士もさぞかし苦労してるでしょうねぇ」

「参考人は言葉を慎んでください」

委員長から、窘めの言葉が飛ぶ。ロゥリィは、これを受けると余裕の笑顔で肩を竦めた。

これに腹が立ったのか、幸原は目を座らせると「お嬢ちゃん。こういった場は初めてだから解らないかも知れないけれど、悪い言葉を使ってはいけませんよ。それに、大人に対して生意気な態度をとってはいけません」と、幼子を躾るかのように窘めた。

それは、年齢の高い者が唯一それだけを頼りどころとして、年若い者をねじ伏せようとする時の言動であった。

「お嬢ちゃん？　それってもしかしてわたしぃのこと？」

ロゥリィは胸に手を当てて尋ねた。

「貴女以外の誰でもありません。まったく、なんて娘かしら？　年長者に対する礼儀がなっていませんね」

「これは驚いたわねぇ。たかが……」

この時、やばいと思った伊丹は自ら手を挙げた。議員の先生方は、姿が同じならこちらの常識が通じると思っているのだ。彼女らが、こちらの常識外に生息する存在であることを示すには、もっとも効果的なこと……。

「委員長！」

「伊丹参考人、指名するまで発言を控えてください」

「幸原議員は、重大な勘違いをなさっておられるようなので、申し上げておかなければと……」

ロゥリィと幸原の間が剣呑な気配を有しているのは確かである。委員長は、伊丹が発言すること

でそれが霧散することを期待した。
「伊丹参考人」
ロゥリィが唇をゆがめて、伊丹を睨みつけつつ席に戻った。彼女の目線は「邪魔をしやがって……コノヤロ」と語っていた。
「えー、幸原議員、そして皆様。我々は、若い人に年齢を武器にして物を言うことがありますが、時としてそれが我が身に返って来ることがあると思うのです」
「参考人は、簡潔に説明してください」
「……あ、申し訳ありません。つまり、その……ぶっちゃけて言えば、ロゥリィ・マーキュリーさんはここにいる誰よりも年長でありまして……」
「それは、儂よりもか？」
大臣経験もある保守党の重鎮……御歳八十七歳が一番後ろから不規則発言した。
「……はい」
馬鹿なことを……という気配が議場内に満ちた。
参考人の歳を聞いて見ろというヤジが飛んだりする。
ロゥリィは「女に年を尋ねるものではないわよぉ」と席にいながら応じるが、幸原としては尋ねないわけにもいかないことである。
「おいくつですか？」

「九百六十一歳になるわ」
静まる議場……唖然とする女性議員。不老不死……？　という声が漏れた。
女声による他の参考人の年齢も聞いてみて、というヤジが出たりした。
「百六十五歳」というテュカの答えに、ゾッとする男性議員と、ぐびっと唾を飲み込む女性議員。
雪の結晶のような天然の美しさと永遠の若さ。テュカが圧倒的な存在感をもって放射するそれは女性達が追い求めるものであったからだ。それを体現したものが目の前にいる。
ま、まさか……という思いを込めてレレイへと質問が及び、彼女が「十五歳」と答えた時、議場にいた男性議員の間にはホッとした雰囲気すら流れたほどである。美しさ＝若さという等式が成立している旧人類の男心というのは、斯くのごとく複雑なのである。
ここで、レレイの解説が入った。
レレイは、門の向こうにおいて「ヒト種」と呼ばれる種族であり、衛生状態にもよるがその寿命は六十～七十歳前後である。向こうに住む者の多くはヒトである。
それは、まさしく門のこちら側における人間と同じであり、議員連中をホッとさせ、同時にがっかりさせた。
テュカは、不老長命のエルフ。しかも、その中でも稀少な妖精種であり、寿命は一般のエルフを遙かに超えて永遠に近いという説もある。
ロゥリィもヒトではなく、亜神である。肉の身体を持つ神である。やはり不老だが彼女に関して

言えば元来はヒトで、亜神へと昇神した時の年齢で外見が固定されている。通常一千年ほどで肉の身体を捨てて霊体の使徒に、そして真なる神となる。従って、寿命という概念はない。

幸原みずきは、内心で頭を抱えた。

先ほどの自身の言からすると、年長者に対する礼儀を示さなければならないのは幸原の側となってしまうからだ。だが日頃から政府に対して高齢者に対する礼儀や、思いやりが欠けていると主張しているその口は、言葉を失っていた。

こういう時は忘れてしまう。それが政治家のメンタリティーである。都合の悪いことは忘れる。無視する。あるいは捏造する。白を黒と言い抜ける屁理屈論述能力と、それをして平気な面の皮がなければ与野党問わず政治活動なんてやってられないのである。

「質問を終わります」

ホントに終わったのかよという不完全感が漂うが、質問者が終わったと言えば終わりである。幸原みずきは使用する予定だったボードの殆どを使わずじまいのまま小脇に抱えて自分の席へと戻っていった。

つづいて与野党から何人かが質問に立ったが、これ以降は、『門』の向こうの生活や、それぞれの文化についての質問ばかりで、ロウリィやテュカがへそを曲げるようなものはなかった。

要するに炎龍撃退は、誉めこそしても非難するようなことではない。自衛隊は案外うまくやっている。彼女たちには不満はない。そういうことであった。

最後の最後に日暮(ひぐれ)議員が立ち上がった。

そして、特にロウリィを指さすと「生きながら神とあがめられ九百年の長きに渡って生きているという貴女に尋ねたい。私たちは自由を大切にしているが、行きすぎた自由によって不当に貶められる人を守るためにそれを制限しなければとも考えている。例えば、幼い女性を描いた物語や絵画といったものの、とある方面の内容についてです。どうしたら良いでしょう?」という質問をした。

それは、異世界の価値観を知りたかったのか、それともその答えの内容から彼女の精神的な成熟度を測ろうとしているかのいずれかのようであった。

ロウリィ参考人は次のように答えている。

「答えのない問いは、長年生きていても答えは出ないわあ。答えが出ないことがまさしく答えなのだから。それでもあえて答えるなら、自分に理解できないとか、合わないとか、気に入らない、あるいは誰かの権利が害されるのを防ぐため等の理由で、ある種の文化や芸術・表現方法を廃絶する姿勢は、結局差別に行き着くと知りなさい。『健全』とか『人間性』といった名目で文化を健全と退廃に分別することを大義名分にしたとしても、その一方を抑圧し廃絶しようとするならぁ、どこで線を引くかが必ず問題になるのだから。今日、中間で線を引いたつもりでも、一方が廃絶された明日には、それは端っことなるわぁ。また、その中間に線を引きたくなる。また端っこになる。……やがて人の魂を抑圧する考え方に行き着くことになる。行きすぎた清潔主義、健康主義は必ず

極端化して、害悪に転じてしまうのよぉ」

＊　＊

伊丹等が、国会において参考人招致を終えた頃。

マイクロバスは、伊丹達を迎えに国会議事堂へと向かっていた。その前と後ろを、情報本部から差し回された車がきっちりガードしているが、夕刻の首都だけに道路が混んでくれば、割り込みして来る車がいたりするのは、どうしても防ぎきれなかった。

信号で、停まり再び走り出す。

周囲の車が、追い抜いたり、あるいはマイクロバスの後ろに入る。その車が妙に遅くて、マイクロバスの後ろで、警護に就いていた駒門達の車は、マイクロバスから徐々に引き離されつつあった。

「う～ん、妙だな」

呟く駒門。苛立つ運転手。

「ったく、足が遅い癖に割り込んでくるんじゃないよ」

運転手が、ウインカーを出して前の車を追い抜こうとするが、追い越し車線にいる車が妙に遅くて、なかなか車線変更の機会が得られなかった。

そうこうしてるうちに前方の信号が赤になって、ついにマイクロバスは先へと行ってしまった。
次第に見えなくなっていくマイクロバスの後部を見つめながら、駒門はマイクを片手に呟くように言った。
「指揮車より全車、敵さんがお出でなすった……気を緩めるな」

17

地下鉄丸の内線が、滑るように国会議事堂前駅へ入ってきた。
駅の立地条件もあって終業時刻となったお役人とおぼしき人々が、そろそろ帰宅の途につこうという頃合いでもある。
この中には国会中継を見ていた者はいないようで、レレイやテュカ、ロゥリィの一際目立つ外見にさりげないチェックを入れても、ジロジロと見るようなことはなかった。
どちらかというと、伊丹に対する視線の方が痛かった。
今の服装は陸上自衛隊の制服を脱いで、地下鉄に乗るようにと知らせてきた駒門の部下から受け取ったグレーのスーツにコートという姿である。
これを着ると見た感じうらぶれたサラリーマンのようになってしまう。こんなパッとしない男

が、金・銀・黒の美女、美少女を合わせて三人もまとわりつかせていれば、あまりの不釣り合いさに誰だって「こいつ何者だ」という視線を投げかける。

余りにも毛色が違うから「娘です」とか「親戚です」という雰囲気をまとうことも難しい。かと言って「恋人です。羨ましいでしょう?」と、砂を吐きたくなるような雰囲気を発することも、伊丹の男ぶりではちょっと無理であった。

善良な第三者が伊丹を見て思うのは、酷い例だと海外の女性を騙すか脅すかして、誘拐してきた人身売買組織の悪人の「手下その三」……あたりである。

わりとマシなのは、来日した外国人タレントの観光案内を仰せつかった怪しいタレント事務所の『スタッフ三号』だろうか。どちらにしても怪しさ満点である。それでいて、一番とは思ってもらえない、見た感じ三番目くらいというところがポイントかも知れない。

こんな事なら、観光会社の小旗でも作っておけばよかったのである。それを振りながら「はい、こっちですよ~」とか言っていれば、世間は一流旅館や風光明媚な風景、そして高級料理の写真を広告にのっけておきながら、すみっこに『これはイメージ写真です』とか書いてあるような広告を出す、怪しい観光会社のツアコン程度に思ってくれたに違いない。

指定されていた先頭の車両を待ちかまえていた伊丹は、列車のドアと、ホームのスクリーンドアが開くと、人々の視線から逃れるような気ぜわしさで素早く乗り込んだ。

レレイやテュカも、伊丹に続いて電車の中を珍しげに見渡しつつ入ってくる。

ロゥリィは、珍しいことに表情を少しばかり引きつらせていた。
見ると、車内で待ちかまえていたピニャとボーゼスの二人も不安げだ。富田と栗林がそれぞれをエスコートしている。
「よう」
伊丹が手を挙げる。富田が黙礼して話しかけてきた。
「ホテルから、バスで移動するとばかり思ってたら、急に四谷駅へ行って地下鉄に乗れって言われましてびっくりしましたよ。時間もなかったし、慌てました」
「ま、問題なく乗れたようだし、いいんじゃないか？」
伊丹は、富田の腕にしがみついてるボーゼス嬢へと視線を送った。
富田がボーゼス嬢を心憎からず思っていたことは周囲の誰もが感づいていたから、「はいはい、おめでとさん」という気分である。見ていて腹が立つほどだ。
革のパンツに、ジャケットという服装で背も高くワイルドな雰囲気の富田は、金細工でゴージャスなお嬢様であるボーゼスを隣に立たせても全く遜色ない。要するにお似合いなのだが、ボーゼス嬢の表情は不安から逃れようというものが感じられて、甘い雰囲気など微塵も感じさせないところが、彼女のない男達にとっての唯一の救いであろう。
ピニャも、ボーゼス嬢ほどではないが、ぎこちない表情をして栗林につかず離れず立っている。今、大きな音が鳴ったり、電気が消えたりしたらピニャは悲鳴を上げて栗林にしがみつくんじゃな

いかなぁとさえ思える。
思わず、わっ！　と脅かしてみたくなるが、顰蹙を買いそうなのでやめておく伊丹であった。
「丸の内線が地下を走るようになってから、カタコルーベに連れ込んでどうするんだって怯えはじめて。大丈夫だって言い聞かせてるんですけどね。天井は崩れてこないのかとか、灯りは消えたりしないかとか、このまま地の奥底へ連れて行くのか？　とか心配してます」
四谷あたりだと、丸の内線は地上を走っている。それが途中から地下に入ったので、びっくりしたのだろう。そういうものだと解っている我々は気にならないが、何につけても初めてのピニャ達にとっては、驚天動地の出来事かも知れない。車内は灯火が明るくとも、車窓の外は真っ暗な地下だ。この乗り物がどういうものかという予備知識もなく、どこに行くのかも知らされていない現状では、不安感を抱いたとしても無理からぬ話だ。
「カタコルーベ……お化け屋敷みたいなもんか？　（初出の単語なので、単語帳に記入しつつ）慣れないと地下鉄の走行音ってのも耳障りかも知れないし、恐いのもしょうがないさ。まぁ、でも今でよかった。一昔前の丸の内線って、走行中に電気が途中で切れて真っ暗になることもあったそうだ」
そんな風に話していると発車の合図音がして、その後ドアが閉った。
ロゥリィは、音の一つ一つにその都度驚いてはビクビクとしていた。小さく震える手を伸ばし、伊丹へとしがみつく。

「ど、どうしたんだ？」
　ロウリィも、ピニャ達と同じなのだろうか？　だが、ロウリィの怯える様は、ピニャ達のものとは、いささか質が異なる感じである。
「じ、地面の下はハーディの領域なのよぉ」
「ハーディ？　知り合いか？」
「あいつヤバイのよぉ。もし、こんなところに居るのを見つかったら、無理矢理お嫁さんにされかねないのぉ。二百年くらい前に会った時もぉ、しつこくって、しつこくって、しつこくって、しつこくって、しつこくって……」
　そう言って、ロウリィは伊丹の左腕に自身の左腕を絡めてがっしりと抱きかかえた。
　右腕は、例によって帆布に包まれたハルバートを抱えている。どんな存在なのかは良く判らないが、ハーディという神様（地下というイメージから魔王ということもありえるか？）をロウリィは毛虫のごとく嫌っているようである。
「それで何で、俺に？」
「ハーディ除けよぉ。あいつ、男なんて見るのも厭って奴だから、例え見つかっても男の側にいれば近寄って来ないかも知れないでしょぉ」
　この時、伊丹は間違っている、と強く主張したかった。「か、勘違いしないでよねぇ。ただの虫除けぇ、カモフラージュなんだからぁ!!」といったセリフこそが、こういう場面ではふさわしいは

ずである。
　異世界の住人に門のこちら側の常識（？）に従うことを求めるのは、間違いであることはわきまえているが、やっぱりロゥリィがお約束のセリフを口にするのを聞いてみたいと思ってしまうのが、オタクとしての正直な気持ちなのである。これは教育の要があるかも知れないと心密かに決意する伊丹であった。
　次の停車駅霞ヶ関駅では、駒門が「よおっ」と手を挙げつつ乗り込んで来た。
「どうでした？」とは伊丹。
「見事にひっかかりました。市ヶ谷園から、レトロパシフィカに場所を変えたことを知っていて、地下鉄に移動手段を変えたことを知らなかった時点で、機密漏洩の容疑者を二人まで絞り込めた。湧き出てきた連中には、今切り返しをかけてる。ほどなく、素性が割れるでしょう」
　切り返しとは、追跡してきた連中を逆に尾行して、『どこの誰か』を確かめることである。
「その二人、どうするんで？」
「置いておく予定です」
「捕まえたりしない？」
「必要ありません。そこで水が漏れるということをこっちが承知していればよいのです。それに、敵さんもガセネタ掴まされたと解った段階で、切り捨ててるよ。どうせ特定の主義思想団体と関わっているか、ハニートラップにはまっただけのどっちかだし。いちいち処分してたらキリがないも

ん。当然、フォローはいたしますがね」
「ハニートラップねぇ……」
「ハニートラップってのは、罠だと承知してかかれば、美味しい思いが出来ます。上司にハニートラップかけられてるようですって申告しておけば、漏洩させても良い情報を用意してくれる。金、女を好きなだけ喰い散らかして、上の用意したガセネタかませばいい。敵が怒り狂って暴露するぞと脅してきても、こっちは先刻承知。みんな知ってる、それがどうしたと笑えば良い。なのに、それが出来ないのだから困ったもんだよなぁ」
そういうことが出来そうもない人間だからこそ、敵も狙って来るんだと思うところである。要は教育の問題なのだが、日本人は、防諜という概念は伝統的に薄いのである。そこに国防に熱心であることを悪のごとく扱う風潮が加わるから、どうにもならなかったりするのだ。
どこの国か、俺にハニートラップを仕掛けてくれないかなぁと駒門は下品に笑った。
「伊丹さんには、ハニートラップの心配はないですね」
「そう？」
「だってねぇ」
そう言いながら、伊丹の左腕をしっかと抱きかかえるロゥリィへと視線を向け、次に伊丹の右に立つレレイへと視線を向ける。斜め後ろのテュカも、ジーンズにセーターというアメリカの女子高生風外見に戻っている。

駒門は、国会中継を見てなかったからロゥリィやテュカの実年齢を知らないのである。
「幾ら某国だって、この年齢層の工作員は養成してないでしょ……ん……いや、待てよ」
ロリな工作員を敵さんが養成し始めたら、我が国にとってかなりの脅威となるかも……などと呟きつつ、「いや、まて、待て、待て。最近噂されている少女コールガールの組織を、その方面から当たってみる必要もあるかな……」と、急に考え込み始めた。
「コールガールの組織がどうしたって？」
「いや、な……」
駒門は、周囲を見渡して女性達の耳に入らないよう、小声で説明を始めた。
この手の組織は、スキャンダルに敏感な高級官僚とか一流企業の経営者ばかりを顧客とする。送り出されてくる少女の方も超高級の上玉ばかりだ。ブランド物のドレスやスーツ、あるいは着物。そういった金のかかる格好をして超のつく一流ホテルに、まるで家族連れの如き雰囲気で投宿すれば誰も疑わない。
もしその組織が某国の工作機関だったら、ターゲットが少女とのいかがわしい行為に及んでいる場面を隠し撮りして、後でこれをマスコミにばらまくと脅す。今なら、動画サイトにアップするのでもよい。
対象が大人の女性なら自由恋愛とか言い逃れのしようもあるが、相手が見た目にも判る少女とあってはハニートラップと判っていても対処不能。後は破滅だけが残る。だからこそ、脅された側は

絶対に拒絶できない。
「まさか、そんな年頃の女の子をどうやって」
「それが出来るのが、独裁国家なんですよ」
少女を選抜し、時には拉致して洗脳教育を施し、送り込む。人は教育次第で何にでもなる。爆弾背負って自爆テロに走らせることも、銃を持たせて人殺しを厭わない少年兵に仕立てることだって人権という言葉を知らない国なら非常に簡単なことなのだ。そして歴史には、妲己や西施、あるいは貂蝉……年端もいかない少女が国家を傾ける武器として使われて来た記述もある。
伊丹を眺めながらその事に気付いた駒門は、携帯電話を取り出すと知り合いの捜査担当者宛にメールを打ち込み始めた。走行中の地下鉄内だから、アンテナこそ立っていないが文面を打っておいて、後で発信すればいい。
「このあとだが予定を早めて、箱根へと向かいます」
駒門は、携帯に文字を撃ち込みながらも、伊丹に今後の行動予定を告げた。だが、ロゥリィが口を挟んできた。額に珠のような汗をかいて必死な形相であった。
「ねぇ、すぐここを出たいのぉ」
「どうした。乗り物酔いか？」
「どうにも、気になるのよぉ。落ち着かない」
「乗り換えは次の次だし、もう少し我慢できないか？」

この時、ロゥリィの爪が伊丹の二の腕に食い込んだ。真剣な、そして懇願するかのような視線が伊丹を突き刺す。よっぽど辛いようだった。

タイミング的には銀座駅に到着したところだ。ドアも開いた。

二の腕に食い込んだ爪が相当痛いはずなのに、痛くない。そんな不思議を感じながら、伊丹は力の籠もるロゥリィの手に自らの手をそっと添えた。そして駒門へと視線を向ける。

駒門はよく解ってない様子だ。周囲を見渡して、レレイからは無表情のままの視線を交じらせて来て許諾を得、テュカは肩を竦めてしょうがないなぁという態度ながらやはり許諾の意を示した。

富田と栗林は伊丹の部下だから従うのが当然。ピニャやボーゼスだって、地下鉄に乗っていることが良い気分では無いようだから、反対はしないだろう。

帰宅や買い物の客で、地下鉄は混み始めている。降りる客の流れが終わって、乗り込む客が車内に流れ来ようとする、その瞬間。

「ということで駒門さん。俺等、ここで降りるわ」

「降りるよ～」の声と共に、伊丹等はお上りさんを彷彿させる大家族のノリでわいわいとホームへと降りていく。人の流れに逆行するという空気の読めない振る舞いに、乗り込もうとしていた客達はみな嫌な顔をした。が、見ればピニャやボーゼスらは外人だということもあって、皆あきらめてしまう。日本人の「空気読め」という感覚は、同じ文化の人間に対して発動される。明らかに人種や文化が違うと「しょうがねぇや」という寛容さがとってかわるのである。

「ちょっと待てって、あんた、こっちにも段取りというものが」
駒門も置いてかれまいと、人をかき分けつつ後に続いた。こちらは日本人である。遠慮無く空気読めという感覚が発動されて、人の流れが彼をぐいぐいと押し返した。駒門は必至になって人の波を泳いでどうにか列車から降りた。
「いいじゃないか。一駅くらい歩いたって」
銀座から東京駅は、目と鼻の先だ。歩いたってたかが知れている。
地下鉄丸の内線、すなわち今降りたばかりの電車が、銀座・東京駅間で発生した架線事故によって停止したことを知らせるアナウンスが響いたのは、伊丹達が改札を出た頃であった。

地下鉄駅から地上……夜の銀座に出てようやく緊張から放たれたらしく、ロゥリィは、う〜んと両腕をのびのび伸ばしていた。例え空気は汚れていても、ロゥリィとしては地下にいるより安心できるらしい。よっぽどハーディという存在に近づきたくないようだ。ピニャとボーゼスも、地の奥底へ連れていかれずに済んだという安心感からか実に幸せという表情をしていた。
皆、夜の銀座の街を見渡して、昼間とはまた違う風景の煌びやかさに目を見張っている。クリスマス商戦のイルミネーションは、ひときわまぶしく色鮮やかだった。
栗林と富田は、寸前まで自分達が乗っていた列車が、架線事故で停まったという事実を重く受けとめて周囲へ警戒の視線をめぐらせている。

「敵さん、何が目的だと思う？」
伊丹の問いに、駒門は目を細めた。
「こっちを威圧してるんでしょう。ついでにこっちの力量を測ろうとしている気配があるな……威力偵察っていう奴だ」
異世界からの賓客が乗っている（と見せかけた）マイクロバスへの、威嚇追跡。
地下鉄で架線事故を演出して、しばし電車を止める。
どちらも、直接危害を加えようとするものではないが、こちら側の危機意識をあおるには充分である。
狙われていることをこちらに意識させ、怖がらせる。すなわち示威行為だ。言わば「お前等に、いつだって手が届くんだよ。憶えておきな」という類の警告なのだ。ただ、それらの全てが成功してない。マイクロバス追跡は駒門の策略で、地下鉄停止はロゥリィのおかげで回避された。
「敵さんも、二度も空振りして今頃焦っているはず。次に空振りすれば三振だから、今度の手はもっと直接的で、分かりやすい手段になる可能性が高い」
交通手段を地下鉄に切り替えたことを知っている人間は極めて少ないため、どんなルートで情報が敵に漏れたのかを推測しようとして、いささか混乱気味な駒門である。何度も尾行をチェックするのもそのせいだろう。
「分かりやすい手ってのは？」

「例えば……」

言った瞬間、ロゥリィが襲われた。彼女の帆布に包まれた大荷物を、人混みから現れたチンピラ風の男が奪い取ろうとしたのである。

「荷物をひったくって後を追跡させて、罠に誘い込む……ってのは古典的な手口なんですが、何やってるんだぁこいつ」

チンピラは、ロゥリィの荷物に押し倒されて動けなくなっていた。その大荷物の正体を知る伊丹達はさもあらんという表情で、チンピラを気の毒に思うだけである。だがそれを知らない駒門は、小さな少女が軽々と抱えていた荷物に押し倒されて、なんで呻いているんだろうと不思議に思った。

駒門は、チンピラにのしかかる帆布に包まれた大荷物へと手を伸ばし、持ち上げようとした。そしてその瞬間、立木の枝を折るような音が彼の腰部から聞こえる。

「ぐ!!」

急性の腰椎捻挫……すなわち、ぎっくり腰である。下手をすると椎間板ヘルニアを起こしている可能性もある。腰に走る激烈な痛みに、駒門は崩れるように両膝をつくと、両腕で腰を押さえて地に伏した。

「なんてぇ重さだ。バーベル並みだぜ」

額に脂汗を流しながら倒れ伏す駒門。

周囲には野次馬の人垣がぐるりと周囲を取り囲み、しかも遠方からは救急車とパトカーのサイレンが聞こえてくる。さらには、国会中継を見た人もいたようでロゥリィとか、テュカ、レレイにカメラ付き携帯を向ける人々も出てきた。

ここまで衆目を浴びてしまえば、隠密裏に襲撃することは不可能と言える。

こうして、見えざる敵の三回目の攻撃は、駒門の献身的な犠牲によって防がれたのであった。

＊　＊

料金滞納が祟って、携帯が止まった。

ガスも止められた。

水道代も督促が来ていて、そろそろヤバイ。

年金、健康保険料？　んなもんとっくに滞納中である。

パソコンが止まったら破滅だから何としても電気代と、ネットの光回線代・プロバイダ料は支払ったが、そのかわりに食事が徹底的に貧してしまった。

九十九円屋で、シリアルと豆乳を買って、朝食と昼食の二食分とする。二百八円（一食一〇四円）。

九十九円屋で、総菜とご飯。二百八円。これが晩ご飯。

ありがたや九十九円屋。我が国日本は、なんて豊かな国なのだろう。

……昨日から三食が、シリアルと豆乳となった。たまに気分を変えてカップ麺に、パン、野菜ジュース……なんとヴァリエーション豊かな食事だろう。だがしかし、これで一日を三百十二円で過ごすことが出来る。なんとか食を繋いで生き延びる。生き延びてやる。

「冬の同人誌即売会までの我慢、我慢」

そう念じながらペン・タブレットを握る。あと十ページ……であった。

Xデイまで持たせれば、まとまったお金が入る。借金と滞納していた公共料金を支払って、お正月が迎えられる。温かいご飯が食べられるのよ。

「そう思って我慢してきたけれど、そろそろマジでヤバイ。夢にまで、シリアルが出てきた。要するに人間は、明日のマン円よりも今日の百円なのよ。って、こんなところで人生の真理を悟ったところでなんになるのだ～あたしぃ」

電気代が恐いので、空っぽの冷蔵庫のコンセントを抜き、室内の電灯も必要最低限以外は消してしまう。暖房？　何それ。服を沢山着込めばいいのよ。パソコンのスリットから漏れてくる空気もあったかいし。

パソコンの液晶画面の光だけが、今や室内を灯す照明となった。

「誰か金貸して……」とPCメールを打ってみたが、サークルの仲間は皆ほぼ似たような状況。印

刷所の締め切りに追われて忙しいか、金欠で汲々としている。よって、つれない返事ばかり。親は勘当状態で頼み込めるはずもなく。いっそのこと、夜の街角で立ちんぼするか？

などと思った瞬間、窓ガラスに映った自分の姿が見えた。

ここしばらく手入れしてない肌。ボサボサもじゃもじゃの髪。牛乳瓶の底みたいなメガネ。クマの出来た目。暗い部屋を背景に、モニターの光に照らされた幽霊みたいな姿だ。不摂生な生活で痩せぎすの手足、緩んだ筋肉、たるんだお腹……スタイルにもいろいろ難あり。

大きなため息が出てくる。

「こんな二十九女を、金払ってまで抱きたいなんて思う男なんていね～って」

ＰＣに、友達からの返信メールが入った。

『あんた、なんだってヨージと別れたのさあ？　少なくとも衣食住は保障されてたやないの？　馬鹿なことしたよねぇ』

「言わないでくれ。つくづく馬鹿だと思ってる。だけど、それだけは、ヒトとして駄目だと思ったのよ～」

先輩と結婚したのは、親が早く結婚しろ、結婚しろと煩かったからだ。

あの時も今と同じようなシュラバで、収入の安定しない毎日の不安から先輩の持つ『国家公務員』という肩書きが、とても魅力的に見えたのだ。

それに中学時代からのつきあいで、先輩という人の性格を良く知っていたこともある。先輩の家

庭事情を知っていたこともある。
クリスマス（二十五才）が近づいて、なんとなく血迷っていたのもある。
お腹をすかせていたあたしは、お腹が減った奢ってくれ、と頼みこむ。
先輩は、「ま、いいよ」と近くの居酒屋につれてってくれて、焼き鳥をごちそうしてくれた。
安定した収入の威力というものを、とても強く感じた。あのときの、ネギ焼きやボンボチ……の美味しかったこと。
「先輩、養ってください。かわりに結婚してあげます」
と、酔った勢いで頼み込んでしまったのだ。先輩なら、断らない。その事を知っていて。
先輩の答えは思った通りの即答……ではなかった。しばし、あたしの事をみつめて、何を考えているのか不安になるほどの一時が過ぎて、それから「いいよ」という答えが返ってきた。
おそらく、きっと……先輩は分かっていたのだ。『結婚してあげる』かわりに『養って』という意識で、結婚生活がうまく行くはずないってことを。
分かっていて、それでも「いいよ」と言ってくれる。それが先輩だった。

その先輩に向けて、助けてくれとパソコンからメールをうつ。
世間的には、別れた夫にこんなこと頼むのはおかしなことだろう。でも、先輩とあたしは嫌いあって別れたわけではないし、ただ、あたしが結婚というものを、甘く考えていただけで、先輩は悪

くなくて、結婚という間違った関係を元に戻したかったから離婚届にハンを押してくれと頼んだだけで……そんな先輩に頼ってばかりの自分は、どうかしてると思うけれど……。

メールを発信しようかどうしようか、パソコンを前にして悩む。悩む。悩む。

『我、メシなし、ガスなし、水道代なし』

まるで核兵器の発射ボタンを押すかのような、苦渋の決断であった。

「……あたしって、身勝手な女」

もう、メシを食ってない。最後に食べたのは昨日だっけ、おとといだっけ。

ひもじさを突破して痛みすら感じるなかで、眠さと疲れで重たくなった頭と、かちかちに凝った項と肩とに気合いの拳をたたき込んで、「あと一ページ」と呟く。

二十七インチワイドＴＦＴ液晶モニタの右下隅に表示される時計が、二十三時三十五分になった。その時……。

部屋のドアが何者かによって開けられる気配を感じた。

鍵が差し込まれ、軽快な音を立てる。

ドアのきしむ音。冷たい冬の空気が流れ込んでくる。

「なんだ、起きてたのか梨紗。部屋を真っ暗にして何してんだ？　もう寝てるかと思ったぞ。それになんだか寒くないか、ここ。エアコンぐらいつけろよな」

あたたかい声は、伊丹耀司先輩、その人だった。
「あ、先輩」
あたしはその名を呼んだつもりだった。なのに自分の口から出た声は「ごはん」だった。情け無ぁ……。

＊　＊

梨紗にとって、それは驚天動地の出来事だった。
「せ、先輩が女を連れてる」
夜の夜中に、女を連れて「よおっ、悪いけど朝までかくまってくれ。疲れた」とやって来たのである。それはもぅ、梨紗の知る伊丹のすることではなかった。
呆然としている梨紗を後目に伊丹は「あ～、入ってくれ」と、ドアの外にいた女性達を部屋の中へと迎え入れる。
見れば、外人ばっかりである。
問題は、梨紗の琴線に触れるタイプばかりであることだった。
「うわぁぁぁぁぁっ！　黒ゴス少女に、きんぱつエルフ、銀髪少女と、紅髪のお姫様っぽい美人に、縦巻きロールのお嬢様っぽい美人と、巨乳チビ女はどうでもいいか……国際的なコスプレの催

しってあったっけ？」

その手のイベントのスケジュールはすっかり頭に入っている梨紗であるが、今年は冬の同人誌即売会まではなかったはずである。そんな梨紗の疑念に伊丹は窓から外を警戒するように見渡しながら、深夜の訪問を詫びて事情を説明した。

思わず、「かわいいよぉぉ」とロウリィに抱きつこうとする梨紗。ひょいとよけられて、ダイナミックに顔から床に滑り込んだ。

「実は宿泊したホテルが火事になって……焼け出されちゃったんだ、これが」

「火事？」

梨紗はパソコンをネットに繋ぎニュースを検索した。

市ヶ谷園の火災が記事となっている。出火原因は「放火か？」と書かれている。

その下には、丸の内線の架線事故。

そして、国会での参考人招致が写真つきで記事になっていて、梨紗の目にとまった。写真に映っている、異世界から招かれた少女達の姿が気になったのだ。

「ん……」

開いてみると、ロウリィ・マーキュリーの「あんたお馬鹿？」発言が大きく取り上げられていた。高齢者＝老人という、我々の概念を根底からたたき壊す、異世界からの美少女（？）軍団、といった記述がスポーツ系新聞では書かれている。

他にエルフ美人や、銀髪の少女の写真も載っている。
ネット上の動画投稿サイトにも参考人招致の動画がアップされ、コメントやアクセス数がもの凄いことになっている。
動画に映っている黒ゴスの少女を見て、そして、今自分の部屋にいる黒ゴス少女を見比べる。
真っ黒で、フリルたっぷりのゴスロリ服。黒色の薄い紗のベールに覆われた黒髪。そして、何が入っているのか彼女の背丈を超える帆布に包まれた大荷物。なによりも、幼げなのに妙に成熟した大人の女然とした切れ味のある容貌は、この世に二つとしてないものだろう。
結論……同一人物。
動画に映っているエルフ女性を見て、そして、今自分の部屋にいる金髪エルフとを見比べる。
腰まである金糸を流したような髪。笹穂長耳は、綺麗な曲線を描いて、髪の隙間から後方に半分ほど突き出ている。アクアマリンのような碧眼。着ている服こそ国会でのリクルートスーツっぽいものから、細い脚の曲線がくっきりきっちり浮かび上がるストレッチジーンズに身頃たっぷりのセーターと変わっていたが、身体的特徴はやっぱり見間違えようがない。
結論……同一人物。
動画に映っている銀髪少女を見て、そして、今自分の部屋にいる、銀髪少女とを見比べる。
光の当たり加減で、白髪とも銀髪とも表現できる髪を短くショートにして、肌も博多人形ばりの白さ。小柄な身体は、中央アメリカのポンチョにも似た生地の厚いローブですっかり包んでいて、

かえって首や肩の細さが目立ってしまう。整ったその容貌は表情こそないが、かといって能面のような無機的な気味の悪さがなく、しっかりと生きた人間であることを感じさせてくる。強いて言うなら無表情という名の表情をもった少女。

結論……同一人物。

ニュース記事の、参考人招致へと至る一連の説明を読み込んで、ようやくポンと手を打って合点のいったことを示す梨紗であった。

「そう、この娘たちはレイヤーじゃなくて、ホンモノなのね。ふふフふふふフふふフふ腐腐腐」

独りほくそ笑む瓶底メガネ女を眺めて、「な、なに？　これ」と一同を代表して尋ねたのは、テュカである。

女捨ててると言いたくなるような梨紗の姿にしろ、あちこちに置かれたダンボール箱にしろ、積み上げられ山をつくっている薄っぺらい本にしろ、生きているのでは？　と思ってしまうほどの精巧な人形がずらりと列べられた部屋の有様にしろ、やっぱり奇怪である。

ロゥリィは「ここにも、ハーディがいたぁ」と、おびえを隠そうともせず伊丹にしがみついた。半分泣きそうである。

これ誰？　という皆の無言の問いに答えるべく伊丹は口を開いた。

「これは、俺の『元』奥さんだ」

「えっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっつ!!」

「二尉結婚できたんですか？　っというか、こんな男と結婚するような物好きが居たってことじたいが、驚きっ!!　だけど、実物見てみたら、非常に納得できる組み合わせっ」と、巨乳チビ女こと栗林の声は、この場にいた皆のこころを代弁していた。

梨紗の部屋に、久しぶりに明かりが灯された。

エアコンも長い休息を解かれて、あたたかい空気を吐き出している。伊丹から緊急援助を受け、とりあえず電気代支払いの心配がなくなった梨紗の大盤振る舞いである。

とは言っても、一同はようやく落ち着き場所を得てたちまち雑魚寝状態で眠ってしまった。門の向こうでは、旅の最中は野宿・雑魚寝は当たり前だし、お姫様方二人は軍営生活経験者だから、そういうことでいちいち目くじらを立てるようなこともない。さらには、雑魚寝用の各種毛布類が豊富に取りそろえられていたこともあって、それほど悪い環境でもないのだ。ちなみに『各種』というのはこの場合、あんパンをモチーフにした子ども向けマンガキャラクターなどの模様が入っているという意味である。

で、伊丹の傍らを陣取るようにしてレレイが寝ている。何故か懐かれているような気がする今日この頃だ。その隣がテュカ。伊丹を挟むようにして反対側がロウリィ。ちなみにボーゼスとピニャは、富田の向こう側だ。

「ふ～ん。事情はよく分かったけど、そういう危ない話にあたしを巻き込むかな～」

梨紗は、伊丹が買ってきたコンビニ弁当をガツガツと掻き込みながら、パソコンのモニターを睨んでいた。時折、ペンタブレットを握って、かしかしとなにやら描き込んでいるから、原稿チェック作業に入っているのだろう。何としても、徹夜で仕上げるつもりのようだ。

「そうですよ、隊長。元奥さまとはいえ、やはり民間の女性を巻き込むのはどうかと思います」

起きている富田が窓の外を警戒しながら言った。

「それに、駒門さんを放り出してきて良かったんですか？」

ホテルの火事を知らせるベルが鳴り響くや否や、伊丹はぎっくり腰でうんうん唸っている駒門を放置して出てきてしまったのである。いくら彼の部下がいるといっても薄情きわまりない行為だ。

「だってさぁ。ここまで続くと、駒門さんそのものが怪しくね？」

「駒門さんが、情報を漏洩してると？」

「いや、そうまでは言わないよ。だけど、彼と関わりのあるところで情報が漏洩してるんじゃないかって思うわけだ」

「尾行されてたとか」

「それもあり得るけど、どっちとも言いづらいよな。駒門さんを放り出して、こっちに何か有れば尾行というのが正解。何もなければ、駒門さんの方に原因ありってことかな」

「だから、ここで何かあって欲しくないんだけど……」

梨紗の言葉を伊丹は何気なく無視しながら、「さぁ、寝よ、寝よ」とばかりに毛布を被る。そし

てふと気付く……レレイの腕が伊丹の腰に回ってる。
「……どうしよ」
なんとなく気恥ずかしいが、とりたてて騒いで周りに気付かれるのも困ったものである。いらぬ誤解を生みそうだ。どうせ毛布の下でのこと、黙っていれば分からない。
「明日はどうするんです？」
「何もなければ、休暇が楽しめる。せっかくの骨休めをつぶされてたまるか。買い物、そして、温泉にのんびり浸かって疲れを癒そう」
「でも、宿泊先に手が回っている可能性、ありません？」
「予約したところには行かないよ。どっかに、飛び込みで行けばいい」
「この時期に、いきなり行って宿泊できるとこなんてないでしょ？」
「大丈夫、何とかすっから。それより、午前四時で起こせよ」
一応、不寝番を富田と伊丹でするのである。
現在午前一時二十分。富田は、午前四時から午前八時まで休める予定だ。
伊丹は目を閉じた途端、眠りに落ちていった。

「時に……梨紗さんは、伊丹二尉の奥さんですよね」
「『元』奥さん。今は、友達……かな」

梨紗は、パソコンのモニターを睨みつけたまま、富田の問いに答える。
「離婚した関係って、別れたあとも友達に戻れるものなんですか？」
「他の例を知らないからなんとも分かんないなあ。あたしんちの場合は、離婚してからの方が友達としてうまくいってる。結婚している時はどうにも落ちかなくって、妻っていう役割を演じきれなかったのよね」
富田は部屋の各所に山積みとなっている同人誌の山とか、各所に列べられた球体関節人形の数々を見渡して、「はぁ、まぁ、そうなんでしょうねぇ」と、曖昧な答え方をした。そうですねと肯定すれば本人を目の前に貶してるようだし、否定すれば嘘をつくことになってしまうからだ。
富田は、積み上げられた本の一つに、何気なく手を伸ばした。そして、頁をめくって凍り付く。
「ああ、止めといたほうがいいよお。男の人には目に毒かも……って、遅かった？」
紙面一杯に描かれた十八禁ＢＬ漫画の描写を前に、富田は仕掛けられた対人地雷でも踏んだような顔をしていた。掘り返した地雷を扱うかのように、丁寧に表紙を閉じると、そっと本の山のてっぺんに積み置くのだった。

18

冬の午前四時過ぎというのは、まだ夜中の内だ。

原稿が仕上がったのか、プリンターは静かながらも作動音をたてて忙しく働いている。部屋の主は、することもなくなって緊張が解けたのかモニターの前でうたた寝していた。

伊丹は、そんな梨紗の背中にリリカルなキャラクター模様の毛布をかけると窓の外へと視線を向けた。だが、明るいところから暗いところは見えにくいし、もしこちらを監視する者がいたら相手から丸見えだということを思い出し、部屋の灯りを落として改めてアパートの外を観察する。

見た範囲では、人影もない。

時折、新聞配達のスーパーカブが軽快な四ストローク音をたてながら家々を回っている。タクシーから酔っ払った人が降りてきて、支払いに手間取っていたり、生活リズムがどうなってるんだろうと思うような人のキックボードの音も聞こえたりする。

それが明け方近い、都内住宅街の生活音であった。

首相官邸。

『お休み中、申し訳ありません。総理……』
「なんだね？」
パジャマ姿の内閣総理大臣が、ベッドの中で携帯電話を耳に当てていた。
『特地からの来賓が行方不明になったようです』
「それはいつのことだ」
『昨夜の二十三時頃です。投宿先の市ヶ谷園で火災が発生しまして……』
首相は枕元の時計を見た。現在午前五時を過ぎている。
「で、第一報が遅れた理由は？」
『はい。ご報告申し上げるならば、状況をある程度把握してからと思いました』
「で、把握できた状況というのはなんだ？」
『はい。市ヶ谷園の火災の原因は、放火のようです』
「火をつけたのは誰だ」
『まだ、判っていませんが、予想では……』
「予想ならば不要だ。現場担当者はどうしている？」
『現在入院中です』
「負傷したのか？　それは、敵対勢力と交戦したということか？」
『まだ、判っていません』

「ちっ。で、来賓は無事なんだろうな？」
『……現在、捜索中です』
「馬鹿か？」
『申し訳ございません。ですが、担当部局も鋭意努力しておりますれば……』
「違う。私が言ったのは君のことだ」
『……と、申しますと？』
首相は舌打ちすると「もういい」と電話を置いた。
首相という職に就いた時に、危機管理の重責を担う以上、緊急の知らせが時と場所を問わずに押し寄せて来ることの覚悟は充分に済ませたつもりだった。だが、手足となって働く官僚達がこの体たらくという現実には、ほとほと参っていた。
エリート中のエリートであるはずのキャリア組官僚達。彼らは、ひとり一人を見れば相当に優秀だし、組織を運営していくことについては国際的にも高く評価されている。一つの課題についても、一度問題意識を持てばそれを研究し、対策をたて、それなりの行動を起こすことも出来る。だが、その場その時、その瞬間に自ら責任をもって判断し、必要な対策を施さなければならない突発的な出来事に遭遇すると「なんで？　どうして？」と小一時間問いつめたくなるほどに、頑迷で無能な存在となり果ててしまうのだ。
しかも、彼らは意外と仕事が出来ない。書類と言えばお役所仕事の代名詞であったのに、『年金

記録をきちんと整えておく』ということすら出来ていなかったことが暴露されたのは、つい最近の話だ。

これとて、世の中が平和で比較的安定していれば、時間をかければ何とかできただろう。だがしかし今は有事である。しかも、日本を取り囲む環境はとりわけ厳しい。特地での戦況こそ有利であるが、『門』のこちら側では、アメリカ、中国、ロシア、EUのみならず、インド、中東、南米各国大使からの、「『門』にかかわる問題を話し合いたい」という申し込みが連日のごとく入ってくる。そしてこれが厄介なのである。

アメリカは、最初っから分け前があると思いこんでいる。招かれないパーティに勝手に押し掛け、しかも行儀良く客用の皿に家の主人が料理を取り分けるのを待つつもりもなく、自分用の大皿を持ち込んでお手盛りで欲しい分を取らせろというのだから、図々しいにもほどがある。今のところ大人しくしてるが、それは料理がまだ出来上がっていないからでしかない。

EU各国の首脳からは、日本が特地の権益を独占することがないように、釘を刺しておくような発言が増えているし、ロシア、中国、あと中東や南米の一部……すなわち資源輸出国は、国連による『門』の共同管理を主張している。

これらの資源輸出国は技術大国にして経済大国の日本が無尽蔵とも言える資源を握ることで、自国の権益や発言力が低下することを恐れているのだ。

ただ、第二次大戦後のベルリンでもあるまいし、一国の首都、しかも皇居から目と鼻の先に外国

の軍隊を入れるという主張は常識はずれに過ぎる。向こうも無茶を承知で口にしているに過ぎないから、真剣に取り合わなければならないような事態にはなっていない。

癇に障るのは、こうした海外からの圧力に迎合する国内勢力の存在だった。

与野党、各種のＮＧＯ団体、挙げ句の果てに宗教勢力等から、『門』の向こう側に立ち入らせろ、調査させろ、特地での活動を保障しろ、マスコミ関係者に立ち入り許可を出せ、それが無理ならせめて向こう側の人間と話をさせろという要求が出て来ている。

そう言えば、昨日の参考人招致。『亜神』という種族のロゥリィと名乗る少女……ではなくて本人の言によれば九百才を超えると言うが、彼女たちの登場は、各界に強い衝撃を与えたようだった。

新聞各社のみならず、週刊誌、雑誌社、出版社、あげくのはてに芸能界、それとニューエイジ系の団体や、東西の新興宗教などから問い合わせの電話がかかってきたと言うから、笑ってしまった。

こうした有象無象からの情報開示の要求も日増しに強くなってくるだろう。

上手にコントロールしなければ、『門』の向こう側について権益を求める連中と結びついて、無茶な要求が現実になりかねない。国際関係というのは、学校の教室内に似ている。国連という名の教師は無能で無力だ。恨み辛みを記した遺書でも残して自殺しない限り警察は来てくれないのだ。来てくれない以上、無いも同じである。従って、子どもは有力な友達をつくって群れなければ、い

じめや無法から身を守れない。

対処としては、同盟国であるアメリカを始め、関係の良好なＥＵ諸国については、それなりに取り分が期待できることを仄めかせておく。実際問題、特地についての情報はまだ多くはないし、もし想定通りなら、特地開発は日本だけでは手に余る。要は、重要な部分で日本によるコントロールが効けばいいのだ。そしてアメリカも、ヨーロッパもそれで満足するだろう。

問題はロシアと中国だ。

ロシアの、エネルギーの元栓を握りながらの強引な外交施策は、ＥＵのみならず東欧諸国でもかなりの反感を買っている。ＥＵが特地に強い関心を示すのも、乱暴なロシアの態度に、内心で辟易しているからだ。特地から安定したエネルギー供給を受けられるようになれば、強いられて来た我慢もしないで済む。

当然、ロシアとしては困るわけで、ロシアが強行に国連による管理を主張するのもそれが理由だ。ロシアにとっては『門』は無い方がよいのである。その意味では厳重な警戒が必要だった。あの国は民間機だろうと漁船だろうと平気で撃つ。下手すると通常弾頭のＳＬＢＭを『門』めがけてぶっぱなしかねない。

ロシアに対しては、ＥＵとも相談しなければならないが……要するにロシアのヨーロッパへの発言力が急激かつ極端に低下しないように気をつかわなければならないということだ。このあたりは『気をつかっているゾ』と示しながら、手を出したらただじゃあ済まないぞという毅然とした態度

を取ることが必要となるだろう。

中国の場合は、ロシアと違って『門』の存在そのものについては否定的でない。何しろ状況が逼迫しているからだ。

中国は資源輸出国であるが同時に、資源輸入国でもある。この国は、愚かなことに十三億人の国民全員に豊かな生活をさせようとしている。それは、エネルギーや資源の需要と供給を大きく崩す行為だった。これまでの数十倍という膨大なエネルギーを、一時に必要とすることになるのだ。これと言うのもあの国が十三億という数の国民を御すことが難しくなって来たからだ。国をまとめるために必要だったのかも知れないが、長年続いた偏った教育の結果、中国人の自我は中華思想を背景に限りなく肥大してしまった。大国意識、過剰なまでの優越意識、そして一人っ子政策からおこる両親による甘やかされ……気位が高くなれば貧しい生活で満足できるはずもない。日本やアメリカから入ってくるテレビドラマに映し出される主人公のような、高級乗用車を乗り回し、物質的に豊かで享楽的な生活をしたいと思うのも当然のことだった。思ってしまうのだ。偉大なる漢民族の一員たる自分が、日本人などよりも劣った暮らしが出来るか、と。十三億人が不満を抱く。国内の不公平に不満を抱く。大国の国民のはずなのに、偉大なる漢民族の一員なのに、自分はちっとも豊かでない。

不満が鬱積し、はけ口を求めて駆けめぐる。

エゴを抑制する力はなく、実力の裏打ちのないプライドは傷つきやすい。真実を指摘したり我慢

を強いる者は敵で、自意識を満たしてくれるものだけが正義だ。

溜まり溜まった不満が出口を求める。

日本のような民主国家は、国民は不満に思った政権を選挙という方法で平和裏に引きずり降ろすことが出来る。だが、独裁国家では破壊と暴力によって政府そのものを転覆させるしか方法がないのだ。だから、彼らは暴動を起こす。それは彼の国の指導者にとっては恐怖であった。あり得ないはずのソビエト崩壊もそれほど昔のことではない。だからこそ必死なのである。国民の不満をなだめるため、肥大していく欲望をいかに満たすかで汲々としているのである。だから甘い言葉を囁く。『共産党の政治により未来は明るく、誰もが豊かになれる明日が約束されていて、諸外国はかつてのように中国を宗主国として敬い、ひれ伏すだろう』と。

日本としては、このような中国ともつき合っていかなくてはならない。ならば、事を荒立てるより仲良くしていた方が得だということを解らせることだ。

そのための餌が特地であった。

中国はとにかく資源が欲しい。そのためには強引に奪うか、友誼を求めて、分けて欲しいと頼んで来るかのいずれかになる。今は、日本の権益独占に対する警戒と嫉妬心を示している段階だ。頭を下げるのも業腹だから『耳障りな雑音』を発しているのだ。それもこれからは、ますます露骨になって来るだろう。

ある意味、ここが踏ん張り所なのだ。

他人が、自分の欲しいものを持っている時、強引に手を出して奪い損なえば、後で態度を改めて「分けて下さい」と頭を下げて頼んでも、貰えるはずがない。その常識をしっかりと理解させる。そうすれば、これまでのことはあたかも無かったかのように、好意的な笑顔で友好ムードを演出しつつ握手の手を伸ばしてくるだろう。しかしこれに容易に乗ってはいけない。中国の対日外交の基本は、『握手をする時に、つま先を踏む』だ。外務省の官僚は、拳を振り上げてくる相手には断固として退かないが、握手する時につま先を踏まれると簡単に一歩退いてしまうという性格がある。そこにつけ込まれているのだ。だから、中国は様々な形で喧嘩を仕掛けてくる。そして、必ず後で握手しようというサインを見せる。その時に飛びつかず、足を踏まれても痛いと言わずにじっと相手を睨みつける覚悟と根性が、対中政策上は必要なのである……が、官僚達のこの体たらくである。先代の北条首相はよくぞ我慢できたものだと思う本位である。「もしかして、わざと？オレって虐められている？」と思いたくなった。

「結局大事なのは学歴なんぞではなく、人間の質なのかも知れない」

先代首相は、反対勢力からは蛇蝎のごとく嫌われていたが、逆に言えばそれだけ指導力に優れ、自分がよいと思う政策をどしどし推し進めていた。内閣も政府も緊張感があって自分が、彼の官房長官として働いていた時は、ホントに良いのかと思うほど果断に振る舞うことが出来たが、それも彼の揺るがない政治姿勢が後ろ盾となっていたからだ。

さすがに、あれは不味いと思って自分が首相になってからは各方面に配慮した政治をするように

したのだが……何が悪かったのか閣僚の汚職疑惑とか過去の問題が噴出してくるわ、党内の身内が身勝手この上ないことばかり言い出すわ、各省庁の問題が頻出するわ、もういい加減仕事を投げ出したくなる。おまけにこの不始末である。

第1の問題は、「特地からの来賓が行方不明」という重要な情報が、この時間まで報告されなかったことである。

第2の問題は、ある程度の状況を確認してから伝えようと思ったのであれば、この程度では状況をまとめた内に入らないということだ。すなわち中途半端なのだ。

第一報というのは不正確であってもよいのだ。何か事が起きているということを知らせることに意義があるからだ。従って速さと早さのみが価値を持つ。この報告を受けた責任者は、対応の準備を（物心両面で）整えることになる。

ついで第二報とは、何が起きているかを詳しく報じることになる。これによって、具体的な対応に動き出す。従って、何が起きているかの具体的な中身が大切になるのだ。その意味から見ても、今回の報告は遅きに過ぎて、しかも内容は不十分である。要するに、ちゃんと報告はした。責任は果たしたというアリバイ工作でしかない。

「これで何を指示しろって、言うんだよ」

と、ぼやいてしまう。とは言っても、何もしないわけにはいかないのが彼の立場だ。特地からの来賓は、この戦争を終わらせるばかりか、特地と我が国との将来を方向付けるという意味でも重要

な存在となる。しかも、その中には国会を沸かせてくれた、あの綺麗な三人組も含まれている。彼女達には恐い思いはさせたくない。

本位は携帯電話を再び開いて、電話をかけた。

しばしの呼び出し音に続いて、相手が出た。

「嘉納さん、朝早く済みません」

……

「よかった、起きておられましたか？　睡眠を邪魔するんじゃないかって心配してたんです。とは言え電話をしなければならない立場がお互いに辛いところですね。え、私ですか？　さきほど叩き起こされました」

……

「実は特地からの来賓の件です。各所からいろいろと雑音が入ってたのは嘉納さんもご存じだと思うんですが、雑音もいささか度が過ぎたようで、来賓が逃げ出してしまったんですよ。無事ならいいんですが……ええ」

……

「え？　……いや、実はお恥ずかしながら、たった今報告を受けたところで」

……

「はい。正直言って今の担当者では心許ないので、お手を患わせますが『特地問題対策担当大臣』

をお引き受け願えないかと……丸投げになってしまって申し訳ありませんが」

……

「ええ、宜しくお願いいたします」

……

本位は、携帯電話を閉じると盛大に「くそっ」と罵倒した。嘉納から嫌みの一言二言も言われたようである。「もう辞めてやる。辞めちゃうぞ、こん畜生め」と呟きながら、ベッドに潜り込むのであった。

夜の帳（とばり）があけた。

テレビでは、無責任なコメンテーターがあちこちで起きた出来事について、あまり意味があるとも思えない個人的な感想を述べはじめた頃合いである。まだ眠っている者を邪魔したくないので、音量を小さく絞って流しっぱなしにしておき、雑魚寝している者を踏まないように注意しながら、伊丹はワンルーム・マンションに申し訳程度につくられている狭い台所に立つと、コンビニで購入したパン、牛乳、卵等を用いてフレンチトーストを作り始めた。

彼のする料理は焼くか、炒めるか、のどちらかだけである。味は甘くするか、ソースないし醤油をかける、あるいは軽く塩をふる、といった単純なもの。複雑な味付けはしないし、そもそも出来ない。ダシも使うとすればスーパーで手に入るカツオダシだ。

素材の味を活かした素朴な……と表現すれば、それなりの料理であるかのように思えるが、要するにフライパンしか使わないのである。

もし、晩飯を作らせたらきっとスーパーで一番安いオーストラリア産かアメリカ産の肉を買ってきて、フライパンで焼いて、軽く塩と胡椒をふっておき、後でソースをかけて食べるという食事になるだろう。もちろん野菜は、冷凍のミックスベジタブルである。生野菜を食べるなら、キャベツとかレタスを半玉買ってきて、ざくっと切ってそのまま出すという大胆さだ。ご飯は、一度に四合くらい炊いておき、一膳ずつラップにくるみ、冷凍保存しておく。そうして毎回必要分を電子レンジで解凍して食べる。要するに料理は、変な味付けをしようとしなければそれなりに食える。そうすれば、とりわけ美味くなくても、まずくもならない。それで良いと思うところが、伊丹の食に対するこだわりと言える。

散らかっている荷物を部屋の隅に押し退けて、大判の折脚テーブルを部屋の中央に置く。そこに伊丹は皿を列べていった。

富田はぐーすかと入眠中。栗林は一度トイレに起きてきたが、今は再び眠っている。この二人が目を醒ます頃には、朝食はすっかりと冷めているだろうが、そういうことはあんまり気にしない。特地組では、ピニャとボーゼス……それとロゥリィの三人が早起きであった。ロゥリィは起きた途端、窓の外に見える太陽の前で跪いて祈っていた。ピニャとボーゼスは最初はテレビに驚いて見入っていたが、この時間に流れているニュース番組の類は言葉を解さないと面白くないためにほどな

く飽きが来て、今度は室内に置かれた同人誌の数々へと関心を移していた。
「で、殿下、こ、これは」
「う～む。これほどの芸術が、この世にあったとは」
「殿下。ここは異世界です」
「そうだった」
「……」
「……」
「文字が読めないのが恨めしい」
「殿下。語学研修の件ですが、是非わたくしを」
「狡いぞ」
「わたくしがこれらを翻訳して、殿下の元に……」
「……」
「……」
「……う、う～む」
伊丹は、自分なりにピニャやボーゼスの会話に割り込むタイミングを見計らいながら、「あの……」と声をかけた。二人とも、ページを捲る手を止めて驚いたように顔を上げた。ロウリィも、丁度お祈りが終ったようで、伊丹へと顔を向けた。

「朝食。出来たんだけど、食べる？」

防衛大臣兼務特地問題対策担当大臣、嘉納太郎宅。

伊丹等がフレンチトーストという洋風の朝食を食べている頃、嘉納も東京滞在時用の自宅で、ごはんに納豆にみそ汁という日本人的（関西方面の方には、異議がおありであろうが、ここはご勘弁頂きたい）な朝食をとっていた。

第一秘書の野地（のじ）が、嘉納事務所の秘書集団を引き連れて「おはようございます」とやってくる。

「大臣、今日のご予定ですが……」

などと、メモを開きながら読み始めるのをさえぎって、嘉納はみそ汁をすすりながら「悪いけど、それは中止だぜ」と独特のしわがれ声で宣った。

「どうしました？」

「明けがたによお、総理から電話があったんだよ。特地からの来賓が行方不明だってさ。だから任せるってよ」

「それって！　だって特地のことであっても講和については、総理が官邸主導で行いたいからって強引に奪っていった仕事じゃないですか。それが、自分では手に負えなくなりました、あとはお願いしますなんて、都合が良すぎませんか？」

「そう思うだろう？　俺も思っちゃうんだよ」

ま、考えなくても分かることだが、首相はこの戦争を圧倒的に有利な条件で終わらせたという成果を独り占めしたかったのだ。狙いは間違ってないと思う。だが、手に負えなくなるとすぐに投げ出すのが、今の首相の悪いところである。要するに根性が座ってないのだ。

もしゃもしゃと味海苔を口にする嘉納は、そんなことを呟いた。

野地は、「はい、かしこまりました」と呟いて、携帯電話で各所にキャンセルの連絡をしていく。

「それでよ、野地。悪いけど官邸まで行って、来賓の方々の資料を貰ってきてちょうだいよ。ついでに総理の顔色を見てきてくれ。松井、朝一番で担当者会議を招集するから関係省庁に連絡してくれ。それと情報本部の担当者に状況がどうなっているか問い合わせてくれよ。以後の報告はこちらにするようにと付け加えてな」

「あ、はい」

野地は、携帯と手帳を懐に戻すと即座に席を立った。第二秘書の松井も携帯電話を取り出すと各方面に連絡を始めた。

＊　＊

「よし、今日は楽しむぞ」

朝食終了後、伊丹は片づけを済ませると、かぶりつきでテレビを見ている特地組女性衆に宣言した。テレビの画面には昨日の参考人招致でレレイらが質問されている様子が映し出されている。

「楽しむって、それどころじゃないんじゃないですか？」

昨日は狙われたり、ホテルに火をつけられたりしたのに軽率ではないかと栗林は言う。

だが伊丹は首を振った。「俺のモットーは喰う、寝る、遊ぶ。その合間にほんのちょっとの人生！だ」と。

そういう問題じゃないように思うんですが……と富田も首を傾げるが、この場における最高指揮官の伊丹が「休暇を楽しむぞ」と宣言する以上、二等陸曹でしかない身では言い返しようもない。

「第一、万が一敵が俺たちの居場所を知ってるんなら、ここに閉じこもってたって危険なことに変わりはないじゃないか。それだったら、外を出歩いて人目の多いところで遊んでいた方がよっぽど得だ。違うか？」

確かに一理あるようにも思える話であるが、なんだか、それだけのためにもっと重要な何かを犠牲にしているような感触もあった。もちろん富田だって、栗林だって仕事大好き人間というわけではない。若いのだから買い物をしたり、遊んだりもしたい。だから、伊丹が遊ぶというのなら「まぁいいか」と最終的には受け容れてしまうのである。

そうなれば、問題はどこへ行くかである。

「はいっ、お買い物っ！　渋谷っ、原宿っ！」

手を挙げたのは、梨紗であった。買い物は狩猟本能の代償行為とも言われている。金銭的な困窮を堪え忍んできた反動からか、熱烈な購買意欲が頭をもたげたようである。

「なんでお前が提案するんだ？」

「えーーーーーもしかして仲間はずれ!?　いぢめかな？　これって、いぢめっ？」

「別にいじめてないって。みんなが良ければ、別に構わないと思うぞ」

「やったぁ」と喜んだ梨紗は栗林に買い物を提案した。栗林もこれに賛同すると、テュカやレレイに、渋谷や原宿がどんなところであるかの説明をはじめた。「洋服だの下着だの……」云々という言葉が聞こえて来る。ロゥリィはなんだか気が乗らない様子であったが、梨紗が「黒ゴス……今着ているようなのが良ければ、下北沢に専門の店があるよ、行ってみる？」と言ったのを栗林が通訳した途端、態度を百八十度変えて賛成票を投じた。

女性陣の希望が渋谷を中心としてその周辺に決まりそうな中で、伊丹は「俺としては、秋葉原、中野なんだが」……と、何が目的なのか理解できそうな地名を呟いたりする。

「自分としては、どこでも良いんですが、ボーゼスさんが『この世界』の資料とか見れるところがいいと言ってますので、図書館などはどうかと思ってます」と、富田がピニャやボーゼスの意向を代弁した。実に渋い意見である。図書館デートを企画しているようであった。

行きたいところが別れてしまった。

伊丹は、「……」と梨紗の顔を見て、「同行してはいけない、絶対にいけない」という第六感の

囁き……ではなく絶叫を耳にした。女の買い物につき合った男の末路は悲惨である。覚悟を決めてとことんつき合うつもりなら、それなりに楽しめる可能性もあるが、中途半端な気持ちで関わるなら絶対にやめておいた方が良い世界なのである。

「とりあえず午前中は別れて行動するぞ。余裕をもって午後二時に新宿駅で待ち合わせして遅めの昼飯にする。それからは集団行動で移動して夕方は温泉で、夜に宴会ってことで」

こうしてレレイらは、異世界の街へと買い物に繰り出すこととなった。

単独行動の伊丹や、図書館行きの富田・ピニャ・ボーゼス組と別れたロウリィ・レレイ・テュカ組らは、栗林と梨紗に連れられてまず原宿に現れた。

おのぼりさんよろしく、周囲を歩くものすごい数の人に圧倒されてきょろきょろしている。そんなレレイ達を連れて梨紗が入ったのは、当然のごとく服のお店であった。

「どうにも、その格好が我慢できなかったよねぇ」

と、梨紗は宣言すると、レレイのポンチョにも似たローブを追い剥ぎか性犯罪者のように「うへへへへ。良いではないか、良いではないか」とひっぱがして、可愛系や、ギャル系、ナチュラル系等の服を次々と取り出してきては着せ替えた。どうも、等身大の人形遊びとでも思っているかのようである。

着せては脱がせ、着せては脱がせ……そうこうしている内に、色は別にしてもレレイが気に入っ

た様子を見せたトップは、シンプルで腿を半分まで覆うロング丈のカットソー（ここまで長いとワンピースと呼ぶべきか？）、ボトムは膝丈のレギンスであった。たっぷりとした生地で身体の線を覆い隠してしまおうとするところに彼女の恥じらいが感じられる。だが逆に下の方は伸縮自在でぴたっとした生地が細めの脚をなかなか良い感じで強調するから、こちらのほうでは冒険を試みている。

「ふむ。そう来たか」

ならば、色としては水色、黄色、ピンク……と眼にもまぶしい色を勧めたい。梨紗としては、これにしっかりした作りの可愛いアウターを選んで、冬の東京にも対応可としたいと思うところである。だが、レレイとしてはパーソナルカラーの白に、どうしても気が惹かれるようであった。一方、梨紗としてはさすがに上下全部が白の無地はどうかと思う。

「白に白じゃ、詰まらないじゃないっ!!」

そこで妥協策として刺繍が入っているものとか、柄物を勧める。

結局の所、トップは無地の白が採用された（ただし悪戯で、背中のカットが深い大胆なデザインのものを忍び込ませた。これによって、細い肩からうなじのラインがあらわになってコケティッシュな魅力を男共に振りまくだろう）。レギンスも生地は白だが、これについてはおとなしいながらも刺繍やリボンが入っている可愛いデザインのものを強く勧めた。

対するに、テュカの方はずらっと列ぶ衣装を前に、自分なりの好みから次々と欲しいものへと

手を伸ばした。今着ているストレッチジーンズとTシャツ＋セーターという組み合わせも悪くないが、どうにもおへそが出るのは心許なく思っていたようで、レレイが選んだような丈のたっぷりとしたものを手にした。ただし、身体の線が強調されるピタっとしたTシャツワンピースを選ぶところは、スタイルに対する自負心が感じられる。「脳筋爆乳」と呼称される栗林とは方向性は違うが、形状の良い曲線を肢体に有しているのだ。色は森の妖精らしく当然のことながら緑……若草色だ。

梨紗としては、テュカのウエスト周りはすっきりとしすぎているから、小物入れかハードなベルトでウェストマークをつけたいところである。寒気対策としてはダブルのコートが良いかも知れない。

着替え終えたテュカやレレイが試着室から出てきたところで、梨紗や栗林そしてロゥリィが「おおっ!!」とぱちぱちと手を叩いたりとファションショーのノリとなる。

金髪ブロンドで碧眼（へきがん）のテュカやプラチナブロンドで翠瞳（すいどう）のレレイは、外国人モデルみたいにとても見栄えがよく、見物人も集まってお店の中はちょっとしたガールズコレクションという雰囲気になった。お店のスタッフも丁度良い人寄せになると思ってか、大いに協力的だ。

こうして、レレイが眉を寄せるような例えば花柄のノースリーブのタンクトップとか、脚をつけ根から露わにするホットパンツといった物も含め、様々なアイテムが買い物籠に放り込まれていく。テュカの買い物籠も、梨紗によって深Vサイドギャザーなど、いわゆるセクシー系の衣装まで

もが次々と放り込まれていった。

昨日の国会中継や、今朝方のテレビ等で、テュカやロゥリィを見憶えていた人達もいたようで、時々「あの三人って、『こっかい』でしゃべってた娘とかでしょ？」などという声があちこちで囁かれだした。その頃合には、このお店での買い物も一段落ついたのでお会計である。お店も売り上げに貢献してくれた五人の女性の買い物には、たっぷりのおまけという形で好意を示してくれた。

ちなみに、買い物の代金はそれぞれ各自が負担している。以前述べたように、レレイは日本政府から通訳などの業務のために雇われているし、テュカは森を切り開く際にどの樹は切って良い、どの樹は駄目という指導をしたり、水源捜索（水の確保は、非常に重要である）といったことで重要な役割を果たしている。ロゥリィは、アルヌスの北の麓につくられた墓地で、祭祀をしたり、宗教的禁忌などを避けるためのアドバイザーの役割をしている。そんなこともあって、三人とも特地では使い道のない日本円を結構貯めているのだ。

「次はインナーよ!!　その次が黒ゴス、そしてアクセっ！」

梨紗の宣言によって五人の女性は、下着のお店へと向かうのであった。

一方、ピニャとボーゼスの二人をひきつれた富田は、図書館へとやってきた。

図書館に収蔵されている膨大な量の書籍に目を丸くしつつ、二人は国家がこれらの書籍を一般に開放し、見たい者がいつでも見ることが出来るということに感銘を受けていた。

「どんな資料が良いですか？」
『門』のこちら側の世界を知るための資料は無尽蔵にある。だが、文字が読めない以上、写真集や映像資料がよいだろうと思いつつ、どんな資料がいいのかと注文を尋ねたところ、二人の答えは即答であった。
「芸術」

19

東京都新宿区新宿二丁目。
ここにはかつて古(いにしえ)の聖地があった。もちろん今は存在しない。地下鉄丸の内線新宿御苑前駅を出て、とあるビルの外壁に面した鉄の階段を上る。ドアをくぐるとそこには漫画を始めとした、他では入手の難しいアニメのポスター、下敷き、ポストカード、そしてセル画などが販売されていた。なんだ、そんなものなら扱っている店はどこにだってあるではないか……と思う向きも多いだろう。どこでと問えば、秋葉原、池袋と、いくつかの地名を挙げることも難しくないだろう。……いやいや、それは今のこと。当時秋葉原は世界にその名も知られるただの電気街であり、池袋にも乙女ロードなどと冠される通りはなかった。そもそも『オタク』などという言葉も、市民権を得る前

だ。とある男が幼女を拐かしては歪んだ欲望のはけ口とした上で殺めてしまい、オタクのイメージを惨澹たるものとしてくれた時期……その頃の話である。

そう。時は、およそ二十数年前。

「当時、結婚したばかりだってえのに、選挙で落選して浪人してたころだな」

スーツ姿のおっさんが旧き良き時代を懐古しつつ呟いた。

「俺は中学生でした」

伊丹は、さっぱりしたような口調で語った。二人は互いに顔を見合わせようともせず、じっとたたずむように、かつての聖地だったビルを見上げていた。

「SPも連れずに独りで来るとは思いませんでしたよ。何かあったらどうするんですか？」

「何言ってるんだ。最強のボディガードがついてるだろ？」

「閣下も冗談を真に受けてるんですか？　アテにされても困りますよ」

ようやく二人は向き合う。そして伸ばした手を互いに握り会った。

立ち止まっていても何である。二人はそぞろ歩きしながら入園料を支払って、新宿御苑の門をくぐった。さすがに冬の平日だけあって、御苑内で散策する人もまばらだ。遊歩道の枯れ葉を踏むとパリという感触が靴底を通して感じられる。

「あのころのチューボーが、今じゃ立派になって」

「あの時のおっさんが、今じゃ閣下ですからねぇ」

「閣下ねぇ……今ひとつ、ピンとこねぇなぁ」
気のおけない同志の会話。互いに言葉を飾る必要もない。政治家の嫉妬や裏の意味が込められた陰険漫才のそれとは無縁のものだった。
「あの時に、この漫画は面白いか？　って話しかけられたのが、きっかけでしたねぇ」
「そうだっけか？」
「当時、青年誌は、中学生が手を伸ばすのは憚られた時代でしたからねぇ。なんてこと訊いて来るんだこのオヤジはって思いましたよ。しかも、内容を解説するのに小一時間くらいは喋らされましたからね」
「代価としてメシを奢ったろ？　だいたい、手を伸ばすのも憚られるって言ったって、ちゃんと内容を把握していたろ、お前さんは」
「そりゃあ、あの漫画はアニメになってましたから」
「そうだったか？」
嘉納太郎は、鼻で笑った。
「あれから、お前さんが教えてくれた漫画は全部読んだぜ」
「俺も、貸して頂いた古いマンガ面白かったです。黒人ガンマンと、東洋人少年とのゴーストタウンでの決闘は、凄く燃えましたね」
「そうだろ？　ありゃ最高だ」

こうして、二人のオタクはしばしの間、漫画談義で時を過ごした。だが、楽しい時とはすぐに過ぎていくものでもある。

「お、そろそろ時間だ」

気がつくとあっと言う間に一時間が過ぎていた。予定の詰まっている嘉納にとっては、もう次の仕事場へと向かわなければならない頃であった。

「あ、これを……」

伊丹は、嘉納に本屋の袋を手渡した。中には電話帳ほどの厚みと重量感のあるカタログが入っている。

「ありがてぇ。最近じゃ本屋にも迂闊に行けねえんだよ」

嘉納は「じゃあまたな」と手を挙げて挨拶をすると背中を向けた。

そして数歩歩いて、「あっ、しまった」と振り返る。

「お客さん方は元気かい？」

「ええ」

「ホテルから逃げ出して行方をくらましたのは良い判断だ。だが、ちと困ることがある。こっちとしては伸びてきた手をピシャリと叩いて、悪戯小僧を叱りつけておきたいところなんでな。手間掛けさせて悪いが当初の予定に戻ってくれ」

「態勢は？」

「お前さんの原隊の、えすえふじーぴぃ（SFGP）って言ったか？　その連中に任せることになった。ってことだから、予約しておいた旅館に入れ。防衛大臣兼務特地問題対策大臣として、職権をもって命じる」

嘉納はここで「命じる」という言葉を用いた。そこに伊丹は嘉納の心意気を篤く感じるのである。はっきりと命令するということは、何かあったら責任を取る姿勢を表しているからである。責任を取りたがらない者ほど命令することを嫌う。命令をせず「頼み事」と言ったり、「相談」とごまかして、何かあったら現場の暴走ってことにして逃げるのだ。その意味では、はっきりと命令された方が安心できる。そして、それは現場に立つ者にとって最高の支援となるのだ。「命令する」「される」の関係を血の通わない無機的なイメージで捉えることもあるだろうが、現実にはこういう側面もある。

伊丹は、離れていく嘉納の背中が見えなくなるまで、四十五度……則ち最敬礼をもって応じていた。

さて、待ち合わせの時刻に、待ち合わせ場所にそろった面々を見渡すと、伊丹は思わずため息をついた。なにしろ、それぞれに大きな荷物を抱えていたからだ。

「つい、買い物しすぎちゃって」は梨紗の言い訳であったが、はたしてこれが「つい」の一言で済む量だろうか？　例えば梨紗は衣類、小物類、婦人用雑貨の数々を山盛りにした袋が一人では抱え

きれないほどになっている。おそらく、伊丹の貸した金の殆どを使い切ってしまったのではないだろうか？　だが「大丈夫、冬の同人誌即売会まで保てばいいんだから」などと宣っている。

テュカは山岳用品店の手提げ袋をぶら下げていた。それとスポーツ用品店の包装紙に包まれた機械式洋弓（コンパウンドボウ）一式である。どうやら森の精霊というのは徹底してアウトドア派のようであった。「こっちの弓って凄いのよ」と言う口にはどこか言い訳めいた響きがあった。

レレイは、やっぱり十数冊にわたる書籍の入った袋をぶら下げて「……本は必要なもの」とボソリと呟いた。

他にも、ノートパソコンとおぼしき箱を大事そうに抱えてもいた。こんなもの買って、向こうで電気……どうするつもりなんだろう？　と思ったりする。

ロウリィは元から抱えているハルバートもあってか、比較的荷物が少な目である。が、それでも手提げの紙袋には、黒いフリルや刺繍の塊とおぼしき衣装の数々が詰まっていた。彼女は堂々と胸を張って告げる。「向こうじゃあ、誂えるのも大変なのよぉ」と。

これに対して、図書館でもっぱら芸術探しに時間の大半を費やしてしまったピニャやボーゼスは、買い物を楽しんだロウリィ達を実に羨ましげに見ていた。どうやらお目当てのものは見つからなかったようである。富田曰く、「何を探しているのだか、はっきりしなくって。ギリシャかローマ時代の彫刻だと思ったんですが、どうも彼女たちの注文する芸術とはイメージがあわなかったみたいです……」だそうである。

＊　＊

アメリカのロッキー山脈の地下には、緊急時……例えば核戦争における全軍の指揮運用を目的とした総合作戦指揮所が用意されていた。

小説や映画で登場する薄暗い指揮所内のモニターやスクリーンにきらめく無数の光輝（グリッド）や、スイッチがイルミネーションのごとく輝く様相を水晶宮に例えて形容してクリスタルパレスと呼ばれることもある。

実際、日本国内でも航空自衛隊の防空指揮所といったところは、そのような場所らしい。

だが、市ヶ谷の地下につくられた広域指揮運用センターや、状況管理運用システムルームなどと称される部屋は、どちらかというと報道番組か政治バラエティ番組を収録するテレビスタジオのような雰囲気を持っていた。明るい部屋の片隅には編集室のようなブースがあって、無数のモニター画面がある。そして、指揮運用に携わる制服組の幕僚達が詰めて、刻一刻と変化する状況に応じて、巨大な液晶パネルに表示される部隊符号を切り替えていた。正面に映っている画像によると、現在九州南西部の石垣島に中国方面から近接してくる航空機があり、これに対してスクランブルが発動されF15戦闘機が二機向かっている。あるいは、同近海に潜む所属不明潜水艦が赤く示されている。その近くには、我が方を示す青い色の潜水艦マークがあって、赤いマークの後ろを執拗につ

け回していた。

某刑事物の映画では、事件は会議室で起きているのではない……というセリフが流れたが、ここでは現場と会議室が直結している。状況の中に投じられ、否が応でも視野が狭くなる現場担当者を、後方に控えた冷えた頭の運用管理者が広い視野の元で支援し、指揮を行うシステムなのである。

この部屋に、防衛大臣兼務特地問題対策大臣の嘉納が背広組の参事官と、制服組の幹部らに付き添われて立ち入った。

「おはようございます、大臣」

二十四時間常時勤務態勢のここでは、時計の針がどの数字を指していようとも、習慣的に「おはようございます」と挨拶される。テレビなどに見られる芸能界の習慣を諧謔的に取り入れたものだが、かえって武張った印象が薄れて気軽な気分で挨拶が出来る。

嘉納も「おはようさん」と手を挙げつつ参事官に案内され、指揮所のなかに臨時にしつらえられた椅子へと腰を下ろした。

「指揮運用担当の竜崎(りゅうざき)二等陸佐です。宜しくお願いいたします」

嘉納の前に現れた制服自衛官はそう名乗った。

「俺、正直言って戦争ってこんなんだと思わなかったぜ」

竜崎に感想を告げながら、嘉納はコートを脱いだ。すかさず女性自衛官のひとりが受けてハンガーにかける。

「そうですね、大多数の人は戦争映画みたいに大規模な戦力が連日衝突するような印象を抱いていることでしょう。ですが、現代戦は大別して二種類のものになりました。ひとつは警察活動とゲリラ戦とが混ざったようなもの。そしてふたつ目は湾岸戦争のような、戦う前に準備を周到に済ませ、敵の急所を見極めて、いざ戦闘を始めれば、一気呵成に敵の要点のみを一撃で粉砕してこれを倒す……というものです。昔のような戦争は映画の中か、あるいは途上国のものです」

竜崎が、中東で行われている米軍の戦いを例に挙げた。

かつてのゲリラ戦は、ジャングルを舞台に敵味方の視界のほとんど無い森に隠れるようにして、互いに遭遇戦、待ち伏せ戦を行うというものだった。だが現在は違う。無辜の市民の中に敵は潜み隠れ、スーツや普段着のまま人混みの間から撃ってくる。乗用車を爆発させてくる。子どもの背中にくくりつけられた爆弾が爆発する。彼らはそれをしてカミカゼなどと呼んでいるそうだが、対象が軍事目標でないが故に断じて神風ではない。ただのテロである。

これに対処するには、無辜の市民と敵性人物とをより分けなければならない。そして倒すべき敵のみを倒す。強いて例えるならば癌治療に似ているだろう。膨大な数の健康な細胞の中に紛れ込んだ、小さなガン細胞を見いだしてこれをつぶしてしまわなければならないのだから。

警察活動は、一つ一つの癌を探し出して捕らえる活動。

軍事活動は、癌の塊を外科手術で取り除く活動。かつて、膝に癌が出来れば、脚一本丸ごと切り取るような手術をするしかなかったが、時代はそれを許さない。故に、いかに健康な細胞を傷つけ

ないで温存できるかが問われることになる。アメリカが国力を傾けて軍事力を投入しているのに、中東の治安が一向に回復しないのも、極端に言えば警察力が低いからである。メスをもって外科手術をするには、中東という病人のガン細胞はあちこちに転移しすぎている。これを取り除こうとして、無辜の市民を巻き込むような戦闘に訴えるしかなくなっているのだ。

「その意味では、我々がこれから行おうとしている作戦は、前者に当たります……すまんが状況をモニターに出してくれ」

コンソールのWAC（女性自衛官）が頷くと、端末のマウスを数回動かした。

すると正面のスクリーンに伊豆半島の付け根から箱根付近の地図が映し出される。十万分の一、五万分の一、一万分の一……と描かれる範囲はどんどん狭くなってくるが、同時に地形は分かりやすく大きくなっていく。そして、山に囲まれたひなびた温泉宿の一つが、壁面一杯の大型有機ＥＬモニターの中心に描かれたところで地図は停止した。

「温泉宿の山海楼閣。美味い料理に、風光明媚な露天風呂で評判です。いずれ泊まってみたい所ですが、本日の舞台はここになります。ルールは至極簡単、予想しうる敵対勢力の襲撃から、こちらに泊まっている来賓を守り抜くことです。隊員は既に配置についています」

旅館の周辺の山や、川といった地形の周辺には、隊員ひとり一人を現す『♀』マークを逆さにした陸曹を示す部隊符号や、このマルが二重丸になった幹部を示す部隊符号があちこちに記された。

嘉納の「おおっ、攻殻みたいだぜ」というセリフは聴かなかったことにして、竜崎はコンソール

の方へと身を乗り出して尋ねた。
「ご来賓の方々は今どうしてる？……現在露天風呂で入浴中!?……おいっ、誰か露天風呂の画像を送ってこれる位置にいる者はいるか？……ちっ、いないのか」
制服幹部の砕けた冗談に、一同苦笑い。場が微妙に弛緩した。女性自衛官の「セクハラですよ」の一言で、皆少しばかり姿勢を正して場が再び締まる。きっとこんなやりとりばかりしてるのだろうなぁと思いつつ、嘉納はネクタイを少しゆるめた。
「さて、山海楼閣周辺に布陣しておりますのは、我が国の精鋭『特戦』です」
「おう。伊丹の奴もその一員だそうだな」
「大臣閣下が、アレとどういうご縁でお知り合いなのかは存じませんが……」と言いつつ嘉納が机の上に置いた同人誌即売会のカタログに視線を送って「まぁ、その通りです」と竜崎は頷いた。
「ただ一部で誤解があるようなので訂正いたしますと、特殊作戦群とは申しましても、要員の全てが全て、海に陸に空にと駆けめぐる忍者かスーパーマンのごとき戦闘のプロというわけではありません。勿論、大半はそういった者なのですが、一部には特技をもって特戦群の一員に名を連ねている者もいます。例えば、コンピュータの扱いに優れた者、鍵などの構造に精通していてどのような鍵でも瞬く間に開けてしまう者、オートバイや自動車の扱いに優れている者、医師、毒物等の扱いに長じている者、人心の収攬（しゅうらん）と煽動に長けている者……」
「伊丹の奴がそうだと？」

「ええ。アレは逃げ足……危険とか、嫌なことから逃げることについては、ピカ一の技量を有しております。そりゃあもう、特戦の連中が追っかけ回しても、なかなか捕まりません。と言うか、奴をターゲットにしたフォックスハンティングの訓練を始めようかという話になった途端、いなくなってます」

「……俺が見た資料は、ちょっと違う内容が書いてあったが」

場にいた女性自衛官が笑いを堪えきれず、数名の幹部達も笑ったら失礼とは思いつつも腹を抱えた。

「大臣、その資料は背広組から回ってきたものではありませんか？　非合法の手段で入手されたものですので破棄されると共に、入手経路についてあとで教えてください。防衛機密の漏洩ルート解明に使わせて頂きます」

「どういうことだ？」

「特戦について、非合法な方法で情報を入手しようとすると……例えばハッキングとか、人を介した方法でもですが……偽装された情報が出て来るようになってるのです。その代表例がアレでして、格闘の達人、心理戦のエキスパート、射撃の上級者、高々度降下低開傘・高々度降下高開傘の技術を持つ空挺、海猿顔負けの潜水技能、爆発物の専門家……痛い中学生の創作みたいな設定がてんこ盛りです。……違いますか？」

「ああ、そうだった。でもなんで？」

「これは防衛機密ですが、大臣にはお教えする必要がありましょう。それは冗談です」

「冗談？」
「ええ、冗談です。まぁ、怠け者の彼に対する、一種のイヤミでもありますが……ま、建前としては欺瞞情報ということになっています」
「おいおい、嫌味かよ？」
「はい、イヤミです。特戦の一員となったからには、隊員達は自己の特技のみならず、自主的に互いの技能を教えあい吸収しあって、各個の技能と練度を高めていくことが期待されています。ところがです。アレだけは他人から吸収しようとしない。ばかりか、怠けていることが自分の仕事だと勘違いして、挙げ句の果てに群内部で漫画だのアニメの布教に勤しんでる有様です」
防衛大臣は頭を抱えた。
「おいおい、ここはどう考えたら良いんだ？　特戦の連中は、そんな奴のことも捕まえられないくらいにレベルが低いのか、それとも伊丹の奴が凄いって思うべきか」
だから奴をクビに出来ないんです……と竜崎は愚痴った。
ここで無能で怠慢だからという理由でクビにしたら、そんな奴を捕まえられない特戦は全員無能ということになってしまう。
「痛し痒しです」
幹部自衛官達は、肩を落として深々としたため息をついたのである。

一方、山海楼閣では……。

ゆったりと温泉に浸かって、ここ数日の疲れを流した伊丹達ご一行様は、食事を済ませ、その後、酒盛りへと突入していた。もう、さっさと寝ればいいのにと思うのだが、栗林と梨紗の二人が結託して、酒とつまみを買い込んできたようである。それぞれに、「もう寝よか」と床に入ろうとしているのを後目に、二人はテーブルの上にビールと酒、ワイン、ウィスキーそしてカキピーやポテチといったつまみの数々を所狭しと列べた。そして始まった栗林と梨紗の酒盛りに、ピニャとボーゼスが「葡萄酒はわかるが、これは何だ？」と興味を示してウィスキーを口にしたのがきっかけで参加。そして後からテュカとロゥリィも参入し、本を読んでいたレレイまでもが「吸い込みが悪いぞぉ」と言われて、ビールを飲まされる羽目に陥っていた。そうして盛り上がってきたところで、栗林とロゥリィの二人が隣の男部屋を襲撃し「やい、男共、ちょっと顔出せや」と伊丹と富田を無理矢理に、文字通り引きずって来たのである。

「なんだこりゃ」

伊丹と富田の見た光景は、まさにサバトであった。あるいは酒池肉林と言い換えても良いだろう。なにしろみんな酔ってる。しかも着慣れない浴衣は乱れまくっていて、下着だって見えてるというか見せまくっていた。思わず、ちょっと待て、恥じらいはどうした？　ここに座りなさい、と小一時間説教したくなるほどの惨状となっていた。

おずおずとボーゼスに「あの、見えてるんですが……」と指摘して服装を正すように言った富田

は、女性衆による「ムッツリスケベ」とか「ホントは見たい癖にぃ」「自己批判しろぉ」「後で布団部屋にでも連れ込んでムフフするつもりだろっ」と悪口雑言と、枕の集中砲火を浴びてしまい、部屋の隅っこに引き下がって沈黙。このことは触れないのが一番と悟った伊丹はもっぱら酒か、おつまみへと視線を集中し、大人しくすることにしたのだった。だが……、

「やい、伊丹っ！　お前には言いたいことがあるぞぉ」

と、伊丹の正面にあぐらをかいて座ったのは栗林だった。だから、浴衣であぐらをかいたら丸見えなんですが……と言ったら最期なので黙っている。

「たいちょ～……伊丹……イタミ二尉……お前に話がある。じゃなくてお願いがありまふ」

酔っぱらいが、伊丹の肩をバンバンと叩きながら言った。結構痛い。

「紹介して下さい！」

「何を……」

「私をですぅ」

「誰に？」

「特殊作戦群の人にです」

「なんで？」

伊丹は、栗林の希望を知っていたから、特殊作戦群への志願でもしたいんだろうか？　と思った。だが、特戦はレンジャー資格必須。そしてレンジャーは女性には門戸が開かれていないのが現

実であったから、どうやって諦めるように言おうかと考えてしまった。ところが、彼女の言葉は伊丹の予想の斜め上へと行っていた。

「結婚を申し込みますっ！」

「ちょ、ちょっと待て！　それって、誰でも良いって事か？」

「んなことありません。独身で、特殊作戦群でも優秀な人に限ります」

「んなこと言っても、相手の都合とかもあるだろう？　確かに半数以上が独身だけど」

「それならＯＫじゃないですか？　考えてもみて下さい。危険な任務に出ずっぱりの毎日、普通の女にはそんな人の女房って務まりませんよ。その点、私なら完璧ですっ！　小さな身体に、高性能なエンジン搭載。清く明るく、元気よくっ。格闘徽章保持で夫婦喧嘩も手加減なしです。しかも、今やコンバットプループン（実戦証明済）っ！　そしてこの胸っ！　報道されない、誰もが顧みない作戦で疲れた心と体を、私ならこの胸で癒してあげられますっ！」

「胸って言ったって、お前さんのそれ、筋肉だろ」

「違います！　筋肉四十パーセント、脂肪分六十パーセント。バスト九十二。仰向けに寝てもたゆまない、張りがありつつも触り心地はゴムまりのごとき美乳ですっ！」

そう叫んだ栗林はいたずら猫のような顔をして、巨乳を胸張った。すると「どうだっ！」と言わんばかりにはじけるミサイル並の決戦兵器。伊丹は、しばらく魅入ってしまったが、はっと気付いて目をそらす。斜め右上の天井へと視線を向けながら呟くように言った。

「ま、隊員の結婚問題はリアルで深刻な問題だからなぁ。ちゃんと上に話は通しておくよ。変な外国人にひっかかられても問題でな。お見合いとか手配したりも仕事になってるくらいなんだ。これマジな話。……お前さんなら顔も良いし、身辺もきれいなものだし、思想的にも申し分ない。もしかしたら、取り合いになるかもな」

「やったぁ！」と上機嫌で栗林は万歳した。その瞬間、伊丹の頭部を激しい痛みが襲う。

「ゴツン」という音がして、鼻の奥にわさびを塊で口に入れた時のようなツーンとした感触が広がり視野が暗くなる。どうやら強烈な勢いで叩かれたらしいということは、かろうじて理解できた。

「あ、万歳した手があたっちゃった……二尉……伊丹隊長……い……ちょ……」

薄れ行く意識の中で、伊丹は「こういう時は、さっさと寝ちまうに限る」と思いつつ意識を手放すのであった。

＊　＊

正体不明の武装集団が、山海楼閣に近づいて来るのが確認されると、静かな戦闘が始まった。

状況管理運用システムルームの中央モニターには、山海楼閣をとりかこむ周囲における戦況が描かれていく。システムルームに置かれた数台のコンソールでは、モニターと向かい合う担当者が、偵察衛星や、空に浮かぶ偽装飛行船などから送られてくる情報を読みとって分析し、インカムにむ

かって語りかけていた。
「北北東の高の台に、熱源三。アーチャー……十時から十一時の方角よ」
『こちらアーチャー。目標を捕らえた』
「対処〇三。よろし？」
『了解』
　このような小規模の不正規戦において、どのような指揮運用方法が適切であるかを、歴史の浅い特殊作戦群では、ほぼ手探り状態で見いだそうとしていた。実際に行ってみて、問題点を洗い出したり、改善点を挙げていくのが一番であるという考えのもと、今回はマスター・サーヴァントシステムをとっていた。すなわち、後方に控える指揮者（マスター）ひとりに対して、戦場に身を置く戦闘要員（サーヴァント）がひとり、という形のペアを組むものだ。
　このペアが七組というところからコード名に、セイバー、アーチャー等といった言葉が用いられているが、このあたりは、誰かによる布教の成果かも知れない。
「ランサー。ポイント３へ移動……」
『こちらランサー。了解』
「キャスター、対処〇二。三時から四時方向でライダーが移動中なので撃たないように」
『こちらランサー。現在、泥濘に嵌っているところ。ポイント３まで一秒の遅れ』
「早く抜け出しなさい……」

状況は、特殊作戦群にとって一方的に有利に展開していた。
数は問題ではなかった。最新の機器によって敵の位置は見えているのだから。敵側は自分が見付けられているということに気づかないまま、無造作に近づいては、一方的に無力化されていった。
これに対抗するには、数を活かした連携しての攻撃しかないだろう。だが、敵側には確認されているだけで三個のグループが存在するのに、その数を全く活かしていなかったのだ。それは、まるで別々の集団のようにも思えて来るほどだった。
軍事には素人の嘉納だが、画面に表示される図を見ただけでも、敵が混乱の極みにあることは理解できた。この様子を眺めながら、敵の思惑について考えをまとめるため、傍らの竜崎に話しかけてみた。
「連中はいったい何を考えてるんだ？　こっちに備えがあることは、もう分かっただろうに」
先頭の集団が痛い目にあって後退する。すると今度は別の集団が近づいてくる。ところが、この集団の近づき方も無造作と言ってよかった。まるで味方が痛い目にあったことなど知らないかのようだ。
「考えられるのは、こちらがこれだけの高度な武力を用いた防御に出るとは、予想していなかったという可能性です。もう一つは、こちらの能力を測っているという可能性も考えられますが、損害を度外視し過ぎにも見えます」
「敵側Ａ集団の損害は、十名を超えました。後退を開始しています」

「もう時期B集団も体勢を立て直すために後退するでしょう。本格攻勢はその後になると思います」
「動かないC集団は、予備選力でしょうか」
「敵性集団に内部対立があるという可能性は？」
そんな会話が飛び交う中、嘉納は、今回の敵の行動についての政治的意図を考えていた。
戦争とは政治の一手段であり、政治と関係のない戦争はあり得ない。戦争の勝ち負けは、政治の土台の上に成り立つ。従って、戦術的な敗北が政治的な勝利であることもあり得るのだ。そう考える時、こちらに備えがあることを分かっていて、壁にむかって卵を投げるような、無意味とも思える攻撃を仕掛けて来ることにどんな理由があるだろうかと、見なくてはならない。
しかし、嘉納は考える材料が少なすぎることに苛立ち、舌打ちをした。
歴史を振り返って見れば、軍事については優秀だが政治を理解しない軍人が闇雲に目前の勝利のみを追い求めて、最終的に日本を敗亡へと導いた。政治を嫌って軍事のみを好む気質は、政略や策略を卑怯として正々堂々の戦いを好む武士道精神のそれと言えるだろう。だがそれは一兵卒の美徳である。国政に関わる者、そして軍事に関わる者はそれではいけない。政治も軍事も、同じ物であるということを理解し、両方を見据えるべきなのである。昨今は、軍事音痴な政治家が日本の政界に多いが、これもまた亡国の原因になると嘉納は考えている。軍事イコール悪としてしまう、感情的な平和運動の悪弊と言えるだろう。
「悪いけどよぉ……連中がどこの所属か調べてくれないか？　嫌な予感がするぜ」

嘉納の注文に、竜崎は眉を寄せた。
「敵は退却しているとは言っても、まだ状況が終了したわけではありません。それに、この手の作戦では装備などに所属を示す物は持たないものです……」
「そこを何とかならねぇか？　例えば人種とかは偽装できないだろ？」
例えば中国や、今のロシアは民族意識を組織の紐帯としているから、絶対的な忠誠心を必要とする工作員に異民族出身者が採用されることは極めて少ない。そしてその極めて少ない例があったとしても、潜入工作員として重要になるからこんな作戦には投入しないだろう。
中国人なら同じ東洋人として日本で目立たずに活動できるのだから、わざわざ異民族を送り込んで来る意味はないのだ。
「二佐……セイバーの近くに、目標の遺体が二つあります。確認させられますが」
竜崎は部下の意見具申を受けて、セイバーに敵の死体を確認するよう命じた。
暫し待機中、竜崎は嘉納に尋ねた。
「何をお考えなのですか？」
「ああ？　勿論政治さ。俺は政治家だからな」
「しかし、それと敵を調べることとどう関係が」
『こちらセイバー。敵の遺骸を調べてるんだが、気になる点がある。ライト使って良いか？』
「それは駄目だ。敵に現在位置を暴露することになるぞ。地形から見て、二キロ向こうからも見え

る。それに暗順応をしばらく失ってしまう」
「気になる点っていうのは何だ？」
割り込む形で嘉納がマイクに話しかけた。
『敵の顔立ちからすると、どうも東洋人ではないように思えます』
嘉納の背筋がさっと寒くなった。
「すまんが何としても確認させてくれ。連中がどの国から来ているかは極めて重要な問題だ」
竜崎が怒ったような態度で嘉納からマイクをひったくる。しばし黙って、首を振りつつ苦々しさを感じさせる声で命じた。
「セイバー。ライトの使用を許可する。ただし短時間だ。そして確認したら、すぐに移動せよ」
『こちら、セイバー。敵は黒人と白人がいたぞ!!』
敵が中国やロシアならば、こんな作戦に黒人や白人を混在させるはずがない。この声が聞こえた途端、嘉納は首相官邸に向かって電話をかけるべく受話器を取り上げていた。

20

「だ、大統領……この資料をどうやって」

『モトイ、問題はその資料をどうやって入手したかではなく、どう扱うかにある。違うかね？』
「た、たしかに」
額に脂汗を流す日本国総理大臣本位の手元には、アメリカから送られてきたファクスの束が存在していた。そこには本位内閣の閣僚それぞれの不正や、裏献金、各種の汚職行為の記録がしっかりと日本語で記されていた。資料そのものはアメリカから送られて来たが、日本で作成されたものなのだろう。
内閣発足からわずか二ヶ月。特別地域自衛隊派遣特別法案に反対した旧与党議員の復党問題から始まって、閣僚達の不正、汚職、挙げ句の果てに現職大臣の自殺という一連の不祥事によって、本位内閣は今や満身創痍の状態である。
この状態でのこの資料は、本位にとってのとどめの一撃に等しい。
『我が国の調査機関が、毎朝新聞の編集部に持ち込まれる寸前でこれを抑えることができたのは、幸運だった』
「有り難うございます。大統領」
『なあに、気にすることはない。これは、君と私との友情の証だよ』
「とは言え感謝は忘れません」
『そこでなんだが、モトイには頼みがある』
「どんなことでしょう？」

『聞いたところによると、そちらには特地から高貴なご身分の方が賓客として来日しているそうじゃないか？　私としては、お姫様を是非合衆国にもご招待したいのだよ』
「どうしてそれを？」
『今の、君の手元にあるものと同じだよ、モトイ』
国家機密がだだ漏れである。本位は、あまりのことに絶望的な思いを感じていた。
これでは手札を、見透かされた状態でカードゲームをするようなものだった。
「そうでしたか……ならば、話は早いですね。大統領直々のご招待の件は私どもの方で来賓に伝えておきますよ。招待状があればお預かりしましょう」
『いや、それは遠慮する。直接招待状を渡したいのでね』
「直接ですか？」
『そうとも。我が国のエージェントに直接手渡すように命じたんだ』
「そうでしたか。それならば、明日にでもお会いできるように取りはからいましょう。来賓は明日、特地にお帰りになられますからその前ではいかがでしょうか？」
『それでは駄目だモトイ。女性をお客としてお招きするコツはね、帰る寸前の里心ついた状態ではなくて、パーティが盛り上がっている最中だと私は考えているのだよ。そういう楽しい瞬間に、この楽しい旅はまだ終わりではないのだと知らせると、喜ばれると信じているのだ』
「しかし、こちらはもう夜中です。来賓もお休みでしょうに」

『いいや。例え夜中でも、良い知らせは喜ばれるものだよ。来賓は快く応じてくれるはずだ。邪魔さえ入らなければね』

「こちらの感覚では、非常識ですよ」

『いけないよ、モトイ。女性に対しては、物怖じしていてはいけないのだ。非常識と罵られることでも挑戦することが成功のカギなのだよ。時には強引に押すことも必要だ。日本人は奥ゆかしいのが美徳だと思っているかも知れないが、私はそれを欠点だと思う。私は以前から苛立たしく思っていた。君たちが得られる利益をとろうとしないことにね。分け前を期待する側としては、ホストの用意するパイが最初から小さいということでは、どのように分配されたとしても不満に思わざるを得ないからね。だから時として、このようなお節介もやきたくなる』

「貴重なご意見だと思いますが、その考え方は日本の風土には合いませんね」

『そうだろう？　だから、我が国のエージェントを直接派遣して来賓にご招待を申し上げたいのだよ。だが、ガードがとても優秀でね。面会すら出来ない始末だ。なんとかしてくれないかモトイ？　我々の友情の証として』

友情の証として……要は、言うことを聞いてくれないとさっきの資料を公開しちゃうぞという脅しであった。死命を制されたこの状態では、本位としては譲歩せざるを得なかった。だが譲歩するとしても、失う物を最小限に抑えることが首相としての責務である。頭脳を最大限に回転させつつ、現状を再確認。状況、手駒、自分がもちうる手段……これらを検討して、言葉を選ぶ。

「……いいでしょう。しかし、私にお約束できるのは、ガードをどうにかすることまでです。来賓にすげなく振られたり、逃げられたからと言って、その責をこちらに押しつけることだけはお止めいただけますね？」

『もちろんだとも。我が国のエージェントは優秀だ。きっと上手く事を運ぶだろう』

よし、言質を取った。

本位は、勝ち誇った大統領に、一矢報いる術を導き出していた。日米関係を決定的に破綻させず、それでいて大統領の意図を挫く起死回生の妙手。だが、それは同時に我が身の破滅を意味している。意味しているが……どうせ死に体の内閣だ。ぶっ壊すのなら派手な方がいい。

「では、うまく事が運ぶことをお祈りしてますよ、大統領。ではお休みなさい」

『納得してくれて嬉しいよ、モトイ。ではお休み。ちなみに、私はこれからブランチなんだ』

大統領は上機嫌な声で言うと、電話を切った。

「中止!?　来賓を守るのを止めろってぇのは、どういう事ですか？」

受話器に向かって吼える嘉納。

相手が首相だろうと、最早遠慮無しにべらんめぇ調であった。それほどに動揺していたし、唐突な内容だった。

電話の相手……本位から合衆国大統領の言葉が要約されて伝えられた。そしてそれに対する本位の決定は、敵対武装勢力が来賓を連れ去るのを黙って見過ごせということである。竜崎二等陸佐は、受話器を握りしめたまま硬直してる嘉納の表情を窺いながらも、総理大臣の指示に従い状況終了を部下に告げる。

「聖杯は砕かれた。繰り返す、聖杯は砕かれた。各位、状況を中止して集合地点まで撤退せよ」

上手く行っていたことを途中で放棄するなど、誰もが納得できることではない。だが、一度命令が下れば、そのままに行動するのは自衛官が持たなければならない本能でもある。

それぞれに様々なことを考えながらも、訓練によってたたき込まれたように身体が動き、隊員達は相互に連携しつつ、遅滞なくその場を放棄していく。

こうして正面のモニターに描かれていた輝点が、防備を解いて西へと下がり始めた。

「どういうことだ？」

嘉納は、受話器を握り締めたまま、怒りに打ち震えていた。本位は言った。

『堪えてください嘉納さん。私だって悔しいんです。ですが、ここまで閣僚のスキャンダルを握られたら、内閣はもうおしまいです』

「だからって、内閣を守るために全てを譲りつづけろって言うことですかい？」

『そこまでは言ってないし、そのつもりもありません。幸い、私が約束せざるを得なかったのは、来賓のガードを止めることまでです。政府として、来賓を引き渡すという約束はしてない。いずれ

言って来るかも知れないが、その前に私は政権を投げ捨てるつもりです。そうすれば全てはご破算になる。握られた秘密など価値がなくなります』

「投げ捨てる？　……も、本位さん、あんた何をするつもりだ。そんなことをしたら、政治家としておしまいだぞ」

『かまいやしません。どうせやるなら、歴史に名前が残るくらいにしてやるつもりです。楽しみにしていてください。それと嘉納さん……後は……日本を頼みます……』

本位の言葉の最後は、涙声であった。歯ぎしりすら聞こえるほどであった。

戦争は戦場だけで起きているのではない。会議室でも起きる。国会でも、首相官邸でも起こる。それぞれその場に適した形で、姿を変えてなされるものなのだ。こうして、本位は戦いに破れた。破れたが、それを完全な敗北に繋げない根性を見せた。

「あの、馬鹿。腰抜けの癖に最後は粋がりやがって」

唇を噛みながら、嘉納は受話器を降ろすのだった。

ふと、何かの気配で目が醒める。

闇に思えた視界も、よくよく見れば見慣れぬ天井。こんな半端な時間に目を醒ますことなど普段ならないのだが、頭をポカリと叩かれて気を失うように眠りついたからか、妙な形で目覚めてしまった。どうせなら朝まで眠れればいいのに、ここ最近殴られたり頭をぶつけたりで、気を失うこと

に馴れたのかも知れない。どうにも意識を取り戻すのが早くなってきたようだ。

頭を起こして周囲を見渡すと布団が敷き詰められた和室に、女達が雑魚寝して静かな寝息を立てている。泥酔して眠っているという状態にしては案外、穏やかな寝姿であった。

旅館の和室。奥は縁側を模した窓となっていて、外の風景を楽しめるようシックな雰囲気の籐椅子が置かれていた。

籐椅子に人影が一つ。

ガラスのコップで氷を転がす音。外の風景を酒肴とし月の光を浴びながら、誰かが琥珀色の酒精を傾けていた。

「はぁぅ」

悩ましいため息。浅く荒い呼吸。

上気した頬に、切なげにゆれる細い脚。

それはロゥリィ・マーキュリーだった。

いつもの黒ゴス神官衣装と違って、浴衣に丹前という格好ではその隙間から伸びる手足も覆い隠すものがない。腰まで伸びる長い黒髪は波打って、染み一つ無い肌はとてもまぶしかった。幼気（いたいけ）な少女がいけない独り遊びでもしているかのように見えて、それを覗き見てしまったような気まずさがあった。だが、男であるが故の背徳的な興奮もあって、伊丹は視線を離すことが出来ないのだ。

淫靡に輝く瞳が、中空に虚ろな視線を漂わせる。やがて、甘いため息とともに、気怠げに振り返る

彼女の双眸が、伊丹を貫いて視線が合致した。
「？」
ロゥリィは伊丹の視線に驚いた様子もなく、見てたでしょ？　とでも言いたげに「くすっくすっ」と余裕の様子で微笑んだ。そして悪戯っぽい表情で、しどけなく左腕を伸ばしその細い指先で「こっちに、おいで」と誘う。この瞬間、まるで催眠術にでも、かかったかのようであった。
伊丹は是とも否とも思うことなく、身を起こした。何の疑問も、躊躇いもない。そうするのが当然であるかのように感じていた。だが、いざ立ち上がろうとすると腰が重い。
それは背中から誰かが、はっしとしがみついているからだった。
その重さのおかげで淡い眠りにも似た夢遊状態が解けて、意識も清明となっていく。
ロゥリィが「ちっ」と舌打ちしたのは聞こえなかったことにして、伊丹は自分を拘束する者の正体を確かめた。
レレイだった。
伊丹は、ここ最近懐いて来るようになった白い少女の手をそっと解きほぐすと、乱れた毛布をなおして、ロゥリィの向かいに腰を下ろした。
サイドテーブル上には、どこで入手してきたのかウィスキーのボトルと氷と水。銀色に輝く満月の光を浴びて、グラスを傾けるロゥリィの姿は実に絵になっていた。容姿が幼いのがとても残念である。これで姿形が二十代だったら、言い寄る男が多くてさぞ困ったことだろう。亜神たる彼女の

肉体年齢は、現在のままで固定されていると言う。だから将来が全く期待できないのが惜しいところであった。そんなことを伊丹が言ったら、ロゥリィは、プィとそっぽを向いた。

「そんなことないわぁ。肉の身体を捨てて昇神したら、姿形は思いのままだもの……そのかわり肉の欲求も喜びも無くしちゃうけどねぇ」

「それじゃあ、意味がないんじゃないのか?」などと応じながら伊丹はあいているグラスをとると、氷を数個放り込み、手酌でトゥー・フィンガー分のウィスキーを注いだ。

ロゥリィは、桜色の唇を噛みながら伊丹を睨みつけた。

「この、すぐ近くで誰かが戦っているでしょぉ?」

どうしてそのことを? と問おうとして、伊丹はイタリカでのロゥリィを思い出した。戦死者の魂は彼女の身体を通じて彼女の信仰する神の元へと召されると言う。その際、ロゥリィの身に、性的な興奮にも似た反応を起こしていた。その婀娜っぽい様に、伊丹もこころ穏やかでいられなかったほどだ。見れば、今もロゥリィは熱の籠もった息を吐いている。それは、酒精だけが原因ではないようである。

「お陰で全然眠れないのよぉ。どうしてくれるぅ?」

「どうしてくれるって言われてもな」

「蛇の生殺しよぉ。わたしにぃ殺らせるかぁ、いっそのことヨージがなんとかしてよぉ!」

「なんとかっ、って? なにをせよとおっしゃるのでせうか?」

緊張の余り、思わず声を詰まらせてしまう。
「言わなきゃ、わからないぃ？」
「こ、この国には、刑法とか児童福祉法というのがあってな。子どもは、そういう対象としてはいけないということに」
「あら、わたしぃが子どもぉ？」
「み、見た目は立派な子どもだろ。少なくとも世間様はそう思う」
ロゥリィは、儀式的に周囲を見回して「世間様なんて、どこにも居ないわぁ」と宣った。そしてずいっと伊丹の耳元に唇を寄せると、「それに、そういう仲になったからと言って、それを周囲に宣伝して歩く趣味もないしぃ」と囁く。
「いや、でもな……やっぱり不味いだろう」
「くすくすくすぅ。ホントにぃ、わたしがぁ子どもに見えるのぉ？」
すっと、伊丹の目前で剥き出しとなった生脚を組み替える。
潤んだ瞳が伊丹の心の奥まで覗き込む。桜色の唇が、その隙間でぬめるように蠢く小さな舌先によって、艶めくまでに潤されていく。ロゥリィの手練手管の前では、伊丹の方こそ子ども扱いであった。男心のなにをどうすればいいか、彼女は非常によくわきまえており、そして経験も豊富であった。男を誘惑するのに、豊かな胸も張りのある腰も不要。そんなものはただの飾りです、エロいひとには分からないんです、とロゥリィに魅せられた者は思ってしまうだろう。

「ホントにぃ、子どもかなぁ？」

断じて否!!

ニゲロ、ニゲロ、ニゲロ……。伊丹の頭の中で大音声が鳴り響いた。だが、身体は伊丹の意思を裏切っていた。ロゥリィは、衣擦れの音も鮮やかにずぃと迫ると、獲物を狙う猫のように、そろりそろりと伊丹の膝へ登攀を始めた。接触面積が極力大きくなるように左のおでこをコツンと胸板にあて、肩、背中、腰を巧みに用いて重みを預けてくる。そして両の脚は、伊丹の腿を挟み込むかのように絡み付いていた。彼女の手は伊丹の心臓に添えるようにあてられていたが、若干爪を立てて、ぎっと掴むような感触がまた痛気持ちよく、官能的ですらあった。仕上げに、ロゥリィが耳元に唇を寄せて温かい吐息と共に、決め台詞を二言三言囁けば伊丹は墜ちるだろう。その証拠に伊丹の腕が彼女の腰に回っていた。

こんな時の決めゼリフは、声になるかならないかの小さなささやきで、くすぐるように「抱いてよぉ」でもよいし、「ねぇ、あそぼぉ」と朗らかに誘うのでも可だ。どれを選ぶかは彼女の気分次第。獲物を捕らえて押さえつけ、抵抗もはぎ取って、あとは料理するばかり。彼女が、そんな風に勝利を確信したその時、携帯電話のコール音が高らかに鳴り響いた。

場を破るということはこういう事を言うのだろうか。水をかけられたように、一瞬で白けてしまった。

なにそれ？　と、ロゥリィに眼差しで問われ、伊丹は携帯電話という道具について若干の説明を

するはめになる。

「時と場所を選ばないなんてぇ、無粋な道具ぅ」

ロゥリィは怒ったのか、拗ねた態度でスルリと伊丹の膝から降りて背中を向けた。その背中から、なんだか黒いオーラが立ち上っているかのようにも見えるほどだ。伊丹は「危なかったぁ」と、しばらく深呼吸して息を整えると懐の携帯電話に手を伸ばした。電話の発信者を確認する。すると、そこに記されていたのは閣下の二文字であった。

＊　＊

クワイドル・ハイデッガーは、日本に新設されたばかりと聞いている特殊部隊の力量に、舌を巻いていた。

ハイデッガーとて、海兵隊出身の猛者である。だが、現在ではＣＩＡに属してもっぱら陰に影に活動する毎日だ。それだけに、力で激しくぶつかる戦いはしばらくぶりだった。アメリカ軍の本来の戦い方は、圧倒的な火力をもって土砂降りのごとく弾丸を浴びせ、膨大な量の火薬を叩きつけることにある。敵が立て籠もっていれば手榴弾を放り込み、壁の向こうに潜んでいれば壁ごとロケット弾で吹き飛ばすという荒っぽくも豪快な手法だ。士官学校で学ぶ基本的な軍事ドクトリンは単純明快、敵の六倍の戦力を一カ所に集中せよ、となっている。しかしＣＩＡの任務では、そうはい

かない。なぜなら、ＣＩＡ活動の舞台は、多くの場合そういった乱暴が許される戦場ではないからだ。平和な日常生活の場である街や住宅地、あるいはオフィス街……そういった場所だ。従って軍隊のようにミサイルだのロケット弾を使うことは出来ない。当然の事ながら支援の砲撃もない。武器となるのは、素早く敵の位置を確認し、音も無く近づいて有利な位置を占め、反撃の暇を与えずに素早くこれを打ち倒すコマンド要員ひとり一人の技量とチームワーク。そしてこれを実現するための綿密な情報収集と作戦立案。繊細な作業の積み重ねが、作戦成功の基礎となる。

予定では来賓と呼称される目標が宿泊する部屋を急襲して、若干の警備（自衛官が三人いると聞かされている）を排除して二人を連れ去るはずだった。日本の油断できないところは、警察のレスポンスの早さである。瞬く間に道路封鎖、検問で、地域全体を塞いでしまう。従って、いかに早く現場を脱出できるかが鍵であり、そのために二十名という数の要員を動員したのである。ところが、敵は旅館を含む山林全体を天然の要害としてあらかじめ偽装して潜み、こちらを待ち伏せていた。地形を味方とし、闇を味方とし、そして多方向から狙ってくる。それに対して、こちらの装備は野戦向きではないブラックファティーグ（黒戦闘服）にボディアーマーという出で立ちで、武器も拳銃かＭＰ５・ＳＤ３くらいだ。想定していない事態に遭遇すれば、いくら精鋭のタスクフォースと言えども手も足も出なくなってしまうのが現実である。

まさか、これほどの戦力を配備しているとは。日本側は、どうやってかは知らないが、襲撃があることをあらかじめ知って待ちかまえていたのだ。そして、待ち伏せによって二十名いた味方は、

瞬く間に半数近くにまで減らされてしまったのである。

彼には知る由もなかったが、実際は、他国の工作機関から嫌がらせめいた追跡や、地下鉄の運行妨害、ホテルへの放火などといったことが繰り返されたため、どんな敵が来ても良いように防御を固めただけというのが真相である。もしそれを知っていたら、余計なことを、と大いに苦情を言っただろう。

いずれにしても日本側が最も防御を堅くした時に、攻撃してしまったのは彼らの不運と言えるかも知れない。そして一度の作戦でこれだけの損害が出るのは、極東方面日本支部の歴史上はじめてのことであった。待ち伏せられていた以上、作戦は失敗。これ以上の損失が出れば、撤退すら難しくなって来る。ハイデッガーは作戦の失敗を悟り、チームリーダーへ撤退を進言した。だがチームリーダーのチャックは、クビを縦に振らなかった。

ハイデッガーを含む残りの要員達に、現状での待機を命じて、通信機でどこぞと相談しはじめたのだ。

「ロジャー！　キム！　迂闊に動くなよ……ゴールドマン。タナカは生きているか？」

「駄目です。眉間を打ち抜かれてます」

「ちくしょう。相手はガードマンに毛の生えたような連中が相手だったんじゃないのかよっ！　これじゃあ、話が違うだろうっ」

冷静沈着なはずのロジャーが、罵倒する言葉を吐いている。

日本人はなかなか銃を使わないし、撃ったとしてもまず手足を狙って、こちらの命を取るのは躊躇う傾向にある。それに装備していたとしても、拳銃の類だから容易に制圧できる。ロジャー達はそう聞いていたし、自らの経験からもそう考えていた。だが、実際はどうだ。やつらは容赦なく狙って来る。

「よし。上の方で話はついたようだ。もうしばらくすると、自衛隊は撤退するはずだから、そうしたら予定通り来賓を迎えに行くぞ」

チームリーダーのチャックが、何事もなかったかのように言った。これにロジャーが食い付く。

「なんだって!!　予定通り!?　これだけの損害が予定の範囲だって言うのかよっ！」

「日本が、これだけ強固な防備をすることは、こちらも想定外だった。だが、それも上が直接話し合って政治的な取引で解決された」

「だったら、最初からそうしろってんだ。そうすればこんなに犠牲を出さずに済んだだろう」

「今回、ホワイトハウスは貴重な切り札の一枚を切った。本来なら別の機会に使うべきカードを無能なお前達のためにな」

激昂したロジャーがチャックにつかみかかろうとしたが、ハイデッガーが割って入り、止めるようにとうながす。

「いい加減にしろロジャー。まだ作戦中だ。チャックも口を慎んでくれ」

唾を吐くようににらみ合った二人は顔を背けて、互いに離れた。

「よし、その政治的な取引とやらが上手く行ったんなら、もう大丈夫だろう。ロジャー、ビッター、先頭に立て。行くぞ」

ロジャーは、なんで俺がという態度で、ハイデッガーを睨んだが、ビッターが銃を構えて「行くぞ」と声をかけると、不承不承ながらこれに従った。

政治的取引でガードが解かれたと言っても、現場に立つ者としては完全に信用できるはずもなく、警戒を解かずに、少しずつ旅館に近づいた。旅館の内部は一般の宿泊客に出くわす可能性もあるので、玄関などの出口を監視するだけにして、突入は庭から行う。部屋の場所は買収した仲居から確認済みである。銃を構え四方を警戒しながら少しずつ『来賓』のいる部屋へと歩み寄った。

21

当事者にとっては悲劇にしかならないが、端から見ていると喜劇としか思えないような出来事も、時として起こるものである。日本国政府が来賓と称される重要人物を特地より招き、今後の外交関係を決定づける重要な会談をもつらしい……という情報は、各国が日本政府の政府部局内に張り巡らせた情報網によって極めて早くから漏れていた。ただ、来賓の東京入りは突然決まったことでもあり、さらには滞在は二泊三日という短期の日程であったが故に、詳細な追加情報を待つ時間

的な余裕がないままに、各国政府は対応を決定せざるを得なかったのである。

アメリカ合衆国は、日本が各国政府に内緒で特地の重要人物と仲良くして、将来の外交関係において有利な立場を得ようとしていることに不快……はっきりと言えば嫉妬の念を抱いていた。分かりやすく言えば、すこぶる魅力的な美人と知り合った日本人青年に対して、世界は自分を中心にして回っていると思っているアメリカ人青年は、自分にもその娘を紹介しろと迫ったのである。だが、日本人青年は美人と知り合ったことを内緒にしている。従って正面から脅しつけたところで「誰に？　何のこと？」とシラを切られてしまう。しかし、そこは抜け駆けだろうと何だろうと、やった者勝ちで、夏目漱石の「こころ」の主人公を賞賛しても、罪悪感に悩む姿は一向に理解できないアメリカ人である。勝った者が正義、恋に禁じ手無しというアメリカ式恋愛観に基づいて、麗しき来賓を攫って自国に連れて来てしまえと、目論んだのであった。もし後で、日本国政府から苦情が来ても「来賓とは誰のことだ？」で済む。なにしろ日本政府も秘密にしていたのだから強く出られるはずもなく、しらばっくれればどうにでもなるのだ。そして、来賓との間に非常に親しい関係を築くことが出来たら……例えば、日本国と特地に存在する国家との和平交渉のため、我が国が仲介の労をとってあげようか？　という感じで恩を着せつつ特地への通行権を求めればよいのである。その為、詳しい情報が得られるのを待たずに、ＣＩＡ長官は極東支部に行動開始を命じたのだが……喜劇の源はそういうことを考えるのがアメリカだけではなかったことにあった。世界の中心は自分であると思っているが故に、同じようなことを考える者が他にいると考えないのが滑稽である。

こうして似たような発想の下で、似たような行動を起こした男達が、夜這いがかち合ったかのごとく間抜けな姿を、麗しき来賓の寝所の前に曝す羽目に陥ったのだった。

中華人民共和国の国家安全企画部の日本支局に属する工作員の残余十二名と、ロシア連邦対外情報庁（ＣＢＰ）の工作員の残余八名と、そしてＣＩＡの工作員の残余九名は、不意に出くわした。とは言っても、それぞれに海外で非合法な活動に従事する身である。数カ国語を自在に操り、国籍がわかるような物は何も身につけていない。服装だって街のミリタリーショップで手に入るような戦闘服にバラクラバ帽。武器は、わざわざ外国の物を使うという念の入れようだ。出くわした相手が誰なのか、いったいどこの国の機関に属しているのか、いかに優秀な特殊工作員であろうと咄嗟に判断することは、非常に難しかったのである。

ただ、彼らにとって一つだけはっきりしていることがある。

それは、出くわした他の二グループが武器を所持した「敵」、ということであった。

先ほどまで手も足も出ないような一方的な攻撃に曝されていたこともある。疑わしければ殺せ。しかる後に敵か味方か確認せよ……三国とも、そういう発想の元で行動する訓練をしている。従って、味方でない者は皆敵なのだ。

「……!?」

「……!!」

「……！」

一瞬、鬆が入ったとでも言うか虚を突かれたと言うべきか、お見合いしてしまった間抜けな数秒。それを取り戻そうとして、皆あわてて銃を構えた。だが……。

縁窓のサッシがバンっと開いて、黒ゴスを纏った少女が築山の上に降り立った。

「みなさまぁ、こんな夜半に、わざわざご足労様ぁ」

数年間に渡る高度な訓練を受けたはずの工作員達の反射神経は、わずか数メートルの距離に、夜空を背景にして立った一人の黒ゴス少女によって、さらに混乱した。

皆、目標の中に、幼い少女がいることは事前のブリーフィングによって知らされていた。でも、まさかその娘が自分達の面前に躍り出て来るとは考えてもみなかったのである。勿論、邪魔になれば撃つ。非合法の活動に従事する工作員だからそれくらいの非情さは持ち合わせている。だけど作戦の邪魔にならなければ、あえて傷つけるのは避けたいとも思ってはいたのだ。だから脊髄反射的に銃口を少女に向けたものの、引き金を引くことにホンの数瞬躊躇ってしまったのだ。

それを見たロィリィは、死神の二つ名にふさわしくニタリとほくそ笑んだ。そして、その直後から黒死の暴風が吹き荒れることとなる。

「うふっ」

信じられないことが起こった。見た目は稚い少女が、鉄塊のようなハルバートを閃光の如き勢いで振り回したのである。そして、その非常識な事態を理解する間もなく、その一振り毎に、米・中・露の工作員達が一人ずつ落命していくのだ。

一呼吸、二呼吸ほどの時間を経て、まだ生きている者はようやく我に返った。
今更ながら飛び跳ねるようにして遮蔽物に隠れると、反撃を開始した。だが、これもまた、この場の混乱を深めるだけとなった。
兎に角サプレッサー装備をした銃を少女に向ける。そして殺傷力において高性能な4・6㎜とか5・7㎜弾を放とうとするのだが、少女は銃口を向けられると、引き金も引かない内にそこからするりと華麗な身のこなしで躱(かわ)してしまうのだ。
放たれた銃弾は、勢いそのままに所属不明の工作員達に容赦なく降り注ぐ。
銃撃を受ければ、相手とてこちらに向けて反撃をしてくる。こうして、黒ゴス少女の暴風にかき回されながら、三つ巴の銃撃戦まで始まってしまうこととなった。
黒ゴス少女は羽根でもついているのかと思わせるほどの身のこなしで跳躍すると、空中で身を翻して銃弾をかわした。もし、その背に翼があるならその色は間違いなく黒だろう。
地に降りればまるで四つ足の獣のような俊敏さで駆け抜けて、たちまち工作員の懐へと肉迫してハルバートを叩きつけてくる。
四方から飛来する銃弾。そして黒い暴風。精鋭なはずの工作員達は、連携も戦術も忘れて、ただ我が身を守るので精一杯となった。味方こそは撃たないものの、それ以外は全て敵とばかりに引き金を引くしかなくなっていたのだ。そして、誰も彼もが手当たり次第に銃を乱射したので、逆に周囲から銃撃を受け、倒れていくことになってしまうのである。

少女の叩きつけて来るハルバートの破壊力は、アラミド繊維のボディアーマーなどまったく役に立たない凄まじさ。一撃毎に、たたきのめされ、吹き飛ばされ、身体を両断される。

工作員達はこれほどまでに非常識で理不尽なほどの破壊力を前にする訓練など受けていない。誰も彼も「こんなの相手に出来るか」とばかりに逃げ腰になった。

旅館の庭には小さな池があり、灯籠があり、築山（つきやま）があり、さらにはよく手入れされた植木があちこちに配置されている。これが銀色に輝く満月の下、ワビ・サビを……つまり風情を感じさせる風景を作り上げてるのだが、彼らにとってはこれほど死角が多く、狭い癖に地形に富んでいてやりにくい戦場はなかった。

黒ゴス少女は、これらの地形を巧みに活かして、銃弾を避け、一瞬にして築山の向こうに逃げたかと思わせると、回り込んで攻めて来る。

迎え撃とうとしても弾は虚しく灯籠を抉るだけ。池に飛び込んだ流れ弾を受けたのか、鯉が腹を上にして浮かび、職人が丹精を込めて冬支度させた植木は瞬く間にズタズタになってしまった。

絶対に旅館の建物に銃口を向けないように気をつけても、命のかかった乱戦である。流れ弾程度はどうしたって出てしまう。一般宿泊客が休む中で、雨樋がふっとび、ガラスを貫いて障子に穴があいていった。

こうして互いに撃ち合い、隠れ、隙を見ては移動して、また撃ち合うという繰り返しによって、貴重な技能を有した人命が耗されていった。

アメリカ側チームリーダーのチャックは、最初の一瞬で流れ弾を受けてしまい、仰向けに倒れていた。だが、彼の祖国に対する忠誠心と使命感は、最後の義務を果たすまで彼に死という名の安楽を許さなかった。次々と倒れていく仲間を見送りながら、無線機に向かって、息も絶え絶えに小さいながら報告の声を発した。

「作戦は失敗……作戦は失敗した。不意の攻撃を受けて、我々は壊滅……状態」

『いったい何があった？　日本の攻撃か？』

「……違う……こ……混乱していてわからない。黒ゴスの少女……が」

『どうした？　応答せよっ！』

無線機は叫んだが、チャックは永遠に応答することが出来なくなっていた。

ハイデッガーは、右大腿に銃弾を受けていた。

石灯籠に身を隠し応急キットから取り出した圧力包帯で傷跡を固く縛り付けたあと、弾の残りを確認しようとした瞬間、築山を掩体として身を伏せていたロジャーが、回り込んできた敵に横合いから殴り倒されたように転がるのを見てしまった。

その情け容赦のない殺戮に、形容のし難い感情がこみ上げてくる。

「この化け物めっ！」

ハイデッガーは、ロジャーの首をはねた黒ゴスの少女に向けて銃弾をばらまいた。

「化け物めっ！　化け物めっ！」

だが少女は巨大な血にまみれたハルバートを楯にして銃弾をことごとくはじき返してしまう。そして彼の銃の弾が尽きると見るや、その巨大な鉄の塊を叩きつけてきた。

なんとか身を捩らせてこれを避けたつもりだが、それでも身体のどこかで受けてしまったらしい。ハイデッガーの身体は小さな池へとたたき込まれた。そこに、さらに追い打ちのような銃撃が襲ってくる。別の敵だ。

振り向き様にＭＰ５を向けるが、弾倉に敵の弾があたったのか吹き飛んで、薬莢が地面に散乱する。最早、弾倉を替えている暇もない。ハイデッガーはサイドアームのシグザウエル・Ｐ２３９を左腕で引っこ抜こうとした。そしてその時に、左の腕を失っていることに気づく。

「ちっ」

慌てて右腕を回し腿のホルスターからマカロフを抜く。敵も拳銃を抜こうとしていて、ほぼ同時である。健全な左足に渾身の力を込め、敵の銃口から身を逸らそうと飛び退いた。敵もまた反対側に飛び退いて、ハイデッガーの銃口から逃れようとしている。

「くそっ」

中空で、互いに銃口を向け合った一瞬、弾倉に装填した殺意が尽き果てるまで、ひたすら放ち続けた。焼け火箸を突き立てられたような熱い感触が胸や頬、肩、腰を襲う。重力に引かれて大地に叩きつけられた衝撃で、息が止まった。弾倉を交換すべく手を伸ばそうとした。だが、手が動かない。銃を握る腕も動かない。急速に力が抜けていく。強烈な睡魔にも似た死の臭い。

「くそっ」
頭の中で、テレビのスイッチを切った時にも似た視界の消失があった。やがて、彼の呼吸が止まった。

気がつけば静まりかえる旅館の庭には、彼女に戦いを挑めるような生者は、既に存在していなかった。

冬の冷たい風がロゥリィのフリルスカートを揺らす。

生き残った池の鯉が、水面を跳ねた。

ロゥリィを援護するために、アーチェリーを構えていたテュカは、構えを解くと小さなため息をつく。

部屋の奥から隠れるように覗き見ていた伊丹やレレイ、栗林、富田達は、返り血を受けて独り庭先で微笑するロゥリィの姿に背筋が寒くなるのを感じていた。

事の成り行きを見守る羽目に陥っていた市ヶ谷の『状況管理運用システムルーム』は、不意に始まった山海楼閣の庭先における戦闘に、皆唖然としていた。

「内輪もめか？」

「いったいどうなってる？」

上空に音もなく浮かぶ偽装飛行船にしつらえられた複数のセンサー……第三世代暗視装置とハイビジョンカメラ、指向性マイク等から送られてくる情報は、旅館を襲ってきた敵襲団が、三つに分かれて互いに撃ち合いを始めたというものであった。

「おいおいおい、どうなってんだ？　誰か説明してくれよ」

嘉納が状況の説明を求めるが誰も答えられない。何が起きているか誰にも理解できなかったからだ。さらに、一人の少女が巨大な鉄斧を振り回しているという映像が彼らを一層混乱させた。余りにも現実離れしていたためすんなりと受け容れることが難しかったのである。

「おいおい、この娘、石の仮面を被ったとか、血を吸われたとか、そういう類の存在じゃねぇよな」

その意味では、マンガなどをよく読む嘉納の方が適応が早かった。彼はこれまで読んだことのある何種類かのマンガから、彼女のような能力を発揮する存在を思い起こしていた。

そのうちに戦闘は少女以外は全滅という形で終わってしまう。

時間が過ぎていくにつれて、庭先に散らばる死骸は冬の寒気に曝(さら)されて冷えていく。次第に体温を失って、発する赤外線も弱くなり暗視鏡にうつる姿が薄くなっていくことに哀れが催された。

「と、とりあえず対処第三項を……」

茫然自失の中から再起動を果たした幹部の一人がようやく対応を始めた。対処三とは、公安警察とその直属の専門グループを送り込んで現場の後始末をさせることである。これは、当初から予定されていたことなので遅滞なく進んだ。この場合の後始末とは、屍体を屍体袋に詰めて運び出し

たり、遺棄された武器や弾薬等を回収（どういう理由か、不自然なまでにその数が少なかったという）したり、痕跡の抹消、怪我人や生存者がいればこれの内々での処理、そして目撃者や関係機関に対して協力（沈黙）要請したり、することである。それと外務省を通じて、ひと通りの関係機関に「こういうことがあったけど、おたくら心当たりない？」という問い合わせをしたり、それとなく、ほのめかしたりすることも含まれる。

もちろん、こういうことに正直な答えをしてくる国はない。ロシアとか中国とか、韓国とか、イランとか、フランスとかの大使館からは大抵「うちは知らない。関係ない。そりゃあ災難だったねえ、お気の毒様」という返事が来るのであるが、今回に関して言えば主たる相手が判っているのでそれはナシである。

で、問題のアメリカなのだが、戸惑ったような態度で「うちの親分とおたくの親分との間で話が付いてたよね。なんで？　どうして？」という詰問をして来た。こちらとしても訳が解らないので起きた出来事を正直に説明したところ「担当者を送るので、屍体を検分させてちょうだい」と言ってきた。もちろん断る理由はないから、快く受け容れることとなった。このアメリカから来た担当者が、惨殺屍体を検分したところ、その殺傷の方法はさておいて「屍体の三分の二は、ロシアと中国のものでしょう」と語った。日本の担当者も同様の意見を持っていたので、ここから今回の出来事が不幸な偶然による遭遇戦であったと判明するのだが、それも後の話である。この時点では、日本としてはアメリカ内部における仲間割れと考えていたのである。従って、アメリカの行動を妨

害するようなことは一切せずに、ふて腐れた気分で後始末だけを坦々とやるという状態であった。

舞台となった旅館そのものについては、今回は、最初から協力体制が敷かれていたので隠蔽工作には大した手間もかからなかった。そもそもが防衛省共済組合経営の保養施設だ。だから宿泊客も、ほとんどが『関係者』によって占められていたのだ。一部の部外者……例えば、自衛官や防衛省役人の家族といった立場で当該施設を利用している一般人宿泊客が、朝食の席で仲居さんに「昨夜遅くに、庭先で騒ぎがあった？」と尋ねたりすることがあったが、「裏山で、戦争ごっこにうつつを抜かしたオタクが、何を考えたのか旅館の庭先にまで入り込んで撃ち合いをやって交番の人に来て貰ったり、叱りつけて荒らした庭先の掃除をさせたりと、ちょっとした騒ぎがありました」という説明で納得したということであった。

「ったく、こんな所まで来て戦争ごっことは非常識きわまりない」

「やっぱり、自衛隊の人だからなんですかねぇ～、ウチのヒロシ、大丈夫かしら。毒されてないかしら」

と、いった隊員の親と思われる熟年夫婦の会話に、事情を知る者はなんとも言えない気分を味わったということであった。

＊　＊

一方、追われる身の上の伊丹様ご一行である。

目の前で、追っかけてきた猟犬が若干の同士討ちとロウリィの手で全滅させられたからといって、それで猟師が諦めると思うほど楽観的な性格でもなかったので、荷物をまとめてまだ暗いうちに旅館を出ることにした。

「なんだか最近こんなのばっかり」とは、富田のぼやきである。

しばらく歩くと、田舎の旅館街に、『何故か』夜中だというのにアイドリングしたままで駐車するワゴン車を見つけた。旅館を襲ってきた連中が足に使っていたものならば、一台だけの筈もなく、周囲に似たような車がいてもおかしくないのだが目の届く範囲にはなかった。実際は、こうした田舎道でアイドリング状態の車が密集していたら悪目立ちして土地の官憲の気を惹く。そのために移動用の車両は、視界に入らない程度の距離を置いて待機することがセオリーなんだとか。それを知らない伊丹としては、深く考えても仕方ないというだけの理由で安直に行動した。伊丹の合図をうけた富田は右後方の死角から、サイドミラーに映らないように素早く近づいて運転席の外国人の後頭部に、鹵獲したＨ＆Ｋ ＭＰ７の銃口を突きつける。そして正面から堂々と「ゴメンねぇ。悪りぃけどさ、降りてくれるかな？」と、日本人的薄笑みを浮かべた伊丹が礼儀正しく現れて、これまた鹵獲したマカロフＰＭ（拳銃）を突きつけながら車を降りるように求めると、いかにもロシア人っという感じの大男が両手を挙げながらゆっくりと車から降りた。

「ここで悪人なら撃っちゃうところだけど？　撃っていい？　撃っていいよね？」と栗林は自分の

身長を遙かに超える大男を見上げながら、鹵獲したＦＮ　Ｐ90を隙無く構えた。完全にアルコールが抜けてないので、言うことがやたらに過激だ。

「それって、ちょっと後味悪いって」と富田は抑えるように言いつつ、大男には俯せになるよう促した。身の危険をひしひしと感じるからなのか、男もやたらと素直である。

「だけど無力化するのってどうするの？　ロープとか用意してないし、殴りつけて気絶させるってテレビやマンガには簡単に出てくるけど、実際にやったことないしなぁ。下手なところ殴ったら死んじゃうしさ。それだったら銃の方が面倒が無くていいんじゃない？　試し撃ちとかしてみたい」

栗林は、そんなことを言いながらも白人大男の脇から拳銃や予備の弾倉を抜き取り、身体のあちこちをまさぐりながら武装解除していった。使えそうな武器弾薬は、当然ながら鹵獲していく。

「員数外の武器弾薬ってありがたいよねぇ。しかも流行のＰＤＷ（個人防衛火器）。待ってたら何年たっても回ってこない最新鋭の武器弾薬が大漁だぁ。鹵獲～鹵獲～」

たまに撃つ弾がないのが玉に瑕……などという自衛隊川柳を詠う栗林の荷物は、彼女の体重並みに重く大きくなっていた。そんな中で、レレイがすすっと前に出てきた。

「殺傷せずに、無力化が出来ればよい？」

「何か方法があるの？」

「ある」

レレイは、そう頷くと俯せになった大男の背中に手を当て、ちょっと長めの詩をどういう咽の構

造なのか和音と不協和音を取り混ぜ『独りコーラス』で詠唱した。強いて言えば、それは喉歌と呼ばれる技法に似ているかも知れない。ただ、彼女の場合は鳩笛にも似た響きを持っていた。

しばらくすると白人男は、大いびきをかき始める。

「これで朝までぐっすり」

「す、スゴ」

栗林が代表して感嘆の声をあげたが、それはほぼ全員が同様に感じたことでもある。

魔法という技を初めて見た日本人一同の驚嘆は、イリュージョン・マジックを見せつけられた未開人のそれに近いかも知れない。なのにレレイは、大したことでもないかのように取り澄まし顔でワゴン車へと乗り込んだ。続いてロゥリィ、ピニャとボーゼス、梨紗、テュカの順で乗り込んで、富田が運転席、身体の小さな栗林を真ん中に挟んで、伊丹が助手席に座る。後は、ひたすら東京へ向けて走るだけ……なのだが、急に伊丹がやめようと言いだす。

「真っ直ぐ銀座に向かうのはやめよう。待ち伏せられたらきつい」

「じゃあ、どうします？　こう言っちゃなんですけど、変にこっちにいるより『門』の向こうの方が安全っすよ。出来るだけ早く駆け込んだ方がいいと思うんですけどね」

「戦闘地域の特地の方が、安全っていうのも何んだか皮肉……そうだ、今回の休暇は台無しになっちゃったんですから、後できちんと取り直しさせてもらいますよ。隊長」

栗林の言葉に、伊丹は握り拳で応えた。

「当たり前だろ。俺だって全然休めてないんだぜ。こうなったら何としても柳田にねじ込んで、十二月二十九日、三十日、三十一日の三日間に休暇をとってやる」
「その日が何の日かは尋ねませんけどね。あたしは別の日に休暇を取ります」
「俺も、もう巻き込まれたくないかなぁ」
栗林と富田は口をそろえた。日本語で為されたこの三人の会話をレレイから通訳されたのか、ピニャも少しばかり詰問口調で声をかけてきた。
「少し尋ねたい。そもそも何故、妾達はこのように逃げ隠れしなくてはならぬのか？」
「そう。わたしもそれを尋ねたいですよ隊長。最初から妙だなとは思ってましたけど、いったい何が起きてるんですか？」
問われて、伊丹はしばらく考えた後に、おもむろにこう切り出した。
「実はな……」
「実は？」
「俺にも、よく、わからん」
「隊長？」
栗林はすぅと目を細めると手にしたＦＮ Ｐ90の銃口を伊丹へと向けた。繰り返し言うが、まだアルコールが抜けきっていないようで、やたらと過激である。
「いい加減に言わないと、後ろ弾です」

伊丹は両手を挙げると「待った、待った」と猛った馬を宥めるかのように、優しく声をかけた。
「話せばわかる！」
「それって死亡フラグかも」と後ろから茶々を入れたのは、梨紗であった。
「問答無用っ！」
「待たれよ、クリバヤシ殿。そなたイタミ殿の部下であろう？　無理を言ってはいけない。これは非常に政治的な問題なのだから」
ピニャが、割って入るように言った。
「イタミ殿が立場上、言えないことは分かっている。これから妾の推測を言うので聞いて貰いたい」
「……」
「まず確認したい。妾は、売り渡されたのではないか？」
伊丹は「それはない」と首を振った。
「だが本来なら、妾もそなた達も休暇を楽しむがごとく安穏に過ごせるはずだったのではないか？　なのに、最初から齟齬が起きている。乗り物が急遽変更になったりすることは、手配の事情で当たり前に起こり得ることだし、目的地寸前でチカテツと称する地獄の乗り物を降りたのは、妾達やロゥリィ殿の意を汲んでのことだから仕方ないと思う。投宿した宿舎が火事になってリサ殿の部屋に駆け込んだのも火事場盗賊を避けるためとしては当然の処置と言えよう。しかし、こうしたことが一日、二日の間に立て続けに起こって、挙げ句の果てに泊まっていた旅亭が襲われて、慌てふた

めいて逃げ出さなくてはならなくなったとなると、いささか出来事が多すぎる。あたかも、コボルトの前に繋いだ子羊を放置するかのごとく、妾達につけられた護衛は外されたのではないか？　それはこの国の意志決定に関わるところで何かが起きているということだ。妾達は、このニホンという国と、帝国との交渉を仲介するために来た。それはすなわち講和の交渉を意味する。察するに、講和を快く思わない勢力と、講和を進めたい勢力があり、それがせめぎ合っている。違うか？」

22

東京近郊のサービスエリア。

時刻は、人々がまだ眠りから醒めない午前五時頃。だが都心へと向かうトラックは高速道路を絶えることなく走り抜けていく。

人影もまばらなサービスエリアの駐車場には、朝靄が立ちこめている。

そんな中で、三人の少女の足音が、行き交う車に気を配りながら売店から走り寄って来るのが見えた。

一人は、年の頃は見た目で十二〜三才。漆黒の亜神。

一人は、見た目十四〜五才ぐらい。賢き魔導師。

一人は、見た目十六～七才ぐらい。森の妖精。
ワゴン車の助手席からそれを眺めていた伊丹は思う。かつてこれほどに美しい少女達が居たであろうか？　と。
後部座席の梨紗は、伊丹に向かってポツリと尋ねた。
「三人の内、誰が好み？」
伊丹は、聞こえないふりでもしているように答えなかった。だから、梨紗は伊丹が答えやすくなるように質問の仕方を変えてみた。
「容姿の好みからすると、エルフの娘よね」
「まぁな」
「性格的には、黒ゴスの娘」
「ああ」
「保護欲がそそられるのは、プラチナブロンドの娘かなぁ」
これを聞いた伊丹は、梨紗ほど自分を理解している女はいないと思った。
「大変よく、分かってらっしゃる」
「何年つき合ってると思ってる？」
カシャカシャと膝に置いたノートパソコンのキーボードを叩きながら、梨紗は伊丹をなじった上に、何が気に入らないのか背もたれ越しにげしげしと蹴った。

ノートパソコンは携帯を用いてネットと接続されている。
富田や栗林はアイドリング中のワゴン車内で交わされる元夫婦の会話に互いに肩を竦め合うだけである。富田は、伊豆箱根から東京までの深夜の運転に疲れたのか肩を自ら揉んでいた。
スライドドアが開かれて、三人が車内へと入ってきた。
「……？」
「痛ぇ」と頭を抱える伊丹を見て、ロゥリィは胡乱な視線を向けた。どうせ間抜けなことでも言ったかやったかして、梨紗から制裁を受けたのではないかと推察したのである。
ロゥリィ達は抱えていた缶甘酒やらお汁粉ドリンク、ポタージュスープやココアといった微妙な品揃えの缶飲料を、伊丹を除いた全員へと手渡していった。機械文明の一端に触れた彼女達は、自分で買い物をしたがるお年頃である。ただ自分が何を買ってきたかは、分かってないようであるが。
「俺のは？」
とはいえ、自分には渡されないと思うと途端に寂しい気分になるものである。伊丹は、ロゥリィに問いかけたが、彼女は無視するかのようにプィとワゴン車の後席へと戻ってしまった。まだ、拗ねているのだ。
「あっそ、……まぁ、いいんだけどね？　どうせ、お汁粉ドリンクなんて飲みたくなかったし……」と、負け惜しみを呟きながら伊丹は肩を落とす。こういうことを口にする心の働きを心理学者達は童話に例えて「採れないブドウは酸っぱい」と呼んでいたりする。

「なにをやったの？」
「何もしなかったんだよ」
男女の関係においては、何もしないことが罪になることがあるという良い例なのかも知れない。女の勘でその手の話であることに気付いた梨紗は、不快な気分が胸中で蠢いたので話題を変えることにした。
「さて、これで仕込みは済んだからね。後は喰い付きを待つだけよ」
「なぁに？」
ロゥリィは梨紗の背後から液晶画面を覗き込んだが、そこには画像の類は一切無く、ただ日本語のテキストがずらっとならんだページが広がっていたために、早々に飽きてしまった。テュカは寝ている。レレイは、かろうじて読める程度だが、内容よりは自分が購入したノートＰＣを見事に使いこなす梨紗を、尊崇の目で視ていた。

『本日十四時、銀座事件慰霊碑に、ロゥリィ・マーキュリー氏、テュカ・ルナ・マルソー氏、レレイ・ラ・レレーナ氏の三名が献花予定。その後、特地への帰途につく』

このような内容が、匿名掲示板に書き込まれ、これに対するレスポンスで、ネット上はちょっとした祭り状態だ。

「どうだ？　いけそうか？」
伊丹は、助手席のバックレスト越しに、液晶画面を覗き込もうと頭をつきだした。しかも、コンビニでお湯を注いできたカップラーメンを朝食としてズルズルとすすっている。その音と汁のしぶきに梨紗は顔を顰めた。
「大丈夫。これで彼女たちを一目見ようと大勢が集まるわよ。……ちょっと止めてよ。頭の上でラーメンなんか食べないでったら」
梨紗は、さらに仕込み作業を続けた。
「参考人招致以降のネットの反応を見て、これはいけるっと思ったのよねぇ。人気ロックバンドのゲリラライブの観客動員数が千人を超えることもあるから、それくらいは集まると思うわ」
銀座で待ち構えているだろう敵から身を守るため、梨紗は『大きなお友達』を動員して、そのみんなに見守られる形で門の向こうへと帰るという方法を提示したのである。いかな米中露とは言え、衆人環視の中で乱暴な方法は使えないだろうから。多少リスクは伴っても街中でカーチェイスしたり銃をぶっぱなしたり、チャンバラを繰り広げるよりはよっぽど安全で確実と言える。
もちろん、目論見通りに行くのであれば妙案だから伊丹は諸手で賛成した。
「とにかく、昼までは仕込みを続けておくから、それまで先輩は寝てなさい」
そう言う梨紗に、伊丹は「あいよぉ」と言いつつも素直に従った。ピニャ達がそうしているように、伊丹も助手席に座ると背もたれに体重を預けて目を閉じる。

「……それと先輩？」
梨紗はキーボードを叩きながら、続けた。
「なんだ」
「いいかげん、お母様のお見舞いに行きなさい」
「……」
返事すらしない伊丹の硬質な拒絶に、梨紗は身を固くした。そして「まだ、駄目なのかなぁ」と呟くと、もうそれ以上はこの話題に触れないようにするのだった。

ピニャは、目を閉じて眠ったふりをしながら伊丹と梨紗のやりとりを聞いていた。
この二人は別れたと聞いたのだが、実際は充分に仲が良いと思う。勿論、会話の意味が理解できるわけではない。ただ、交わされる声の響きや、口調からそう感じるのだ。言葉が理解できないからこそ、そうした響きに敏感になるとも言える。とはいえ、どんな会話がなされているのか理解できないのはなんともどかしいモノである。元夫婦の睦言を盗み聞きする趣味はないが、ちょっとしたやりとりに自分や祖国の将来を左右するような内容が含まれているかもしれないのだ。そう考えると、なんとしても日本語を習得しなければいけない。
特に、『門』のこちら側にある講和を好ましく思わない勢力の存在は、ピニャにとって危機意識を抱かせるに充分のものだった。伊丹の語った、アメリカ、ロシア、中国を始めとする列強。これ

らの勢力のせめぎ合いによって、帝国の運命が勝手に決められてしまうというのは腹立たしいことなのである。せめて、講和を望む勢力と共闘して、帝国の生き残りをかけた外交戦に持ち込みたかった。確かに軍事的には適わないかもしれない。だが適わないからと言って、運命を天に委ねていることは、帝室の一員として許容できることではないのだ。

運を天に委ねるのは愚か者のすることだ。天は良いことも悪いことも持って来るからだ。

帝国貴族が頼るものは、ただ一つ己の力量である。そのためには、広く『門』のこちら側のことを知らなければならない。日本は当然、アメリカやロシア、中国と言われる外の国についてもだ。それは、自分だけでは不可能である。イタリカに戻ったなら、パナシュ、ハミルトン、ニコラシカ、スイッセス達……騎士団のメンバー達の協力を仰ぐ必要もあるだろう。帝都に戻って皇帝に報告もしなければならない。元老院議員や大臣らの説得もしなければ。

旅亭で拾った「じゅう」。伊丹等に気付かれないように懐に隠したその感触を確かめながら、なんとしても無事に国に帰り、この世界の芸術を持ち帰るのだと決意するピニャであった。

＊　＊

その日、テレビは朝から報道特集を流していた。新聞の朝刊は、一面全部を用いて、時の内閣総理大臣の緊急入院と、辞意の表明を巨大な見出しで伝えている。カメラの砲列は、東京女子医科学

病院の建物を撮し続け、集まった報道陣とアナウンサー達は、マイクを片手に道行く人々に事態を知らせその驚きの表情を全国へと発信していた。政権に対して批判的な勢力は、首相を「無責任」となじり、彼の振る舞いを名前とかけて『ホンイする』等の新造語をもって揶揄した。そんな大報道の影で、人々にあまり知られない人の動きがあった。それに気付いたのは、『お粗末様でした!!』という民放昼番組の取材スタッフである。

彼らは、いつものようにカメラと音声、そして女子アナという組み合わせで、今回の首相の入院と辞意表明についての街の反応を拾っていた。だが、銀座という街を行く人の反応は、判で押したようにみな同じである。多くの人が、テレビカメラを向けられると、空気を読んだ対応をしてしまう。つまりは一概に「本当ですか？　なんで急に……」と驚いたりするものだと思って、その通りに反応する。あるいは批判的な立場に立つ人は「辞めて当然」「無責任な」という言葉を続けてみせる。猟奇的な事件で「あの人？　やっぱり、そういうことをしそうな人でした」といった、ステレオタイプな反応を示すのと同義である。

こうやって集めた映像素材は、十……いや、百集めて一、使われれば御の字という世知辛い世の中である。当たり前の反応、意外な反応……これらを、番組の編集担当者が視聴者にどう印象づけたいかという意図に基づいて、切り張り加工して報道番組はつくられるのだから。その為には、どれだけ彩りに溢れた素材を拾い集めることができるかが、取材スタッフの力量の示し所なのだ。

ところが、そのことがまだ分かっていないアナウンス部の新人栗林菜々美（ななみ）は何人目ともつかない

男性にマイクを突きつけて、今回の首相の入院についてのコメントをとっていた。紋切り型の質問には、紋切り型の反応が返ってくる。それがメモリにデータとして収録されていく。番組プロデューサーが欲しいのは「典型例」だけでなく「極端例」である。なのに、彼女は「典型例」と「典型例の亜型」しか拾ってこないのだ。当然、彼女の集めた素材が使われることはない。滅多にない。カメラや音声の士気は低下して、ディレクターから「ちったぁ使える絵を拾ってこい」とお小言を言われ、メインのキャスターからも「もっとがんばらないといけないよ」と言われてしまう始末。同期の女子アナには、既にレギュラー番組を持っている者もいるというのに。

彼女としては、自分の取材映像が使われるように努力をしているつもりなのだ。だが努力の方向性に問題があった。質問のしゃべり方、抑揚、マイクの向け方のみならず、思いあまって姉譲りの巨乳を強調するような服装に変えてみたりもした。途端「あなた、色物アナウンサーで終わるつもり？」と先輩に睨まれたりしてしまった。

ため息をつきながら、今度は誰に声をかけようかと周囲を見渡す。銀座の繁華街だ。取材の対象に困ることはない。そして気付く。人の動きが妙にぎこちないことに。

銀座は、人の動きのある街だ。中央通りを北から南へ、そして東から、西から流れているのが正常である。なのに、今日見える風景は、人の動きが滞っていた。信号待ちをしているわけでもないのに、待ち合わせ場所としてもふさわしくない路傍で、多くの男性が立ちつくしている。

それも一人や二人ではない。流れて行く人々が、彼らを邪魔に思う程度に立ち止まっている。何かを待っているかのように。

「今日、何かイベントとかあったっけ？」

音声担当が「聞いてナシよ」と答えてきた。

カメラマンが、ピントを合わせる手を忙しなく動かしながら街に立ち止まる人々の変化を告げる。

「だんだん増えてるぞ」

ゾロゾロと何となしに立ち止まっている人々。その人垣を抜けるようにして、本来の買い物客達が通っていく。実に迷惑そうである。

「どっかのアイドルが路上でゲリラコンサートでもひらくとか？」

「ちょっとカメラ、回し続けてよね」

菜々美の言葉に、カメラが力を入れ直してレンズを向けた。

「分かってるって。それよりお前も連絡忘れるなよな！」

初めて掴めそうな特ダネの香りに酔っていた菜々美は、大事は局へ報告するという基本をすっかり忘れていた。カメラマンに指摘されて慌てて携帯電話に手を伸ばすのだった。

ＣＩＡの日本支局員の統括責任者、グラハム・モーリスは急な動員に不平不満を漏らしつつも、銀座の一等地につくりあげられた銀座駐屯地と呼ばれる自衛隊管理区域、一辺二百メートルのフェ

ンスと鉄条網に囲まれた正方形の地域を一周しながら、コードネーム『来賓』が姿を現すのを待ちかまえていた。

銀座駐屯地の営門はひとつ。

その前には、銀座事件の慰霊碑と記帳台が置かれ、今でも献花する人の姿が絶えない。

そんな中にやって来る来賓を丁寧且つ迅速にキャッチして、我が合衆国へと移送することが彼の任務であった。

日本政府との話は既についている。

まさか首相が辞任というアクロバットを使ってこちらの握っていたカードを帳消しにして来るとは思いもよらなかったが、少なくとも妨害はしないという約束は有効のはずである。従って警戒するとすれば中国、ロシアであった。箱根に派遣したコマンドチームが全滅したのも、中国・ロシアの工作員との不幸な遭遇戦によるものであったと報告が来ている。見れば、なるほど外国人の姿もちらほらと見える。この全てがそうではないのだろうが、この中には確実に敵が居る。彼の勘はそう告げていた。

ロシア・中国の妨害を排して来賓を迎える。神経を使う困難な作戦だが、自分達には決して不可能ではない。どの国も、この銀座という繁華街の中で出来ることには自ずと限界があるのだから。

だが、しかし、見るとなんだか人の数が異様に増えて来ていた。部下の一人に尋ねてみる。

「今日は、何か行事が予定されてたか？」

「そんな情報はありませんが？」
「それにしてはこの人の数は異常だぞ」
そう、気がつくと銀座の道という道は、人混みで溢れかえっていたのである。

それは中央線と総武線と山手線が同時に架線事故を起こして電車が遅れた時の新宿駅のホームのごとき有様であった。そこから立ち上る陽炎にも似たそれは、人間を箱に詰めてぎゅうと押し込んだらこんな感じになるという熱気と、ストレスから立ち上るある種の殺気めいた苛立ちによって醸し出されたものであろう。銀座の中央通りに至っては歩道では人が収容しきれず、車道へと溢れ出てしまったため自動車の通行の妨げともなっている。
「こりゃあ、千の単位じゃないぞ。万……いや下手するとそれ以上？」
銀座中央署交通課長の岩崎は、巡回の警察官からの報告をうけると、パトカーは大渋滞で動かないため徒歩で現場に駆けつけ、異常に増えた人の数にびっくりしていた。見れば、無届けデモの類でもなさそうである。これだけの人が、どこに行くともなく銀座の街を埋め尽くして、ただひたすらに何かを待っているのだ。
テレビの取材クルーが来ているので、声をかけてみる。
「この人数は、いったい何を目当てに集まってるんだ？」
彼らは、制服警官から問いかけられると思ってもみなかったのか、戸惑った様子を見せたが、溌

刺とした明るい表情の女子アナが代表して答えて来た。
「みんな、特地から来た女の子を一目見ようと集まって来たらしいですよ」
菜々美達は献花台が最もよく見える場所にカメラを据えて、一番の映像をモノにしようと待ち構えていた。
出遅れた他局の取材スタッフは、渋滞と人垣によって銀座に入ることすら出来ずにいるということである。その代わりではないだろうが、明らかに取材のものと違うカメラが数十台、三脚を列べていて報道カメラマンとは種類の異なる熱気を放っていた。局長から「がっちり取材してこい。もし、出来たら報道局長賞モノだゾ！」という言葉を頂いて意気軒昂の菜々美である。

「これ、どうしろって言うんだ？」
運転席の富田は、車道まで溢れた人の群れによってちっとも進まない大渋滞を前に苛立っていた。車は新橋で停止。苛立ったドライバーが、クラクションをやたらと鳴り響かせ、これを受けて怒鳴り声や罵声が飛び交う。警察官が警笛を吹いて懸命に交通整理をしようとしているが、急な出来事に絶対数が不足して対応できないという状態である。
「まいったなぁ。ここまで凄いなんて」と頭を抱えたのは梨紗である。
彼女は完全に読み誤っていたのである。
テュカ、ロゥリィ、レレイの三人が銀座に姿を現すという情報は、ネットを通じて瞬く間に駆け

めぐり、三人を一目見ようと、日本全国津々浦々から集まった人の数、なんと推定で四万人（警視庁調べ）という規模に達しようとしていた。東京ドーム収容人数が四万五千人だから、どれほどのものか想像できようというものだ。

「い、イタミ殿。これだけの群衆はいったいどこから湧いて出てきたのだろうか？」

「ど、どこかで戦でもあるのでしょうか？」

ピニャとボーゼスの二人は、完全に怖気づいていた。

本日の主役、レレイとテュカとロウリィは、途中で買った弔意用のどでかい花束に埋もれて表情が見えない。

「これ、絶対動きませんよ。どうします？」

と言う富田の声に、伊丹は「歩くしかないよなぁ」と答えた。

「でも、これ外に出たら危なくないっすか？」

「大丈夫よ」

花束の間から顔を出して請け負ったのはロウリィだった。

彼女は、右手に梱包を解いたハルバートを持ち、左腕に花束を抱えると、スライドドアをあけて車の外に降り立つ。長く座っていて身体が強ばったのか「う〜ん」と背伸びを一つ。そして、ハルバートを小脇に抱え、近くにいた群衆の青年Ａに声をかけた。

「ギンザはどっち？」

すると……。

現場で、それを目撃していた梨紗は後にこう語っている。

「古い映画に海がバッと割れて道が開いていくシーンがあったでしょ。それを見ているみたいだったわ。人の群れが、彼女を前にして道をあけていくのよ」

23

残念なことに、世の中には理性の手綱を放してしまい、感情に酔うまま暴走する人種がいる。例えば通り魔がそうだ。それに坊主が憎ければ袈裟まで憎いとばかりに殺人犯を憎むべきなのに、その家族にまで憎しみの矛先を向けたりする者も同じだ。

彼、ないし彼女らは感情を向けるべき対象を完全に見誤っている。全く関係のない他人については述べるまでもない。また犯人の親族を相手にして親の罪が子どもに、子どもの罪が親に波及してそれを償うべきだというのも、古代ローマにもなかった野蛮な風習と言える。二千年もの昔の古代人に精神的成熟度で劣るとは、実に情けない話だろう。

しかし、銀座事件の被害者にとって、ロウリィ、レレイ、テュカといった特地から訪れた三人は、ある意味、初めて見る敵国人であった。

銀座の街を埋め尽くす大群衆の中に、逆恨みでしかない感情を彼女らにぶつけようとして紛れている者がいないとも限らない。従って伊丹は、緩んだ表情をシリアスに引き締めると、富田と栗林の二人に告げたのだった。

「今日はやめよか。また梨紗の部屋にでも泊まろ」

がっくりと来る二人。だが嫌なことは避けて通るが信条の伊丹だ。困難が予想される現時点でこの状況から逃げようとするのは、当然の選択でもある。しかし栗林は言う。

「で、明日になって、どこぞの工作機関とかが待ち構えているのを強行突破するんですか？」

梨紗が人を集めてくれたのも、アメリカとかの工作機関の待ち伏せからピニャとボーゼスを守るためである。この困難を避けるために今の状態を作り出したのに、これからまた逃げたら元の木阿弥ではないか。

「逃げた先、逃げた先へと追いかけて来る借金取りの如く」

市ヶ谷とか、各地の駐屯地に逃げ込むというアイデアはボツだ。政府機関で二人を保護すれば、今度大統領から電話がかかってきたら躱しきれなくなってしまうからだ。それでは何のために本位総理が辞意を表明したか分からなくなってしまう。自分達が、現時点で政府のコントロール下にないからこそ「逃げられちゃいましたねぇ。残念でした」とお悔やみを言いながら、内心で舌を出すことが出来るのである。このあたりの事情は、太郎閣下からの状況説明で充分に理解している伊丹であった。

「参ったなぁ……」

伊丹は髪を掻きむしりながら瞑目すると、大きくため息をついて二人に命じた。

もし、彼女達を害そうとする者があれば「撃て」と。これは「許可」ではなく「命令」である。富田も栗林も志願して自衛官となった身である。そして職業自衛官として高度な訓練をうけた陸曹でもある。さらに実戦の洗礼を経ている。従って一度「命令」という形で指示を受けたなら自らのマインドセットを殺戮機械モードへと変えることも出来るのである。故に、二人はそれぞれに手にした鹵獲武器の弾倉を確認するとともに、予備弾倉を栗林の荷物から拾い出してポケットやズボンのベルトに挟み込んだ。その双眸からは冷たい兵士としての光を放つ。サングラスがあったらかけていただろう。もちろん、銃をあからさまに曝して周囲を威嚇するようなことはしない。ジャンパーにハーフコートにと銃を隠し、それぞれすぐに発砲できる状態にして、周囲を埋め尽くす大群衆を前にしてワゴン車を降り、銀座のアスファルトを踏んだのである。

栗林志乃は黒い革ジャンパーをまとっていた。

ストーンウォッシュされたデニム生地のミニスカートに黒のストッキングをはいている。靴は、ストレッチブーツ。ヒールが高い履き物を好むのは彼女のコンプレックスの現れだろうか？　チビ巨乳とあだ名される彼女の体躯は小さい。が、背の低い者によく見られる手足が短くて胴が長いというスタイルとは一線を画していて、引き締まった身体に鍛えられた筋肉を持つ者だけが許される

メリハリのある曲線の連続で、スラリとした肢体を形作っていた。要するにバストを除いた全ての構成要素が、均整のとれた比率を維持したままに縮小されているのである。

革のジャンパーの前を完全に開いて、内に着ている白いセーターを覗かせる。

ここで立ち絵を入れるなら、そのポーズは左腕でジャンパーの左襟を押さえ、その内懐に右腕を突っ込んでいるように見せる姿だ。もしフルカラーが許されるなら、唇には深紅のルージュ、眉は切れのある線でくっきりとひいて、凛然とした表情で描きたいところである。もちろん右手にはドイツのヘッケラー&コッホ社が制作したＭＰ７が提げられている。元来の巨乳故に、突き上げられているジャンパーの胸には生地の余裕が全く無いため、ストックを縮めて全長三十四センチでしかない銃すら隠しきれず、革ジャンの裾からわずかに覗けてしまう。

そんな彼女が冷たい冬のビル風をまとって、精神的臨戦態勢を済ませているところなどを是非格好良く脳内イラストボードに描いて頂きたい。

さて、そんな彼女の隣に立つのは富田である。富田章（あきら）はカシミア混のハーフコートをまとっていた。長身でワイルドな富田は、筋肉質だがボディビルダーのようなずんぐりとした印象はない。敏捷性に優れたアスリートを連想させる体格だ。日焼けして浅黒い肌に、精悍な顔つき。顎を覆う無精髭もイチロー風で格好がよく、見ていてなんだか腹が立ってくるほどだ。そして、猛禽のような眼光は、周囲を睥睨して射抜かんばかりである。

その内懐には、ベルギーのＦＮ社が開発したＰＤＷのＦＮ90を隠している。

最後に、伊丹だが。その容姿はどこにでもいるサラリーマン風の三十男。着の身着のままのスーツはしわくちゃになりつつあり、一足二千円くらいの安売り革靴（合成皮革）は、既に汚れが目立ち始めていた。この上に、冴えないデザインのくすんだロングコートをまとっていて、新宿駅西口から新宿ガード界隈の飲み屋で一杯引っかけてもおかしくなさそうである。もし、ラッシュアワーの駅のホームに立たせたら、あっと言う間に群衆に埋没して彼を見つけだすのは非常に困難な作業となるだろう。それくらいの凡庸さで身を固めているのだが、そのコートの下には、一応のところマカロフ拳銃を隠し持っている。

こうして、三人の雰囲気が戦闘的に激変すると、梨紗は「ひっ」と小さな悲鳴を漏らした。ついさっきまでのノンビリ、のほほんとした雰囲気を放っていた三人が、剥き身の日本刀のような気配を放ったのだから。それはヤクザやチンピラとか、吼えまくる闘犬のそれと異なって、野生の肉食獣が放つ静謐な獰猛さを感じさせた。不気味な恐怖感と言ってもよい。とは言っても富田や栗林と違って、伊丹のそれは持続時間が短く、瞬く間に普段のとぼけた印象に戻ってしまうのだが。

「悪りぃな、梨紗。こっから先は連れていけない」

窓から中に顔を突っ込む伊丹に対して、独り置き去りにされようとしている梨紗は肩を竦めて見せた。

「しょうがないかなぁ。この車どうしたらいい？」

「適当なところに放置しておけばいいよ。それと借金、早く返せよ」

「ど、同人誌が売れたら、ちゃんと振り込むから……それより、次はいつ頃来れるのかなぁ？」
「判んないな、しばらくは無理だろう？　また連絡するよ」
伊丹は、手を挙げると背中を向けようとした。しかし梨紗が呼び止める。
「あ、あのさ……先輩って、来ると言っても来ないことがあるでしょ。だから無理だとか言いつつも、来るかも知れないなぁ、なんて思って待ってたりするのは、だめ？」
「そんなこと言い出すくらいなら、何で離婚したんだ？」
「だって、その……養って貰うために結婚してそれに胡座かいてるのって、なんか、人間として駄目かなぁなんて思っちゃって」
伊丹は呆れたように「好きにすればいいさ」と告げると、今度こそ背中を向けた。

＊　＊

「……このように、本位総理の緊急入院と、突然の辞意表明についての各界の反応は、唖然、呆然とも言うべき驚きに満ちたものでした」
スタジオには、本位総理大臣の巨大ポートレートを背景にして、各界の著名人がコメンテーターとして列んでいた。
ひげ面の大学教授が不満そうに「余りにも無責任すぎますよ」と吐き捨てる。

すると女性作家が「しかし総理という職は激務ですから、体調が思わしくないとなれば仕方ないかも知れませんよ」と弁護するようなことを言った。

「閣僚のスキャンダル続きで、マスコミや野党の追及にプッツンきちゃっただけですよ。野党は、総理の辞任で振り上げた拳の降ろしどころに困っているはずです」

元知事の肩書きで、政治評論家となっている男が国会の状況について解説を加える。

「いや、野党は困ってませんよ。次の総理が誰になるにせよ、民意を問うという形で衆院の解散総選挙を強く求めて来ることになります」

「今話題となりました、次の総理の問題ですが、早速永田町では与党の有力議員の動きが活発になっています」

アナウンサーが報道し、コメンテーターが感想を述べていくなかで、司会者でもあるメインキャスターが次の話題、総裁選へと話を転換していく。

「与党内で次の総理総裁候補と見られているのが、森田氏、嘉納氏、荒巻（あらまき）氏の三名です」

三人の写真がモニターに大写しにされていく。

「各派閥からの支援を受けて次期総裁候補ナンバーワンと見られているのが森田氏です。嘉納氏は国民的な人気こそありますが、党内の力関係で行きますとまだまだ実力不足と見られています。次期総裁が派閥の代表者による協議で決まるか、それとも総裁選挙が行われるのか、注意深く見守っていきたいところです」

政治の話題をここで終って、キャスター達は仮面を取り替えるがごとくの早業で表情を変えた。
「銀座が大変なことになっています」

ここでCM。

そして六十秒間計四本……洗剤と自動車保険とラップフィルムと紙おむつのCMが終わると、次のパートは先日おこなわれた国会での参考人招致の映像から入った。
見た目にも印象的なさらさら金髪のエルフ、テュカが国会の赤絨毯に立って四方からフラッシュを浴びているシーン。その輝きを受けて、透けるような美しさを放っている。そのままシャンプーとかリンスのCMにも使えそうだった。
レレイの静謐な双眸。そして銀糸のような髪。
そして、黒ゴスをまとったロウリィの鋭い毒舌と、悪戯っぽい小悪魔的表情。
「特地から参考人として招致されたこのお三方が今や大ブレイク中です。なんと言ってもファンタジー世界の住民でしかないと思われていたエルフ娘が実在するということで、テュカ・ルナ・マルソーさんが一番人気です」
コメンテーターが言う。「いや、ホントに綺麗ですよ。オタク心をくすぐるとでも言うんでしょうか？　空想上の存在だとばかり思っていた相手が、ホントにいたんですから、一目でもいいから

生エルフを見てみたいって思いますよ」
「私も国会中継見てましたが、びっくりしました。レレイさんでしたっけ？　彼女なんかわずか数ヶ月で身につけたにしては日本語も上手だし。テュカさんの耳は、最初は特殊メイクか何かかと疑ったぐらいです」と若いタレント弁護士が述べた。
「ところで彼女たちのお歳、ホントなんですか？　いや、年齢を云々するのは失礼とは思うんですが……一年が異常に短いとか」と尋ねるのは女性作家だ。やはり気になるらしい。
「防衛省発表の情報によると、特地での一年間は、三百八十九・三日と推測されるそうです。一日の時間が、こちらに比べると若干少ないのですが、その誤差を差し引いても、こちらに合わせると年齢は増えるだけなようです」
「でも、ロゥリィ・マーキュリーさんに至っては、九百才を過ぎてるってのは、ちょっとねぇ。どう見ても中学生くらいでしょう？」
こだわる女性作家である。
「こちらの、テュカさんも百六十才過ぎと言うには若すぎませんか？」
さらにこだわる女性作家である。
某書の記述によると女というものは、知性とか教養とか品の良さとか、そういったものには全く嫉妬しないが、美しさとか財産といったものには、敏感に反応するそうである。五十才に達しようとしているこの女性作家も、自分より遙かに年上と称する女性が、どう見ても十代の美しさを湛え

ていることに、複雑な思いを禁じ得ないようであった。
「国会でも、こちらの二人は長命な種族であるという説明があったようですが」
「男性としてはどうなんですか？　見た目はこんなに若いけど、実際は百才過ぎてるって言われて」
「ホントのところ、全く実感湧かないですね」とひげ面の大学教授。
「化粧とかで若作りしてるとか、整形で若く見せているとか言うなら、ちょっとアレかなって思いますけど、ナチュラルにこれだけ若いんなら、実際の年齢が百才だろうと五百才だろうと気にならないと思いますよ」と答えたのは、若いタレント弁護士だ。
「このようにいろいろな話題に事欠かない彼女達なのですが、本日銀座事件の慰霊碑に献花して、その後特地に帰られるということがわかり、彼女たちを一目見ようと集まったファンで銀座がごった返しているそうです」
メインキャスターの仕切りで、路上にあふれかえる人の群れの映像が大写しとなった。
交通は麻痺し、自動車は渋滞している。警官が必死に警笛を吹きまくって人々の群れを整理しようとしているが思うに任せない有様が映し出された。その後、メインキャスターの顔がアップされる。
「今映し出されたように、銀座では午後一時頃から、各地から集まったファンで賑わっています。たまたま当局の取材スタッフが現地に居合わせましたので呼んでみましょう。栗林さ～ん」
画面が現場からの実況中継に変わった。
既に全国ネットに映っているというのに、栗林菜々美はそれと気付かずに周囲の状態を見渡した

り、喋る練習をしていたりする。掌に「人」の字を書いて飲んだりする姿が妙にほほえましかった。彼女の背後には、献花台と、その周囲に群れる人々の姿が映っている。

「栗林さ～ん」

その、人の群れだが、整理する者もいないのに何故か献花台へと至るまでの道筋が開かれていた。その開かれた道筋を、花束を抱えた黒ゴス少女や金のサラサラ髪のエルフ娘、銀髪ショートの少女、豪奢な赤毛女性と金髪縦巻きロールの女性と、彼女たちの案内役なのか、ボディガードなのか日本人男女と併せて七名が歩いて来るのが見える。

「音声の調子がおかしいようですね。栗林さ～ん」

実は、伊丹も画面に映っているのだが、彼の発する色合いが、主役達の華やかさとまったく違うため、ワンセットとして人々の目に入らなかったのである。

どちらかというとモブシーンの一キャラでしかないのに主人公の傍から離れない図々しい奴という印象になる。

「栗林さ～ん」

音声に指摘されて気付いたのか、栗林は慌てて外れていたイヤホンを耳に装着した。

「あ、はいっ、こ、こちらは銀座ですっ」

「今、そちらの様子が映っていますが、現場は今どうなっているのですか？」

「はい。こちらでは、今、お三方が周囲の声援に手を振りながら、ゆっくりと献花台に近づいてき

ています。集まったファンの方々も、道路にはみ出して交通渋滞を起こしたりとはた迷惑な事ばかりしているわりに、彼女たちに対しては不思議と行儀が良く、誰が整理しているというわけでもないのに、まるで何かに操られて居るみたいな感じで道をあけて彼女たちが前を通るのを待っています」

人垣の群れから、飛び出してくる青年が居た。富田がばっと身構えるが、それよりも早くロウリィが、ハルバートの石突きをアスファルトをうち砕くほどの勢いで突き立てた。すると錫杖のような凛とした音が広がった。さらに彼女が妖しく微笑んでみせると、青年は毒気を抜かれたような表情で、後ずさりながら人垣の列へと戻っていった。

「……こちらの映像から見ると、お三方だけでなく、他にもおいでのようですね？」

「はい。見たところ七名の方がいます」

「他の四名も特地の方なのですか？」

「いえ。見たところ……見たところ……お姉ちゃん？」

「はい？　栗林さん？」

「い、いえ。なぜか私の姉がいました」

「栗林さんのお姉さんですか？」

「はい。姉は自衛隊に勤めていて、今、特地にいるはずなのですが、こちらに来ているとは聞いて無くて……ちょっと、お姉ちゃん、何やってるのよっ！」

「あれ、菜々美ったら、こんなところで何やってるの？」

栗林姉は目の前に出てきた妹の姿を見て、道ばたで出会ったがごとくの気安さで返事した。とは言いながらも、警戒の視線を周囲に油断なく向けている。彼女の本業はＳＰではないのだから、これでも充分に頑張っていると言っても良いだろう。

「テレビの中継だけど……」

「もしかして、今映ってる？」

「全国ネットだけど」

「やっほ～お母さん、元気？」と、この瞬間だけはカメラ目線で左手を振った。

そのせいで全国ネットだというのに、銀座のど真ん中でＭＰ７という名の銃を握る右手が、ちらちらと見えてしまった。つっこみ所満載の行為だが、注意力の七十パーセント以上を警戒のために費やしていたが為に、正常な思考が働いてなかったのだと、好意的に解釈してあげたいところである。栗林と富田と伊丹が周囲を警戒する中、ロゥリィ達特地組五名が献花していく。この時、百台近いカメラのフラッシュが瞬いた。献花を済ませると、ロゥリィは周囲を見渡して「鎮魂の鐘が必要ね」と呟く。そして、ハルバートを立てると、「誰かぁ、鐘を鳴らしてくれるかしらぁ？」と声をあげた。

その時、まるで彼女の求めに応じたかのように、銀座の時計塔がチャイムを鳴らし始めた。ロゥリィは「うん。ありがとぉ」と微笑むと、静かに瞑目を始め周囲は厳粛な雰囲気に包まれた。

テレビカメラも栗林姉妹を画面からはずして三名が哀悼の意を表している姿を、しばしの間、流

した。やがて、チャイムが鳴り終えるとロゥリィ達は献花台に背中を向けた。その背中をカメラは追い続けたが、音声は栗林姉妹の会話を拾っている。

「ねぇ、特地からの三人にインタビューできない？」

全国ネットで中継の真っ最中だというのに、喋りが一般人となり果てている栗林妹である。でも、番組プロデューサーはスタジオの奥で、「よっしゃ」と握り拳で栗林妹を誉めていた。彼女の評価はもう、堕ちるところまで堕ちていて下がる余地が無い分、これ以上は上がるだけだからだ。日本中が注目する特地三人娘に繋がるコネクションを持っているというのは、評価の対象だった。

「無理無理。献花が済んだら一刻も早く、特地に帰らないと」

「なんでよ？　少しならいいじゃない？」

「一昨日から、狙われてるのよ」

「……狙われてるって？　何に？」

「アメリカかなぁ、もしかして中国とかロシアかも。乗った電車はなんか知らないけど事故って停まるし、泊まってたホテルは放火されて火事になったりするし、他にもいろいろでさ。こうしてる今だって……」

さすがに不味いということに気がついて、語尾を濁したが、ここまで口にしてしまえば、全部暴露したも同然である。何しろ、テレビのニュースや、新聞にきちんと目を通している者ならば、彼女の口にした出来事と符合する記事があったことに気付くからだ。

「よお、グラハム」
群衆を苦々しく見つめるグラハム・モーリスの前に、一人の日本人が立った。
情報本部所属の駒門だ。以前から陰気な男と思っていたが、コツ、コツと杖をついて歩く姿はさらに陰気さを増しており、不快な気配をまき散らしているように見えた。
「何の用だ、駒門。お前達の出番は無いはずだが」
「確かにそちらさんの仕事については文句を言うなとお達しが来ています。ですがね、ロシアとか中国からの工作員については、放っておくことはできないからね、現在マークをしているところです」
「なるほど」
グラハムはそう言うとご苦労様と肩を竦めた。それならば、日本側が両国の工作員を抑えてくれるから仕事はしやすくなると思ったのだ。
ＣＩＡ要員に群衆にパニックを起こさせる。同時にテレビ中継の回線を切断。現場の混乱に乗じ、コマンドチームが急襲して来賓を拾う。非常に難しいがそういう段取りである。
「ところで、グラハムに聞きたいんですが、ＣＩＡの局員と、ロシアとか中国の工作員ってどうやって見分けたらいいんですか？　後学のために教えてくださいよ」
「なんだと？」
「なんかこうＣＩＡの局員だってことが一目で判るような目印をしてくれないと、ロシアとか中国

人と見間違えちゃうんですよ」

そんな事を言って頭を掻く駒門を見て、グラハムは慌てて携帯電話をとった。

各所に配置した部下を呼び出すが、返事が全くない。

「お前っ！」

「だから言ったでしょ。ロシア人とか中国人とか区別がつけられねぇんですよ……すまねぇな」

見渡す限りを埋め尽くす群衆に舌打ちするグラハム。こうして彼は作戦の失敗を悟ったのである。

駒門は携帯電話を取り出すと、メモリにある電話番号の一つを選んで呼び出した。

数秒後に出る声に駒門は告げた。

「よお、伊丹。露払いはしておいだぜ」

「ガッデッムッ！」

アメリカ合衆国大統領、ディレルはホワイトハウスの執務室にてゴミ箱を蹴倒すと、中身もろとも怒りにまかせて踏みつぶした。彼の前にあるテレビモニターは、東京は銀座からの中継画面を映し出していた。この大群衆の中では、いかにＣＩＡ凄腕コマンドチームであっても来賓に近づくことなど不可能だった。挙げ句の果てに「アメリカとか中国とかロシアに狙われてる」という言葉が全国に流されたという。そのうえ、コマンドチームを支援して、テレビ放送を邪魔したり、群衆にパニックを起こさせるＣＩＡ局員の殆どが、ロシア人や中国人と間違えたという名目で日本側に抑

えられてしまった。

コマンドチームは無事だから、強行するという方法もあるが、当然の事ながら全国生中継だ。下手すると世界生中継である。そうなれば完全に悪役だ。いかにアメリカでも、そして中・露も含めて、この状況で強硬手段に訴えれば、間違いなく窮地に陥ることになる。このような状況を演出してくるとは、これまでの日本政府には考えられないほどの大胆さであり悪辣さと言えた。日本政府は、直接手を下さずにアメリカの手を封じた上に、はっきりと言わずしてアメリカや中国、ロシアによる非合法活動の存在を、大衆に向かって臭わせ、非難することに成功したのだ。

例えば、この女性自衛官の言葉を受けてホワイトハウスから「根も葉もないこと言うな」と日本国政府に不快感を表明したとする。別にクレムリンとか、中南海からでもいいが、当然の事ながら、日本は「日本政府としてはアメリカ（中国・ロシア）の非合法活動については、何も知らないので、何も述べることはない」と公式見解を発表して終わりなのである。

「全国中継で言ったぢゃないか」と非難したら、「いち自衛官の戯言を真に受ける人なんていないよ」とか言い返されること必定である。何をどう言おうと日本政府としては、「彼女は、その日休暇中だったから、酒にでも酔っていたのではないか？　彼女が持っていた銃はおもちゃ。その証拠に日本はあの銃を配備していない」とか、シラを切り通せるのだ。

だが、この中継を見ていた大衆がどちらを信じるかは言わずもがなである。何気ない姉妹の会話であったからこそ、人々の耳に真実として響いたのだから。ディレルは、中継の画面に本位総理の

幻影を見た。その幻影は彼に向かってこう告げていた。
「うちのお客様に手を出さないでいただきたい。こちらにも相応の覚悟がありますよ」と。
「くそっつ、くそっ！　このモトイッの馬鹿野郎め。浮売の息子野郎！」
白い家の、赤い絨毯上でゴミ箱の破片が踏みつけられて細かく砕かれ、さらにめり込んでいく。
クレムリン宮殿ではジェガノフ大統領が、ウォッカの入ったグラス片手に、「日本人もなかなかやるじゃないか」と呟き、中南海の奥では薹徳愁国家主席が静かに舌打ちしながら現場担当者に撤収を命じた。

こうして伊丹達は、なんとか無事に……ではなくて心身共に疲労してしまう散々な休暇を味わって、銀座の『門』へとたどり着いた。
大群衆がテュカの名を呼び、レレイの名を連呼し、ロゥリィの名を叫ぶ。群衆を熱狂させるアイドルという存在を知らない彼女たちは、どことなくドン引きした感じの笑顔で、これに応えて手を振った。そして、逃げるようにして足早に『門』をくぐったのである。
『門』を越える時は、警衛所で空港の手荷物検査にも似た点検を受ける必要がある。車両やトラックの場合は、荷台やボンネットを全部開けて、中まで徹底的に調べるという力の入れようである。さらに、人員についてはすり替わりなどがないように、指紋、掌紋、網膜パターン、皮静脈パターン等の検査が行われる。こうしてようやく、『門』を覆うコンクリート製のドームに入ることが出

来るのである。
ところが……。
「これ全部、東京で買ったんですか？」
「何か問題が？」
しらじらしい態度の伊丹に、警衛所の係官は大きくため息をついた。
彼女らの荷物は、ロウリィが購入した黒ゴス、しかもパンク系（鋲とかチェーンとかの金属でじゃらじゃら）の服とか下着とか、衣類の筈なのに金属反応のするものも少なくない。それに加えて日用雑貨品……例えばレレイのパソコンや、テュカのアーチェリーとか、各種雑貨が山となっていて、係官はとても閉口していた。
「これ全部点検するのかよ」
女物の点検にはいろいろと問題があるのだ。
下着類は、女性自衛官にチェックしてもらうとしても、日用品などいちいち箱を開けていたらキリがないほどであった。もうざっと見るだけでいいんじゃないかと思ってしまう。とは言っても、手を抜くわけにも行かず、レレイや、テュカ、ロウリィ、そしてピニャやボーゼス、栗林らのボディチェック等には女性自衛官が動員された。
そして、「これ何ですか？」と、ついに、ピニャとボーゼスの隠し持っていた拳銃が見つかってしまった。

「おや」
思わず呟く富田。
「やるわねぇ」
と、抜け目ない態度に感心してしまう栗林。彼女は、咄嗟に「あ、それ護身用に彼女らに預けて置いたヤツなんです」とかばい立てした。そして、ドサッと重そうなバッグを係官の前に置いた。
「何です？」
と、開けて見るや、バッグから出てくる出てくる鹵獲武器の山。
「まさか捨ててくるわけにもいかないでしょう？　だから持ってきたんですが、こちらで管理します？」
実は、自衛隊には鹵獲武器の取り扱いについての規則がない。
もし、ここにある武器を正規の手続きにのせて扱おうとすると、必ず問題となるのが入手の経路なのである。だが、一般人も宿泊する旅館の敷地内で、しかも某国非合法活動員の遺体から入手したなんて、公式の文書に残せるはずがない。
「どうします？」
したがって、これらの鹵獲武器は、存在しているだけでも厄介事なのである。そして、厄介事は引き受けたくないと思うのが組織人である。伊丹から入手経路等について説明を受けた警衛長は、顔を逸らすと『見なかった』『聞かなかった』と宣った。

「こいつは、あんた等が鹵獲したんだな。ならば諸々の手続はそっちの責任だ。とりあえず、これだけの武器がここを通ったということは別に記録しておく。だがそっちで掌握しておけ。いいな」

別に記録しておくというのは、後日問題になりそうになったら、ちゃんと通過した記録が引き出しの底から出て来るが、そうでない限りは通常の書類等には載ってない、ということを意味している。場合によっては、上からの指示で別の記録はシュレッダーにかけられることもある。

こうして鹵獲武器の数々は、員数外の武器弾薬として、第三偵察隊の武器庫に収まることになったのである。

＊　＊

レレイ、ロゥリィ、テュカの三人は、富田の運転する高機動車で、アルヌス丘麓の難民キャンプへと送り届けられた。

それぞれに手みやげが多い。伊丹はそれを降ろすのを手伝ってやった。

「日本って面白いところだったわぁ」

ロゥリィが言う。

「興味深い。また行きたい」

レレイが言う。

「買い物。楽しかった」
テュカが微笑んだ。
そんな三人に伊丹は、「お疲れさま」「また、明日」と挨拶をかわす。そして互いに別れていった。
既に陽は落ちて暗くなろうとしている。
テュカは、プレハブ長屋の間を抜けて自分に割り当てられた部屋の戸を開けると「ただいまぁ!!」と明るい声で帰宅を告げた。
「門の向こうって凄かったわ、お土産も沢山」と言いつつ薄暗い部屋の中でテーブルに荷物を置いていった。だが、何の反応もないことに首を傾げた。
「あれ？　居ないのかな？」
部屋のあちこちを探して、「父さんたら、また、あちこちうろついてぇ」と嘆息する。
「目を離すとすぐにこれなんだからぁ」
と呟きつつ、買ってきた物の整理を始めるのだった。

一方、ピニャとボーゼスの二人は、宿舎として借り受けた居室で、ベットに座り込み重苦しい雰囲気を放って黙り込んでいた。
日本と帝国との交渉の仲介役。その任の重さが今更ながら感じられてきたのだ。
このまま戦争を続けたら、帝国は間違いなく負ける。文明、技術、そして戦争というものに対する

考え方。これらの全てが段違いであることをその目で確かめ、その身体で実感してきたのだから。

「殿下」

ボーゼスが澱んだ空気をはらおうとするかのように言葉を掛けてくる。

「うむ。明朝には此処を出立して、帝都へと向かう」

ピニャは答えた。

ただちに仲介役として、講和交渉の準備を始めなければならない。

講和が、どのような形になるかは分からない。おそらく、帝国の敗北という形になるだろう。だがそうだとしてもこのまま戦争を継続して、滅亡へと向かうより、はるかにマシだと思えたのである。

その決意を、ピニャは言葉にした。

「妾は、この戦争を終わらせる」と。

「ゲート　自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり　— 1.接触編 —」は
次の方々の支援により出版されています。

菊池 光　　葛元利伸　　仲地慶剛　　西村大和
清川好深　　山地隆三　　水野竜一　　長尾亮補
村井恵介　　tani　　嶺 隆寛　　Ｎｅｍｏ
M.T.　　村上拓也＠kotubunet　　工藤克也
上田秀人　　山之内武大　　邑松正勝　　トンフル
K.W　　佐藤 諒　　柴山道郎　　鈴木恭一
ふのじ　　高木公博　　早川 淳

P.26 における伊丹耀司の人生を表現した台詞「息抜きの合間に、人生やってるんだろ」は、
『究極超人あ～る』（小学館）のコミックス第 4 巻 P.129、
「人生には息抜きというものが必要だぞ」
「あんたたちは息抜きのあいまに人生やってるんだろう !!」
より出典しております。

P.260-271 におけるオーケストラの一節は、
リヒャルト・ワーグナー作
『ニーベルングの指輪第一日「ワルキューレ」第三幕』の前奏曲「ワルキューレの騎行」
より出典しております。

ALPHAPOLIS
アルファポリス 作家 出版原稿 募集!

アルファポリスでは才能ある作家 魅力ある出版原稿を募集しています!

- ◉既存の賞の傾向や審査員の嗜好の枠からはみ出た小説
- ◉これまで知られてこなかった仕事の裏側事情
- ◉目からうろこの生活・情報ノウハウ ……などなど

アルファポリスでは出版化にチャレンジできる
ドリームブッククラブ、Webコンテンツ大賞など
様々な企画・コーナーを用意しています。

まずはアクセスして下さい!

▶ アルファポリスからデビューした作家たち



恋愛小説

市川拓司
『Separation』
『VOICE』



ファンタジー

吉野匠
『レイン』シリーズ



児童書

川口雅幸
『虹色ほたる』
『からくり夢時計』



ホラーミステリー

椙本孝思
『THE CHAT』
『THE QUIZ』

*次の方は直接編集部までメール下さい。

- ◉既に出版経験のある方（自費出版除く）
- ◉特定の専門分野で著名、有識の方

詳しくはサイトをご覧下さい。

アルファポリスでは出版にあたって
著者から費用を頂くことは一切ありません。



フォトエッセイ

吉井春樹
『しあわせが、しあわせを、みつけてきた。』
『ふたいち。』



心理エッセイ

本多時生
『イヤな人がいる!』
『幸せになる考え方』

電網浮遊都市

ALPHAPOLIS アルファポリス

http://www.alphapolis.co.jp



アルファポリス　検索

モバイル専用ページも充実!!

携帯はこちらから
アクセス!
http://www.alphapolis.co.jp/m/

Webコンテンツが読み放題

登録コンテンツ7000超!（2009年12月現在）

アルファポリスに登録された小説・映像・ブログなど個人のWebコンテンツをジャンル別、ランキング順などで掲載!　無料でお楽しみいただけます!

Webコンテンツ大賞　毎月開催

投票ユーザにも賞金プレゼント!

恋愛小説、ミステリー小説、旅行記、エッセイ・ブログなど、各月でジャンルを変えてWebコンテンツ大賞を開催!　投票したユーザにも抽選で10名様に1万円が当たります!（2009年12月現在）

その他、メールマガジン、掲示板など様々なコーナーでお楽しみ頂けます。もちろんアルファポリスの本の情報も満載です!


レイン1、2、3
好評発売中!
吉野匠
レイン
1
闇の中に生まれた戦士
待望の文庫化開始!
シリーズ60万部突破!
吉野匠
レイン
3
シャンドリス、復活す
文庫化第3弾!
シリーズ70万部突破!
吉野匠
レイン
2
捉われる帰還
文庫化第2弾!
シリーズ60万部突破!
待望の文庫化開始!

レイン

吉野 匠

Illustration：MID

シリーズ70万部突破。

人気爆発!! 剣と魔法の最強戦士ファンタジー!



単行本 本編7巻+外伝 好評発売中! 今後も順次刊行予定!

柳内（やない）たくみ

東京都在住。自衛官を経験した後、2006年に自営業を開業。本業に従事する傍ら、インターネット上で精力的に執筆活動を展開し、人気を博している。

イラスト：Daisuke Izuka
http://www.kcc.zaq.ne.jp/d-trench/

ゲート　自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり　— 1. 接触編 —
柳内（やない）たくみ

2010年 4月 12日初版発行
2010年 5月 15日３刷発行
編集－太田鉄平
発行者－梶本雄介
発行所－株式会社アルファポリス
〒150-0022東京都渋谷区恵比寿南2-1-8恵比寿OTビル7F
TEL 03-6303-1388
URL http://www.alphapolis.co.jp/
発売元－株式会社星雲社
〒112-0012東京都文京区大塚3-21-10
TEL 03-3947-1021
装丁イラスト－Daisuke Izuka
装丁デザイン－ansyyq design
印刷－シナノ書籍印刷株式会社

価格はカバーに表示されてあります。
落丁乱丁の場合はアルファポリスまでご連絡ください。
送料は小社負担でお取り替えします。
©Takumi Yanai 2010.Printed in Japan
ISBN978-4-434-14235-2 C0093

9784434142352

1920093017008

ISBN978-4-434-14235-2
C0093 ¥1700E

定価：本体1700円+税
発行 アルファポリス
ALPHAPOLIS
http://www.alphapolis.co.jp/
発売 星雲社

